

# IS II 進化の果てへ

小坂井

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある男性操縦者の戦いから十数年。くすぶり続けていた過去の怨恨が新たな戦いを呼ぶ。

最強の兵士『破壊者』の血を引き継ぐ少年は自らの呪われた宿命に抗い、戦い続ける。

生と死が交差する刹那、この悲しく虚しい戦いを終わらせるために。そして歩み続ける、この戦いの果てに何かが変わると信じ。

\*この小説は前作『IS 進化のその先へ』の続編となります。

\*ストーリーは完全オリジナルです。

追記 突然ですが、新章として前作の直後の話となる「after story」を投稿させていただきました。

# 目次

登場人物	1
AFTER STORY 次の世代へ 前編	4
AFTER STORY 次の世代へ 後編	13
1話 少年の境界	23
2話 異文化へのランウェイ	34
3話 彼の地は遙か遠く	43
4話 因果を超えた宿敵	52
5話 英雄の再来	61
6話 再起と決意	70
7話 暗闇の証明	85
8話 終末の向こう側	95
9話 迫りくる魔の手	103
another story	115
01	127
02	137
03	146
04	155
05	164
06	173
07	182
08	191
09	200
10	

1	1	1	1	1
5	4	3	2	1
<hr/>				
243	234	223	215	208

## 登場人物

小倉衣音（こくら いおん）

本作の主人公。長い青髪が特徴の少年らしき外見をしているが、その正体はISの殲滅と根絶を目的とした破壊者計画の成功体の受精卵を人間の母体に人工着床されたことよって生まれたハーフ。だが、自分の正体を知らないからか、本人はそこまで攻撃的で好戦的な性格ではない。しかし、自分を侮辱したり見下したりする者には容赦がなく、どんな手段を用いても発言や態度を撤回させようとする高い自尊心がある。実際のところ、破壊者だからか常人を卓越した身体能力や頭脳を持つが、それで他者を見下すことはなくあくまで温厚に意見をいう部分がある。

兄弟はおらず、母とその妹である叔母と一軒家で暮らしている。母からすれば衣音に破壊者であることを伝えるつもりはなく、1人の人間として育てるつもりであったが、破壊者の因縁から自分の正体を知り、家族のために戦う決断をする。

小倉刀奈（こくら かたな）

衣音の母親だが、外見はあどけない少女のような容姿をしている謎の多い女性。昔はIS学園に所属。そこで生徒会長をこなし、ロシアの代表生であったと同時に政府の暗殺部隊の当主をしていたが、衣音を出産すると同時に引退し絶縁したため現在は関係はなく専業主婦となつている。炊事・洗濯・掃除と家事を完璧にこなし、性格も温厚。そのため、多くの男性が求婚してくるが本人はお断りの様子。夫の面影が色濃い息子の衣音を深く愛しており、大切に思っていたが、衣音が破壊者として戦い始めようとしていることをとても心配している。なお、いまだに夫のことは愛している模様。旧姓は更識。

更識簪（さらしき かんざし）

刀奈の妹にして衣音の叔母。衣音は親しみを込めて『簪お姉ちゃん』と呼んでいる。昔から家族同然に暮らしてきており、刀奈に負け

ないほどの愛情を衣音に注いできた。学生時代、刀奈と同じIS学園に所属しており、日本の代表候補生であったため旧式だが専用ISを持っている。だが、簪は破壊者<sup>ルットレ</sup>ではないのに加え、三十路に差し掛かっているも男性付き合いがない現実<sup>ルットレ</sup>に心の中で小さくはない劣等感を抱いている。刀奈や衣音の正体を知る数少ない人物。

エスト（えすと）

簪のIS技術をサポートするために作り出された少女の姿をした自立型思考AI。肉体を持たず、ホロアクターであるが、とても感情豊かで人間味がある。特技として他の電子機器に侵入し、動かすことができるため全く実物に干渉できないというわけではない。今はISサポートから離れ、衣音のパートナーとして行動している。日頃は物腰柔らかで紳士的な態度をしているが、性格は衣音に似ており、一方的な要求や見下された交渉などには激昂する。ちなみにエストという名前は開発者が昔見た絵本に出てくる少女から名付けられた。

小倉雄星（こくら ゆうせい）

前作の主人公であり刀奈の夫にして衣音の父親。見た目は少年だが、最強の兵士である破壊者<sup>ルットレ</sup>の成功体。かつて学園に潜入していた時期があり、刀奈や簪とはその時に出会った。すべての原点にして頂点な存在である破壊者<sup>ルットレ</sup>であるためか戦闘能力は非常に高く、学園にいた頃の武勇伝は今も語り継がれているほど。味方には優しく頼りになるが、敵対する者には容赦なく、徹底的に壊滅させるまで戦う。今は消息不明となっており、妻である刀奈も何年も会っていない。

小倉瑠奈（こくら るな）

雄星の義理の姉にして雄星や衣音と同じように破壊者<sup>ルットレ</sup>の成功体。雄星との関係上は姉弟という関係だが、彼には執念に近い恋心を抱いている。過去に破壊者<sup>ルットレ</sup>として覚醒した雄星に殺害されるが、皮肉にも自分を殺したのと同じ破壊者<sup>ルットレ</sup>として生き返り、自分の心を満たすために手に入れようと画策する。しかし、既に彼には刀奈や簪といった代

わりの人物がおり、そのことに激高し、2人を抹殺しようとするが、雄星に阻止され、相打ちという形で姿を消す。衣音は雄星の精子とこの小倉瑠奈の卵子を組み合わせた受精卵を刀奈の体に人工着色することによって生まれた。

## AFTER STORY 次の世代へ 前編

窓1つない密室となった空間でガチャガチャと金属音が鳴り響く。そこには精密機械のような機材が所狭しと置かれており、1人の少年が神妙な顔でノートパソコンのキーボードを叩いている。

「よし、これでどうだ・・・エスト、準備は整ったか？」

『はい、いつでも大丈夫です』

肉体を持たない友人の確認を取ると、失明を避けるためゴーグルを身に付け、機械の電源を入れる。すると、バチバチと目の前の金属のリングらしきものが入っている真空管に青白いプラズマが発生し、光を発する。

「エスト、パワー上昇率はどのくらいだ？」

『現在45%までの上昇を確認、依然としてエネルギーは上昇し続けています』

「少しずつ機材のリミッターを慎重に外していけ、この準備に10日もかかったんだ、失敗すると面倒だからな」

細かい変化に注意しながら少しずつ実験を続けていく。だが、突如機材がけたたましいアラーム音が発せられ、実験機材が振動によって震えていく。

「やばっ、どこかでミスったかな・・・エスト、実験は中止だ！すぐにエネルギーの供給をー」

そこまで言ったところで、実験器具の真空管から強烈な衝撃波が発せられ、少年を吹き飛ばす。それならまだいいのだが、その少年の上にはかの吹き飛んだ実験機材が降り注ぎ、下敷きになってしまう。死にはしなかったが、10kg近くあるその重量が体に降り注ぐのだ。

痛いよりも先に脳を強く打ち、意識が朦朧としてくる。

「あ・・・あ・・・」

なんとか機材をどけようとするが、それよりも早く体が白旗を上げるのが早かった。大量の冷たい金属の中で力尽き、心地よくない眠りに入っていく。



「ーーん!!」

「——おん!!」

「う……」

暗く沈んだ意識に女性の声が響く。重い瞼を開けると、セミリングの青い髪が特徴の眼鏡をかけた女性が自分の顔をのぞき込んでいた。

「衣音っ!!大丈夫?」

「簪お姉ちゃん……?」

自分の名を呼ぶのは簪。自分こと衣音いおんの母親の妹ーつまり、叔母にあたる人物だ。だが、叔母といっても衣音にとっては母親も同然の存在だ。なので『簪お母さん』と呼ぼうとしていたのだが、母親が2人いるのもおかしいので、『簪お姉ちゃん』と勝手に呼んでいる。

「もう、また無茶なことをして!!」

「ご、ごめんなさい……」

部屋に散乱している機材を見ておおよその状況を把握したのか、説教というより説得のような口調で叱りつけてくる。どうにもこういう言葉は苦手だ。保身などではなく、本気で自分を心配してくれるその態度は父親や兄弟がない衣音は母親以外であまり言われたことがないため、耐性がない。

「ほら、上で休みましょう?立てる?」

「うん、大丈夫……あ、そうだ!」

懐から小さなコントローラーを取り出すと、部屋に設置されているアームが動き、散らかった目的の物を探し始める。こんなひどい目にあい、大切な家族である簪からは怒られたのだ。相応の成果がなくては釣り合わない。

「おっ、あつたあつた」

ボロボロに壊れた機材の中で不思議に光る金属のリングがアームにつままれて姿を現す。もう危険性がないことを確かめると、最終確認を始める。

「エスト、検索を頼む」

『了解しました。該当原子番号なし、粒子特性不明、分子構造未登録。おめでとうございませす、新しい元素粒子を発見しました』

「おお、それはよかった。データをいつものファイルに入れておいてくれ」

『了解しました、ごゆつくりお休みください』

後始末を任せると、簪に支えられながら実験室を出ていく。当然だが、あとでこの散乱した部屋の片付けもしなくてはならない。その面倒事に逃避するように目をそらしたとき

ーーーーイオン

「……えっ？」

突如、自分を呼ぶ声が聞こえる。自分を支えている簪かと思っただが、声が人間味を感じない中性的な声だった。

「今のは……」

「衣音、どうしたの？」

心当たりのない声から空耳か幻聴なのだろうと勝手に決めつけると、吹き飛ばされたときに頭を強く打ったせいか、ズキズキと痛む後頭部をさすりながら部屋を出ていった。

ーーーー

「ほら、動いちやダメ」

「いてて……」

騒音と被害を最小限にとどめるため、地下に作られている実験室を抜け、リビングに入ると床に座らされ手当てをさせられる。時間を見

てみると、意外と長い間気絶していたらしく日は沈み、夕方となってしまっていた。

「頭にたんこぶができてきているわよ。もうこんなことになって……」

「簪お姉ちゃんは心配しすぎだよ。大丈夫、これくらい……」

「衣音!!」

「ひっ……」

怒りの有頂天といった声を上げられて体が震える。すると、紅茶を入れたカップをお盆に乗せた母が苦笑いを浮かべながらやってくる。ニコニコと笑顔を浮かべる母だが、その姿を見ればおそらく誰もが眉をしかめるだろう。

外見が余りにも若々しすぎるのだ。今年で15歳になる衣音から推測すると、どんなに計算しても30代は超えているはずなのだ。なのに、その外見は衣音と同じか少し年上ぐらいにしか見えない。若さの秘密を聞いたところ、『私は高校生の時から年をとっていないのよ』とメルヘンチックな返答が来た。

一時は姉か何かと思つてアルバムをみたが、生まれたての自分と思われる赤ん坊と共に写っているのは真正正銘、目の前にいる母だった。まさにミステリアスという言葉が似合う女性だ。

「簪ちゃんは心配しすぎよ。エストちゃんもいるんだし、本当に危ないときはあの子が知らせてきてくれるわ」

「お姉ちゃんはいつもそうなんだから……」

確かに自立型思考AIプログラム、通称『エスト』は優秀だ。衣音が小さい頃からガードマンやボディーガードのような役割となり、見守ってきた。今ではこうして共に実験する良きパートナー的存在ではあるが、どうやら昔は簪と組んでいたらしく、簪のことを『マスター』という敬称で呼んでいる。

詳しいことはわからないが、エストから聞いた話だと母親とその妹である簪は昔、宇宙開発を目的に開発された、マルチパワードスーツ、インフィニット・ストラトス通称 I S の代表候補生であつたらしく、それなりに優秀な人物であつたらしい。

その興味深い話をさらに教えてくれるように頼んだが、どうやら口

止められているらしくそれ以上は何も聞かせてくれなかった。まあ、誰にでも知られてほしくないことの1つや2つあるだろう。どんなことがあるかと、たった2人の家族なのだ。

「はい、氷をあてて冷やしていなさい」

ポンツと痛む後頭部分に氷をあてられて治療終了を告げられると、母が運んできた紅茶に口を付ける。その美味な紅茶が傷だらけの心や体を温めていくように感じる。

「てゆうか、簪お姉ちゃん帰ってたんだ。お帰り」

「ええ、ただいま、衣音」

それだけ言い残し、簪は身支度を整えるため部屋に向かっていった。嵐が通り過ぎたことを確認すると、ため息を吐く。

「簪ちゃんは衣音に対してすごく厳しいわね。嫌になつた？」

「まさか、僕のたった2人の家族なんだ、何を言われても愛しているに決まっているじゃないか」

昔からこうだ。普通の人ならば新しい元素粒子や新たな物理法則を見つけたらすごいと褒めるだろう。だが、母や簪はそれで衣音を褒めたことは1度ない。その反面、衣音が危険なことをしたら鬼のような形相で叱りつけてくる。この自分の身を第一に考えてくれる母と簪が衣音は大好きだ。

「甘えん坊な所もあの人に似たのかしらね・・・」

「ん？母さん、何か言った？」

「いえ、何でもないわ。ほら、もうすぐ夕飯にするからお風呂に入ってきなさい」

「簪お姉ちゃん入りたんだけどいい？」

「ダメに決まっているでしょう。それにあの浴槽に2人も入れないわ」

「ちえ・・・」

拗ねたような声を出すと、衣音は着替えを取るため部屋に戻っていった。時間を見るともうすぐ午後の6時を回ったところだ。それを確認すると、母も夕飯の準備をするべく料理を再開した。

――

「エスト、何で僕は簪お姉ちゃんと結婚できないんだろう？」

『倫理の問題ですね』

夕食を終え、自分の部屋に戻るとエストとくだらない雑談を交わしながら今日の研究成果を整理していく。今日は新しい元素粒子を発見したが、その詳細は不明のままだ。それをじっくりと研究していかなくては。

――イオン

「……え？……うつ!!」

突然のことだ。研究室で聞いた声が聞こえたと同時に、頭に電流のようなものが駆け巡る。痛みはない、不快感もない、違和感もない。ただ、頭の中を電流が通ったことで出来た細く真つ直ぐな穴に記憶の断片が映し出されていく。

夜空でぶつかる2機の機体。そしてその中で血だらけで苦悶の表情で戦う自分に似た1人の少年の姿。そしてその中には脆く弱っている母親の姿があった。

「い、今のは……」

未知の場所、知らない戦い。だが、知っている、その戦いの真実を。「そうか……僕は……」

知ってしまった、分かってしまった。自分は親に望まれた存在ではないのだ。大きな流れのなかで偶然的に自分は生まれた。自分の正体を知ったからか、複雑な気持ちに心が渦巻いていく。

だが、これからどうすればいい？このことを母親や簪に伝えるべきだろうか。だけど、そうしたらもう自分を家族として見てくれないの

かもしれない。知らぬが仏という言葉もある。

だけど、自分の正体を確かめなくてはならない。重い足取りで母親の部屋へ向かっていくと、ぼそぼそと母親の話し声が聞こえてきた。「そう・・・やっぱりあの人の血縁者でないと・・・機体は動かせないのね。・・・ダメよ、あの子を機体に触れさせるだなんて・・・もう嫌・・・」

誰かと話しているのだろうか？だが悲しげな声が聞こえてくる。数回ノックして部屋に入ると、偶然か室内には母親と簪が座っていた。

「あら、どうしたの衣音？こんな遅くに」

「いや・・・その・・・」

状況が状況だけにどう話を切り出したらいいのかわからない。それでも自分の正体を確かめたい。そう強く願い、口を開いたとき、強烈な爆撃音と震動が家を包む。地震や地盤沈下などではない、明らかに人為的な音だ。

「な、なんだ・・・エスト!!」

『周囲の監視カメラによる高解像度画像を出します』

そこで表示された画像に映し出されていたのは無数に佇む銅の乙女のような印象を受ける機体だった。黒いマネキンのようなスマートなシルエットの背後に大きな砲口が空けられているバックパックを背負っている。見たこともない機体だが、その正体は大体想像がつく。

「あ、IS・・・?」

なぜこんなところで自分たちを襲撃しに来たのか考えるよりも早く、母親が衣音の腕を掴んで地下の研究室へ避難し始める。

「衣音っ!!早く避難するわよ!!」

「待って、母さん!!なんでISがこんなところに!?!」

「そんなのいいから早く!!」

頑丈とは言えない家のつくりだが、地下の研究室となれば多少はマシだろう。外で応戦するため簪とは研究室前で別れ、母親と衣音は研究室に入り、ロックを掛ける。

「大丈夫、大丈夫から……」

壁に寄りかかると、衣音を抱きしめて繰り返す。だが、その言葉はどちらかといえば、衣音よりも自分に言い聞かせているように見える。きつとこの人は怯えている。もう忘れかけていたどす黒い因縁がこうして這い上がってきて、自分たちの命を狙っていることに。

「母さん……」

元気づけるように母親の手を握った瞬間、天井にピシリと亀裂が入る。次の瞬間、その亀裂が天井全体に広がっていき、一斉に崩壊する。おそらく、外で戦っていた簪と襲撃者のISの流れ弾が偶然天井の真上に直撃したのだろう。

「衣音っ!!」

降り注ぐコンクリートの塊から衣音を守るように抱きしめるが、そんなことで防ぐことが出来るはずもない。そのまま2人も生き埋めになるかと思った時、母親の胸が淡く輝くと同時に大量の粒子が放出され、2人を包み込む。まるで鉄壁の中にいるのかと思うほどにその防御は固く、次々と降り注ぐ瓦礫を押しつけていく。

全ての瓦礫から2人を守り抜くと、包み込んでいた粒子が再び動き始め、1つの機体へと姿を変えていく。青と白のカラーリングに全身に金色の筋のような線が入っており、背中には大きな翼のような装備。そんな神秘的な雰囲気を持つ機体が2人を守るように覆いかぶさっていた。

「こ、この機体は……」

偶然でも何でもない、この機体は間違いなく自分と母親を守るために動いた。そしてこの機体は自分のことを知っている。

「……」

その機体の真意を確かめようと近づこうとするが、母親が手首を掴み、静止させる。

「ダメ……あなたまで失いたくない……」

恐怖で掠れる声を振り絞り、必死に訴えかけてくる。

「外で簪お姉ちゃんが戦っている。助けに行かなきゃ」

「あなたが行っても何も変わらないわ……あなたまで危険にさらす

わけにはいかないの……」

「破壊者」

「っ！」

かつて忘れようと努力し、そして忘れかけていた忌まわしい言葉。その言葉が愛すべき息子の口から発せられた。

「それが僕の正体なんですよ？戦いのみを求められ、そして全てを超越した最強の兵士。その血が僕の中に流れている」

「あなたは衣音よ!!小倉衣音、私の……家族……」

ダメだ、このままでは彼は行ってしまおう。かつて自分の愛した者が戦いのなかで消えていってしまったように、この子も戦ってしまおう。それは彼を身籠った時から絶対にしないと決意していたことだ。例え、この体が八つ裂きになったとしても絶対に離さない。

そう決意するように衣音の手首を必死に掴んでいる母、だが、そんな母に衣音は微笑んだ。

「安心してください」

優しく、穏やかな口調で話すと、自分の手首を掴んでいる手を優しく握り返す。顔を見ると、衣音の両目が紅く輝いていた。

「僕が……僕たちがこの子を守ります。だから、そんな顔をしないでください。刀奈さん」

微笑む衣音のその顔は夫の忘れ形見を彷彿とさせるほどにそっくりだった。その懐かしい優しさに手の力が抜け、その場に座り込む。その光景を見届けると、衣音はゆっくりとかつて自分の父親が乗っていた最強の機体へ歩みを進めていく。

父親と同じように逃れられない戦いの宿命。その中へ進んでいく衣音を止められない無力な自分。その非情で残酷な現実には救いを求めるように消えてしまいそうな声で小さく呟く。

「あの子を守ってあげて……雄星君……」



## AFTER STORY 次の世代へ 後編

海の香りがする。これが機体と母が父と別れをした場所の匂いだ。その香りと同時に奇妙な解放感を感じる。多分、この体が――遺伝子が戦場に舞い戻ってきたことを喜んでいる。それもただの戦場ではない、大切な家族を守るための戦場だ。

なんて素敵なことだろう。世界は戦いと破滅に満ちている。そんな救いようのない愚かで醜い世界を壊すためにこの力は存在するのかもしれない。

「くっー」

襲撃者である黒いISのタツクルで簪の乗っている打鉄式式が大きく吹き飛ばされる。敵の数は合計5機、機体性能は大差ないが、こちらは単機なのに対して向こうは5機。圧倒的に不利すぎる。そんな簪を右腕に装備された巨大ブレードで切り伏せる。

耳を塞ぎなくなるほどの激しい金属音と共に、打鉄式式の装甲の一部が吹き飛ばされる。だが、瞬時に体勢を整えると、荷電粒子『春雷』を撃ち放ち反撃する。しかし、装甲が厚いからか大したダメージにはなっていない。

(衣音・・・お姉ちゃん・・・)

危機的な状況だが、それ以上に不安なのは地下に避難した衣音と姉の状況だった。無事だとは思うが、どうしても心配せずにはいられない。そんな心境の簪をよそに襲撃者の攻撃は次々と簪を襲っていく。降り注ぐ超高密度圧縮熱線、それを必死に耐える。

「くっ・・・うっ!!」

別に簪自身もあの日からだ怠けていたわけではない。自分の無力さを後悔し、訓練を続けていた。だが、いざこうして障害を目の前にしたら、こうしてどうしようもなく追い詰められている。ダメだ、やはり自分は何も変わっていない。何も変わらず、弱いままだ。

「きゅっ!!」

背面に装備していたミサイル装置を破壊され、バランスが大きく崩れる。その隙を相手が逃すはずはなく、接近し、巨大ブレードで簪を

切り裂こうとしたとき、夜空の星の1つが一瞬だけ強く輝く。その刹那、一筋の光線が襲撃者の腕を吹き飛ばす。

それに続いて1機の機体が降臨する。右手には巨大なライフルを持ち、背中には大きな機械の翼らしき装備が備え付けられている。その機体を簪は知っている。十数年前、自分たちを助けるために降臨した最強の機体だ。

「ゆう……せい……?」

「簪お姉ちゃん……大丈夫?」

「い、衣音……」

いつも聞いているとても安心する衣音の声のはずなのだが、その機体に乗っているからか、どこか緊張感のあるように感じられた。

「ここは僕が引き受ける。簪お姉ちゃんは母さんと一緒に安全な場所に避難してくれ」

「でも……衣音……」

「早く!!」

有無を言わせない圧倒的強者としての言葉。それが簪の迷いを断ち切った。そうだ、今はあの時とは違う。ならば、今は自分の為すべきことをするだけだ。衣音を信じ、中破した打鉄式で崩壊した家へ向かっていく。その後を追うように襲撃者のISが動くが、そこに衣音が立ち塞がる。

「僕がいる限り、ここを通れると思うなよ? ガラクタ共が」

自分も十年以上前の機体を使っているため、相手のことを言えたことではないのだが、少なくとも目の前の連中に負けるつもりはなかった。ニツと笑った瞬間、衣音を敵対者と判断した襲撃者が切り伏せようと一斉に攻撃を開始する。

まっすぐ向かってくる高压熱線、その攻撃を背中から射出された遠隔兵器が打ち消す。

「へえ、お前、ヴァリアントっていう名前なのか……僕の名前は小倉衣音、よろしく」

衣音……いや、ヴァリアントに防御兵器があることを瞬時に判断した相手は防御できない巨大ブレードを引き抜き、一気に距離を詰め

る。だが、振り下ろされるブレードをヴァリアントは装備されている手首ごと抑え、防御する。

「相手はゴーレムⅢっている機体か：ヴァリアント、お前は以前戦ったことがあるのか？てか、僕よりお前年上なのか・・・意外だ」腕のパワーをフル稼働させ、ゴーレムⅢはヴァリアントを圧倒しようとするが、どんなに頑張ってもびくともしない。痺れを切らしたほかの機体が背後から接近するが、ヴァリアントの両翼から青白い粒子のようなものが一気に放出され、吹き飛ばされる。

「っ!!」

陣形が崩れた隙に、掴んでいるゴーレムⅢの手首を握りつぶすと、敵機を掴み、全身の機体出力を使って猛スピードで自分の倍の大きさはあるゴーレムⅢを押しつける。そのまま簪が向かった家から引き離す。母親と簪から敵を引き離すのが目的なのだが、運悪く残りの4機のゴーレムⅢはヴァリアントの誘いには乗らず、簪を追っていく。

「エスト、聞こえるか？」

『はい、なんででしょうか?』

「この機体の周波数を最大まで上げろ。何としてもあのガラクタ共には振り向いてもらわなくてはならない」

『分かりました』

ピピッと甲高い機械音がしたと同時に、一斉に残りのゴーレムⅢはヴァリアントに視線を注目する。複数の敵から一斉に狙われるなど危険もいとところなのだが、こっちの方がやりやすい。

「ウォーミングアップだ!!行くぞ!!」

まず最初にヴァリアントの手首が輝き、エネルギーを溜める。そのまま髪入れず、掴んでいるゴーレムⅢの胴体に手をつ込み、全ての源であるISのコアを握りつぶす。

「Iつ目!!」

無力化したされたことを瞬時に確認し、残骸を投げ捨てると、自分に誘われて向かってくる複数のゴーレムⅢの1機に狙いを定める。そして手に大型のライフルを展開させ、1つの光弾を撃ち放つ。だが、命中する瞬間、相手は腕部にシールドを展開させて受け止める。

しかし、防御できると思われた瞬間、放たれた光弾が急速に回転し、ゴーレムⅢの防御を突破する。そのまま相手の胸から上を吹き飛ばし、撃ち落とす。

「2つ目!!」

味方がやられたことによつてヴァリアントにむやみに接近するのは危険と判断したのか、残った3機は全身の砲口をヴァリアントへ向けて火力を集中させる。実際、これは悪い手ではない。ヴァリアントには防御兵器があるが、3機のゴーレムⅢの火力を完全に防ぐことは出来ないし、その弾幕を避けながらの攻撃など至難の業だ。

「.....」

だが、そんな状態でも衣音は慌てることなく攻撃をかわしながらチャンスを伺う。攻撃され始めてから数十秒後、わずかに弾幕が弱まった瞬間、ヴァリアントの火力を解き放つ。1機のゴーレムⅢに背中に装備されている2つのキャノン砲の砲身に向け、引き金を引く。「高純化兵装「エクリプス」、灰燼に帰せ!!」

放たれた眩い閃光に吞まれ、敵機は跡形もなく消え去る。これで残りの数は2機、一気に決着をつける。何としても撃ち落そうと引き続き攻撃を続ける2機のゴーレムⅢ。その攻撃をかいくぐり、接近すると両手にサーベルを抜刀し、両腕を切断する。そのまま蹴りを食らわせて吹き飛ばし、胴体にサーベルを投げて貫通させる。

バチバチと全身に駆け巡るプラズマ。そして地面に墜落した瞬間、その衝撃からか機体が大爆発して吹き飛ぶ。

「残り1機!!うあっ!!」

最後の1機が体当たりを食らわせ、ヴァリアントを吹き飛ばす。ここまで追い詰められたのならばいっそのこと自爆でもしてくれたのならば楽なのだが、どうやら相手は最後まで戦う様子だ。

「ちい!!」

不意の重い一撃をもらい、大きく体勢を崩す。まだ完全には慣れていない機体制御と圧倒的な戦闘経験の不足で頭が小さくはないパニックを起こす。そんな様子の衣音を相手が知る由もなく、今までのお返しと言わんばかりに右腕に装備された大型ブレードでヴァリア

ントを吹き飛ばす。

完全に平常を失った衣音を追い詰めようとさらに追撃を食らわせようとした瞬間、空に輝く星々の1つが強く煌めき、1つのビーム攻撃がゴーレムⅢの右腕を吹き飛ばす。正体不明の攻撃に僅かばかり、思考が麻痺する。その隙を突くように、目の前で体勢を立て直したヴァリアントが大型のソード、『ヴァリアント・ソード』を引き抜き、ゴーレムⅢの胴体を一刀両断する。

上半身と下半身が真っ二つに切断されたゴーレムⅢは大爆発を起こし、墜落していった。その光景を見送ると、周りに敵機がいないことを確認し、武装を解除して空を見上げる。

「さっきの攻撃は・・・エスト、この近くに僕以外の機体反応はあるか？」

『先ほど戦闘した敵機の残骸反応はわずかばかりありますが、それ以外の反応はありません』

「だとすると、さっきのはなんだ・・・？」

自分を助けたということは敵ではないのだろう。だが、知り合いにあんな粒子圧縮率の攻撃を撃てる者などいない。だとすると、簪だろうか？いや、彼女は母の救援に向かったはずだ。どう考えても無理だろう。

「っ・・・」

当然と言えば当然だが、その疑問が解決するはずもなく、衣音は家族のいる方向へ機体を向けた。

「衣音!」

それから家族と対面できたのは数時間後のことだった。衣音と戦闘中に簪が政府のIS委員会に連絡し、調査員が来ていた。初めは悪戯かと思っていたようだが、戦闘映像を送り、嘘ではないと分かっているから形式番号と所属が不明機を横取りされまいと大勢の政府の調査員が訪れた。

大量の機材と現場を右往左往する大量の調査員とへり。もうちよつとしたお祭り状態だ。そんな状態で状況説明と取り調べを受け、ようやく家族と再会できた。何とか母も簪も無事で切り抜けられたが、会った瞬間、衣音に抱きしめた母は無事とは言えない様子だ。さつきからずつと強く衣音を抱きしめ、泣き続けている。

「母さん……」

「ごめんね……ごめんね……衣音。こんなことになって……私が、弱かったばつかりに……こんなことに……」

途切れ途切れだったが、自分にひたすら謝っているのはわかる。衣音は別に戦ったことも、自分の正体を知ったことにも後悔していない。だが、こんなことになってしまったことに対して母は苦しんでいる。そんな泣き続ける母を宥めように優しく手を握る。

その時、衣音の瞳がわずかばかり紅く輝く。

「泣かないで……母さん。母さんと簪お姉ちゃんを守れたのならば僕に後悔なんてない。だから……元気を出して」

「衣音……」

「あのー……」

感動的な家族の再会に水を差すようで申し訳なく思っているのか、苦笑いを浮かべた調査員らしき人間が話に割り込んでくる。それが冷やかしなどならば無視していたが、現場を調査している調査員ならば無視にはできない。涙を袖でぬぐうと、耳を向ける。

「襲撃した機体ですが、申し訳ないことに我々のデータには該当しない未登録のコアと技術のため説明にはまだ時間がかかります。内容が内容なので詳しいことは後日改めてお話ししたいと思います。それと……あなたの息子さんのことですが……」

そこまで言ったところで1つの茶封筒を手渡す。開けて、中を見てみるとそれは高校の入学証であった。それもただの高校ではない。その場所はIS学園、かつて母と簪が在学していた学園であった。「決議の結果、我々は君をこのまま放置しておくのは危険と判断し、来年にIS学園へ入学させることにしました。安心してほしい、あそこならば今回のようなことはないし、起こったとしても専門家の教員たちが対応することが出来ます。もちろん、君の家族は我々が責任をもって保護します」

「・・・分かりました、お願いします」

「い、衣音・・・」

自分と家族は安全な場所に避難することができなのだ、迷いなどない。だが、やはり家族としばらく会えなくなるというのは寂しいものだ。

「学籍はこちらで用意しておこう。名前を覚えてもらえますか？」

「な、名前・・・」

分かってはいたが、答えられない質問に口ごもる。今、衣音は自分の立場を正直に言えるような状況ではない。まあ、偽証といえばそれまでだがここは偽名で満足していただく。

「僕の名前は小倉瑠奈です。詳しい証明書は後日お見せします」

「はあ・・・小倉瑠奈ですか・・・」

「どうしました？」

「いや、どこかで聞いたことがある気がして・・・まあ、多分何かの勘違いでしょう。それではこれで失礼します」

まだ仕事如山積みらしく、大量の書類を片手にその調査員は去っていった。この『小倉瑠奈』という名前で止まっていた時の流れが再び動き始めた。自分を知らぬまま平穏な時を生きていた1人の少年と、永い眠りから目覚めた白き翼を持ち、父から子へと引き継がれた最強の機体。

その歪な存在達はこの逃れられない残酷な流れの中にいた。

「あんたが織斑千冬？」

「ああ、そういうお前は小倉衣音だな？」

それから数か月後、衣音改め瑠奈は入学前の寮への荷物と転校の手続きでIS学園に来ていた。家は全壊してしまったため、私物のほとんどはなくなってしまったが、別になくなって困るものはない。必要最低限の生活用品を買い直して大きなバックを背負い、こうして学園の制服を身に纏い、転校手続きを済ませて職員室に来ていた。

本来は荷物運びと手続きだけで用事は終わりなのだが、母にどうしても会ってほしい先生がいると言われたのだ。事情が事情だけに従って会いに来たが、その千冬という教師は何とも言えない人物だった。年齢は30後半から40前半ほどの女性なのだが、初老な年齢なのに対しその鋭い目つきにすらりと鍛えられた肉体からは戦士のような雰囲気を感じる。

「お前、まともな戦闘経験もないのに機体に乗って戦ったらしいな。無茶なことをする」

「少なくとも、母さんと簪お姉ちゃんを守れる範囲では考えているさ。僕の……たった2人の家族なんだから。そんなことより、母さんがあんたに会えと言っていたんだ。何か僕のことを知っているのか？」

「ああ、私はお前のことをよく知っている。破壊者のこともお前の両親のこともな」

「へえ、父さんのことに興味があるんだ。教えてくれる？」

「まあ待て。おい、鈴先生、デユノア先生。ちよつといいか？」



その千冬の声に反応して来たのはツインテールの髪型をした小柄な女性とショートカットの金髪が特徴の女性。どちらもスーツを着ているところを見ると、どうやらこのIS学園の教師のようだ。

「何ですか織斑先生……ってこの子は……」

「こいつが衣音だよ、小倉衣音」

「衣音……ってええええ!!」

名前を聞いた瞬間、鈴とデュノアという名前の2人の教師は大きな声を上げて驚く。衣音という名前で驚いているらしいが、自分の名前にここまで驚かれることに驚きだ。記憶の限りでは千冬を含めたこの3人とは初対面なのだが、いったい過去に何があったのだろうか。「衣音ってあの衣音!?大きくなったわね!!」

「僕のことを知っているのか?」

「ええ、私たちはあなたのお母さんの後輩であり、あなたのお父さんの同級生だったのよ」

「へえ……」

意外な関係に驚嘆の声を漏らすのが、問題はここからだ。回りくどいやり方は嫌いなので単刀直入に質問する。

「それで……僕の父さんってどんな人だったの?」

「どんな人かあ……そうだね、一言で言えば滅茶苦茶強い人だったかな」

「そんなに強かったの?」

「うん、僕も鈴もその時ISの代表候補生だったんだけど、僕たちが手も足も出ないほどに君のお父さんは強かったんだ。だけど、そんな強さばかりに注目していたせいで彼の苦しみに誰も気づいてあげることが出来なかった。そんな君のお父さんに手を伸ばしてあげられたのが、君のお母さんと簪だったんだ」

「っ……」

母も簪も教えてくれなかった過去の闇に触れてしまったような気がして奇妙な緊張感を感じる。ヴァリアントに触れた時、過去の断片を見た。自分は親から望まれた存在ではない。偶然的に生まれた存在なのだ。母や簪はそんな自分を一体どんな気持ちで育ててくれた

のだろうか。

「安心しろ」

そんな衣音の不安な気持ちを汲み取るようにコーヒーカップを片手に持った千冬が口を開く。そこには微量な力強さがあった。

「確かにお前は望まれた存在ではないかもしれない。だが、お前は皆から祝福されて生まれてきた。それは私が保証する」

「そうか……」

慰めか同情か、それともただ単に自分の経験則を述べているだけなのか。ともかく、あまり励ましにならない言葉に苦笑いを浮かべていると、職員室の扉がノックされ、1人の少女が入ってきた。長いポニーテールの黒髪に何かスポーツをしているからか、制服の上からでもわかる鍛えられた体。そんな堂々とした風格はまるで歩く大和撫子といった感じだ。

「織斑先生、私の荷物の詰め込みが終わりましたー……って彼は誰ですか？」

衣音の存在を気付いたのか、その少女が千冬に問いかける。

「こいつは小倉瑠奈。丁度いい、自己紹介をしろ」

「初めまして小倉さん。私の名前は織斑<sup>はるか</sup>春香。千冬さんの姪っ子よ」

春香と名乗る少女が簡潔な自己紹介をする。どうやら、彼女は父が世界で唯一の男性IS操縦者であつたらしく、衣音と同じように家族と自身の保護のためにこのIS学園に入学することになったらしい。他人のことを言えないが、彼女も面倒な事情がある様だ。

衣音と春香。この2人の親は過去に互いの道がすれ違い、刃を交わした。それから十数年、運命の悪戯かそれとも宿命かそれぞれの力を受け継ぐ次の世代の子供がこうして再び道が交わろうとしている。それを誰よりも感じている千冬はカップに口を付けながらわずかに微笑んだ。

## 1話 少年の境界

ガンディーは言った。

『弱いものほど相手を許すことができない。許すということは強さの証だ』と。許すという行為は自身の強さの証だ。自身の器の大きさと寛大な心を図っている言葉だ。

だが、どんなに謝られても、どれだけ謝罪を言われても許せないことがある。たとえ、それ行いが正しいことであつてもだ。許すという行為が強さの証であつたとしても、それで自分の大切なものが守れなくては意味がない。それは強さであつて力ではない。

ならば、僕はどうすればよかったのだろうか？あの時彼女が襲われ、傷ついているところをガタガタと震えながら、指をくわえて見ていればよかったのだろうか。カカシのように何も感じず、何も言わず、襲われているのが自分でなくて良かったと安心しながら。

しかし、あの時自分が他者を絶命させる力ではなく、何があつても生きようとする強さを持つていればこんなことにはならなかったのかもしれない。

アルトウル・シヨーペンハウアーは言った。

『船というものは、荷物をたくさん積んでいないと、不安定でうまく進めない。同じように人生も心配や苦痛、苦労を背負っているほうがうまく進めるものである』と。

確かに、荷物があつたほうが船は安定して進むだろう。だが、その荷物の重みで船が沈没してしまつては意味がない。

僕は荷物を積むと引き換えに、前へ進むためのエンジン部分を失つた。前に進むことも、後ろへ下がることもできず、ただただその場で立ち尽くしたままで何もできない。周りの船がすべて出航し、長い時間をかけて地平線の彼方へ進んでいったとしても、それでも僕は何もできない。

この失つたエンジン部分を取り換えてくれる人がいないからだ。だが、みんな、自分のことではいいいいいなのだ。そんな人間が

いるはずがない。

アルベール・カミイは言った。

『人間は理由もなしに生きていくことはできないのだ』と。理由？唯一の家族を奪い、人ならざる者の体にされて何を理由に生きていけというのだろうか。ふぎけるな、僕は他の奴なんか理由という名の餌を与えられて生かされる家畜じゃない。

別に理由なんて大袈裟なものじゃない。僕はただ、唯一の家族——お姉ちゃんと一緒にあの小さな孤児院で過ごすことができれば幸せだった。たとえ、将来どのような環境であつても、彼女の『ただいま』という言葉を言ってくればどこまでも頑張れた……ような気がする。

賢者は歴史から、愚者は経験から事を学ぶという。だが、この世界には学びたくても学べない者が、成長したくても成長できない者がいる。それはそうだろう、そんなものは既に人間でなくなっているのだから。

かつて夢があつた。別に警察官になりたいとか、プロサッカー選手になりたいとかそういうものではない。ほとんどの人間は既に叶えているであろう些細なことだ。だけど、僕には生まれながらにしてその夢を叶えるチャンスがなかった。いや、一度は叶っていたのかもしれない。

だけど、ダメだった。あと一歩のところまで来たのに、逃してしまった。

それなのに自分は生きている。浅ましくて、愚かで、醜くて、無様な姿で。たまにそれが嫌になる。だけど、それでも生きなければならぬ。彼女たちのために。

これは夢の断片だ。とある少年が自分の運命と向き合い、歩き始める物語。そして誰も知らない大きな力が次の世代へ受け継がれていく記録。

――年  
――前

暗黒の暗闇が周囲を支配する深海。光源は一切なく、昼夜問わずに真つ暗な場所に一機の機体が動く。

『……………』

真つ暗でよく見えないが、その機体は人型らしき形状をしており、深海の海底を這いながら何かを探すように頭部をきよろきよろと動かす。あたりにはさび付いた大きな金属片が飛び散っている。それから判断するに、何かの乗り物が沈没した残骸なのだろうか。

だが、いくら探しても視界に映るのは同じような部品だったり、大きな金属破片ばかりで他には何も無い。そんな殺風景で変化のない場所をしばらく探索すると、機体が一つの物体をとらえる。

『つ！はあ、はあ……………』

目的の物を見つけたとたん、飢えた獣のように息を乱しながら近づくと、壊さないようにやさしく掴む。それは小さな密封されたカプセルであった。破損はなく、カプセルの中には明らかに海水とは違う不気味な液体で満たされている。

『……………』

カプセルをセンサーに通し、中の状態を確認すると微弱だが生命反応がある。どうやら、この冷たい環境で生き残るために本能で冬眠状態に入っていたようだ。つまり、まだ死んでいない、仮死状態だ。何度も諦めていたが、奇跡的な確率でようやく手に入れることができた。この『種』を。

『ふふふふ……………これで……………』

装甲越しに邪悪な笑みを浮かべ、カプセルを機体に収容すると目撃者がいないことを確かめ、ゆつくりと浮上していく。そして海面から飛び出し、機体が夜の月光に照らされる。ピンクのカラーリングをほどこされ、背中には大きなウイングユニットが装着されている人型の

機体。

そして頭部に装着されている装甲がスライドし、操縦者の顔が現れる。長い白髪と同じように雪のように白く透き通った肌。その肌が夜風に当てられ、微弱な肌寒さを脳に伝える。

「ようやく手に入れた……。あんな化け物に体に乗っ取られて悔しいでしょ？だから、私が……お姉ちゃんがあなを産んであげる。もうすぐ会えるからね……」

自分の大切な家族を取り戻す。そして過去に自分から彼を奪ったあの女に騙されているあの子も必ず取り戻す。弟もあの子もすべて自分のものだ。それを邪魔するものは誰だろうが叩き潰す。そして、それを奪ったあの女には必ずしかるべき報いを受けさせる。

その狂った願望と復讐心が『彼女』を動かしている原動力であった。

—————

「全員そろったわね。それじゃあ、ショートホームルーム S H Rを始めようよ」

入学式初日の教室の黒板の前で元気な声を出して挨拶するツインテールの髪形をしている一人の女教師。名前はファン・リン・イン鳳鈴音。入学前に衣音……いや、瑠奈が出会った教師の一人で協力者だ。どうやら、後ろで控えている副担任である千冬が気を利かせて彼女が担任であるこの1年1組に瑠奈を手配してくれたらしい。正直、助かる。

だが、その肝心の瑠奈はそのことに感謝を告げることなく、手元の本に目を通していた。それも仕方がないだろう、クラスメイトが全員女でそのすべての視線が自分に集中しては。

(嫌な空間だな……)

当然ながら、瑠奈が入学したIS学園はIS操縦者の育成を目的に創立された教育機関。だが、そのISを扱えるのが女だけとなると、

必然的にIS学園に入学するのは女だけになる。そのなかでISを使える男である瑠奈ルナがイレギュラーなのだ。

過去に男のIS操縦者がいた例もあったらしいが、そんなことなど今はどうでもいい。重要なのはこのドラマのお色気シーンを家族で見ってしまった並みに気まずいこの状況をどうやって切り抜けるかだ。だが、この居心地が悪すぎる空間が早く過ぎてくれといくら祈っても、残念ながら時は加速したりはしない。

「ちよつと、小倉!!聞いているの!?!」

すると、いつの間にか席の目の前に立っていた鈴先生が大声で名前を呼んでくる。

「そんなに怒鳴らなくても聞こえています。なにか御用ですか?」

「御用ですかじやないわよ。、自己紹介、小倉の番」

「ああ、そうか。では失礼して……」

けだるそうに本を置いて席を立つと、黒板の前に立つ。世界で珍しい男性IS操縦者の自己紹介。それに対してか、なんとも言えない期待を感じる。

「皆さん、どうも初めまして。小倉瑠奈と申します。すでに皆さんはご存知かもしれませんが、男性IS操縦者としてこの学園に来ました。以後、お見知りおきを」

なんの特徴もない無難な自己紹介を一通り済ますが、やはり男だからか『これで終わるわけがない』という無茶ぶりに近い雰囲気を感じ取れる。ならば、そのリクエストに応えよう。

「ちなみに、今彼女を募集中です」

その一言で教室内が乙女の甘い声で埋め尽くされる。それはそうだろう、ここはほぼ女子高。彼氏のいる学生生活など夢のまた夢だと思っていたのだが、そこで一筋の光源が現れる。目の前に垂らされた蜘蛛の糸を彼女たちは掴まずにはいられない。

「またそんな嘘をついて」

「嘘じゃありませんよ、僕に見合う人がいるのなら恋愛関係を結ぶのもやぶさかではありません」

想像通りの教室の反応に苦笑いを浮かべる瑠奈だが、その笑顔から

父親の面影を感じ取れた。妙に懐かしい感覚、奇妙な既視感。席へ戻っていく瑠奈の後姿を見ている間、それが鈴の心の中に深く根付いていった。

「ねえ、あれって小倉さんじゃない?」

「あ、本当だ。あれでしょ?今、恋人と募集中なんでしょ?私、ちよつとやっっちゃおうかなあ」

「ちよつと!!抜け駆けは許さないわよ!!」

S H R後に気分転換として、廊下に出ても状況は変わらず、いい意味でも悪い意味でも注目され、後ろ指をさされる環境が続いている。それから逃げるように屋上に逃げ込み、栽培されていた芝生の上に寝っ転がる。

「はあ……やはり、一人はいいな」

『今まで、人とかかわりを断ち、世捨て人となっていたツケが回ってききましたね』

「エスト……お前もクラスで紹介しておくべきだったかな?」

視界の隅で学園の制服を着て、静かに佇んでいるエストに軽口をいう。周りが見知らぬ人のなかで、彼女(彼女?)のように知り合いが一人いるだけ、大分支えにはなるものだ。

『紹介する機会はこの先、いくらでもあるでしょう。お気遣いは不要です』

「そうか、まあ、寂しくなったら言ってくれ」

「屋上でなに独り言をいつているの?」

周囲に人影がないこの状況下でぶつぶつと呟いている瑠奈を不思議そうな顔をしながら、一人の少女が近づいてくる。長いポニーテールの髪に大和撫子のような堂々とした顔つき。いわずもなが、彼女は織斑春香。千冬の姪っ子にして瑠奈のクラスメイトだ。

「独り言じゃないさ、ここには彼女がいる」



『どうも、初めまして』

「え・・・きやあ?」

挨拶するためしようとするが、突如目の前に出現したエストに春香は驚き、後ろに倒れて尻餅をついてしまう。まあ、普通はそんな反応をするかもしれないが、瑠奈は物心ついた時からエストと一緒にいたため、そういう感覚は麻痺してしまっている。

たとえ夜中、真つ暗な廊下に不気味に佇んでいようが、後ろに振り向いた瞬間、エストの顔がドアップに映っていても平常心を保っていられる。まったく慣れとは怖いものだ。

「すまない、驚かすつもりはなかったんだ」

「こ、これって・・・ホロアクター?」

「ああ、自立型思考AI、通称エスト。僕の大切な家族だ」

『はい、エストと申します。握手はできませんので、申し訳ありませんが言葉だけのあいさつでご勘弁ください』

「え、ええ、よろしく・・・」

明らかに戸惑っている様子の春香を見ながら、再び瑠奈は芝生に腰かける。よく考えたら、彼女とは入学前に挨拶しただけで、教室では一度も話したことはなかった。まあ、これからこの学園で暮らしていけば、話す機会はいくらでもあるかもしれないが、これも一つのきっかけだろう。

「織斑さん、あなたのご両親はIS操縦者だったんだよね」

「ええ、お父さんもお母さんも昔は専用機を持っていたみたい。だけど、詳しくはわからないわ、あまり私にそういうこと話してくれないから」

「僕の両親もIS操縦者だったんだ。母さんはロシアの代表生でその妹・・・僕の叔母は日本の代表候補生だったんだ」

「へえ、すごい人なのね」

春香の父は男性のIS操縦者、そして母も代表候補生とまではいかなかったが、専用機を持っており、叔母である千冬は初代ブリュンヒルデという称号を持っている。このスーパーハイスペック家系に並ぶ一家など存在しないと思っていたが、上には上がいるものだ。

「だけど、僕も君と同じように親の昔のことはわからない。話してくれないから。そういうところをみると、僕たちの親はISなんていうものに触れてほしくなかったのかもしれないね」

春香の両親の事情は分からないが、瑠奈は自分がヴァリアントに触れようとしたときの母の顔をよく覚えている。あの少女のように脆く、儂い表情を思い浮かべたびにあの時自分がやったことは正しかったのかわからなくなってくる。

「親が優秀だと苦労するわよね」

「ああ、苦労するこっちの身にもなってほしいよ」

口では毒づいた感じだが、その反面二人とも表情はどこか楽しそうだ。なんやかんだでこの二人ともこの状況を楽しんでいる。静止していた時間が鈍い音を発しながらようやく動き始めている。しかし、それは忌まわしい呪縛も同じであることをこの時の二人は知らない。

――

「ちよつといい？」

「はい？」

その日の放課後、用意された寮に戻ろうと廊下を歩いていると、不思議な集団に声をかけられる。瑠奈よりも背が高く、がっちりとした体格をしている複数の女子生徒であった。しかも、制服ではなく、柔道着を着ているところを見ると、空手部か柔道部の生徒のようだ。

「悪いけどあなたに用があるの。一緒に来てくれる？」

「・・・ええ、喜んで」

質問する前に瑠奈の周囲を取り囲んでいるあたり、質問の返答に関わらず、瑠奈を逃がす気はないようだ。そんな状況で無難な返答をすると、女子生徒の集団に囲まれて歩き出す。柔道着を着た高身長的女

子に囲まれて歩かされる男。いったいどういう状況なのだろうか。

「あの・・・どこに行くんですか？」

「黙って歩きなさい」

有無を言わさぬ高圧な言葉で黙らされ、黙々と歩かされてしばらく経つと、目的地に到達する。やはりというべきか、そこは柔道場であった。ガラガラと戸を開けて、中に入ると、一人の柔道着を着た女子生徒が仁王立ちで待っていた。

「部長、連れてきました」

「よくやった、お前たちは下がれ」

その言葉に従い、その部長といった上級生と瑠奈以外の人間は後方に下がる。地味に出入り口をふさぐように立っているのが怖い。

「えつと・・・何か御用でしょうか？生憎、僕は柔道部や空手部に入るつもりはありませんよ？」

「いや、違う。小倉瑠奈、私はお前に聞きたいことがあるんだ。お前、恋人はいるか？」

「いいえ」

「では、恋人を募集中というのは本当だな？」

「は、はい・・・」

その質問で何となく真意がわかった。どうかこの予想が外れてほしいと願うが、その願いが叶うことはなかった。

「で、では丁度いい。お前、私の男になれ」

「・・・は？」

見かけによらず、頬を赤く染めた部長からシンプルで単刀直入な告白を聞かされる。まあ、色気もなければ飾り気もないところがこの人らしいのかもしれない。

「男で年下で彼女なし、これ以上ないくらいに私の好みだ。さ、さあ、こつちにきて私の唇にキスしろ!!」

「キヤー!!部長かつこいい!!」

「素敵ー!!」

名シーンなのか、野次馬の部員からピンク色の声援がでる。こういう集団告白は中学生で終わっているものかと思ったが、意外と思春期

の名残というものは取れないものらしい。

「あの……ごめんなさい。僕……あなたのことよく知らないですし……」

「キスをした後に互いのことは知っていけばいい。心も……か、体も……」

恥ずかしそうに顔をそらす。それを見てかわいらしいと思うが、やはり気持ちは変わらない。

「ごめんなさい、やはりいきなり交際は無理です。友達から始めませんか？」

「……ダメか？」

「はい」

「どうしてもか？」

「はい」

「そうか……では仕方がないな」

「ごめんなさい」

頭を下げ、柔道場を出ようとしますが、出入り口の前を部員が立ちふさがる。しかも、表情はどこか決意を感じ取れる。

「……えっ？うおっ!!」

次の瞬間、右肩をつかまされると強烈な力で床の畳にたたきつけられ、押さえつけられる。その慣れた手順を見ると、おそらく柔道か空手の技なのだろう。引き離そうとしても、相手がやはり体育系だからかいくらもがいてもびくともしない。

「ちよ、ちよっ?!」

「ごめんね小倉君。これも部長のためだから」

ジタバタともがくが、右肩のほかに両足と胴体を抑えられまともに動けなくなる。そんな瑠奈に先ほどの部長がゆっくりと近づいてくる。

「ダメならば仕方がない。無理やりにも既成事実を作ろうか。おい、カメラはあるか？」

「携帯ので良ければここにあります」

「よし、これより撮影にはいる。しっかりと抑えているよ」

「そういい、なぜか部長は柔道の帯を解くと上着を脱ぎ、下に着いたTシャツを出す。そしてそのTシャツすら脱ぎ捨て、黒いブラジャーが姿を現す。続いて下すらも脱ぎ捨て、ブラとパンツだけの完全なる下着姿となった。」

「ちよ、ちよつと!!何をしていますか!!」

「おい、口を塞げ。この声が誰かに聞かれたら面倒だ」

「はい、頑張ってください」

「むぐつ!!んー、んー」

口をガムテープでふさがれ、声すら出せなくなる。手足は動かさず、声も出せない。完全に積みの状態だ。

「まずは部長の勝利の状態の撮影から入りましょう。部長、股を小倉君の顔に乗せてください」

「わ、わかった。恥ずかしいが、ここまできたらやるしかないな……んっ……」

仰向けの状態にした瑠奈の顔を跨ぐと、ひざを折り、ゆつくりとしゃがんでいく。少しずつ、少しずつだが目の前に黒い下着の景色が広がっていく。それと同時に女の妙に甘ったるい香りもしてくる。想像したくないが、それはきつと、部長がこうしたため興奮し、体内から分泌された体液の香りだろう。

「っーっー——っ!!!」

ブンブンと顔を振って逃れようとするが、両太ももがつつちりとホールドされ動けなくなる。そして——

「それじゃあ、行きますよー。はい、チーズ」

「——っ!!!」

シャッター音と同時に声にならない叫び声が放課後の後者に響いていった。しかし、その声は誰の耳にも届くことなく、消えていく。動き始めた時間とこの事件をもって小倉衣音の学園生活は始まっていった。

## 2話 異文化へのランウェイ

「入るぞ」

暗い部屋でドアが開閉する音が響く。室内には電子機器をいじりながら書類の整理をしている一人の人影があった。それを確認すると無感情な声で淡々と告げる。

「少し前、お前の妻の家がISに攻撃された。襲撃したISは全部で5機。それをお前の息子が機体を稼働させ、すべて撃墜。そこには私の援護もあつたがな」

「……」

「それと、オータムによればその後お前の息子は身柄保護のため機体とともにIS学園へ移動したそうだ。母親も政府に保護された」

なんの反応もない声で返答するが、先ほどまで作業していた手が止まっているところを見ると、いろいろと思うことがあるのだろう。

「今でもあの学園には織斑千冬がいるが、奴一人ぐらいならばなんとかなる。小倉衣音の身柄を奪取するか？」

「いや、いい。あの学園に行くことを選んだのはあの子自身だ。それならば、いくら言ったところで無駄さ」

「そうか、報告は以上だ」

それだけを言い残し、再びドアは閉められ部屋には静寂が戻る。その静けさの中、静かに溜息を吐き、座っていたソファアの背もたれに寄りかかる。

自分と全く同じだ。過去の呪縛から逃れられず、望まぬ力を手に入ってしまった。

「辛い道を選んだんだね……衣音」

そしてここまで来てしまった以上、もう戻れないだろう。すべては自分の至らなさが招いた結果だ。それを悔やむように手元の書類を握りしめる。

その握りしめられた書類にはぼやけた一枚の写真が貼られていた。全体的にぼやけていたが、人影らしきものが映し出されている。

そして、その写真の下にはこう綴られていた。『小倉瑠奈』と。

――

「っ……」

気が付くと見知らぬ部屋で朝を迎えていた。いや、少し考えたらわかる。ここはIS学園の寮。自分は昨日、この学園に入学してきたのだった。すごく当たり前なことのはずなのに、入学した昨日の記憶が曖昧だ。正確に言えば、昨日の放課後からの意識と記憶がない。

「なにかあったっけ……ふあああ……」

体が朝だと伝えんばかりに大きなあくびが口から出る。だが、活気にあふれている肉体とは反対に、ため息が出てくる。この何とも言えない鬱鬱さは一種のホームシックなのだろうか。いや、そんな単純なものではない。なぜかわからないが、自分が女しくないこの学園に早くも嫌気を感じ始めている。

『衣音、おはようございます。起床早々申し訳ありませんが、連絡がございません。本日午前3時22分でヴァリアントの全ての武装のロックを解除、現在操縦者へのフォーマット作業を行っております』

「そう……後でデータを送ってくれ……」

『了解しました。あとどうでもいいですが、今の状態で瞼を閉じた場合、高確率で二度寝が起きます。直ちに起床することを推奨します』

「今日は熱があるんだ。学校は休む」

『測定した体温は平熱領域を出ていません。仮病はやめましょう？登校すれば女の園が待っていますよ？』

「僕がそんな戯言でやる気を出すと思うか？」

苛立ちが混ざった声で言い返すが、ここで言い争っても無駄だ。エストのことだ、正当な理由がない限り彼女が学校を休ませることなどないだろう。下手すると、眠気を覚ますために怪しい薬を体に投与されかねない。全身の総力を振り絞ってベットから抜けると、シャワーを浴びて制服に着替える。

「まずは朝飯にしようか」

朝の運動を兼ねて、部屋から出ると食堂へ向かっていく。当然と言えば当然だが、ここは生徒が住む寮。道中でたくさん生徒とすれ違うが、皆歩みを止めて衣音「ーい、いや、瑠奈を指さしたりごしよごしよ」と小声で話している。

それを見ていると人間の習性だからか、自分に対して悪口を言っているように感じてしまう。彼女達が自分の悪口を言っているなどという証拠や確証もないというのに、無意識にそう妄想してしまう自分がいる。

『周囲の雑音をカットしますか？』

「いや、いい。この環境にしばらく生きていかなくちやいけないんだ。早く慣れないとね」

エストのアシストを断って食堂へ到着し、朝食の乗ったトレイを持ち、テーブルに座る。ご丁寧な瑠奈から5mほどは無人の状態で、皆遠くから瑠奈を眺めつつ朝食を食べている。どうやら今、ここでの自分のポジションは鑑賞される見世物らしい。自分を見ていて食欲が増すかどうかはわからないが、それを言っても仕方がないので黙って食べる。

そんな周囲から感じる視線に耐えつつ、黙々と進んでいく朝食。そこに入ってくる人影があった。

「ここ、空いているか？」

「どうぞ」

声の持ち主で正体を知りつつ、目の前に座った人物を見る。黒いスーツに長い黒髪、そして狼のように鋭い目つき。紛れもなく、それはこの寮長であり、ISの実技授業を担当している織斑千冬であった。



「この学園には慣れたか？」

「いいや、まだだ。もしかすると一生慣れないかも」

「授業の方はついていけそうか？」

「昨日、参考書は一通り目を通したからだぶん大丈夫だ」

「そうか・・・」

不愛想で冷たい態度だが、そこがやはり父親に似ていると感じる。母子家庭であるがゆえに、てつきり母親のような性格になっているかと思っただが、彼の根幹は生まれた時から変わらないらしい。それが嬉しくもあり、微笑ましい気分になる。

こうして彼はまっとうな人間として育ってくれた。彼が生まれた当時、千冬を含め多くの者が彼の存在に苦悩していたであろう。中には殺した方がいいという意見もあったが、彼の母親は一心にして小倉衣音という存在を守り、信じ、肯定した。無論、彼女も衣音という存在の裏に潜む影を感じ取ってはいしたが、それでも愛し続けた。それはどれほど母親として――人間として立派なことだろうか。

「何か困ったことはあるか？お前にもお前の事情があるだろう。遠慮せずに何でも言え」

「そう言われてもね・・・それならば近々外泊許可をくれる？」

「外泊許可？それは構わないが、どこかに行くのか？」

「まあ、そんなところ。詳細は後々伝えるよ」

それだけ用件を伝えると、食べ終わった食器がのせてあるトレイを持って席を立つ。よくわからないが、彼にも事情があるらしい。それを他者に話さず、1人で抱え込んでしまうところは母親に似ているのかもしれない。容姿といい、髪の色といい、見事なまでに小倉衣音はあの両親の血を継いでいると納得してしまう。

「ちよつと、よろしくて?。」

「ん?。」

入学二日目もすると、早くもクラス内でも行動するメンバーが固まりつつある。それがいいことなのか悪いことなのかはわからないが、生憎そのような適応力を衣音は持ち合わせていない。それも自分が男であることが原因だろう。

女子の中で男が混ざっているのは良くも悪くも目立つ。そこに単独で乗り込むのはきついであろう。そんな状況で血路を開くものがない。長い金髪が特徴の外国人少女、名前は――確かアリス・オルコットといったはずだ。入学試験で一位を取り、主席であったはずなのだが、なぜそんな人物が話しかけてくるのだろうか。

「訊いていますか?お返事は?。」

「ああ、聞いているよ。何か御用かな?。」

「まあ!なんてだらしないお返事ですの?わたくしがわざわざ声をかけて差し上げたというのに!!」

大袈裟つぽく声をあげて、横柄な態度をとる。なぜかわからないが、今のは自分の態度に非があるらしい。素直に『ごめんなさい』と謝ると、『よろしいですわ。お顔をあげなさい』と殿様――いや、女王のような対応をさせられる。

「で、何か御用ですかミス・アリス・オルコットさん」

「ほう?わたくしの名前を?存知とは、男にも人の名前を覚える知性はあつたようですね」

誉められているのか貶されているのか……いや、たぶん貶されているのだろう。だが、ここで感情的になっても無意味だ。こういう状況はさっさと話しを進ませて会話を終わらせるに限る。

「まあ、お互いお世辞を言いあうような仲ではないでしょう。それでは改めて聞かせてもらおう。何か御用ですか?。」

「あなた、専用機をお持ちですね?。」

「ああ」

「その専用機の技術を我が祖国イギリスへ提供していただけますか」

？」

「断る」

迷いもせずに即答する。自分の機体をつい先ほど会ったばかりの人間に渡すなどできるはずがない。それは100人中100人が同じ反応をするだろう。だが、相手はそれで引き下がってくれるほどやさしい思考はしてくれなかったようだ。

「よくお考えなさい？どれほど優れた機体であろうと、操縦者がダメでは意味がありません。まさかに pearls before swineです」

「私が操縦者として劣っている？」

「ええ、男の中ではそこそこ優秀なようですが、所詮はそれまで。わたくしたちにはまだまだ及びません。そんなあなたができることなど、その技術を万人の方々へ分け与えること。それがあなたのできる最大の献身ではないですか？」

高飛車で饒舌となつていいるからか、言いたい放題なアリス・オルコットのスピーチを聞き流しつつ、なんとかエストを抑え込む。あの自尊心が高い彼女のことだ。下手すると、『ぶつ殺すぞ！この金髪縦ロールアバズレ処女があ!!』と喧嘩腰で極道妻のような口調で発狂しかねない。

「何度も言うが、答えはNOだ。機体は渡せない。同じことを何度も言わせないと助かる」

「これほど頼み込んでいるのですか？わたくしがあなたに役に立てるチャンスを与えているのですよ？」

「君のその安っぽい頭を下げれば何でも願いが叶うほど世界は優しくない。自分のその頭一つで私が顔を縦に振ると思われたのなら、随分と舐められたものだな」

「なんですって？」

先ほどの柔らかで親切な物腰とはうって変わり、下冷えするような低く、怒りを感じさせるような口調で言い返す。そのまま言い争いに発展するかと思われたが、双方が口を開くよりも早く教員である鈴が教室に入ってきたことよって強制的に会話は中断させられる。

「話は終わりませんわよ!!いいですわね!!」

「いいね、お互い納得するまで徹底的に話し合おうじゃないか」

平和で穏便に済ませられるならば、それに越したことはないのだが、この時話し合いではなく殴り合いで解決することになるとは誰が想像できただろうか。

――

「それじゃあ、SHRを始めるわよ――」

前に立った鈴の軽い声を合図に色々と言達事項を伝えられていく。全体的な一年の行事に学園の設備を使う上の注意事項。そのほとんどが他愛ないものだったが、最後に思い出したかのように最重要事項を告げた。

「それと再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めなきゃいけないんだけど、立候補者いる?」

「先生、代表者ってなんですか?」

「代表者っていうのは、そのままの意味よ。再来週の対抗戦の出場だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席、まあ、クラス代表みたいなものね」

あからさまに面倒な要件に教室がざわざわと騒がしくなる。ここではリーダーシップのあるものが進んで仕事を引き受けるものなのだが、なにせ場所が場所だ。その行事に対して、民衆の関心がどこへ向かうのかはあからさまだった。

「はい!小倉瑠奈君を推薦します!!」

「あ、私もそれに賛成です!!」

なぜ、こういう嫌な予感というものは的中するものなのだろうか。

よくあることだ、『まさかね』と思っていたことがよりによって起こってしまう、それも悪い状況に限ってなのだから夕チが悪い。場の流れか、それとも同じことを考えていたからか、次々とクラスメイトが賛成の声を出していく。

「待つてくださいい！そんなこと納得がいきません!!」

その流れを逆流するように、一人の生徒が大声をあげる。それはよりによって先ほど言い争ったアリス・オルコットであった。だが、顔をしかめており、耐えられないといった表情だ。

「そのような選出は認められません！物珍しいからといって、男がクラス代表だなんていい恥さらしです!!」

若干、話のベクトルが違うが、この小倉瑠奈をクラス代表としようとする流れに逆らってくれるとは有り難い。あえて、反論はせず好きにさせる。

「男だからという理由で専用機を手に入れたような素人にクラスの顔となるクラス代表を務めさせるなど、そんな恥辱と侮辱を一年間入学主席であり、イギリスの代表候補生であるこのアリス・オルコットに耐えろとおっしゃるのですか!？」

『言いたい放題ですね、それに対して何も言わないだなんてそれでも男ですか?』

「黙っているエスト、僕があんな見え見えの挑発に乗ると思うなよ」

言われ放題で我慢ならなかったのか、エストが煽ってくるが、動じた様子もなく無表情で聞き続ける。この流れで行けば、クラス代表は間違いなくアリス・オルコットとなるだろう。ならば、今はやりたいようにさせて、後でどっちが優れているのか、白黒はつきりさせればいい。完璧かつスキのない計画だ。だが、どんな計画も必ず綻びは出てくる、主に人間の感情によって。

「そもそも、小倉瑠奈などという男でありながら、なんですかその名は!?!まったく、これを名付けた親のセンスを疑いますわね!!」

「っ!!」

その一言で今まで冷静を保っていた感情が一気に沸騰する。人ならば誰しも心の中で踏みこんでほしくない領域があるだろう。それ

を彼女は踏みにじった。言い訳や弁解など不要だ。その言葉だけではどんな手段を用いたとしても、撤回させる必要がある。

『抑えてください衣音。ここで出てもなんの得もありませんよ?』

「黙ってる。おい!アリス・オルコット!!」

ガタンと物音を立てて、勢いよく立ち上がると限界まで感情を押し殺した声で丁寧な用件だけを伝える。

「こんな場で申し訳ないが、さっきの話の続きだ。僕の機体、君に差し上げてもいい」

その衝撃的な発言に鈴を始めとしたクラスの人間が驚いたような声を出す。そのなかでアリス・オルコットだけは勝ち誇ったような笑みを浮かべ、口元に手をかざす。

「やっとわかってくれましたか。やはり、下手に背伸びをせずに、凡人は凡人なりにコツコツと努力をしていくのが相応ですわ。

a journey of a thousand miles begins  
といたしますしね」

「ああ、だからどちらがこの機体を手にするのにふさわしいのか勝負しよう」

「勝負・・・ですか?」

「ああ、君と私とでISの試合を行って、君が勝ったのならなんの条件も付けずに私の機体を君に引き渡そう。だが、私が勝利したのならばさっきの発言を撤回してもらおう」

「さっきの発言・・・あなたを凡人と言ったことですか?」

「いいや、私の名前を侮辱したことだ」

「いいでしょう、その条件で結構です」

どう考えても割に合わない。負けたら機体を奪われるというのに、勝ったとしても相手の謝罪の言葉のみ。メリットとデメリットが不釣り合いすぎる。誰もがそう思う中で、ただ一人発案者である小倉溜奈だけは涼しい顔で口角が上がっていた。

いい機会だ。こんなところで躓くようでは自分が破壊者の力も機体も受け継ぐ資格などない。幸いなことに、相手もそれなりの強敵と聞く。相手にとって不足はないだろう。

### 3話 彼の地は遙か遠く

「いったい何を考えているのよあんたはっ!!?」

「~~~~~っ!」

放課後の寮で響く鈴の怒声。まるで拡声器のような音量の振動に脳震盪を起こしそうになるが、何とか踏みとどまる。だが、鈴の怒りはそれでも収まらないらしく、一緒に部屋に来た千冬とシャルロットに止められる始末だ。

「落ち着いて、鈴。とりあえず衣音から話を聞かない?」

「そんなことやっている場合じゃないわよ!よりにもよって一年の主席と専用機をかけて戦うことになったのよ!?!?どうするのよ!?!」

「過去を悔やんでも何も生まれませんよ?」

「あんたは黙っていなさい!!」

怒りの有頂天といった様子の鈴では話が伝わらなそうなので、ひとまずエストに鈴の相手を頼み、シャルロットと千冬に軽く事情を説明する。朝、教室で起こった出来事、アリス・オルコットというクラスメイト、そして自分の専用機を賭けて戦うことになったこと。

どうせなら、シャルロットと千冬にこの勝負に勝つための算段を考えてほしかったのだが、やはり内容が内容なだけにいい顔はしてくれなかった。

「衣音、悪いことは言わん。今すぐ相手の部屋へ行って勝負を取り消してもらえ」

「お断る」

「そうは言っても相手は入学主席にしてイギリスの代表候補生、しかも、貴族オルコット家の次期当主アリス・オルコットだぞ? IS訓練もかなり積んでいるだろう。いくらなんでも相手が悪すぎる」

「そんなの、やってみなくてはわからない」

「ならせめて機体だけでも許してもらおうよ?」

「機体を掛け皿からなくしたら相手は本気で戦ってこないだろう。それでは意味がない」

機体なんていうものを賭けておけば、いざ負けた時『手加減して

やっていた』などという言い訳など通らない。更に言えば、相手が勝負に降りることもない。的確かつ効果的な餌だ。

「もし負けたらどう責任を取るつもりだ？」

「責任？そんなものないだろ。負けたらヴァリアントは奪われ、僕は学園を去る。どこに誰が負うべき責任がある？」

「っ！」

反省の色なしといった衣音に頭を抱えながら、近くにあった椅子に腰かける。シャルロットも同じ心境らしく、苦悩しながら項垂れている。

「エスト、お前は近くにいたはずだろう。なぜ止めなかった？」

『止めても無駄だと判断したからです』

衣音は機ヴァリアント体を通して自分の出生の秘密を知った。それでも家族を守るために小倉衣音は小倉瑠奈となり、戦うことを選んだ。その自分の名を殿様だろうが、將軍様だろうが、女王様であろうが、何者だろうが貶すことなど許されない。

「心配してくれるのは感謝する。だけど、戦うよ。自分が起こした戦いなんだ、自分で始末をつけないとね」

捻くれることなく、こんな自分を肯定し、否定するものと戦う。その決意のような言葉を聞いた瞬間、この戦いを止めるのは不可能だと薄々と感じ取る。

「さあ、ヴァリアント。お前が待ち望んだ戦いだ」

自身の身体に潜む最強の相棒に言い聞かせるようにつぶやくと、今日の疲れを癒すためにベットに横たわる。隣でギヤアギヤアと鈴の怒声が聞こえてくるが、一度瞼を閉じてしまえばこっちのものだ。



「馬鹿か君は」

「朝っぱらからバカといわれる日が来るとは思わなかったよ」

朝っぱらの食堂、そこで偶然会った織斑春香と席をともして第一に言われた言葉がそれだ。もっと『おはよう』とかの挨拶言葉があるのではないだろうか。

「馬鹿と言われても、私はそこら辺の連中よりは賢いと思うけどね。私は新しい数学公式や新型の元素粒子を発見してきた。それは常人にできるものかな？」

「ならば、その頭を使つて損得の計算をすることはできなかったのか？それも子供ができるような単純な計算をだ」

「君、言葉がきついな」

刺々しい言葉を聞きつつ、朝食をとる。肯定的な言葉を彼女に求めた自分がバカだった。昨日といい、今日といい他人から罵声を聞かされる日だ。別に誰かに理解してもらおうとは思わなかったが、ここまですべて周囲が否定的だと傷つく。

「相手は男である私が専用機を持つのはふさわしくないと言っていたけど、君も同意見？」

「否定はしないな、少なくとも私は私の父が母に勝っているところを見たことがない。それでは考えが偏ってきてても仕方がないというものだ」

「そうか・・・君の母さんはそんなに強いんだ」

「ああ、剣道の有段者なのだが、そんな母に父は毎日挑んでは負けて返り討ちになつていたな。それはもう見事なまでの負けっぷりだった」

「それも一種の夫婦愛なのかな・・・」

愛のカタチも十人十色だ。彼女の両親のように剣道の腕を競い合つていくことで互いを認め、そして相手を見ることもできる。なんとも不思議な関係だ。それに対し、自分の両親はどのようなものだろうか。

母――謎の美貌を持つ自分の母親。かつてISの代表生だったようだが、今はその片鱗を見せることなく自分を育ててくれた。だが、昔少しだけ見たことがある言葉、『楯無』。そこにはどのような意

味が。

そして父は――

「父さん……」

「おい？どうしたんだ？」

「いや、別に何でもない。少し両親のことを思い出しただけ」

「そうか、ともあれこのまま戦っていても負けることは必須だ。それでどうだ、私がいろいろ教えてあげてもいいぞ？千冬さんをはじめとするISの関係者は周りにたくさんいるからな」

「いや、結構。気持ちだけ受け取っておくよ」

「え……」

個人的に勇気を出して助け舟を出したつもりなのだが、それをあっさり断り、席を立つ。別に意地や感情の問題ではない、純粋に彼女の力を借りる必要がないと感じての返答だ。孤立は問題だが、過保護では自身の成長が望めない。ライオンは我が子を崖へ落とすという、ならば人間にもそれにふさわしい試練があってもいいだろう。

――

♪♪

薄暗い部屋にオルゴールの安らかなメロディが響く。その部屋には蛍光灯らしきものはなく、部屋の真ん中にあるほのかな明かりのラントンが部屋を照らしている。そんな部屋に設置されたソファアの上に白い髪が特徴の一組の少年少女がいた。

ソファアに腰かけた少女に少年が膝枕をされており、心地よさそうに頬を膝の上に置いている。そしてそんな少年を撫でながらオルゴールのメロディにそって鼻声で歌っている。二人とも同じ白髪のところを見ると、姉弟または兄妹なのだろうか。

「ねえ、あなたはこの世界は美しいと思う？」

「世界を問わず、この世の全ての美麗と醜悪は表裏一体だ。人は美しいものを好む、なのに醜いものは嫌いというものは少々都合がよすぎないかな」

「ならば、私たちはこの世全ての悪なのかしらね。この世に存在する最も尊いものの正反対の存在。万物すべての人々から嫌われ、蔑まれ、迫害される宿命」

「別にいいさ。僕たちは人ならざる者、この世界の理から外れた存在。人の常識などいらぬ、人間ごときの尺度で僕たちを凶られてたまるか。お姉ちゃんには僕がいるよ」

「よく言えました。ふふっ・・・」

頬を包むと、少年を起き上がらせて唇に自身の唇を押し付ける。互いの口をこじ開けられ、下を差し込まれる大人のように淫靡で妖しいキス。数十秒のキスの果てに口が離れる、二人の口の間を唾液でできた銀の橋でつながれる。

「でも、なんであの胡散臭いウサギー―條ノ之束の力を借りなきやいけないの？あいつ、僕を実験動物を見るような目で見てきて殺したくなるんだけど」

「それは私も同じだけど、ダメよ殺したら。あの女はすべての用が済んだら殺せばいいわ、生かしておいていいこともないしね」

それはおそらく相手も同じことを考えていただろう。共通の目的を達成した後はあの女と手を組んでいる必要などない。もらえる物はもらい、奪えるものは奪う。それができてこそ完全勝利というものだ。そしてそこにいるのは自分とこの子のみでいい。ほかに勝者など不要だし必要ない。

「ねえ、もつとしようよ」

「ダメ、これ以上はベツトでしないとソファア―が汚れちゃうでしょ？」

「それもそうだね、じゃあこれで我慢する・・・」

目線を下に向け、少女の着ているシャツのボタンをはずしていく。すると、小さくはない胸を包んでいる清楚かつ大人びた紫色のブラジャーが顔をのぞかせる。

「可愛らしいブラ。もしかして、僕がこうすること期待していた？」

「私はいつでもあなたがこうして甘えてきても大丈夫なようにしているだけよ。それとも、もつと刺激的なやつのほうがよかった？」

「次からそれも見てみたいな」

そういい、少女のブラを上にかくしあげ、可愛らしい乳房をむき出しにする。白い髪と同じようにシミ一つない綺麗な肌に柔らかそうな二つの膨らみ、そしてその膨らみの先端にあるピンク色の突起物。それが大きな母性と安心感を伝えてくる。

「っ……」

その母性に身も心も任せるように顔をうずめる。顔いっぱい広がる柔らかい感触と温もり、それをもつと得ようとぐりぐりと顔全体を胸に押し付けていく。

「気持ちいい？」

「うん、柔らかくて温かくて……安心する」

「ふふっ、でも続きはベットでね？」

「えー、こんな中途半端で？」

「あそこでならいくらお互いがいくら汚れてもシーツを変えればいいんだから。ほら、早く服を脱ぎなさい」

顔を離させて立ち上がると、半脱ぎの状態だったYシャツとたくしあげられたブラジャーを脱ぎ、床に投げ捨てる。それに続いて、下に履いていたミニスカート、すらりと長い足を包んでいた黒タイツ、靴下を脱ぎ、最後の衣類である紫のブラジャーとおそろいの紫のパンツに足を通し、脱ぎ捨てる。そのとき、肉付きのいいお尻が左右に揺れる。

「ふう……」

生まれたままの姿となり、全身にひんやりと冷たい空気が包み込む。この冷たさが世界だ。誰もが孤独で誰もが無価値だ。誰にも理解されることもなく、壊れればまた違うパーツと取り換えられる。自分を必要としない世界、人間はなぜこんな世界で生きていける、そしてなぜ生きていて幸せだと胸を張って言える。

世界は自分を必要としていなかった、ならば、こちらは何もいらない。自分には彼が……弟のみいればいい。

「お姉ちゃん？どうしたの？」

振り向くと、自分と同じように生まれたままの姿となった少年——弟がいた。なんだか急に彼が愛おしくなって抱きしめる。それはまるで彼が最後の希望というように、もう二度と彼を離さないというように。

「今日は雄星の好きなことをしてあげる。さあ、おいで？」

「うん、お姉ちゃんを満足させられるように頑張る」

ベットに横たわって少年——雄星に向かって両脚を開き、すべてを受け入れる体勢をとる。白い肌に瑞々しい肉体、そして男の情欲と性欲、そして本能を存分に刺激するであろう無防備な姿。それに流されることなく、雄星は優しく、そして丁寧姉の身体と自分の身体を重ねる。

「んっ……」

刺激に我慢できずに両者の声が部屋に響く。今はもうすぐやることになるであろう仕事のこともすべて忘れて情事に没頭していたい。

「次はどんなことをしたい？」

「その……こっちでいい」

腰に腕を回し、肉付きのいいお尻を鷲掴みにする。それだけで意図を理解すると四つん這いになり、左右の尻肉を開き、排泄口を見せつける。そこには恥じらいや不快感などなく、弟に自分の痴態を見ている二人だけの世界。他者が介入しない不変の世界。そしてこの世界ももうすぐそのようになる。それまでの辛抱だ。

——

『2. 1の標準正規分布における確率は？』

「48. 2%」

『正解、では3. 3の標準正規分布における確率は？』

「確か・・・5%だったっけ？」

『残念、正解は5%ではなく50%です。少々記憶違いがありましたね』

「げっ、僕もまだまだだな」

「おい、何をしている」

第三アリーナのAピットにやってきたのは不機嫌そうな目つきをしている千冬であった。殺し屋のような鋭い目つきでのんきにくつろいでいる瑠奈を睨みつける。

「標準正規分布の確率の問題を出し合っているんだ」

「それ、楽しいのか？」

「意外とね、それで何か御用？というより、なんでここにいるの？」

「それはこちらのセリフだ。お前は今日ーーいや、今がなんだかわかっているのか!？」

言われなくてもわかっている。今日は翌週の月曜日の放課後、それはここ最近学園中で話題で持ちきりになっていたアリス・オルコットとの対決日であった。そう、今日、いや、今が試合時間だ。本来ならば既に試合が始まっているはずの時間、だというのにまだに瑠奈はAピットでくつろいでいる。

「お前が出てこないから観客席からはお前は棄権したのではないかという野次が出ている。さっさと出撃しろ!!」

「僕は別にこの試合に誰かを招いたつもりはないんだけど・・・勝手に来ておいてブーイングだなんて随分と理不尽なギャラリーだな。まあいいや、いこうか」

長い水色の髪をたなびかせ、ヴァリアントを展開する。過去に一回しか戦闘経験はなかったが、機体の着脱ぐらいは問題なくレベルでスムーズに行えるようになっていた。あとはヴァリアントと自分がどのくらいやれるかだ。

「あ、そうだ、出る前に一ついい？」

「なんだ、何か不具合でもあるのか？」

「いや、そういうのじゃなくて、素朴な疑問。僕の髪、切ったほうがいいかな？」

男にしては明らかに長すぎる水色の髪。これと容姿のせいで昔はよく女に間違われていたことがある。街を歩いていけばチャラついた男に声をかけられ、ひどいときはモデル編集者やレスビアン同性愛者に金を握らされてホテルに連れ込まれそうになったこともある。

この長い髪がなければ少しはマシになるかもしれないと思っただけだったが、なかなか実行には踏み出せずにこうしてダラダラとこの髪と付き合ってきた。別にコンプレックスという意味ではないのだが、場所が場所だ。思い切ってイメチェンしてみるべきか。

「いや、お前はそのままでもいい。その髪も容姿も親からもらったものだ。頑なに否定することはしない」

「そうか・・・ありがとう、少しだけ勇気をもらったよ。そろそろ出る。下がっていてくれ」

軽い風圧とともに機体が浮き上がり、静かに飛び立っていく。

千冬としては彼とは教師と生徒との関係でありたかったのだが、最近では身内のように砕けた口調で会話を交わしていた。まあ、今更彼に『敬意を払え』と言ったところで従うとは思えないが、内心千冬も喜んでいるのかもしれない。

過去の因縁と責任で自分には彼と話す資格すらないはずだ。だから、彼が生まれて十数年、会いに行くことはおろか連絡をとることすら避けて日々を過ごしてきた。だが、運命の悪戯かそれとも宿命か、父親の力を受け継ぎ、この戦いの戦火に身を投じていく。そしてその火蓋が切って落とされた。

#### 4話 因果を超えた宿敵

かつて少女は孤独だった。歪んだ親、歪んだ愛情、そして歪んだ家庭。そのすべてがまだ幼い少女の心に突き刺さり、引き裂き、傷つけた。それは世間でいえばクソみたいな現実だったのだろう。だが、救いもあった。あの同じ親から生まれたとは思えないほどに可愛く、素直な弟だ。

ほぼ育児放棄状態であった家庭の中で、唯一と目立っていた家族であった。一緒に起床しては食事をとり、共に入浴して床に就く。孤独であった少女にとって数少なく・・・いや、唯一の人とのふれあいだ。誰も助けられない現実、見て見ぬふりをする人々、その中で自分を癒してくれる存在。

そして弟に向けていた愛はいつからか家族愛から恋愛へ変わっていった。早く大人となつて、結婚式を行い、自分を姉としてではなく嫁として抱きしめてほしい。だが、困ったことに彼とは血のつながった血縁者。これでは法律が認めない。

ならば、国外へ行こう。合法的に婚姻が認められているフランスあたりに行き、そこで挙式すればいい。ついでに新婚旅行を兼ねて観光だ。そんな子供じみている妄想や空想をするのが好きだった。それは物や愛に恵まれなかった自分の編み出した唯一の趣味なのかもしれない。

さらに嬉しかったのは弟も自分と同じ気持ちだったということだ。『僕も結婚するのならばお姉ちゃんみたいなひとがいい』と言ってくれたのだが、お姉ちゃんみたいなのがいいーつまりは自分と結婚したいということだろう。相思相愛、両思い、なんて嬉しいことだ。となればこうしてはいられない、善は急げだ。もっともっとお互いを知っていかなくちゃ。

心も体もとろけあうほど一つになって、一心同体というほど互いを知り合つて。だけどある日、興奮した様子の両親が自分たちのもとへ来た、そしてー



――

「やっと来ましたわね。てっきり怖気づいて逃げ出したのかと思いましたが」

「勝ち戦で逃げる必要はないだろ。それと遅れて悪かった、さっさと始めよう」

相対するアリス・オルコットの専用機は鮮やかな青色のデザインをしたISであった。左右の方には鮮やかで可憐な光のフォトンを出し、まるで戦乙女フルキューレのようなフォルムをしている。質素で鈍重なデザインをしているヴァリアントより美しさが目立つ。

(だけど、それがどうした)

ミケランジェロの彫刻だろうが、レンガだろうが砕けてしまえば同じ石の残骸に過ぎない。兵器にデザインや美しさを求めるなどナンセンスだ。まあ、ISでプロパガンダをしている政治家には通じない理論なのかもしれないが。

「……………」

「ふう……………」

試合開始のカウントダウンが始まり、わずかばかりの全身の力を抜く。試合が始まった瞬間、全力で動けるように。

3・2・1

カウントダウンが終わるまであと1秒もない時間で瑠奈の頭部をヴァリアントの装甲が覆いかぶさる。

試合スタート!!

「落ちなさいー!」

「っ!!」

試合開始とともに相手が大型ライフルを出現させ、撃ち込んでく

る。正確な射撃、だがそれを既に見切っていたヴァリアントは機体の軸心をずらして躲すと素早く後方に下がって距離を取る。それは相手の射撃に確実に反応できる距離にいるためなのだが、その対処は相手にとって有利なフィールドで戦う結果になってしまった。

「このブルーティアーズmarkⅢとわたくしに遠距離で戦うなど、笑止ですわね!!」

自分の有利な距離でいる間に仕留めたいのか、遠慮や妥協をすることなく機体の全ての射撃性能をフルに生かしてヴァリアントに攻撃をしていく。展開した大型ライフルに両肩に装備されている全自動砲撃装置、そして自身がもつとも得意とする射撃。

これの試合に勝ったらあの機体が自分の物となる。そこまで重要な試合となつては油断などしない、全力で叩き潰す。

「さあ、わたくしのこの猛攻を前にどれくらい動けますでしょうかね？」

容赦なく放たれる攻撃の嵐、それによって近づくことができないヴァリアントは周囲を飛び回って攪乱させていく。距離は相手の有利であるがゆえに、接近できないがこちらには逃げ道は十分にある。アリーナ内には障害物がないゆえに上下左右、相手の360度すべてが自分の動ける範囲だ。

逃げ続けていれば負けはしない。そこからスキを見つけていく。

「くっ、いいかげん落ちなさい!!」

そして好機は意外と早く訪れた。始めて10分も経たずに戦闘経験と心境で差が表れ始める。焦りと苛立ちからか、アリス・オルコットの射撃にわずかばかり乱れが生じてきた。明らかに自分が有利であることは明白、だというのにいくら経っても相手にはかすり傷一つ負わせられない。

それに加え、全身の遠隔操作武装ビットも全機稼働させてさらに攻撃の手を強めていく。だが、それでも勝てない。

ピピッ

「っー」

警告音に驚き、エネルギー残量を見ると既に三分の二を下回っ

ていた。当然だろう、何分もすべての武装をフル活動させて掃射していれば多くのエネルギーを消耗する。ここまで時間をかけても仕留められない苛立ち、そして焦りが本人の知らない失態を起こす。

「ちよこまかとしぶといですわね!!」

イライラをぶつけるように叫んだ瞬間、すべての武装の射線が大きくブレる。そしてその隙を瑠奈は見逃さない。

「っ!!」

一瞬にして全身のスラスターをフル活動させ、鮮やかな弧を描くように急接近する。急な動きの変化に戸惑いつつ、火力を集中させるが動揺と慌てからかうまく命中せずに接近を許してしまう。そして

「はああああ!!」

ブルー・テイアーズmarkⅢの装備である大型ライフルを蹴り壊す。そして鮮やかな動きで隙だらけとなったアリス・オルコットの腹部に強烈な蹴りを直撃させる。

「ぐううう!!」

強烈な圧迫感が操縦者を襲うが、絶対防御とシールドバリアーのお陰で次の瞬間には普通に動ける。それに接近されたとはいえ、食らった攻撃は一発の蹴りとライフルの破壊だけだ。そこまで大きな損害やダメージはない。戦闘続行にはなんの問題はないのだが――

「あ……くっ……」

自分の自慢の射撃をかくぐり、攻撃を食らわされた。決して油断などしなかった、なのに正面から正々堂々とこんなにもあっさりとしたその直視した現実が脳内をかき乱していく。

「なんで……どうして……」

「まだ続けるつもりなら付き合うけど、もういいんじゃないかな? 君はもう試合を続けられる精神状況じゃないと思うけど……」

熟練の選手ならば、この程度の出来事などすぐに流せるかもしれないが、彼女は未熟であるがゆえに必要な以上に精神にダメージを負いすぎている。そんな状態で戦っても勝てるはずがない。

「もうやめないか?」

「くっ、ま、まだですわ!!」

弱気になっている自分を喝破するように叫ぶと、合計8機のビットをフル稼働させる。射撃で倒しきれないのならば、近距離攻撃で確実に仕留めればいい。ビットの銃口から刺々しい鋭利な刃物を出現させると、一斉に切りかかる。

ブルー・ティアーズの格闘性能と近接武装のなさ問題解決のために装備された武装だが、その動きはどこか単調でぎこちない。サーベルを抜刀すると、すべてを引き裂き危なげもなく無力化する。

「無駄だ、諦めろ」

もはや勝敗は決した。これ以上の試合続行は無意味だ。それを相手もわかってくれたらしく、悔しそうに歯ぎしりをしつつも武装を収納してくれた。ひとまず勝利といっていいだろう。ヴァリアントももっていたサーベルを収納しようとしたと、異変が起こる。

ピー!!

「ん?なんだ?」

機体が上空から急降下してくる謎の物体を捉える。それを見た瞬間、体が奇妙な感覚を感じた。この体の中に無理やり潜り込まれるような不気味で不快な感覚。それに苦しむよりも早く空が光る。その

刹那

ドカンっ!!!

会場全体が震えるほどの振動を起こして乱入者であるヴァリアントに似た人型の黒い機体がアリーナの中央の着地する。ヴァリアントとは正反対に漆黒のカラーリングをしており、所々に淡く輝く青い線が入っていた。戦闘に介入しに来たかと思っただが、両手には何も武器らしきものは握られておらず、背中に大型の物理シールドらしきものを背負っているだけだ。

危険度は高いようには見えないが、その誰も見たことがない機体に啞然としている。だが、無謀にもその機体に近づく者がいた。

「ちよつとあなた!」

終了間際とはいえ、自分たちの試合に介入されてご立腹なのか、ほとんどの武装が破壊されているというのに近づいていく。

「上級生の専用機持ちだと思えますが、神聖なわたくしの試合に無断

で入るなど無礼にもほどがありましたよ?」

通信チャンネルで呼びかけるが、一向に返事はなく静かに佇んでいる。見向きもしないその態度にアリス・オルコットの貴族としてのプライドが爆発する。

「訊いていますか、お返事は!? わたくし、アリス・オルコットの質問に答えなさい!!」

振り向かせよと接近したとき、濁った声がわずかに漏れる。

『キ……エ……ロ……』

「え?」

次の瞬間、手首から巨大な光の剣が出現しアリス・オルコットのブルー・テイアーズ markⅢに切りかかる。急すぎる行動と素早い剣筋に反応できず、切り裂かれると思ったがその間にヴァリアントが割り込み、受け止める。

「こんな形で介入してくるんだ、どう考えても敵に決まっているだろ!!」

「こ、小倉さん……」

「っ!!」

重い剣筋を何とかはじき返すと、アリス・オルコットを掴んで距離を取る。機体の形式番号を検索するも結果がでない。だが、一つだけ単語が表示されるがそれは『AXE』<sup>アグゼ</sup>という全く聞き慣れない言葉だった。

「なんだ……こいつ……」

相手の正体も目的も性別もわからない。だが、なぜか自分に——小倉衣音に強烈な殺気を送ってくる。目的は自分なのだろうか。

「下がれ、アリス・オルコット」

「で、ですがそれでは……」

「君がいても邪魔なだけだ。退いてくれ」

「わかりました……」

先ほど危機を救ってもらって頭が冷えたのか、反論することなく提案を受け入れる。既に観客席の生徒は避難を始めている。それにもうすぐ教員の救出部隊もあるだろう。

「すぐに増援を連れてまいります、それまで頑張ってください！」  
「期待せずに待ってるよ」

最後の一人の退避を確認すると、ヴァリアントの武装のロックを解除し巨大な剣を出現させる。試合では使う予定はなかったのだが、贅沢は言ってられない、使えるものは使う。

「……………」

衣音の戦闘態勢を感じ取ったからか、相手ももう片方の腕にも武装を展開して二刀流の戦闘スタイルをとる。白き機体と漆黒の機体、その両者の足がわずかばかり動いた瞬間、互いが一斉に相手に斬りかかる。左右の腕による手数で戦う謎の漆黒の機体『AXE』と一撃の攻撃力に重点を置いた白き最強の機体ヴァリアント。

「ぐっ、ちいっ!!」

だが、相手は相当の鍛錬を積んでいるのか動きに無駄がない。左右の腕を効率良く動かし、中々反撃の機会を与えてくれない。防御に加えて本能と勘で何とか凌いでいるが、そんな場しのぎがいつまでも続くはずもなく、剣筋がわずかばかり直撃し、顔面の装甲を傷つける。

「うぐっ!!」

それにわずかばかり動揺した隙を突くように腹部に強烈な蹴りを受け、大きく吹き飛びアリーナの障壁に激突する。

「やってくれるな……少しばかり手加減してくれてもいいんじゃないか?」

ぐらつく意識で立ち上がりつつ、負け惜しみに似たセリフを吐く。相手は本気だ、間違いなく自分を殺そうとしている。しかも技量は相手が上、いや、ただ単純に自分がヴァリアントの能力を使いこなせていないだけなのかもしれない。

「くそ……………」

勝てない相手ならば逃げるのが鉄則だが、相手が素直に自分を逃がしてくれようか。だが、ここに居てもこのままジリ貧、教員の増援が来たとしてもこの『AXE』相手に勝てるとは到底思えない。被害が増えるだけだ。

「やばいな……………」

『衣音、衣音!』

思考を張り巡らせていると、エストが慌てた様子で話しかけてくる。

「悪いエスト、今はお前に構っている余裕はないんだ」

『そうではありません。さらに一機上空からこちらに降下してくる機体があります!!』

「は?」

その言葉の意味を理解するよりも早く、前方に激しい振動と共にさらに一機の機体が着地する。その機体もヴァリアントやAXEと似たような外見をしていた。だが、カラーリングは赤を基準としており、脚部、胴体には分厚そうな赤い装甲、そして背中にはヴァリアントに似た翼があった。

「なんなんだよ、次から・・・」

オペラ舞台のごとく次々と現れる介入者に驚きと驚嘆の混じった声を出す。てつきり、この機体も敵かと思ったのだが、なぜか自分に背を向け、AXEと向き合っている。そしてその赤い機体からは自分に対する殺気らしきものが感じられなかった。

「なんだ、この懐かしい感覚は・・・」

奇妙な感覚だが、不思議と不快さは感じない。それどころか心地よく安心できる優しさを感じ取れる。その機体も相変わらず機体のほとんどは謎だ。だが、やはり一つの単語が出る、それは『EXA<sup>エグザ</sup>』。

「あの、あなたはー」

そう問いかけるよりも早く対面していた『AXE』がヴァリアントへ向かって突っ込んでくる。相変わらず驚異的な速度だが、それがヴァリアントに到達するよりも早く『EXA』が割り込むと腕の剣を受け止める。そのまま手から発生したエネルギー波で『AXE』を吹き飛ばす。

まるで熟練の兵士のように鮮やかで無駄のない動き、見事なまでのカウンターだった。必要最低限の機体の武装以外を使わず、技術で圧倒する。いったい操縦者は何者なのだろうか。

だが、カウンターを受けても相手は怖気づくことなく攻撃を再開す

る。

串刺しにしようとする光の刃を突き刺すが、わずかに体を屈めて刃を躲すと腹部に拳をめり込み前かがみの体勢にさせる。そのわずかな時間を逃さず、顔面に膝蹴りを食らわせ大きくのけぞらせる。そして機体の脚部の装甲を展開し、強烈な蹴りを直撃させる。

鼓膜が震えるほどの金属音とともに黒き人型の機体が吹っ飛んでいく。

「す、すごい……」

圧倒、最強、そんな存在が目の前にいた。それに見惚れていると、学園の格納庫からいくつかの機体が出撃され、こちらに向かってくる。おそらく学園の教師による増援部隊だろう。

『……』

目の前にいる『EXA』には敵わないと思ったのか、『AXE』は武器を収め全身から電子パルスを散布し撤退していく。完全に退いたことを確認すると、ヴァリアントを解除する。同じ未確認機である『EXA』の前で危険だとは思っていたが、自分がこの機体に救われたのは確かだ。

だが、『EXA』はそんな衣音を一瞥すると機体を浮上させて去っていった。飛び去っていく赤いエクストリーム、初めて見るはずのその機体を懐かしく、嬉しく、そしてなぜ憐れ感じるのだろうか。その時上空から教員部隊が降下してくる。波乱に満ちたアリス・オルコットとの試合はこうして幕を閉じたのであった。



## 5話 英雄の再来

人生山に谷あり、一難去つてまた一難、そんな難儀続きの人生だが、その難儀の後には大抵休息というものがあるはずなのだが、ここIS学園にはそんな余裕はないらしい。

「……………」

「……………」

取り調べ室のとある一室、そこで机越しに無言で対面する瑠奈と千冬がいた。てつきり先ほどの襲撃を無事に切り抜けられたことに對する労いの言葉をかけてくれるかとおもっていたが生憎、織斑千冬という女にはそのような優しさはなかった。

「もう一度訊く、先ほどの襲撃で起こったことを報告しろ」

「お望みならば何度でも言つてやる、あの黒い機体は私をボコボコにしたあと勝手に立ち去つて行つた。他は知らない」

千冬を始めとした教員による密室での尋問と質問を繰り返すこと一時間、何度も聞いた返答をいわれる。あの襲撃直後、事件処理という名でアリス・オルコットと小倉瑠奈に取り調べを学園側は受けさせた。なんでもアリーナでのカメラはジャミングによつて使えなくなつており、あの襲撃者の正体の説明を学園はアリス・オルコットと小倉瑠奈に求めているらしい。

だが、アリス・オルコットは襲撃者と交戦することなく撤退しており、手がかりになりそうなものは手に入れていない。だとすると、頼みの綱は瑠奈にあるのだが、それすらもないということをこの一時間で味わっている。

「生徒は教員のいうことを聞くものだ。いつまでもお前に割いている時間はない、さっさと白状しろ」

「しつこい女は嫌われるよ？まったく、そんなんだからアラフォーになつても嫁の貰い手がないんだよババア」

「っ!!」

売り言葉に買い言葉、そして反論できない正論に苛立ちをぶつけるように目の前の机をバンと叩く。無論、何も知らないなど嘘の報告

だ。『AXE』に『EXA』報告するべきことなど山ほどあるが、それを報告するのは口が阻まれる。

何となくだが、この学園を信用できないし報告する義務があるとは思えないのだ。

「もう無理だよ、いくら私をゆすつたところでこれ以上は何も落とさない。わかってるだろう？」

千冬も瑠奈の報告が虚偽であることはわかっている。だが、千冬には瑠奈の報告を虚偽だと証明できる証拠がない。カメラは全滅、目撃者もないとなると千冬を初めとした教員も学園側も瑠奈の証言を信用せざるを得ない。その緻密さと口の堅さも父親譲りだ。

「もう質問がないなら行っていい？休みたい」

「ちっ・・・もういい、行け」

退室の意志を確認すると瑠奈は部屋を出ていく。それに入れ替わる形で鈴とシャルロットが入室してきた。

「どうでした、何か言っていました？」

「いや、ダメだった。あいつめ、全く私のことを信用していなかったよ」

「やっぱり僕が取り調べをしておいたほうがよかったかもしれない。織斑先生は必死すぎるんですよ」

瑠奈「・・・いや、衣音と千冬はもしかすると根本的な部分でずれているのかもしれない。教員として行動している千冬の一生懸命さと使命感が衣音には心のどこかで滑稽に思っており、馬鹿らしく思われている。もしかすると、先ほども必死になっている千冬を心の奥底で嘲笑っていたのだろうか。」

「もういい、地下の解析室に行く。もしかしたら映像を復元できるかもしれない」

それだけ言うと、千冬も部屋を出ていく。ともあれ、誰一人負傷者を出さずに事態を収束できたことを喜ぶべきなのかもしれない。だが、根本的な部分が解決できていない。あの黒い機体、他の対策を考へなくてはならなくなった。なんとなくだがこのまま敵が引き下がるとは思えない、自分の予感がそう告げているのだ。

「ふう……」

オレンジ色に染まる夕暮れの学園、寮へ続く道の途中に設置されているベンチに寝そべると安堵の息が漏れる。とにかく疲れた、ヴァリアントを起動させたときも実戦を経験したが、今回はその時とは比にならないほど疲労感が体に残る。

集団戦よりも手練れとの対決のほうが緊張感と緊迫感が桁違いだ。その疲れを少しでも癒すため缶コーヒを片手に持っているが、缶を片手にベンチに寝そべっていると完全に酔いつぶれた酔っぱらいにしか見えない。現に周りの生徒が自分を指さしてクスクスと笑っている。まあ、別にいいが。

「……」

極度の戦闘の後にはなぜか頭が冷静になる。あの黒いエクストリーム『AXE』、学園は政府に所属不明の無人機と説明したが、明らかに違う。あの機体には自分に対して明確な殺意――敵意があった。だとすると敵の目的はヴァリアントか自分か……多分、両方だろう。なんとというか面倒な奴に目をつけられてしまったものだ。

「ちよつとよろしいですか？」

「ん？」

頭上から聞き慣れた声、顔を向けると先ほどの試合の対戦相手アリス・オルコットがいた。どうやら、既に互いの取り調べは終わっていたらしい。神妙な顔つきを察してか、体をずるずると動かして起き上がる。

「隣、よろしいですか？」

「どうぞ、あと取り調べお疲れ様、お互い無事で何よりだ」

「は、はい……」

すると両者の間で沈黙が続く、別に溜奈としては彼女に用件はない。せいぜい『お互い無事でよかったね』程度だ。互いの無事を喜び合うような仲ではないだろう。

「あ、あの……」

「ん？」

「その……ありがとうございます。助けていただいて……」

「ああ、あの時か……」

多分、彼女はAXEに切りかかれた時、溜奈にカバーしてもらった時の礼を言っているのだろう。どうやら、あの剣筋と不気味さは彼女の中でトラウマになってしまったらしい。

「別にいいさ、見殺しにするのも気分が悪かったしね」

「それと、ごめんなさい。あなたのお名前を侮辱してしまって……」  
「っ……」

そういえば根本的な部分を忘れてしまっていた。今日のあの試合はヴァリアントの所有権と自分の名前を侮辱したことに対する謝罪を賭けたものだった。それを謝るといふものは負けを認めたということだ。正直、これは意外だった。プライドが高い彼女のことだから『勝負はうやむやになってしまったため、後日再戦を行いましてよ!!』と性懲りもなくかかってくると思っていたのだが。

「こちらこそ悪かった。君をよくわからない事情に巻き込んでしまったようだ」

「結局、あの機体はなんですか？ 学園は所属不明の無人機と発表していますが」

「多分……あれは無人機じゃない。無人機にしては敵意や仕草、動きが滑らかすぎる。そして躊躇いもせずに警告もない不意打ちをしてくる所を見ると、相当の手練れなことがわかる」

「そうですか……」

それから再び沈黙が続く。アリス・オルコットはその沈黙が気まずく感じられ、困ったような表情を浮かべていたが、溜奈は対して気にした様子もなく飲みかけの缶コーヒーを飲みながら夕焼けを眺めて

いた。だが、カフェインを摂取したことで少し元気になったからか、どこか饒舌そうな口調で口を開いた。

「さっき謝ってもらったところ悪いけど、私の名前である小倉瑠奈っていうのは本名じゃないんだ」

「偽名……なのですか？」

「ああ」

なんとなくだが、それは感づいていた。明らかに女性の名前である名前に加え、彼の筆跡を見てもどこかぎこちなさを感じる文字だった。例えるなら自分の漢字を親から教えてもらったばかりの子供だ。

そして決めては先ほど母へ報告を兼ねた連絡をした時の反応だ。イギリス代表候補生という立場や完璧主義な母からすると今回の敗北は間違いなく自分の評価の下方修正は避けられないと思っていた。

だが、彼の名前——小倉瑠奈の名前を伝えると母は少女のような楽しげな笑い声をだして『そう、それならば仕方がないわね。大変かもしれないけど頑張りなさい』という投げやりな返事だけだった。母まで懐柔させる存在である小倉瑠奈はいったい何者なのだろうか。そしてなぜ彼はその名前を使ってこの学園に来たのだろうか。

「まあ、まだ私の機体を諦めきれないというのなら一度本国と相談して作戦を立ててからくるといい。それこそ、あの襲撃者を相手でも勝てるほどの完璧な作戦をね」

さらっと皮肉を交えた冗談を言うと、これ以上の会話は不要と思っただのか立ち去っていく。既に体力の限界からかフラフラと危なっかしい様子だったが、まあ、大丈夫だろう。その時、夕涼みの風が吹いてアリス・オルコットの長い金髪をなびかせる。

「……………」

波乱に溢れた日だったが、不思議と自分の中で何かが成長したような手ごたえがある。それを自覚している自分がいるのだ。

「それじゃあ、一年一組のクラス代表はアリス・オルコットに決定したわ。はい、拍手」

次の日、教卓にあがった鈴のかけ声とともにパチパチとアリス・オルコットへ拍手が送られる。だが、それに一番戸惑っているのはアリス・オルコット本人であった。昨日の試合で自分より小倉瑠奈の方が優れていることは明らかだったはずだ。

だが、それなのに自分がクラス代表となっている。その理由は今朝の寮内までさかのぼる。

朝一で瑠奈が自分に言った言葉は『君がクラス代表をやってくれ』であった。当然ながら、遠慮した。昨日の試合では間違いなく自分は負けていたし、自分自身も敗北だと認めている。ならば優れた者がクラス代表をするべきなのは当然と言えば当然だろう。

だが、彼には肝心のやる気がなかったらしい。昨日の試合は私情での戦いであるがゆえに、クラス代表を決めるのは別の話だ。ならば、やる気のある人間がやった方がいい、それが彼の意見であった。そこまで言われたらクラス代表をやらないわけにはいかず、渋々引き受けたわけであった。

幸いなことにクラスメイトから実力は認められており、反論の声はなかった。ちらりと彼の方を見てみると目覚ましの缶コーヒを飲みながら拍手を送っている。それを見るとなんだかいろいろ負けたような敗北感がこみ上げてくるのは気のせいではないはずだ。

「そ、それではこのアリス・オルコット。精一杯尽くさせてもらいますわ」

あいさつ代わりにスピーチをすると、妙な気恥ずかしさを感じて顔が赤くなる。小倉瑠奈、少し変わった人間だが悪い人間ではなさそうだ。そう思いながら授業が始まるため、アリス・オルコットは教科書を開いた。

青く澄み渡る青空、その下を衣音の母親である小倉刀奈が歩いていった。前まで彼女は政府に保護状態であったのだが、なんとか事態の落ち着きを見せ、外出許可がでたのだ。外に出られるようになったら最初に行くところは決まっていた。

襲撃によつて破壊されてしまった我が家だ。見たいものではないが、現実から目を逸らしてもいられない。そのためこうして渋々足を運んでいる。

自慢の長い花畑を歩き、丘を越え、自然いっぱい道の道を歩く。

「え？」

すると、ほぼ全壊状態である自分たちの家の前に佇む1つの人影があった。遠くからで顔は良く見えないが、黒い上着を着て、長い黒髪が特徴の人物であった。そしてその人物を刀奈は知っている。

「っ、まさか!？」

そう思うが否や走り出す。そしてその人物はやはり刀奈が知っている人物であった。

「嘘……あなたは……」

風によつてたなびく髪を抑えながらゆつくりと振り向く。その人物は10代後半と思われる若い外見をしている少年だった。まるで女性のように腰まで伸びた長い黒髪に紅く光るオツドアイの瞳。そして息子である衣音に瓜二つの顔。

「……お久しぶりです、刀奈さん」

その人物は紛れもなく自分の夫にして衣音の父親である小倉雄星であった。意外すぎる人物の登場に目を見開き、驚く。十年以上前から行方不明となっていた彼がなぜこうして突然姿を現したのだろうか。だが、そんなことはどうでもいい、彼に出会えたことに対しての

安心感が湧き出てくる。

「おかえりなさい、雄星君」

涙目になりながら愛する夫の胸元へ飛び込む。雄星と刀奈、この2人は子持ちの夫婦なはずなのだが、外見からはとても想像できない。せいぜい、学生カップルと想像するのが精一杯だろう。だが、既に生き物や自然の理から外れた2人にはそんなこと関係ない。

宝石のように輝く紅き瞳に卓越した身体能力、そしてその代償として老いることが許されず、自然の摂理に従って死ぬことのない不老の肉体。かつて人間の生み出してきた醜態と醜悪の具現化した姿。

「僕は・・・雄星じゃない。彼の皮を被った化け物です」

「そんなこと言わないで・・・あなたは私の夫なんだから・・・」  
否が応でも離さないといった刀奈を抱きしめる資格を今の自分にはない。だが、ここで下手に突き放しても彼女を傷つけるだけだ。過度なボディタッチを避け、ぎこちない手つきで刀奈の頭を撫でる。正直、この反応は予想外だ。十年以上会わずにいたのだ。別の男と再婚していてもいいはずなのに、彼女はずっと自分を待っていたというのか。

「ねえ、キスして・・・」

「僕にそんなことをする資格はありません、僕はーんぶっ！」

そこまで言いかけたところで後頭部に手を掛けると強引に唇を押し付ける。流星にまずいと思って引き離そうとするが、必死にしがみつき口づけを続ける。その仕草が不意に可愛らしく感じてしまい、いつの間にか抵抗を止め、身を任せていた。

「んっ・・・」

しばらくして2人の唇が離れる。しばらく流れる沈黙、だがそんな空間で雄星が刀奈の体を優しく抱きしめる。

「ただいま帰りました、刀奈さん」

「ふふっ、待たせすぎよ」

小倉刀奈は夫をー小倉雄星を愛している。それは自身の肉体と同じように不変の意志だ。彼の本名を知り、過去を知り、苦しみを知った。そして政府の暗殺部隊の姓も責務も投げ出し、衣音の母親と



なつて今日まで生きてきた。自分は衣音や簪を愛している、家族を愛している、家庭を愛している、そして夫も当然ながら愛している。

それを感じた時、『彼』はこの女性が抱いている自分への愛を感じ取る。そうか、こういう風に強引で狡賢く、可愛らしくて美しい。だから相棒はこの小倉刀奈という女性を自らの命を犠牲にしてまで救いだしたのだろう。長年、分からなかった謎が1つわかったような気がした。

「お互い言いたいことがたくさんありそうですね、場所を移しましょうか」

「ええ、なら2人つきりで話せるとおきの場所があるわ。ほら、行きましょう」

手を繋ぐと30近くとは思えないほどの無邪気な笑みを浮かべて歩き出す。どうやら肉体だけでなく、精神的な面でも成長や老化はないらしい。そんな久しい再開と同時に行われた初デートを初々しい仕草をしながら楽しんでいく。だが、大人となった今、小倉刀奈がどのようなデートプランを立てているのかその時予想できなかったのが最大の失点であったことをその時気づけずにいた。

## 6話 再起と決意

かつて自分には大切な相棒がいた。いや、相棒などという表現はいささか不適切だったかもしれない、自分の半身、といっても過言ではない大切な存在。だが、そいつはあろうことが自分に肉体、人間関係、能力、すべてを自分に託し、消えていった。

それ以来、自分の存在理由に大きな罪悪感を感じていた。相棒の願っていた目的は達成し、自分の願望もなくただただ存在するだけの人生、そんな目的もない人生の送るためにあいつは死んでいったのだろうか。だが、拒絶される恐怖から、あいつの妻にも子供にも会えず、距離をとっていた。だが、偶然とは怖いものでその妻と会ってしまった。

十数年ぶりの再会、予想外の対面、それでも優しく迎え入れてくれるところはさすがは相棒が惚れた女性とあったところだろう。それで会うのが久しぶりなため、どこかで話し合おうという話になった。さて、ここで質問したい、ここで案内された場所が――

「ほら、早く入りましょう」

「・・・・・・」

ラブホテルだったとき、どのような反応をすればいいのだろうか。そこそこの町巡りの後、夕暮れとなった町で案内されたのはなぜか妖しいピンク色の蛍光色が目立つ建物、その前でなぜか刀奈に腕を引かれて連れ込まれようとしている。

「あの、ここは？」

「二人つきりで話したいんでしょ？ならばここが絶好の場所じゃない」

「いやいやいや、それはおかしい」

さすがに不味すぎる。それは相棒が彼女とホテルに行くというのならばまだ納得できる――というより、彼女は相棒の妻なのだ。どんな形であれそのように良好の関係を築いているのはいいことだ。だが、今は肉体こそ同じだが、精神面や人格面では違う人物だ。

それは自分も『小倉雄星』という人物の半身であったため、全く違

うわけではないのだがそれでもホテルに入るのは倫理的にいかがなものだろうか。

「いいじゃない、久しぶりに会ったのよ。身も心も裸になって語り合いましよう」

「あなたは政府に身柄を保護されている立場です。それなのに無断外泊に加えて男とホテルだなんていろいろ不味いでしょう」

「大丈夫よ、外泊についてはうまく誤魔化すし、ばれなきや問題ないわ」

「で、でも……」

「雄星君」

その声と同時に刀奈が腕を抱きしめ、密着してくる。そして悪戯する猫のような無邪気な声で悪魔の言葉を囁く。

「もし、もう一回断ったら、大声で叫んじゃおうかなあ。『助けて!!』この人、私を無理やりホテルに連れ込もうとするのっ!!』って言ってえ〜」

そして脅しの言葉。なんだか、過去にも同じようなことがあったよな気がする、この押してダメなら引いてみるという180度違った対応。彼女の否が応でも自分をホテルに連れ込もうとしようとするこの活気と知恵はどこから出てくるのだろうか。

「さあ、どうする?」

「いや……でも……」

「仕方がないわね、っ!!」

「わかりました!わかりましたから叫ぶために勢いよく息を吸い込みのをやめてください」

危うく警察に追われるかもしれないなかった危機感を感じつつ、白旗を上げる。彼女にそんなことされたら間違いなく大きな騒ぎになるのに加えて、しばらくはこの街を使えなくなる。彼女との交流上、それはなるべく避けたかった。

(雄星、これも名誉のためだ許してくれ)

そのとき脳内に相棒の表情が浮かぶ。呆れと疲労を感じさせる顔、『大変だけど頑張ってくれ』と応援のようなメツセージ性を感じ取れ

る。幸いなことにそのホテルの部屋の貸し出しは自販機による無人であったため、人に会うことなく部屋に入ること成功する。

一応、こういう状況のため、人目に触れないのは好都合だ。

「じゃ、その・・・シャワーを浴びてくるから待っていてね・・・」  
先ほどの大胆さはどこへ行ったのか、部屋につくなり刀奈が顔を真っ赤にして猛スピードでシャワー室へ向かって行ってしまふ。どうやら、本格的に性行為をする場所に訪れたことによって今まで堪えてきた緊張感と羞恥心が一気にあふれ出てきたようだ。

自分から誘っておいて、その本人が一番照れているとはどういうことなのだろうか。

「雄星、本当にお前の嫁はかわいいな・・・」

羨ましくつぶやくと、上着と靴下を脱いで部屋に設置された大きなベッドに寝っ転がる。その時天井が鏡張りになっていて、せいで自分の全身が目映る。

中性的で凛々しい顔、長い黒髪、そして紅く光るオッドアイ。

「なあ、どうしたらいい？」

「・・・君は僕だ、ならば自分のやりたいことをすればいい」

「お前の妻とホテルにいるんだぞ？いろいろな文句が出てこないか」

「・・・まあ、君が無理やり連れ込んだならまだしも彼女自身が連れ込んだ。たぶん、彼女は今不安がっているんだと思う、一緒にいてあげてくれ」

「いや、待て。彼女はお前の女だぞ？それを違い奴に触れられるというのはいかなものだろうか」

「・・・遺伝的には問題ないさ。その体は君の物だ。ならば好きなことをやればいいし、したいことをすればいい。どのみち、僕にはもう帰るべき肉体もなければ、自身の存在を誰にも伝えることもできないただの概念に過ぎない。」

「それでも俺はお前を知っている。触れることすらできないが、お前の声を聞くことができる、お前の意志を聞くことができる。ならばお前には俺がいる。お前は一人じゃない」

「・・・そうだったね、君がいてくれて・・・本当に・・・」

よかつ・・・た・・・

幻聴や空耳なのかはわからないが、たまに声が聞こえてくる。自分の背中を押してくれる希望に満ちた声だ。ならばいいだろう、存分に楽しい夜にしてあげるとしよう。

「ありがとう雄星、とりあえずできることをやってみる」

鏡の自分に向かって礼をいうと、刀奈のいるシャワー室へ向かっていった。

熱いシャワーを浴びながら刀奈は思考を張り巡らしていた。無論、内容はこれから展開についてだ。勢い余ってホテルに誘ったのはいいが、ここからどうやって攻めるべきだろうか。衣音を身籠って十年以上、夫一筋の人生を送ってきたせいで男性の気持ちなどまるつきりわからない。

さつきは強引に持ち込めたからいいものの、ここから先はそうもいかない。自分は身体には自信がある、ならばお色気で攻めるべきか。ーいや、ダメだ、いくらなんでもあざとすぎる。しかも失敗したときの精神的ダメージが大きすぎる。

理想は彼のほうから襲ってきてくれることだが、さつきの様子を見る限りそれは期待できない。そもそも誘ったのは自分なのだ。それに応えてくれただけでも良しとするべきだ。ここでしくじってダメな女というレッテルを張られるのは避けたいところだが。

ガチャ

「え?」

その時シャワー室の扉が開いてとある人物が入ってくる。それは当然ながらー

「刀奈さん、背中を流します」

「ゆ、雄星君?!」

自分と同じようにタオルを片手に、生まれたままの姿の雄星だっ

た。予想外すぎる大胆な行動に対する驚きで頭がパニックなり、顔が真っ赤になる。

「な、なにしているのよ！こ、こ、ここはシャワー室よ!！」

「だから背中を流します、それとも余計なお世話でしたか？」

「い、いや、別にそういうわけじゃ・・・」

「ごによごによと後半は聞き取れなかったが、本人が嫌なことではないを確認すると背中に立ち、タオルで背中を軽く洗っていく。シミ一つない綺麗な背中の下には可愛らしいお尻がある。そしてそのきれいな割れ目を見たとき、邪な考えが頭をよぎる。

「きやつー!」

背中を洗った後、勢いよく刀奈を抱きしめると大きなふくらみの胸を両手で驚掴みにする。驚きで可愛らしい悲鳴があるが、シャワーの音がそれをかき消していく。

「ゆ、雄星君?その・・・」

「前も洗います、力を抜いてください」

優しく身も心も蕩けるような声、それが大きな安心感を与えてくる。そうだ、今は自分と夫しかない。ならば、彼にすべてを任せてしまおう。

「そ、それじゃあ、お、お願いしようかしらね・・・」

期待と動揺を抑えながらそう答えると雄星は驚掴みしている刀奈の胸を優しく、そして適度な強さで揉んでいく。過去に彼に胸を揉まれたことはあったが、好きな人に自分の身体を触られるというのはやはり何とも言えない高揚感と幸福感が心からあふれ出てくる。

「あつ・・・」

すると、両手が胸から離れて下へ移動していく。その手は引き締まった腹部に当てられる。

「相変わらず綺麗なお腹ですね。トレーニングを続けていたんですか?」

「え、ええ、再会したときみっともない姿は見せられないじゃない。美容とトレーニングは念入りしていたわ。女の子は好きな男の人の前ではずつと綺麗でいたいものよ?」

「では、こちらはどうぞでしょうかね」

腹部からさらに手が下がり下腹部へ、そして下腹部から両太ももへ手が伸びる。繊細な手つきで、過度な力を入れず撫でるように。その時指先にフサフサとした体毛の感触があった。よく考えたら、彼女の体が不老となったのは16歳のころだったはず。だとすると、二次性徴を終えて大人となった部分があっても不思議ではないか。

「ほら、綺麗になりました。ベットへ行きましょう」

「え、ええ……」

緊張しているのか甲高い声で返すと、雄星に体を拭いてもらいベットへともにダイブする。

「雄星君……」

生まれたままの姿で雄星の胸もとへすり寄る。甘え上手というより、彼女は不安がつているのかもしれない。十年以上、彼女は夫と連絡を取れず、会えず、こうして同じベットで寝ることもできなかつた。そういう意味では今自分は彼女の夫としての役割をこなせているのかもしれない。

だが、彼女は小倉雄星の妻。そういう意味では自分はいくら頑張っても彼女を妻ではなく、自らすり寄り股を開いてくる娼婦としか思うことができない。だが、こんな自分でもできることはある。一つ目はこうやって彼女の……小倉刀奈の夫を演じ、心身ともに安心させてあげること。二つ目は……

「っ……」

「ゆ、雄星君……?」

これから訪れるであろう危機を身を挺して守り抜くことだ。それを示すように刀奈の裸体を優しく抱きしめる。できるだなんていう確証はない、勝てるという確信もない。だけど、それでも自分は勝たなくてはならない、彼女の家族を守るために。

「刀奈さん、あなたとあなたの家族だけは守ります。何があっても必ず、この破壊者（ルットローレ）の名にかけて」

「……ありがとう、雄星君。こんな私を愛してくれて……愛し続けてくれて……」

刀奈もわかっていた。彼はもう自分の愛した小倉雄星ではない。あの少年は自分をあの悪魔の飛行船から助け出したとき、自分を捨てて戦った。だが、そうならなくてはならない事態を招いたのは自分の弱さだ。だけど、彼はこんな弱い女をずっと守り続けていた。

昔、こんな化け物の体では社会で働くこともできずに経済的に行き詰っていたのだが、ある日大金が刀奈の個人口座に大金振り込まれていた。一応何かの手違いかと思って銀行側に確認をとったのだが、紛れもなくその金は刀奈あてに振り込まれていたという。

振り込んだ人物に連絡を取ろうにも明らかに偽称した個人情報では確認する気も起きず、ひとまずその大金を受け取ることにした。これだけの金額なのだ、そのうち何かの手違いだと分かり、相手のほうから連絡してくるだろうと思っていたのだが、不思議なことに毎月一日になると決まって減った金額の分振り込まれていた。

毎月毎月、減った分を補い養うように、『せめて経済的な支援はしたい』というように。銀行側も頭を悩ませていたようだが、薄々と誰の仕業か分かってきた。もつとも本人に聞いたところで『きつとそれは金と銀行の妖精さんの仕業ですね』と言って受け流されるのは分かっているが。

「大丈夫よ・・・雄星君・・・私はあなたの・・・奥さん・・・だから・・・」

そして一筋の涙とともに静かな眠りにつく。それからしばらくして安らかな寝顔の刀奈が風邪をひかないように布団をかけ、艶やかな唇にキスをする。その時懐から1つの指輪を取り出すと綺麗な刀奈の指に嵌める。いつか渡せたらいいと思っていた結婚指輪だが、こうしてプレゼントできてよかった。これで心置きなく戦いに行ける。

「行ってきます、刀奈さん」

それだけ耳元で囁くと、服を着なおし上着を羽織る。そして静かにドアをあけて出ていった。



――

「うーん」

太陽が完全に沈み、夜となった山。周囲からは虫の羽音や獣のうめき声が聞こえてくる、だが、衣音瑠奈はそんなものを聞きながら広場でヴァリアントをまとっていた。理由は単純明快、ヴァリアントの武装チエックだ。アリス・オルコットが相手の時は武器を使わなくても勝てたが、あのAXEが相手となると手ぶらではいろいろときつい。

そのためこうして人目のない山奥で仙人のように籠っているわけだ。ちなみに千冬には既に外泊許可はもらっている。まあ、行方不明と騒がれてしまったとしても、こんな山奥にいるだなんて誰もわからないと思うが。

「ディバインスライサー!!」

そう叫ぶと手元のライフルが背中中の翼から放たれたビットと組み合わせ、大型のソードを形成する。その状態で数回振り回すが、やはり大型なだけあって切れ味と威力は確かなようだ。

「まだ、機体のシンクロ率が悪いな。これは時間をかけるしかないか・・・」

まだこの機体と戦った月日が少なく、衣音の反応とヴァリアントの反応が合わせられていない。まるで型の違うホットプレートだ。ブロンブと何度も動くが、やはり反応面ではぎこちない部分がある。

「今すぐは無理か・・・」

機体を降り、近くに設置しておいたテントへ入る。中には娯楽系のものはほとんどなく、わずかな食料と水があるだけだった。常人だったら退屈さに発狂するかもしれないが、生憎遊びに来たわけではない。これぐらいがちょうどいいのだ。

「ふあ〜」

あくびをしながらランプの明かりをつけ、寝っ転がる。最近のテントはよくできていて、テントの中においても外の虫の鳴き声や空気の音が聞こえてきて心地よいBGMとなる。だが、今夜は奇妙な来客が

あつた。

ガサガサツ！

「っ!？」

明らかに大きすぎる音が近くから聞こえてくる。風によつて草や木が揺れる音にしては激しすぎるし、その音が近づいてきている。野生動物だとすると、キツネカリスーリーいや、最悪熊という可能性もあるし盗人かもしれない。

「……誰だ？」

護身用のナイフを持ちながらゆつくりと体を起こし、警戒態勢を取る。相手の出方によつてはテントを突き破つて襲つてくるかもしれない。その対策を考えながらゆつくりとテントをでるとそこには――

ミャーミャアー

「……夜遅くに何の用？」

小さな子猫がテントを引つ掻いていた。小さな猫、生後数か月と行ったところだろうか、茶色の毛並みの猫。そんな猫がどうしてこんな夜遅くに山奥にいるのだろうか。まあ、そんなことどうでもいい。「お前がテントを引つ掻いてるとうるさくて寝れない。さつさとあつちに行け」

しつしと手をはらつて追つ払おうとするが、人間の言葉が通じるわけもなく衣音の声を聞くや否や餌をねだるように寄ってくる。

「エスト、猫語で『さつさと失せろ』と伝えてくれ」

『申し訳ありませんが私の言語プログラムに猫語はありません。適当に猫の鳴き声を聞かせますか？』

「いや、いい。寝てる途中で猫の鳴き声を聞かされたらイライラして目が冴える……ん？」

よく見てみると猫の体に所々噛み傷や切り傷、そして両目がさつきから開いていない。いや、開けないのだろうか。

「エスト、この猫は山猫か？」

『いえ、この猫の毛色から判断するにおそらく雑種の猫でしょう。そんな猫が山に住んでいるとは考えられませんが……』

「まさか、お前捨てられたのか？こんな山奥に・・・」

飼い主の都合でこんな山奥に捨てるということは誰にも拾われることを期待していないし、拾わせる気がない。つまり殺す気であったということだ。そしてこの全身の傷は野犬や野鳥に襲われて命からがらここまで逃げてきたのだろうか。

「・・・気が変わった。何か食わせてやる。おいで」

『いいのですか？こんな病原菌を持っているかもしれない動物を匿つても』

「後で手を洗えば問題ない。さつさとー」

そこで再び近くの草むらから大きな物音がする。この猫の全身にある傷からすると予想はついていたが、どうやらドンピシャのようだ。

グルルル・・・

「意外と数が多いな」

草むらから見える無数の光る眼。それに続いて数匹の野生のキツネが姿を現す。十中八九この猫を追ってきた狩人だろう。その考えを肯定するようにそのキツネの鳴き声を聞いて足元の猫がビクビクと震えている。

「お前たちにもなにか食わせてあげたいところだけど生憎そんなに食べ物はないんだ。帰ってくると嬉しいんだが」

そう言っても通じるはずもなく、衣音こと仕留めようと逃げ道を断つように周囲を囲む。敵意や野蛮な雰囲気醸し出す野生の肉食獣。ならば格上の存在を見えよう。

「エスト」

『わかりました』

素晴らしいや否や足元の子猫を拾い上げ、抱きしめる。次の瞬間空気が震えた。まるで脳、心臓、そして細胞単位で恐怖し、振動するような強大な動物の鳴き声。その正体はエストが放ったライオンの威嚇声であった。その百獣の王の咆哮は山の中でしか生きていない小物どもを恐怖させるのは十分すぎる。

まるで竜のような声に周囲の鳥は飛び去り、目の前の動物は逃げ去

る。だが、大半の仲間は逃げたのに対し、リーダー格と思われる一回り大きい体のキツネだけはなんとか踏みとどまり、威嚇を続けている。そして敵とみなした衣音の喉元へ食らいつこうと飛び掛かる体制をとり、わずかばかり体の重心を後方に落とした瞬間

「っー」

衣音が眼前の地面にナイフを投げつける。それによってその体勢が完全に崩れ、大きく後方に飛び退く。そのナイフの投擲は『これ以上近づいたら殺す』という無言のメッセージだった。

「さっさと消えろ」

その野生動物顔負けの威圧のある声と殺意に完全に戦意が削がれたのか、体をビクツと震わせて草むらへ消えていく。

「さて、ご飯にしようか」

腕の中で震えている子猫の頭を撫でて、テントへ入っていく。だが、当然ながら猫缶やキャットフードを持ってきているわけもなく、適当に高カロリークッキーを砕き、受け皿の上に水を入れて差し出す。すると、相当空腹だったのか、バクバクと食べ始める。

「お前も大変だな。いい加減な飼い主にこんな山奥に捨てられて」

『おそらく捨てたのはペットブリーダーか何かでしょう。所々に栄養剤の投与跡がありますが、いくらなんでも体が小さすぎます、未熟体もいとところでしょ』

子猫の大きさは片手で収まるほどで、先ほどのキツネに襲われて全身傷だらけ正直なんで生きているのか不思議なぐらいだ。

「両目が見えないのはここに来る道中で襲われたからか？」

『いえ、おそらく母親の体力が満足にない状態で出産を強制されたため、生まれながらに両目の視神経に障害を持った状態で生まれてきたのでしょうか。そんな両目に障害を持った状態では売れるはずもなく、こうして山奥に処分しようとして捨てられたと考えられます』

「なるほどね・・・」

目の見えない状態で傷を負いながらもあのキツネ達から逃げ切り、ここまでたどり着いたのはもはや奇跡だ。だが、これからどうしようか。学園はペット禁止で飼うことはできない。

「ここで腹を満たしたとして、こいつはこの自然で生きていけると思  
うか？」

『無理でしょう、どうせ襲われて食料になるか飢え死にするオチです。  
いや、もしかすると崖から転落死するかもしれません。生き延びよう  
にも目が不自由では狩りをすることもできませんしね』

「どうしようか・・・」

『どのみち今の私たちでは飼えません。いつそのこと見て見ぬふりを  
して再び山に戻すのはどうでしょうか？』

「救ったのにまた殺せというのか？そもそもこいつが死にかけている  
のは人間のせいだろ？ならばその尻拭いは人間がやるさ」

食べ物に夢中になっている目の前の子猫の頭を撫でる。すると、ブ  
ルブルと子猫の体が震えるそして

ブエエ、ガフツ！

口からクツキーの欠片と血が混じった胃液を吐き出し、力尽きる。  
突然の出来事にパニックになりつつ、触ると体温が低下しているのか  
生ぬるかかった。

「おい、エストどうなっている!? やっぱり人間の高カロリークツキー  
はまずかったか!」

『いえ、久しぶりの食べ物に胃が消化不良を起こしているのかもしれ  
ません。ともあれ、体温低下で危険な状態です』

「エスト、宿泊は中止だ!! ここから一番近い動物病院はどこだ!」

『こんな時間帯ではどこもやっていません。それにたどり着くまで生  
きているかどうか・・・』

「だったら電話でたたき起こして伝えろ! 『急患が来る』ってな!!」

子猫をタオルで包みつつ、テントを飛び出す。とはいえ、今は夜遅  
い時間帯で目先は真っ暗だ。木の根っこに足を取られて転ぶかもし  
れないし、道中野生動物に襲われるかもしれない。どのみちこのまま  
山道を下るのは時間がかかりすぎる。

「仕方がない、ヴァリアント!!」

そう叫ぶと脚部にわずかにプラズマが纏い、大きくジャンプして木  
に飛び乗る。そのまま猿のように機敏な動きで木々に飛び移りなが

ら山道を下っていく。

「いくら何でもお前の最後の晚餐が僕のあげたクッキーというのは後味が悪すぎる。まるで僕が殺したみたいじゃないか。頑張れよ、ここが正念場だぞ」

その声に反応するかのように腕の中でタオルにくるまっている子猫がわずかに動く。その時、山の頂上から朝日が顔を出す。その日は偶然拾った猫の生命の危機という慌ただししい出来事で始まるのであった。

――

夜が明け、白くなってきた空の下の高速道路で一台の車が走っていた。夜明けの時間帯だからか、周りには他の車はおらず、車のエンジン音だけが響く。

「すまない、こんな時間なのに迎えにきてもらって」

「気にするな、お前の事情に振り回されているのは慣れている。それに妻に会いたいのならば咎める理由もないだろう」

助手席に座っているのは先ほどホテルを出た雄星であった。そして運転席でハンドルを握っているのはサングラスで目元を隠した女性であった。彼女がホテルを出てきた先で迎えに来てくれており、こうしてスムーズに帰ることができている。

正直、あまり目立った行動をしたくない雄星には大助かりだ。

「それでどうだ？お前の妻とホテルに行った感想は」

「あまりいいじめないでくれ、夫が妻の魅力を言うのは中々に照れるものなんだよ」

「いいかげん妻と同居したらどうだ？それにお前は一度息子と話す必要もある」

「僕は十年以上妻と子供を放置しておいたような奴だぞ。刀奈の夫として接することはできても父親として接するのは難しい」

「そうか……」

そこで会話が途切れ、沈黙が続く。だが、しばらくして雄星が口を開く。だが、目が紅く輝いていた。

「すまない『マドカ』。何度も厄介ごとに君を巻き込んでしまった」

「先ほど言っただろう、お前の事情に振り回されているのは慣れている」と

次の瞬間、空中から光の弾丸が降り注ぎ、雄星とマドカの乗っていた車を吹き飛ばす。大きく空中を舞う車の残骸、その中から二機の機体が飛び出してくる。一機はEXA、もう一基は黒いカラーリングで蝶のような翼があるISであった。

『黒騎士』——それがかつてこの機体が呼ばれていた名前だ。

その二機が危なげもなく道路に着地すると同時に上を見上げる。そこには自分たちを見下すように二機の機体があった。

片方は先日学園を襲撃した黒いエクストリームAXE、そしてもう片方はピンクと白のカラーリングをしているエクストリーム『エクセラ』。

「久しぶりね盗人」

「またあんたか……しつこいね」

「今日こそ私の弟の肉体返してもらおうよ」

「残念ながらあんたの弟は死後、あんたに肉体を渡すという遺言は言っていないんだ。どうしても欲しいのならば裁判を開きな」

「っ!!」

その挑発に歯ぎしりを鳴らすと、手元に大型ライフルを出現させて撃ち放つ。だが、その攻撃はEXAの背中から射出された遠隔操作兵器に防がれる。

「どこまで私の邪魔をするのか……」

「いいね、今日こそ決着をつけようか」

両手に大型のバスターライフルを握り、黒騎士は背中にマウンドしである大型のバスターソード『フェンリル・ブロウ』を握る。

「僕はエクセリアを抑える。君はAXEを頼む」

「了解した」

かつて自分が生んだ禍根。その歪みをここで断ち切る。この新たなエクストリームEXAで。

「雄星、お前の家族を守るためだ、お前の肉体借りるぞ」

その時完全に上った朝日が四機の機体を照らした。



## 7 話 暗闇の証明

「これはひどいな……」

医師が子猫に見た最初の言葉がそれだった。時刻は明け方となった時間帯、住宅街は閑散とした就寝となつている中で不自然に明かりが灯っている建物があった。

「こいつは助かるんですか？」

「何とも言えないな、だけどあと数時間遅かったら諦めていただろう」

そういい、白衣を着た初老の医師は子猫の口に人工呼吸器をつけると点滴と入れ、診察していく。当然ながらこんな時間帯に動物病院など営業しているはずもない。目の前のドクターも急患と言つても受け入れてくれなかつたのだが、衣音が差し出した札束でその考えは180度変わり、こうして診察してくれている。

まったく医者とは現金なものであると思うが、それ故に信頼できる。これだけの大金がかかっているのだ、そう簡単に見捨てることはないだろう。

「この子はお前の飼い猫か？」

「違います、そもそも飼い猫ならばこんなに重体になってから大金を積んで病院に来ないでしょう」

「それもそうか、無料な質問をしたな」

そうこうしている間に全身の傷口の消毒、包帯を巻き、麻酔で眠らせる。やはりそれなりのキャリアはあるらしく、腕は確かなようだ。「ひとまずできることはやった。あとはこの子の生命力と体力に期待しよう」

「申し訳ない、こんな時間に開いてくれて。これはお礼です、受け取ってください」

そういい先ほど見せつけた札束を差し出すが、医師は目覚めのコーヒーを飲みながら受け取りを拒否する。

「まだ代金はいい。これほどの大金だ、治療、入院、予防接種、すべてを終わらせた後でもらおう」

「いいんですか？」

「良いも悪いもそれが医者の仕事だ。患者を途中で投げ出したりなんかしねえよ」

その言葉には医者としてのプライドを感じられた。てつきり、現金な闇医者だと思っていたが、意外と善意や親切心があったらしい。

「で、これからどうするんだ?」

「え、これから・・・ですか?」

「こいつの身柄だよ」

苛立ちを混ざった声で安らかに眠っている猫を指さす。そういえばそうだった、自分はこの子猫を飼うことはできない、いつてもずっと入院させているわけにもいかない。里親を探そうにも障害をもった猫を引き取ってくれるお人好しがいるわけもなく、山に戻しても生きていけるはずもない。

「どうしましょうかね・・・どのくらいで治りそうですか」

「大目に見て約一か月と言ったところだ、それ以上は入院させようにも空気がない、そうになったら保護施設行きだな」

「殺処分されると?それでは助けた意味がないでしょう」

根本的な話、生半端な覚悟でこの猫を救ったわけではない。そもそも途中で投げ出すぐらいなら初めから背負ってなどいない。

「大丈夫です、こいつは僕が必ず引き取ります」

「お前みたいな奴ばかりが飼い主だといんだけどな、ほら、飲め」

その子供のいびりとは違う心意気を気に入ったのか、コーヒーを出してくれた。そういう気遣いができる辺り、意外と彼はいい人なのかもしれない。

「まあ、どうしようにもこれから数週間は絶対安静だ。それまで待ちな」

「どうも・・・」

挨拶もそこそこにカルテのための記入を済ませると病院を後にする。時刻は午前6時頃、このまま帰ろうと思ったが騒がしい朝はまだ終わらない。

『衣音!』

「うおっ!?!」

病院を出るや否やエストが大きな声を出して出現する。病院内では静かにするべきと思うに加え、医師にエストの存在を説明するのが面倒なゆえに通信を遮断していたのだが、いったい何が出てくるのだろうか。

「どうしたエスト？」

『これを見てください』

素晴らしい表示されたのは一つの朝のニュース映像であった。大きな事故が起きたような煙や爆発が起きたらしく、画面いっぱい黒い煙幕で埋め尽くされている。そして画面の右上には生中継を表すLIVEという表示があった。

「なんだこの映像は・・・っ！」

すると、画面の端で拘束に動く無数の機影を捉える。その一つに漆黒の機体AXEがあった。

「エスト！今すぐこの場所に案内してくれ!!」

『わかりました、ナビゲーションします』

位置情報を習得するとヴァリアントを展開し、飛び立つ。状況がよくわからないが、あのAXEがいる以上何かが起こっているのは確かだ。それを確かめなくてはならない。全く変な猫に懐かれるわ、朝早々戦闘は起こるわで騒々しい日だ。

――

ここで少しマドカという存在の話をしよう。正直、マドカはなぜこの小倉雄星と協力し合っているのか自分でもわからない。昔は彼とは敵対している関係であったというのに、最近は武器を持たずに彼の部屋を訪れることもあればさっきのように送り迎えのために車の運転席を座ってあげることもある。

そして今のように互いに力を合わせて戦っている。まあ、自分も巻き込まれているというのもある。直接攻撃を受けた以上、自分だけ見

逃してくれるだなんて都合のいい話はないだろう。ならば、なぜ今自分は本気で戦っているのだろうか。

まるで小倉雄星を守るように、仲間である彼を死なせないように、今の自分は本気で相手を倒そうとしている。なぜ？どうして？

『彼が仲間だから？』

「……いや、それはない。一度も彼とは協定も協力関係も結んでいない。彼は大切な仲間かと聞かれたら自分は間違いなくNOと答える。」

『彼のこと好きだから？』

「……それはもつとない。そもそも自分は人間として、女として異性に対する好意など持ち合わせてなどいない。今まで男とであつてこの男と結婚したいと思つたこともなければ、この男の子供を産みたいと願つたこともない。」

『ではなぜ彼のために戦う？』

「……決まつている、それはこの男が自分を受け止めるに値する器の持ち主だからだ。かつて自分は『力が強すぎる』と言われたことがある。そして失敗作の烙印を押され、誰にも愛されなかつた。だが、この男は違う。自分の互角……いや、それ以上の大きすぎる力を持つている。だから自分を受け止めてくれた、それがどれほど嬉しかったことか。」

結局自分は抛り所を欲していた。そしてそれを理解してくれたのが小倉雄星だったという話だ。

「貴様に恨みはないが、ここで死んでもらう!!」

マドカ大型バスターソードとAXEのソードがぶつかり合う。互いの武器をぶつけあう黒き機体、そこには明確な殺意があつた。

だが、未知の機体AXEはそんなマドカの攻撃を易々と受け流すと、腹部に蹴りを入れて吹き飛ばす。

「くっ！」

大型の武装であるがゆえに取り回しが悪く、隙ができる。相手はその弱点を的確に突いてくる。

「ならばこれならどうだ！」

黒騎士装備である一対のランサービットを打ち放つが、それすらも背中に装備されていた物理シールドで防ぐと、手に光の刃を発生させて急接近してくる。その素早い接近戦に対抗しようとバスターソードを引き抜くが遅かった。

圧倒的スピードで接近したAXEは黒騎士のランサービットをまとめて切り落とす。

「ちいっ!!」

だが、これは好機だ。接近されたというのならばカウンターでダメージを与える。切り伏せようとするが、その刃ですら安易に物理シールドで受け止められた。

「まったく、その反応速度ですらあいつゆずりか」

苦言と同時にAXEの瞳が不気味に揺れる。ほんと、厄介な奴を敵に回したと思う、ここまで格上の相手とは。だが、あいてのほうが強いからといってそう簡単に引き下がることはできない。

「ならば、このまま切り伏せるー!」

『フェンリル・ブロウ』にエネルギーが集まっていき、チェインソーのような光の刃が出現し切り裂いていく。勝てないのならば、せめて腕ぐらいいは取らせてもらおう。だが、その考えすらもAXEの前では無意味に帰す。

「っ、なに!?!」

ぶつかり合うAXEの物理シールドと黒騎士の大型バスターソード。先に悲鳴を上げたのは黒騎士の剣だった。ピシツと物が壊れる亀裂の音、それが黒騎士のバスターソードから発せられた。少しずつだがAXEの物理シールドに黒騎士の武装が耐えられなくなっている。

「それでも!!」

腕はだめでもせめてその物理シールドだけでも、そう願いながら腕に力を込めるがその願いが叶えられるよりも早く、その刃はAXEの腕部に内臓されたビームサーベルで切断される。そしてそのままその光の刃がマド力を切り裂こうとするが――

「っー」

上空から数発の射撃が打ち放たれ、黒騎士からAXEを引き離す。そしてそのまま白と青のカラーリングをした機体が降下し、AXEを切り飛ばす。

「貴様は……」

紛れもなくその機体はヴァリアント。学園にいるはずの小倉衣音であった。

「また会ったなAXE」

その言葉に反応することなく、両腕にサーベルを装備させて対峙する。どうやら相手はまだやる気満々らしい。

「おい、あんたまだ戦えるか?」

「戦えるといえば戦えるが、残った武器は腕部のガトリングのみだ。あまりアテにしてくれるなよ」

「手助けしてくれるだけありがたい」

ここは下手な遠距離戦よりも接近戦だ。ライフルに背中のビットを組み合わせて大型ソード『デイベイン・スライサー』を握る。

「さあ、前の続きをしよう。今度は負けないぜ」

――

「忌まわしい機体に忌まわしい子供。本当に不愉快だわ」

「そういうなよ。これもあのレポティツアの縁だ、ヴァリアントも駆け付けたし楽しもうじゃないか」

「ヴァリアントを操縦者しているのは確か小倉衣音……更識楯無の一人息子だったわね。あの子の目の前で母親を殺したら私の弟になつてくれるかしら」

「いやいや、無理だろ」

ヴァリアントやAXEから少し離れた空ではまた別の戦いがあつた。EXAとエクセリアのものはや別次元ともいえる激戦が繰り広げ

られている。エクセリアが手に鮮やかな文様が描かれている防御結界を発生させながら、EXAへ突撃してくる。

それを胸部から大量のミサイルを打ち放ち、わずかにスピードを緩める。その隙にサーベルを引き抜き、切りかかるがヴァリアントに似た大型ソードに受け止められる。

「ふん、その程度でやられないわよ」

「お互い死ぬはずだった身だ。今度こそこの世の未練を断ち切って地獄へ行こうじゃないか」

「っ！」

このまま強引に押し切ろうとするエクセリアだが、力を入れるよりも早くEXAの頭突きが額に直撃し大きくバランスを崩す。その決定的なスキを逃さず手元のバスターライフルで打ち込むがエクセリアを無数のシールドバリアーが出現し、防がれる。

「ちい、しづとこ」

相変わらずの機敏な動きに舌打ちをしつつ、ライフルのマガジンを取り換える。どのみちもうすぐ政府部隊が駆け付けるだろう。戦いを引き延ばすのは互いに良くない。

「もうやめろ、お前は小倉瑠奈でもないし小倉雄星ももういない。いつまで故人を引きずっているつもりだ」

「何言っているの？私は小倉瑠奈だし雄星もすぐそこにいるじゃないそれも『二人』」

その二人のうち一人は自分の肉体の持ち主を指し、もう一人を誰が指しているのかは容易に想像できる。あの作り物の小倉雄星で満足しているとは狂気に似た恐怖を感じる。

「違うな、あれは弟じゃない俺たちの息子っていうんだよ」

やはりだめだ、こいつを倒さなくては戦いの連鎖は終わらない。それが今の自分の使命であり、義務だ。

「決着だ、この呪われた因果ここで断ち切つてやる」

両手に武器を握り、一気に背中からピットを射出する。そして全武装を一気に打ち放った。

――

ヴァリアントとのリンク値が上がったからか、優秀な後衛がいるかわからないが前のように一方的にやられることはなく、何とか互角に勝負を持つていくことができていた。だが、あくまで互角止まりで勝負を決める決定打に欠ける。

「ちよこまかと・・・」

黒騎士の両腕からガトリングを打ち放つが、AXEの動きを前では命中させられても大きいダメージにはならない。そんな黒騎士をうっとおしく思ったのか接近してくるが、間にヴァリアントが入って攻撃を防ぐ。

「ここ戦いはお互い勝っても負けても得がないんだ、退いてくれないか？」

『・・・・・・』

その平和な交渉すらも剣筋で切り伏せ、攻撃を繰り返す。正直、この迷いのない純粹な殺意というのは中々に恐ろしいものだ。逃げたいところだが、ここで逃げてもいずれば決着をつけなくてはいけない運命だ。

「っ!!」

一瞬の隙をつき、AXEの顔面を蹴り飛ばしバランスを崩させるがわずかばかりにぐらついた程度だ。反撃と言わんばかりに顔面に拳を叩きこまれ後方へのけぞる。そしてそのままサーベルを振りかぶられるがそこで黒騎士が乱入し、AXEをタックルで吹き飛ばす。

「決める!!」

右腕の装甲を展開させ、エネルギーをためる。そして背中の中翼のスラスターで疾走しAXEに急接近し、渾身の一撃を叩きこむ。

「シャイニング・ブレイカーアア!!」



輝く手がAXEの顔面を掴み、大爆発を起こす。その衝撃に耐えられずAXEの顔面の装甲が吹き飛ばされ操縦者の素顔が晒される。そしてそこには自分がいた。血で真っ赤に染まった自分と瓜二つの顔に長い白髪、まるで自分の分身が自分を殺すために殺意を向けていた。その現実離れた光景に頭が真っ白になる。

「お前は……」

「くっ!!」

これ以上の戦闘続行は不可能と瞬時に判断すると、ヴァリアントと黒騎士を吹き飛ばしAXEは戦線を離脱する。そのあとにエクセラアが続くがその光景を見つつ先ほどの自分に似た顔が頭から離れない。あれは間違いなく自分だった、だがあの瞳は到底人が持てる憎悪ではない。

「なんなんだ……あれは……」

呆けている間に黒騎士を迎えにきたのかEXAがくる。そういえばまだこの話は終わっていなかった。さりげなく黒騎士を連れて逃げようとするEXAの後頭部にライフルの銃口を突きつける。

「さて、説明してくれるよね? 父さん」

「……」

その一言で自分の正体が完全にばれていることを確認すると、顔面の装甲をはずして素顔を見せる。そこには苦笑いが混ざった笑顔を浮かべていた。

「どこでわかった?」

「さつきエストが教えてくれた」

ここは互いに正体を知って衝撃……というのがテンプレではないのだろうか。それが実の息子から銃口を突きつけられて問い詰められるとは中々なレアケースだ。

「悪いがここで話すようなことはない。お前はさつきと学園に戻れ」

「その女性……確かマドカさんつか言ったっけ。別の女を連れまわしていることを母さんに言うよ」

「彼女はただのパートナーだ。変な脅しはよせ」

「そう言って信じるならば世の中の浮気調査探偵に依頼はきてない

よ。なんなら簪お姉ちゃんにも報告しておこうかな、もしかすると泣いちやうかもね」

エストからの報告からか雄星が中々の愛妻家ということを知っており、的確に弱点を突いてくる。こんなことになるのなら、戦闘終了後黒騎士を迎えに来るよりも早く徹底すればよかつた。普段ならば悩む程度の交渉だが、今はよりもよつてもにホテルを過ぎた後なのだ。

キスをし、指輪をプレゼントした直後に浮気したなどという情報が伝わったら間違いなく彼女の逆鱗に触れる。それだけは何としても避けたかつた。それは簪も同類だ。

「母さん、ああ見えて怒ると怖いからね。ばれたらどんな目にあわされるか・・・想像するだけで悪寒を感じる」

「・・・わかつた。わかつたから母さんに報告するのはやめてくれ、心が挫けそうになる」

「わかつてくれてありがとう、とりあえず浮気をしていないことだけは伝えておくよ」

「・・・別の女を連れまわしていることは黙っていてくれないのか」  
これは次会った時間違いなく嵐が来るだろう。あのサディストな一面を持つ刀奈がどのような仕置きをしてくるのか。

「母さん、どんな報復をしてくると思う？」

「まあ、間違いなく噛みついてくると思う。最悪、鞭打ちの刑に処されるかもね、浮気は絶対に許さない人だから」

その会話内容で雄星は暗く沈み、衣音は励ますように肩に手置き、マドカは面白すぎる家庭事情に必死に笑いを堪える。結局は母は強しだ、あの偉大な妻の前では最強の兵士である破壊者すらも尻ルットレに敷かれ、服従と屈服の選択しかない。

まあ、本人たちが幸せならばそれで良いでしょう。

## 8話 終末の向こう側

過去に衣音は父親と一回だけ会ったことがある。その日は何年も前の晴れた日だった。連絡もなく父親は家に尋ねると自分に『小倉刀奈という女性はいるか？』と玄関で出迎えた自分に言った。その時は自分の正体も知らず、目の前の自分と似ている人が自分の父親なんて思いもしなかった。

その後言われた通り、客が来たと母に伝えると滅多に来ない来客に不思議そうな顔をしながら玄関へ母は向かっていった。その後のことは覚えていない、微かに覚えていることと言えばその時偶然来ていた簪お姉ちゃんがまじめにやってくれたパペットの一人芝居が死ぬほど退屈であったことぐらいだ。

そしてその夜、母は自分を抱きしめると涙を流して泣いた。聞いても何も答えず、ギョツとさらに力を入れて自分を抱きしめる。なぜ怪我をしているわけでもないのに母は泣くのだろうか。痛くて泣いているわけではないのだしたら、寂しかったのだろうか。

だけど、周りには簪お姉ちゃんを始めとしたたくさん優しい人たちがいた。親戚や学生時代の同級生、それでも母にはその人たちには埋められない心の欠片があった。それは最も大切な部分、そして自分が最も欲している物であった。

「……………」

「……………」

戦闘が終わり、時刻は午前9時。本来は学園にいる時間なのだが、衣音は学園から大きく離れた山奥のテントの中で父親と向かい合っていた。そしてその隣には一緒にいてきたマドカ。だが、顔はどこか気まずそうな表情をしている。

「……………」

戦闘が終わり、誰もいない場所である昨晚野営をしていたテントへ

案内したのだが、向かい合って約二時間、双方一言も言葉を発することなく真顔で向かい合っている。初めはマドカもお互いどう話しているのかわからずに戸惑っていると思っていたのだが、さすがに二時間は異常だ。

考えられることといえば、自分が分からない信号を送っていることだがいくらなんでも二時間は会話に時間がかかりすぎではないだろうか。この不気味な空間から出たいが、テントの外は山奥であることもあってか大量の蚊がいてうっとおしいことこのうえない。

だが、この摩訶不思議な空間にもやつと進展が見えた。

「父さん」

「なんだ？」

「愛人とかいる？それも子持ちの」

やはりこの親子の会話の内容をいくら考えても理解できない。再開したばかりの父親に『愛人をいるか？』と質問することなど昼ドラでもないだろう。

「僕以外の子供いるよね？父さんがそこらへんに種を蒔くからそうなるんだよ」

「いたとしてもそいつを自分の子供としては認知したくないな。泥沼な展開になることは火を見るよりも明らかだ」

「じゃあ、『あいつ』はなんだ？」

その時衣音の目つきが急変する。目の前の父親と敵対するような攻撃的な雰囲気醸し出し、睨みつける。

「あの顔は間違いなく僕や父さんの血が混じっている。ただの愛人の子ならまだしも、なぜよりもよってそいつがAXEに乗って僕の命を狙ってくる？」

「あいつは……例えるならばお前のドッペルゲンガーだ。限りなくお前に近いが別の存在」

「都市伝説は信じていないんだけどね……なんなんだあいつは……」

「お前はどこまで知っている？」

「詳しくは知らない、小倉瑠奈と小倉雄星、あとは破壊者<sup>ルットレ</sup>。そして人と破壊者による実験によって生まれたのが僕でしょ」

「なんだ、しつかりと知っているじゃないか。あの母さんのことだ、秘密は墓場まで持つていくと思つていたのだが」

「だけど、それ故に説明するのが心底嫌になる。性交渉ではなく、人工着床によつて生まれ自然ではありえない3人の遺伝子を持つ子供である小倉衣音に刀奈が愛した夫のなりそこないである自分、そして自分の知らないところで生み出された自分の血を引く子供。いくらなんでも複雑すぎる家族構成だろう。」

「簡単に言えば、AXEの操縦者は小倉瑠奈と僕——小倉雄星の間にできた子だ。お前と違い、人間の遺伝子が入っていない破壊者と破壊者との間にできた真正正銘、最強の兵士の力を引き継ぐ存在」

「過去に殺しあつた関係だというのに、母さんを裏切つてまで彼女とくつついたの？」

「それは少し違う。あいつもお前と同じ自然の摂理に沿つて生まれたものではないのさ。昔、とある場所に破壊者の研究施設があつた。そこには小倉雄星——破壊者の成功体をベースに研究が推し進められたんだが、あの小倉瑠奈はそこで小倉雄星の遺伝子を手に入れ、やりにもよつてそれを自分の体に植え付けた。そしてお前の分身が生まれたのさ」

「……狂つてるな」

つまり、あれは自分から母——小倉刀奈の遺伝子を抜いた姿だというのか。遺伝的要因や環境的要因で人間という生物は大きく変わるものだが、それがあそこまで変化するとは驚きだ。

「そんなに自分の子供が欲しかったの、彼女は？」

「子供というより、自分の愛情のはけ口が欲しかったんだろう。人間などという格下の存在ではなく、自分の血を受け継ぎ、愛欲、性欲、保護欲を受け入れる者が」

「でもいくら頑張つても弟であつた小倉雄星と違うよ。あいつは自分の息子であつて弟じゃないよね？」

「そんなこと小倉瑠奈は考えていない。あいつは自分の腹から生まれてきた弟だ、そしてこの弟と協力して自分の遺伝子を継ぐ不当な輩を片付けようつてね」

無茶苦茶すぎる理論に頭が痛くなる。なぜ弟が姉の腹から生まれ  
てくるのだろうか。その話を聞くと、遺伝的には自分に近いが、立場  
や存在は父に近いものなのかもしれない。複雑すぎる……複雑す  
ぎる人間関係だ。

「……で、結局その小倉姉弟は何がしたいの？目的が見えてこない  
んだけど」

「いろいろあるが今のあいつらの目的は自分達以外の破壊者ルットローレの遺伝子  
を継ぐ者の排除。まあ、簡単に言えば僕たち一家の皆殺しだな」

「こっわ……」

結局、これも過去の因縁なのかもしれない。小倉瑠奈と小倉雄星、  
誰よりもお互いを必要とし、愛し合った仲だというのに今や戦い殺し  
あう関係。正義も悪もない、勝ったものが未来を手にする単純明快す  
ぎる報酬。

「なんとかして見逃してもらえないかな？」

「無理だ。あの小倉瑠奈はかつて大切な弟を奪った小倉刀奈に執念を  
抱いている。話し合いで済むような相手じゃない」

「二度死んだ者が恨みを持って復讐してくる。まるでホラー映画だ  
な」

現状は把握した。だが、状況が状況だけにどのよう動くべきだ  
ろうか。あのAXEの強さからするに相手も相当な力を持っている  
ことがわかる。当然ながらヴァリアントであろうとAXEとエクセ  
リア相手にして勝機など薄い。ならば、ここは父とマドカと手を組む  
べきだろう。

母を守りたい気持ちは同じだし、敵対していいことなど一つもな  
い。

「父さん、僕も戦う」

「ダメだ、お前は学園にいる。あそこならば安全だ」

「本気で言ってるの？」

「ああ、本気だ。お前が僕たちの事情に巻き込まれる必要はない。小  
倉雄星の因縁は小倉雄星が終わらせる。お前は大人しくしている」  
「っ！」

どこまでも子ども扱いしてくる父親の態度に頭に血が上り、胸倉に掴みかかる。さっきの発言ではまるで自分が足手まといのような言い方だ。

「こっちはAXEに一度襲われている身なんだ。それに話だけ聞くと、僕だけ都合よく見逃してくれるなんてことは期待できない。だったら戦うしかないだろう。それともこのままあいつらから逃げ回るような人生を送れというのか?」

「そんなことをさせるつもりはないが、万が一お前の身になにかあったら母さんになんと詫びればいい?」

不意に出てきた母親の話で体の力を抜ける。何年も家を空けていたというのに、自分と母親の心配をしていたことが少々意外だった。

「何年も帰っていないいこんなるくでもない不倫夫ならばまだしも、最愛の息子であるお前が死んだなどということになったら母さんは悲しむなどという話じゃない。最悪、自殺するかもしれない、それをわかっていて僕にお前を戦わせろというのか?」

「何をいまさら・・・父親面を・・・」

「単刀直入に言えば、僕はお前も簪も母さんも誰にも死んでほしくない。死ぬのは僕だけで十分だと思っている。なぜならお前たちを愛しているからだ」

「・・・」

この言葉を口にしたとき、やはりこの人は父親なのだと確信する。日頃、猫のように狡猾でずる賢い母が誰よりも寂しがり屋であること、そして自分の身を案じて言うこと。それはただの遺伝子提供者ではなく、母を愛し、自分を息子であることを自覚しては言えないセリフだ。

「わかった、今はとりあえずおとなしくしているけど。本当にやばくなったらそっちに行くよ」

「ああ、それがいい。それよりも学園に戻らなくていいのか?授業があるだろう」

「そうだね、テントを畳むから二人は外に出て」

なんやかんだで話は終わり、外に出ると雄星とマド力は少し離れた

場所で衣音が片付けをしているところを眺める。

「どうだ、息子との会話をした感想は？」

「衣音は・・・本当にあいつに似ている。強いところも賢いところも、人一倍他者に対して警戒心があるところも」

まるで自分の相棒と話したような気分だ。それほどまでに衣音は自分とそっくりだった。そしてそんな衣音だったからこそ、妻を十年以上支えてきてくれたんだろう。

「僕は家族を守りたい。その後でどうするかはあいつ次第だ。けど、もう破壊者<sup>ルットローレ</sup>として生きていくのはやめてほしいな、ロクなものじゃない」

それだけ言うと、片付けをしている衣音に背を向け、ゆっくりと山の中へ消えていく。息子と会えたからといって喜びはない。あるのはこの禍根と因縁を今度こそ確実に断ち切るという確固たる意志であった。

――

「ぐっ、うつ、ぐううう・・・」

暗い部屋で一人の少年の苦悶の音が響く。最低限の家具しかない殺風景な空間で血で真っ赤になったタオルを額に押し付け、ベッドで狂い悶えていた。それは先ほどの戦いで負傷したAXEの操縦者である雄星であった。先ほどから止血と痛み止めを行っているが、なかなか痛みが治まらない。

だが、それでも彼は最強の兵士の遺伝子を継いだ破壊者<sup>ルットローレ</sup>。傷口は既に塞がりつつあった。

「大丈夫、雄星？」

すると部屋に戦闘終了後、雄星の傷の治療を施し、シャワーを浴びていた小倉瑠奈が部屋に戻ってきた。服装はセクシーな黒のラン



ジエリー姿で歩くたびに胸とお尻の肉が左右に揺れている。

「ごめんなさい、私の不注意でこんなことになって・・・」

心底申し訳なきように謝ると、血だらけの雄星の頭を抱きしめた。そのせいで胸のブラが血で汚れてしまったのだが、気にした様子もなく落ち着かせる。だが、雄星が自分の胸に顔を押し付けていることに大きな肉欲が湧きだしてくる。

「っ・・・」

モジモジと太ももをこすり合わせ、必死に欲望を理性で抑えるがそう長くは続かない。体中の皮膚が熱を帯びて赤くなり、息が荒くなつていく。口から唾液が垂れ、脳内に欲望のビジョンが映し出される。彼を犯したい、彼を襲いたい、彼の体で性の快楽を味わいたい。それに埋め尽くされると、雄星の頭を抱いたまま、ゆつくりとベットに押し倒す。

「雄星、雄星っ・・・」

雄星の腹部に馬乗りになり、ブラのホックをはずして脱ぎ捨てる。続いてパンツも脱ぎ捨てようとする瑠奈の手を雄星が静止させる。

「ダメだよ、お姉ちゃん。今僕は負傷中だから寝ていないと」

「そ、そんなあ・・・お願い雄星一回だけでいいから。なんなら前座はなしでいきなり本番で挿れてもいいのよ?」

「今の状態じゃ、お姉ちゃんを満足させられる自信がないんだ。だつたら、少し我慢して最高に気持ちよくなれるほうがいいと思うよ」

「もう・・・じゃあ今夜は沢山してもらおうからね?・約束よ」

「うん、頑張るよ」

約束の証と言わんばかりに瑠奈の口にキスをすると、それで納得してくれたのか脱ぎかけのパンツと床に脱ぎ捨てられたブラを拾って瑠奈は部屋を出ていく。そして部屋から離れていく足音を聞き届けると、深くため息を吐き、

「べっ!・くそ女が・・・」

歪んだ顔で先ほどのキスによって生じた自分と瑠奈の唾液の混合液を吐き捨てる。なにが家族だ、なにが姉だ。今のようにならなくていいし、苦しんでいたとしても自分を欲望のはけ口としか見ていないくせ

に。自分を小倉雄星とかいうよくわからない男のドツペルゲンガーと見間違えている精神異常者が。

「くそが……」

今すぐにもあの女を殺したいところだが、短気は損気だ。まだ、あの女には利用価値がある。始まりの破壊者<sup>レットローレ</sup>である小倉雄星と死を超越し、狂気の化身である小倉瑠奈。両者がぶつかり合えば激戦になることは確定だ。そして自分はその中で漁夫の利を得ることができればいい。

小倉雄星と小倉瑠奈。どちらが勝つにしろ、自分の自由になるには両者とも大きな障害となる存在だ。そんな者たちには退場願おう。そしてもう一つの障害である小倉衣音。

「あいつ……」

自分と似たような生まれ方、自分と同じ破壊者<sup>レットローレ</sup>、そして自分と同じ力を持ちながらも人から愛を受け、人の温もりを味わった者。歪んだ家族愛と恋愛を受けて育った自分と正反対の境遇を持つもの。羨ましい、妬ましい、嫉妬の渦で狂いそうだ。

だが、いずれ決着はつけてやる。この傷の借りも必ず返す。それまで人としての幸せを存分に味わいながら生きていければいい。自分の無力さに変わるその日まで。

## 9話 迫りくる魔の手

波乱万丈な夜と朝を乗り切り、ようやく訪れた平穏な日々である学園生活。だが、それすらも学園への取り調べという面倒ごとで始まった。さすがにニュース報道までされたこの状況では言い逃れできるはずもなく、自分がEXAの操縦者とコンタクトを取っていたことを伝え、AXEへの今後の対処法を学園に依頼した。

一応EXAの操縦者が父であることは言っていないのだが、その話を聞いている途中千冬表情はずっと険しいままであった。少しでもその不安を和らげようとEXAは自分たちと敵対するつもりはないと弁明してあったが、学園側がこんな生徒一人の言葉を信じてくれるはずもなく、学園には厳戒態勢がとられるようになった。

教員のISは二十四時間常に戦闘可能状態で待機、場合によっては日本政府から増援をもらう可能性もあるという。自分の身内の揉め事で学園には大きな迷惑をかけてしまったことを申し訳なく思うが、厄介者には厄介ごとがついてくるものだ。それを引き受けるのが教師であり、大人の役割だろう。

「はあ・・・」

放課後の食堂で響く溜息。騒動が終わり、お茶を片手にくつろいでいるが、どうにも落ち着かない。やはり学園の中で女子しかいないこの空間では精神的疲労はある。だが、殺し合うよりはマシだ、安心してきる。

「隣、よろしいですか?」

「どうぞ」

聞いたことがある声に短く返すと、瑠奈の隣に腰かける一人の少女。それは先日クラス代表となったアリス・オルコットであった。友達とはいえないが、共にAXEの脅威を体験した者同士、どうにも不安を感じている様子だ。

「今朝は大変でしたね。あんな町中で戦闘になるなんて・・・」

「大変なのはお互い様さ。代表候補生でありながら、クラス代表も兼任するだなんて多忙もいいところだね」

「わたくしならまだしもあなたは命を狙われている立場です」

「まあ、自分の身は自分で守るさ。ところで、君はライガーって知ってるっ？」

「・・・え？まあ、少しは」

唐突すぎる質問に戸惑いつつ、答えを返す。ライガー、確か父がライオンで母がトラの雑種の生物であつたはずだ。それは知っているが、なぜこのタイミングでライガーの話が出てくるのだろうか。

「結局、あの生物ってライオンなのかな？トラなのかな？」

「どちらかと聞かれましたも・・・」

生物学者ならば答えられるかもしれないが、生憎学者でもなければ専門家でもないアリスには答えられない。だから、答えではなく、自分の意見を言うことにした。

「どちらでもよろしいのではないのでしょうか？」

「どちらでもいいっ？」

「はい、人はライオンかトラか、どちらなのかという答えを求めているのかもしれませんが、肝心の本人は自分がどちらなのかなんてことは気にしていませんでしょう。気にして、考えたところでわかるわけでもないですし、決めたとこで何かが変わるわけでもありません。ならば、どちらでもよろしいのでは？」

「秀才ならぬ大雑把でシンプルな答えだね」

「こういうのは考えすぎてはいけなとわたくしは心得ています。それよりも、もうすぐ行われるクラス対抗戦のお相手をしてくださいますか？」

「・・・いいよ、気が済むまで付き合おう」

ライガーは自分がライオンかトラなのかは気にしない。気にしたところでわかるわけではないから、確かにそうなのかもしれない。だが、自分はどうなのだろうか。小倉刀奈の息子である小倉衣音として生きるか、父の機体と力を受け継いだ破壊者<sup>ルットレ</sup>として生きるか。

はつきりと割り切りたいとこだが、既に半身を浸かっている身だ。どちらを選んだところでまっとうに生きていけるわけでもない。それでもいつかは決めなくてはならない。重く、苦しい決断だ。だが、

こうしてどちらでもない身だからこそわかる。戦うことしかなかった父や破壊者<sup>ルットレ</sup>でありながら無力で悲しい思いを味わった母。

そんな二人がいてくれてこうして選ぶことはとても幸せなことなのではないのかと。

「それでは行きましようか。時間が惜しいです」

「ああ、わかった」

結局その日は遅くまで特訓は続いた。もうすぐ行われるクラス対抗戦に対する意気込みだからか、AXEに対する危機感からか。だが、あの襲撃が二人に大きな向上心を生み出しているのは間違いなかった。

――

「ではこれよりISの基本的な操縦飛行を実践してもらおう。小倉、オルコット、試しに飛んで見せろ」

「はいー」

「了解」

次の日、昼下がりのアリーナで千冬の声が響く。アリーナ内で整列する1年1組のクラスメイト。前にはISスーツを着た担任である鈴とシャルロット、そしてスーツ姿の千冬がいた。普通の授業では学年主任である千冬は参加しないのだが、ISを扱うこの実習では非常事態にそなえて参加するらしい。

空中に飛行するためには当然ながら、機体を展開しなくてはならない。だが<sup>衣音</sup>瑠奈がすぐに機体を展開できたのに対し、アリスは中々機体を展開できずにいた。どうやらまだ昨日の特訓の疲労が残っているらしい。

「はやくしろ、それともイギリスの代表候補生はまともに機体の展開

も習得できていないのか？」

「うっ……く……」

必死に集中しようとするが、疲労や周囲へ対する焦りからか雑念が頭をよぎって中々機体を展開できない。

「深海だ」

「え？」

「静かな深海の中を想像するんだ。そしてその中で自分のペースでゆっくりと意識を集中させていけばいい」

「はい……」

目をつぶり、静かな深海をイメージする。無音の空間、静寂の世界。そんな空間で少しずつぼんやりとした光が集まり始め……

「っ！」

すると、アリスの耳に着けているイヤリングから光の膜が放出され、全身を覆いつくす。そしてアリスのISであるブルー・ティアー Zmark III が展開される。

「展開にいつまでかかっているつもりだ。たるんでいるぞ」

「も、申し訳ありません」

きついお叱りの言葉を受けて、飛び立つ。ひとまずアリーナをぐるりと一周してくるが、その時瑠奈は相変わらずの仏頂面であるが、アリスは落ち込んだ様子であった。

「気にしなくていいさ。あんな教師一人に昨日僕たちがやった訓練を分かれてたまるか」

「随分と小倉さんは織斑先生を毛嫌いしているようですね？」

「嫌になるほど彼女からお叱りを受けて、それでも尊敬するならばその神経を疑うな。ただのマゾだよ」

そういえばそうだった。彼はあの千冬を前にして顔色一つ変えないう強靱な度胸の持ち主であった。その強さとメンタルを少しは見習いたいものだ。

「完璧主義ほど小さなミスをいつまでも気にするものだけど、それをいつまで引きずってはいはただの重石だ。邪魔なだけさ」

「ふっ、あなたらしい考え方ですね」

楽しそうにほほ笑むアリス。なんやかんだで何事にも完璧を求めてしまう彼女には溜奈のような考えがいい緩和剤となっているのだ。すると、千冬から新たな指示が届く。

「小倉、オルコット。急降下と急停止を実践して見せろ。目標は地表から10cmだ」

「了解、それじゃあお先に失礼するよ」

軽く挨拶を交わし、地表に向かって一気に突っ込む。全身で感じる風邪を切る音、それに耐えながら視界に地表が広がっていく。そしてそのまま顔面が触れる瞬間、上半身をそらす。すると、ビュンという音がすると同時に体勢が整い、地表ギリギリのところまで急停止する。その動きに周りから驚きの声が出るが、千冬は不満そうな顔をしている。

「私は10cmで急停止しろといったはずだ。お前は地表から15cmで停止している。訓練が足りないぞ」

「すみません、いかんせん最近はよくわからない刺客に命を狙われてまともに訓練する時間も取れませんでしたね」

千冬のダメ出しを軽く受け流し、続いてアリスの番となる。だが、さすがはイギリスの代表候補生といったところだろうか。千冬の指示通りの距離で停止し、自分の技量の高さを見せつける。どうやら、さっきの会話がいいリラックス効果を醸し出してくれたらしい。

「よし、次はISの基本的な実習に移る。6つの班に分かれ、それぞれ打鉄II型をハンガーから運べ!!専用機を持っている小倉とオルコットは実習の手伝いと補佐に回れ」

千冬の指示で生徒は動き出す。精密機械で超重量の装甲を装着しているIS。ハンガーやカーゴを使っても女子だけで運ぶのは中々厳しい。

「ぐぐぐ……重い……」

「ほら、皆もつと力を入れて!!」

それぞれの班が必死にISが入っているハンガーを押しているが、なかなか動かない。すると、押しているハンガーが急に軽くなる。

「え……」

不信に思い、見てみるとそこには瑠奈のヴァリアントに抱え込まれている打鉄Ⅱ型があった。

「ハンガーだけで運ぶのは大変だ。私が運ぼう、皆は先に行ってくれ」  
「おおっ！ありがとうございます小倉さん」

意外な親切心に喜びながら、生徒たちは実習を開始していく。千冬は自分たちでハンガーを運べと指示したのだが、瑠奈が善意で行っていることだ。間違っていることではないのでひとまず目をつぶっておくことにした。

「……………」

ひとまずすべてのISを運び、実習が開始されるとやることもないので隅で座り込み休む。別に突かれたというわけではないのだが、なぜかこうしたくなったのだ。

「破壊者、小倉瑠奈、小倉雄星……………」

自分にまとわりつく数々の因縁。そして相手の目的は自分を含めた一家の根絶。だとすると、自分の命を狙って自分のドツペルゲンガーとあの小倉瑠奈は今も見ているのだろうか。自分を仕留めようと息をひそめ、好機を待ち、万全の態勢で。

「どうすればいいんだか……………」

「小倉さーん!!」

遠くで自分の名前が聞こえる。顔をあげると、遠くで自分に向かって手を振っているクラスメイトがいた。

「ちよつと助けてー!!」

「どうしたの、困り事?」

「ええ、間違つて直立状態で降りちゃつて…………次の人が乗れないのよ。ちよつと手伝つてくれる?」

「ああ、もちろん…………行こう」

休憩もそこそこに立ち上がると、助けを求めるクラスメイトへ歩いていく。そういえば打鉄といえば、叔母である簪の専用機を思い出す。学園にあるⅡ型は安全面を重視し、鎧のように装甲で纏われた機体だが。簪の式式は火力面と機動性に重点を置いた機体だった。

昔はよく簪のISに抱きかかえられて空を飛んだものだが、今は自



分で自立飛行ができる状態になってしまった。そういえば、入学前の襲撃以来、保護や手続きとやらで立て込んでいて簪と会えていない。今、簪はどこで何をしているのだろうか、元気にしているといいが……

――

暗い夜道を一人のスーツを着た女性が歩く。少し癖つ毛でセミロング髪形に眼鏡が目印の簪であった。とあるIS技術研究所の技術者として働いているため、残業やスケジュール合わせのために泊まりになったり帰りが遅くなることも珍しくなかった。

「はあ……」

ハイヒールの音を響かせながら首を回すと疲労からか、骨の音がなる。首の筋肉の疲労に加えて肩や足の筋肉も疲労で凝ってきている。それも無理はないだろう、簪もいまは30過ぎなのだ。どんな超人も疲労や老いを克服することなどできない。

いや、老いを克服した者が身内にいた。だけど、いつまで経っても変わらないあの肉体を見ると、妹でありながら一人無様に年を取っていく自分が醜く思えてくる。おまけにこの年になっても婚約者はおろか、男性との付き合いもない自分に対し、姉は子持ちだ。

このまま誰もいない一人暮らし用のマンションに帰ると思うと、なんだかみじめに思える。

「……ん？」

すると、前方で奇妙な人影があつた。まるで簪を待ち構えていたかのような立ち方で佇んでいる。顔を見ようにも月が雲に隠れてしまっており、月光がなくて誰だか分からない。

「あの……私に何か御用ですか？」

恐る恐る声をかけるが、返答はなく沈黙の空間が続く。だが、数テ  
ンポ遅れて相手の声が聞こえてくる。

「更識簪、初めましてというべきかしらね？」  
「え？」

口調と言い、声の高さといい相手は女性なのだろうか。だが、聞いたことのない声だ、しかし相手は自分の名前を知っている。いったい彼女は何者なのだろうか。

「すみません、心当たりがなくて・・・顔を見せてくれますか？」  
「ふふつ、誰だか分からないとここまで無防備とは・・・哀れね」

誰だか分からない簪をあざ笑うかのような声が響く。だが、そんな言葉に頭をかしげている簪の表情が次の瞬間、凍り付く。

「っ！」

目の前の暗闇に不気味に浮かび上がる2つの紅き光。機械のような人工的な光ではなく、宝石のようにどこまでも磨き上げられた鮮やかな輝き。その輝きを簪は知っている。

「あ、あなたは・・・」

その時、雲の隙間から月が顔をだし、月光が周囲を照らしていく。自分の前に立ち、紅い双眸をもつ女性。それは紛れもなく

「昔、雄星が世話になったようね、更識簪？」

「小倉・・・瑠奈・・・」

白い髪が夜風にたなびかせているかつて想い人の義姉、小倉瑠奈であった。その正体を知った瞬間、簪の体が無意識に防衛行動を起す。

「くっ！」

素早く後方に下がると、瞬時にISを展開しようとする。いくら相手が破壊者<sup>レトルター</sup>であってもISが相手では何とかなるかもしれないとおもっていたが、その考えが甘かった。まるで獣のような瞬発力で距離を詰めると、打鉄式式の待機状態である指輪がつけられている手首を押しえつけられ、反対側の手で首を掴まれる。

「ううう・・・ぐぐぐ・・・」

「確かに私は尋ね者の立場だけど、そうも警戒されるとどうしようも

ならないのよね。とりあえず、明確な敵意をむき出しにするのはやめてくれるかしら？」

呆れが半分、警告を半分といった口調で伝えると簪の首を掴んでいる手を放して開放する。ゲホゲホとせき込んでいる簪から少し離れる。一応、これは相手に警戒心を与えないための処置だ。無論、仕留めようと思えばすぐにできる距離だが。

「私は今日、あなたに話があつてきたのよ。もちろん、あなたと戦うつもりはないけど次ISを展開させようとするのならば、その指輪ご指を切り落とすわよ」

「っ……」

冗談でもなければ脅しでもない、正真正銘の警告に体の背筋が凍る。だが、自分と交渉をしに来たというのは意外だ。

「わ、私に何の用？」

「単刀直入に言うわ、私に小倉刀奈の居場所を教えてくださいませんか？ 更識簪」

「そ、そんなの言うわけないでしょ……」

考える間もなく即答する。自分の姉は前の襲撃によって政府の保護施設に行くことになった。当然ながらその場所は最高機密で誰にも知られていない。さらに情報漏れを防ぐため、自分以外の唯一の肉親である衣音ですら、その場所は知らない。小倉瑠奈に姉の居場所を教えたら、間違いなく姉を殺しに行くだろう。それを分かっているはずがない。だが、その考えが大きく揺らぐ

「もちろんただとは言わないわ。もし、私に話してくれるのならばあなたを破壊者にしてあげる」

「え……」

破壊者、その言葉の意味を知っている。かつてISを根絶することを目的に作られた最強の兵士。紅い瞳と不老の肉体、そして驚異的な身体能力をもつ存在。

「わ、私を……破壊者……？」

「ええ、なにも難しいことじゃないわ。私が持っている雄星の種をあなたの体に人工着床させるの。その結果、あなたは妊娠することにな

るけど、別に結婚や付き合っている男性もいないんでしょ？好都合じゃない」

「そんなこと・・・できるの?」

「難しいことじゃないわよ。元々破壊者は試験管からの体外出産ではなく、人間を母体とした人工着床で生まれさせることを目的に調整されているのよ。そのほうがコストも時間も短縮できるしね」

同じやり方であるのなら、破壊者を母体に人間の種を植え付けるという方法があるが、それでは生産効率が悪く、限界がある。そのため母体の負担が最低限になるように調整されているのだ。現に、刀奈も人間の身でありながら衣音を出産し、破壊者となっている。

「どう?別に悪い話ではないわよね」

「っ・・・」

その話の魅力がないはずがない。簪も老いを克服したいと思っっているし、不老を手に入れられるのなら願ったり叶ったりだ。だが、それと引き換えに要求されたのはただ唯一の肉親の命。易々と差し出せるはずがない。

「このままあなたは醜く老いていく。老いを克服した姉と違って皺だらけになり、誰にも愛されることなく」

「やめて・・・」

「そんなあなたを破壊者である姉はこう思っている。『妹は所詮人間だ。だけど、自分は違う、もはや妹とは別の生き物なのだ』」

「お願い・・・言わないで・・・」

「あなたはどこまでも姉の劣等種。格下の存在にすぎないのよ」  
「いやああ!!」

かつて過去に感じていた暗い気持ち、コンプレックスがこみあげてくる。永遠の美貌を手に入れ、衣音という子宝にも恵まれた完璧の女性、最高の母親。それに対して自分はなんだ。醜く老い初め、異性を惹き付けるような魅力もない。誰にも愛されず、誰にも見られず、一人ぼんやりと生きていくだけの人生。

ボタボタと涙を流し、悲痛な現実泣き叫ぶ。そしてそんな弱り切った簪に小倉瑠奈はさらに追い打ちをかける。

「言っておくけど、あなたの恋人である小倉雄星ももういない。これを見なさい」

「素晴らしい差し出される一枚の写真。それは繁華街のなかで取られた写真だ。写っているのは姉である小倉刀奈、そして一緒に写っていたのは……」

「嘘……」

長い黒髪の十代後半と思われる若い少年、紛れもなくそれは小倉雄星だ。彼が姉に手を引かれてホテルへ連れ込まれている写真であった。その衝撃的な写真に頭の中が真っ白になる。

「雄星が戻ってきたことを雄星自身も姉もあなたに伝えていない、隠している。それはなぜか、簡単なことよ。破壊者<sup>ルットレ</sup>ではないあなたはもはや二人の前では劣等種。恋愛対象ではないのよ」

「そんな……」

「悔しいわよね。自分も雄星を学園に在る間必死に支えてきたのにおいしいところはすべて姉に取られちゃって。残ったのはこのまま無様に生きるしかない人生だけ」

知りたくない、知らないほうが幸せだった真実。それが一度に降りかかってきて理解しきれない。わかることはただ一つ、自分は姉の劣等種ということだけ。その否定できない現実の刃が心を切り裂いていく。

「言っておくけど私もあなたを思っただけで交渉しているのよ？ 姉である私、そして姉がいるあなた。似たような人だから私はあなたに手を差し伸べたいの。わかってくれるかしら？」

涙があふれ出る顔を上げて小倉瑠奈を見る。そこには自信にあふれた顔があった。もし、同じ破壊者<sup>ルットレ</sup>となったら自分もこうなれるのだろうか。瑞々しい肉体、不変の美貌。それを手にしたらもう一度学園にいた頃のような幸せを味わえるのだろうか。

「まあ、伝えたいのはこれだけよ。もし、話に応じる気があるのなら私を呼んでその時はどんな時間帯でも駆け付けるわ」

最後に『私はあなたの味方よ』と手を優しく包み込んで話すと、闇に溶けていく。あとに残されたのは残酷な事実<sup>ルットレ</sup>に傷だらけとなった

簪のみ。そしてこの日を境に少しづつ日常の歯車が狂っていく。

「マジカル・ミステリアスー!」

「グギャアアア!」

手元のステッキから放たれたきらびやかな光線が目の前のモンスターを消滅させる。真夜中のビルの上でドレスらしき衣装に身を包んだ1人の少女が立っていた。彼女の名前は魔法少女カタナン。人知れず、魔の手からこの町を守る正義の魔法少女だ。

「やったねカタナン。ミッション完了だよ!」

そう無邪気な声で足元いる直立二足歩行で歩く不思議な白猫、「サイカ」がハートのカタチをしたストーンを渡してくる。今からX年前、カタナンこと刀奈は偶然出会った魔法世界の使者「サイカ」と出会い、多くの魔の手からこの町の人々を守ってきた。初めは緊張や不安でいっぱいだったものの、今では随分と手慣れたものだ。

「これで今日の分は終わりかしら?それじゃあ、帰りましょう」

「うん・・・そうなんだけど、ちよつと話があるんだけどいいかな?」

「え・・・どうしたの?」

日頃の無邪気な声とは一変し、深刻な声で話すパートナーに奇妙な緊張感を感じる。そしてその予感的中してしまうのだった。

「実は僕、もう魔法の国へ帰らなくちゃならないんだ」

「な、なんで!?!」

突然すぎる告白に夜中だというのに大きな声で驚く。いや、それも仕方がないことだろう。なんの予兆もなければ告知もなく、何年も共に戦ってきた大切な相棒がいなくなってしまうのだ。狼狽えないほうが無理だ。

「どうして!?!なんで!?!何が理由なの!?!」

「それはね・・・」

「刀奈ちゃんがもう魔法少女っていう年じゃないからだよ」

「え……」

予想の斜め上……いや、180度違う回答に先ほどの混乱が吹き飛び、思考が停止する。てつきり魔法の国からお迎えが来たとか、任期を終えたからとかそのような理由かと思っていたが、思いのほか大人すぎる理由だった。

「僕と出会った時、君はまだ可憐で無邪気な女の子だったけど、今じゃもう体も心も大人なんだよ？そんな人に魔法なんて使えるようにしたら絶対にいけなくて邪な目的で魔法を使うよね？」

「そ、そんなことするわけないじゃない！私は魔法はこの町を守るためにしか……」

「僕知っているんだよ？君がこの前、想い人であるクラスメイトの雄星君に一時自我をなくす魔法をかけて一緒にお風呂にはいったこと」「うっ……」

「やっぱりこのまま続けていたら君は我欲を満たすために何をしでかすかわからない。もう、無理なんだよ」

「ち、違うのお願い！話を聞いて、これには訳が……」

「わかつてはいたけど、清純な子が汚い大人に変わっていくのは見ていてつらいね。でも、変化があるから人間なのかもしれない」

そんな哲学めいたことを言うと、その白猫の体が光っていく。そしてそのまま浮かび上がると夜空の星へと消えていく。そしてその場に残されたものはビルのコンクリートに力尽きたように座りこみ、項垂れる魔法少女らしきコスプレをした心が穢れた女子高生だけであつた。

「はっ！」



眠気もなければ疲れも感じず、はつきりとした興奮によって目が覚めて朝を迎える。この興奮の原因は分かっている、昨晚みた夢のせいだ。現実離れしているくせになぜかその人間性がリアルすぎる奇妙な内容。かつて自分が思い描いていた魔法の国とは違いすぎるが、そんな夢物語だからこそ、夢なのだろう。かといって夢の中で現実を混ぜるのはいただけないが。

ニヤー

自分の主が起床したことに気が付いた白猫が顔元に寄ってきてくると、朝の洗顔代わりなのか顔をなめてくる。そう、猫は所詮猫だ。決して魔法の国の使者だったり、なんとも醜くくて大人な人間倫理などいわないだろう。だが、無駄だと分かっていたとしてもどうしてもこれだけはいつておきたかった。

「サイカ、私は我欲のために使ったんじゃないやなくて自分のために使ったのよ?」

当然だが猫に人間の言葉が分かるはずもなく、顔をかしげるだけであつた。

—————

「そうか・・・彼女は学校生活に復学したか・・・いや、悪いがもう学園に行くつもりはない。あとは彼女の心の強さにかけてよう・・・ああ、また連絡する」

朝露による濃霧につつまれた山奥。朝を告げるように鳥のさえずりが聞こえてくる。人の手が一切加えられることなく、ありのままの自然が残るこの地でとある少年の声が響く。必要最低限の整地しかされておらず、非常に足場が不安定な土砂のうえで腰かけ、大きな通

信機器を片手に通話している一人の少年がいた。

彼に明確な名前は無い。だが、人に名前をいうときは「小倉雄星」と名乗るようになっている。その雄星は通話を終えて手元の時計を見ると、背後にあった大きな荷物を背負い、立ち上がる。

「あれ・・・どこいった？」

きよろきよろと周囲を見通すと、少し離れた場所で樹木の枝にいる小鳥を見上げている一人の人物がいた。全身を覆うほどのコートにフードを深くかぶっており顔が見えず、その人物がどれほどの年齢なのか、男なのか女なのかすらわからない。

そんな謎の人物に雄星は近づくと、肩をポンポンと叩く。

「通話は終わった。この山を下ったところに宿がある、そこで休憩しよう」

その言葉にコクリと頷くと二人は静かに山中を歩いていく。一言も言葉を交わすことなく、ただ黙々と足を動かす。だが、その沈黙は不仲から来るものというよりも、互いが自身の考えの没頭からくる思考の時間であった。

「お二人様でのご利用ですか？はい、大丈夫です。お部屋へご案内いたします」

旅館の窓口で受け付けを済ませ、従業員に案内されて泊まる部屋へ入る。もつとも明日の早朝には出ていくつもりなのであくまで休憩目的といったところだ。大きな荷物を降ろし、小さく安堵のため息を吐く。野宿も別にいいが、寝るときに虫よけのために焚火をする必要がない点を考えて、やはり屋根があるというのはいいことのように思える。

そんなでくつろいでいると、フードの人物が立ち上がると荷物を漁り始める。

「風呂に入るのか？別に文句を言うつもりはないが・・・大丈夫なのか？いろいろと」

「……………」

その疑問に返答することなく、タオルを出すと出入口にかけられているシャワーマークの立て札を指さす。

「へえ、室内に備え付けのシャワーを使うのか。いっておくが、別にお前が風呂をはいるのを止めるつもりはない。普通に大浴場に入ってきたらどうだ？」

「……………」

その提案にも答えることなく、手を軽く横に振り拒否するような仕草をすると、シャワー室へ入っていく。その光景を見届けると、空中投影ディスプレイを出現させて複雑な英数字に目を走らせていく。この先、何が起こるかわからない。だからこそ、楽観的な考え方はしない。必要な時、全力で動けるように準備を怠ることなく、今は静かに牙を研ぎ続ける。

これは本来あり得なかった未来、明けることのなかった夜の物語。  
破壊者<sup>レットロー</sup>という種族が行き着くもう一つの結末だ。

—————

パリンツ！

IS学園の学生寮の一部屋で朝から大きなガラス質の割れ音が響く。落ちた衝撃で床に散らばる白い破片、その光景を二人の少女が驚いたような表情で見つめる。

「お姉ちゃん？」

「あ…………、ごめんなさい簪ちゃんっ！すぐに代わりのお皿を用意するから!!」

そういい、明らかに動揺した表情で上の戸棚から新たな皿を取り出すが、またしても同じように手から滑り落ちて床に二枚目の皿の破片を広げる。もはや動揺や朝ボケなどといったレベルではない、根本的な思考が鈍っているといつてもいいかもしれない。

「私がやるから、お姉ちゃんは先に食べてて」

「で、でも……」

「いいから」

ほぼ追いつくような形で台所から出すと、部屋のテーブルに乗せられている朝食を食べ始める。正直、今の姉をひと時も目を離したくなかったが、いつまでも見張っていることなどできない。下に屈み、片付けを始めていく。ちらりと姉の方向をみると、焦点の合わない瞳でぼんやりと皿に盛られている朝食を見つめていた。

「お姉ちゃん、早く食べないと遅刻するよっ」

「え……あつ、そ、そうね……」

破片を集め、袋に詰めるとごみ箱に入れる。その時、ちらりと近くに壁にかけていたカレンダーが視界に入ってくる。そういえばそうだった。もう、あの日の出来事十日も経つのだった。あの完璧な姉もある日いきなり、あのようになってたわけではない。十日前のある出来事が原因だ、それ以来、ショックで無残といえるほどに変わってしまった。

無論、簪も完全に立ち直れたわけではないのだが、姉があんななのだ。自分までダメになったらそれこそ世紀末のような状況になってしまうだろう。

「それじゃあ、学園に行きましょう」

「お姉ちゃん、カバン忘れてる!!」

「え……あつ……」

本当に頭を抱えたいような状況で頭痛がしてくる。姉は完璧超人であったがゆえに多少のショックではメンタルが崩れることはない。だが、それであるがゆえに一度崩れたメンタルはそう簡単に回復しない。人間とはそういうものだ。

階段から転げ落ちそうになること四回、道で転びそうになること四

回、教室を間違えること一回、何度も危機を救いながら姉を教室まで送り届け、簪も自身の教室の席へ到着する。そして椅子に腰かけると、すでに一日分の徒労を吐き出すかのように大きなため息を吐くのだった。

「.....」

外からワーワーとにぎやかな声が聞こえてくる。時刻は昼過ぎであるため、昼食を終えた生徒たちが食後の運動として屋上や校庭で元気よく遊んでいる。その中、簪は外に出ることなく学園内の保健室のベットの上で横になっていた。

一人になりたいとき、簪はよくこの保健室を使用している。今はこの保健室の担当は空席となっており、管理するものはいない。そのため鍵がかかっているのだが、パートナーであるエストが鍵の形状を記憶していたため、だれも使わないのならばと合鍵を作製し、無断利用させてもらっている。

最近姉の面倒ばかり見ているが、無論簪もダメージがないというわけではない。だからこそ、一人になれるこのような場所が必要であった。

「エスト」

『はい、何でしょうか？』

「私を元気づけて」

『難しいことを仰いますね』

唐突すぎる頼みに困ったような声で返答する。なんやかんだで彼女も顔に出さないだけで疲れているのかもしれない。エストに肉体があればマッサージなどができたかもしれないが、生憎AIであるエストにはこうして話し相手をするだけで精いっぱいだ。

そうしていると、昼休みの終了を告げるチャイムがなる。そうなくては簪も教室に戻らなくてはならないのだが、ベットの上で横たわる

簪はピクリとも動かない。

『チャイムはお聞きになられたはずですよ。お戻りになられないのですか?』

「午後の授業は……休む……」

『そうですか……ならばせめて……』

今できる精いっぱい気遣いとして保健室を消灯して少しでも人がいない雰囲気を外に醸し出す。

「エストは……授業をさぼる私を叱らないの?」

『何度も言いますが、私の使命はあなたをサポートすることです。育成することでもなければ、教育することでもなく、サポートする。ならば、マスターのすること、行うことを肯定し、私のできることをするだけです』

「ありがとう……エストは優しいね」

『あなたもご立派な人です。あなたのお姉さまと同じように誰よりも傷つき、疲労しているというのに必死に立ち上がり、自らを奮い立たせている』

「褒めすぎよ……私はただの……」

そういい、眼鏡をはずすと枕に顔を押し付ける。食後なのもあってか、胃に血がいつている。そのため脳がぼーとしているせいでそのまま眠気が訪れるのはすぐであった。

少し長い昼寝をしたせいで、多少元気となった簪はすっかり空は赤く染まった放課後の学園を歩いていた。目的は姉の教室である。無論、子供じやないのだから送り迎えなど不要とは思っているが、今朝のこともあって本当に帰ったかだけ確かめたかった。

「え、嘘?そんなことがあったの?」

「本当よ本当、目撃者も何人もいるんだから」

二年生の廊下を歩いているが、なんだか騒がしく、落ち着きがない。

それでも姉の教室にたどり着き、先に帰っていてほしいと願うが、現実には非常であった。

「あ、簪ちゃん、迎えに来てくれたの？」

「え……？」

教室内を除いたとき、まだ帰っていないなかった姉である楯無の姿。それだけならばいい、異常だったのは彼女の顔であった。彼女の右頬全体を覆いつくすかのような巨大な湿布、そしてその湿布が剥がれないように医療用テープが張られていた。

「それ……なんで……」

「知らないの？」

そこでクラスメイトと思える人物が割り込んでくる。

「今日、会長が廊下を歩いていると会長の座を狙う剣道部員が一斉に襲い掛かってきて、木刀で右頬を思いっきり殴られたのよ」

「嘘……」

自分の知らないところで起こっていた壮絶なことに対して声も出ずに絶句する。このIS学園において会長は最強である証である。その会長の座を狙う生徒は多少はいた。その者たちに対し、姉は危ないげもなく会長の座を守ってきたはずなのに、こんな形で終わるとは。

「そのあとに反撃するかなって思ったら、そのままフラフラとどっかに行っちゃって。近くにいた別の体育部員が持っていた医療道具で手当てしたんだけど……。襲った部員たちもなんか無抵抗な会長が不気味に思っただけでどっかにいっちゃったんだよね」

「大げさね、ちよつと油断しただけよ」

そういう苦笑いを浮かべる楯無だが、その笑みはどこか乾いており虚しいだけであった。そんな姉の姿を見ていると心の奥から悔しさと悲しさがこみあげてくる。

「お姉ちゃんっ！帰ろっ！」

日頃の簪では想像できないほどの大きな声を出すと、楯無の机からカバンをひったくるようにとり、周囲の目から逃げるように手を引いて廊下を歩いていく。時間がたてば傷口は塞がるだろうと楽観的に考えていた自分が甘かった。このままでは自分と姉の傷心はどんど

ん広がり、何が起るかわからない。先ほどのサボリ行為と同じように、本人も気が付かないうちに忘れられない過去の禍根が彼女たちを絡めていく。その影響を姉が大きく表に出た、それだけの話なのだ。

「夕食は私が作るね」

「でも、それじゃあ……」

「いいから休んでいて」

ほぼ寝かしつけるかのように楯無をベッドで横たわらせると、夕食の準備のために台所へ入る。幸いなことに食材の仕込みは既に朝に終わっていたため、手早く調理器具を使って調理を進めていく。だが、簪の脳内は先の見えない未来に対しての試行錯誤でいっぱいだった。

だが、どうしても正解が見えない、解決策を見出すことができない。苦悩しながらちらりと楯無の方を見てみると、ベッドの上で虚無を見つめるかのような暗い瞳で外の沈みゆく夕陽を見つめていた。ただでさえ精神的に衰弱している状況だというのに、今日一日の学園生活の肉体的疲労によって心身ともに疲労しきっている。もはや、限界なほど超えているのかもしれない。

「エスト……」

『はい、何でしょうか？』

「お姉ちゃんと私を……元気づけて……」

『難しいこと仰いますね』

つい先ほども似たような会話をしたことに困惑するような表情を浮かべるが、エストにそのような感情があるのかは不明だ。適当にネットから拾ってきた人間の困惑した表情を模写しているだけなのかもしれない。

「このままじゃ……ダメ……だから……」

本当に人間とは面倒な存在だとエストは思う。機械はエネルギーを供給され、部品を入念にメンテナンスをすればいくらかでも動く。だ



が、人間はほかの生き物を殺し、食材にして生きていく。しかも、それだけでは飽き足らず、心などという不明瞭なものを抱え込んで存在している。そして彼女たちはその不明瞭なものに悩まされ、苦惱し、今や全てを投げ出して自滅しようとしている。

だが、そんな者たちを愚かしいとは思わない。強固なものとは裏腹に抱え込まれた脆い部分。そのバランスはとても美しいと感じている。

『……一つだけ可能性があります』

「……教えて」

簪の意志を確認すると、見慣れた日本列島の地図を表示する。そのまま、四国あたりをズームするがその場所は人里から遠く離れた山奥であった。

『この場所へ向かえば希望が見えてくるかもしれませんが』

「エスト、どういう意味？」

『行けばわかります。ですが、この場へ向かうという意味をよく考えてから向かうことをお勧めします』

「……？」

いまいち彼女の意図が理解できない。だが、今はそれが唯一の道しるべだ。今すぐ向かいたいところだが、日帰りで帰れるような場所ではない。何も考えず、何も考察せず、簪は自分と姉の分の外泊届を提出するために部屋を出ていく。

だが、彼女たちはまだ知らない。その希望に縋るといふ行為がこれから先、どのような出来事を起こし、そしてどれだけの血が流れる結末となるのかを。

「っ……？」

「……どうした？」

不意に山道の途中で立ち止まる。もうどれだけ歩いたのかわからないほどの距離を歩いたが、その顔に疲労の表情はない。だが、その

代わりに何とも言えない危機感を感じる面持ちへと変わる。

「今……風が変わった……」

「いい方に変わったのか？それとも悪い方？」

「多分……悪い方……」

その時、強風が吹き荒れてかぶっているフードを大きく乱す。その時、隙間から見えた紅く輝く瞳が暗い夜空へと輝く。そのつかぬ間の黄昏の時期に日に二人の少女の顔が脳裏を掠める。なぜか彼女たちの姿を見ると胸が切なくなる。それはきつと、こんな結末を迎えてしまったが故の寂しさなのだろうか。

「はあ、はあ……」

太陽は完全に沈み、夜空が煌めく夜。大きなリックを背負った二人の似た少女が山道のふもとで息を切らしていた。

「簪ちゃん……どこに向かっているの?」

「ここに行きたいんだけど……」

「そこって山奥じゃない。そんな場所に私を連れて何ががあるの?」

「ごめん、わからない」

「わからないって……そんなこと言われても……」

朝、起きたら急に荷物がまとめられており、なぜか四国へ連れて込まれた。学園には外泊届を出しているからいいが、今日は平日なのだ。いったい、妹は平日に授業を休んでまで自分を連れてこんな辺境の地に何をしに来たのだろうか。さつきからその意図を聞いているのだが、『わからない』の一点張りだ。

「とりあえず、宿泊できる場所を探しましょう。もう日も落ちてきているし……」

「そうだね……」

少し、周囲を散開すると運よく灯りが思っている宿泊施設らしき旅館が発見できた。

「これはこれは、いらっしやいませ」

中へ入ると、従業員らしき女中のような着物をきた女性が出迎えてくれた。

「あの、予約をしていないんですけど……大丈夫ですか?」

「はい、お部屋は空いています。お二人様でのご利用ですか?お部屋へご案内いたしましょう。よろしければお荷物をお預かりいたします」

飛び入りのような状況だが、嫌な顔一つせずに笑顔で部屋へ案内してくれた。

「このような辺境の地の民宿をご利用していただきありがとうございます」

「いえ……こちらこそいきなり来てしまつてごめんなさい……」  
その謝罪の言葉に優しく微笑むと疲れた楯無と簪を労つてか、布団を敷き始めてくれる。そのさりげない気遣いは地味に嬉しいものだ。  
「そういえば……最近、お若い方々の間でここのような辺境を観光するのがブームなのですか？」

「え……そういう意味ですか？」

「つい最近、あなた方ほどの年齢のカップルがこの旅館をご利用していただきましたので……なにやらそのような流行が巷にはあるのかと思ひまして」

「いえ、私たちは観光ではなく……その……ちよつとした調査をするためにここへ来たので……」

「ああ、そうなのですか。申し訳ありません。不必要なご質問をしてしまひまして」

「あつ……いえ……気にしないでください……」

日頃は人見知りをする簪なのだが、この従業員の礼儀正しくも優しい雰囲気になまされ、ついつい世間話をしてしまった。その珍しい光景を楯無は満足そうな顔で眺めている。

「お客様、不用意ながら温泉をご用意させていただきました。ぜひ、ご利用ください」

最後にペコリと深くお辞儀をすると、従業員は部屋を静かに出ていった。そして暫しの間を沈黙が支配する。

「えつと……とりあえず、温泉にいかない？」

「え……あ、うん……」

疲れからか、脳がフリーズしてしまうが今日一日の汗を流すにはいい機会だ。お互い、疲労でクタクタの状態で着替えを持ち、入浴場へと向かつていった。

「ふー……」

湯につかつた瞬間、何とも年寄り臭い声が出てしまう。だが、それ

は体が今日一日の疲労を流してくれているという確かな証拠だ。

「ふう、気持ちいいわね、簪ちゃん」

「うん……」

簪と楯無の声が広い大浴場に響く。周囲には他に誰にもいらず、完全に貸し切りの状態となっている。その雰囲気はさらに豪華さを演出していた。やはり、近くに観光地があるわけもなければ、都会があるわけでもないこの旅館ではわざわざ来て宿泊しようとするものなどいないのだろうか。

温泉を引いているおかげか、少し湯に粘り気がある。それを楯無が気持ちよさそうに腕や肩にかけているが、腕部や肩、脇下などの部分からは少しやせ細り、骨が浮き出していた。

「お姉ちゃん、ちよつとごめんね」

「簪ちゃん？きやつー！」

ふとそのことが気になった簪が楯無のやせ細った部位を軽く触る。やはり、ここ最近の無気力な生活のせいで食欲がなくなっていたのか、肉付きがなくなりか細くなっている。

「最近……食べてないよね……？大丈夫？」

「だ、大丈夫よ……もう簪ちゃんったら心配しすぎなんだから……」  
誤魔化のように明るい声で取り繕うが、やはりどこか弱弱しい印象が感じ取れた。このまま少しづつやせ細って死んでしまうのだろうか、そんな最悪の未来を想像して温泉に入っているというのに背筋が冷たくなる。

「エスト、そろそろ教えて……ここに何があるのかを」

『ふむ……そうですね。そろそろお教えしましょう』

周囲に誰もいないことを確認すると、目の前にエストが現れる。

『ただし、お聞きになられる際は落ち着いてください。いいですね？』  
その条件に二人は軽く頷き、重要な話を聞くために気持ちを整える。

『この近くに……』

エストの告げる衝撃の事実。それを聞いた瞬間、二人の目が大きく見開かれる。

「っ！」

『マスター！刀奈様を止めてください!!』

それを聞くな否や湯からでて、全裸のまま脱衣場を飛び出そうとする勢いの楯無の背後を簪が羽衣締めにして止める。

「お姉ちゃん落ち着いて!!」

「離して簪ちゃん！すぐそこまで・・・すぐそこまできているんだから行かなくちゃ!!」

『今は夜です。そんな足場も見えない状態で山へ行くのは危険すぎます』

「でも・・・でも・・・」

本人も夜の山に入ることがどれだけ危険なことなのかはわかっている。だが、その考えに興奮と思考が追い付いておらず、心の底から有り余る興奮と焦りを完全に制御しきれていない。

「お姉ちゃん、私だって行きたいよ・・・でも、夜の山は危険・・・」

「そう・・・よね・・・」

そこまで言われたところで頭が冷静になり、今焦っても仕方がないことを理解する。

『とりあえず、もう一度温泉へお戻りください。このままではお体に触ります』

簪の説得とエストのアドバイスに従い、再び温泉へ戻る。そして大きく取り戻した自分を反省するかのようには話したまで湯に浸かる。まるで悪戯をして叱られた子供のようだ。

『本格的な搜索は明日に行いましょう。今日はごゆっくりとお時間をとり、お体を癒してください』

「そう・・・ね・・・」

落ち着いたとはいえ、今の心情は目的の山奥へ向かうことでいっぱいであった。そしてその興奮がそう簡単に収まってくれるはずもなく、この後の入浴時間も夕食中もこの言葉にできない焦燥と焦りが楯無の心中に蠢いていくのであった。

「すー．．．すー．．．」

その感情は就寝時間となった今でも消えることはなかった。疲れと夕食後の満腹感からか、静かな寝息を立てながら眠る簪の隣で、今すぐにでも飛び出したいこの感情を抑える。「今動くのは危険だ」、「危ない」、その危機感と隣り合わせで存在して言うのはかつての思い出であった。

あの時もなんの前触れもなくいきなり消えてしまった輝かしい日々。今、動かなかつたらあの時と同じように消え去ってしまうのではないか。少し心が傾く。そのまま考えが傾倒していくのにそれほど時間がかからなかった。

「簪ちゃん、ごめんなさい」

簪が完全に寝ていることを確認すると、何も持たず、旅館着のまま静かに部屋をでていく。

幸いなことに通路の灯りは消灯されておらず、迷うことなく玄関へ行くことができた。そのまま戸棚に手をかけた時

「お客様？どうなされました？」

背後から声を掛けられる。振り向いてみると、そこにいたのは先ほど自分たちを出迎えてくれた女中の従業員であった。備品の片付けをしていた途中だからか、手元には装飾品と思われる高価そうな生け花をもっている。

「あつ、えつと．．．夜の散歩をしようと思いましたが．．．」

「そうですね、しかし、夜のこの近辺には山から野生動物が下ってくることがあります。夜、出歩くのは、遠慮ください」

「しかし．．．えつと．．．」

その従業員の全うな警告を聞いても、今の楯無には部屋へ戻る気は毛頭なかった。なんとか相手に納得のいく理由を考えるが、そんな都合のいいものが出てくるはずがなく、言葉にならない声をだして不審な挙動をする。そんな怪しさMAXな楯無に何を思ったのか、女中の従業員は優しい声で語りかける。

「お客様、お時間があればよろしいのですが、今から私の部屋へ参りませんか？」

「え……部屋へですか？」

「はい、ちょうど本日の業務が終了したところですので」

てつきり警告を聞いても部屋へ戻らないことに対しての注意を受けるかとおもったが、彼女の口調からはそんな様子は感じられず、むしろ楯無との会話を楽しんでいるような節もある。

「それでは……お邪魔でなかったら……」

ここは怪しさを感じさせないためにも相手に合わせる。だが、その返事に心底嬉しそうに微笑むと、従業員の部屋へ案内してくれた。

「どうぞ、狭い部屋ですが」

従業員の部屋といっても楯無達が使っている部屋と大差はなく、畳の上に様々な装飾品が施されている一般的な民宿のような部屋であった。そして部屋の隅に案内してくれた女中が使うであろうと思われる布団が敷かれている。

「あの……」

「はい、なんですか？」

「他の従業員の方々はどこですか？」

「いません、今、この民宿は私一人で運営しているんです」

「えっ、大丈夫なんですか？それって……」

「はい、恥ずかしながらこんな山奥の民宿をご利用していただくお客様が減多にいないもので……」

やや自虐的な笑みを浮かべながら、楯無へ茶飲みに注がれた緑茶を差し出す。飲んでみるとほのかな苦みの味覚がした全体に広がっていく。

「おいしい……」

「それはよかったです。いい茶葉を長年寝かせておいた甲斐がありました」

そうこうしている間に仕事着から寝間着に着替え、楯無へ向かい合う形で座る。そしてお茶菓子を差し出したり、お代わりの緑茶をいれたりして客人である楯無をもてなしてくれた。



「あの……なんで私を招いてくれたんですか？ただの客人に過ぎない私を……どうして……」

ふと先ほどから疑問に思っていることを口にしてみる。このようなご厚意は嬉しいが、それがなんの施しもないものだとなると、不気味に感じて、失礼ながら何か裏があるのではないかと勘繰ってしまふ。

「……………」

その疑問に女中はすぐには答ええない。じつと手元の湯飲みを眺めて、静かに感傷を浸るような顔をしている。そんな状況が数秒ほど過ぎたほどだろうか、女中が静かに口を開く。

「似ていたから……」

「え？」

「あなたが昔の私に似ていたから……」

何か一つの事に焦り、焦燥し、そして取り返しのつかない結末へとたどり着く。まさにそんな状況へたどり着こうとしている目の前の少女に対し、女中は奇妙な感情を抱いていた。

「信じてもらえないかもしれませんが、私は昔、ISのテストパイロットをしていましたんです」

「え？」

『ISのテストパイロット』、その単語に対し思わず驚きの声が出てしまう。目の前の女中は楯無がIS学園の生徒であることやロシアの代表生であることなど知らない。となると、目の前のこの女性は楯無を操縦者としてではなく、一人の少女として自らの過去を話しているのだろうか。

「もう九年も前になりますかね。昔の私は偶然IS適正が高かったことから、エリートコースであるISのテストパイロットを担当することができ、大きな高揚感と優越感を抱いていたと同時に大きな焦りと焦燥がありました。少しでも他者よりも先へ、他者よりも上へ。その底なし沼のような出世欲と承認欲求は日に日に増幅していく一方でした」

世間一般ではISが高いことは大きなステータスとなる。それゆ

えにそのことによって自分は優秀だと己惚れて他者を卑下したり見下すものも少なくない。彼女の場合、それを自身の大きなアイデンティティとなり、それであるがゆえに少しでも他者に遅れたくない。現在のお淑やかな風貌とは違い、昔の彼女はさぞかし大きなプライドの塊であったのだろう。

「少しでも結果を残そうと、少しでも上司に評価してもらおうと躍起になり、無茶なテストスケジュールを組んではそれを実践する日々。そんな日々は最悪の形で終わりを告げました」

そこで少し口ごもり、目頭にわずかな涙が浮かべる。あの日々を後悔するように、悔やむように。だが、何度願っても過去に戻ることはできない。今の自分にできることは目の前の少女に自分の二の舞にならないように忠告してあげることだけだ。

「ある日、高高度での飛行訓練中に私が操縦するISの事故が起こり、メインシステムが完全にダウンし、絶対防御もシールドエネルギーもない状態で地上三十メートルから地面にたたきつけられたんです」  
「嘘……」

衝撃的な出来事に思わず手元の湯飲みを落としそうになる。地上三十メートルから落下する。その時、彼女がどのような恐怖を抱いたのか想像もできない。

「事故の原因は新たに取り付けたスラスターとISとの制御管制の不適合から。それは技術者が入念に調べればすぐに見つけることができたものなのに、出世や結果に焦る私が急かしたせいで見落としていたとのことです」

そうして女中はゆっくりと立ち上がると、腹部に巻き付けてある浴衣の帯をほどく。それによって重力に従って浴衣がずれ落ち、女中の下着をまとった肢体が楕無に晒される。年相応の大人の色気を感じる黒い下着、本来ならば艶やかなで色気を抱かせる姿だが、体の所々にある痛々しい手術跡が全てを台無しにしてしまっていた。

「事故によって私の体はボロボロになりました。両腕の骨は粉々に砕け、肋骨の骨は肺に突き刺さり、脚部の骨は皮膚から飛び出し、内臓は潰れ、そして――」

ゆつくりと股間部を覆う下着へ手を伸ばし、脱ぎ去る。女性の全ての人間の始まりともいえる部位、そのわずかな上の下腹部には大きな縫い目が存在していた。

「落下の衝撃で骨盤の骨が吹き飛び、その吹き飛んだ骨の破片が私の卵巣と子宮に深刻なダメージを……それによって……子供を……産めない、体に……」

辛く、思い出したくもない過去を語っているうちに自然と涙が流れてくる。それでも必死に伝える、愚かしく、浅ましい自らの過ちを。

「その後……私は……テストパイロットを降ろされ……当時、お付き合いしていた恋人とも……音信不通となって……しまい……」  
自責の念と後悔で押しつぶされそうになる中、必死に言葉を紡ぐ。自分の過去の過ちが目の前の未来ある少女の役に立つようにと願いを込めて。

「それによって……全てに……嫌気が……さした、私は……世捨て人と……なり、今もこうして……」

そこまで言いかけたところで、ふと心地よい温もりが顔全体に感じる。

「もう十分です。あなたの苦しみは伝わりました……」

話を聞いていた楯無がいつのまにか、辛く苦しい過去を話す女中を抱きしめていた。泣く子をあやす母のように優しく、慈愛に満ちた行為であった。この二人は今日会ったばかりなのに、客と従業員という関係に過ぎないのに、そうしてこんなにも胸が締め付けられるかのような苦しみを感じるのだろうか。

「ありがとうございます、辛く悲しいあなたの過去を話してくれて」  
生徒会長となり、ロシアの代表生となったせいで全てを知った気でいた自分が恥ずかしくなってくる。絶対防御などというが、この世に絶対などないのだ。今日の技術の発達にはこの人のような悲劇や事故もあってこそだ、決して自分が優れているなどと己惚れるな。そう胸に深く刻み込む。

すると、不意に外の廊下から人の足跡が聞こえてくる。この旅館には自分たち以外には宿泊しておらず、ほかに従業員もいない。となる

と、その足音の持ち主が誰なのかは容易に想像できた。

「付き添いが起きてしまったようです。もう部屋へ戻ります。お茶、おいしかったです」

「そうですか、お気を付けてお戻りください」

正直、もう少し彼女のそばにいたかったが、明日には出る身だ。ここで中途半端に気を使っても何の解決にもならない。ペコリとお辞儀をして扉を閉める。

「簪ちゃん！」

「あ、お姉ちゃん！どこに行っていたの？」

「ごめんなさい、トイレに行っていたんだけど……道に迷っちゃって」

適当な言い訳をいうと、簪とともに部屋へ戻っていく。いつの間にか前までの焦りはなくなり、今はゆっくりと休もうという考えへ変わっていた。無理に動いても何も解決しない、ならば今の自分ができることをするしかない。そしてそれは、今日の疲れをゆっくりと癒すことであろう。

話している廊下はいつの間にか消灯しており、真っ暗となっていた。その薄暗い通路を二人はゆっくりと歩いていく。まだ朝まで時間がある、明日のためにもゆっくりと休まなければ。

「いろいろとお世話になりました。ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそまたのご利用をお待ちしております」

小鳥のさえずりとともに迎えられる快晴の朝。そんな朝日の光とともに楯無と簪は旅館を出る。最後の最後まで礼儀正しく、謙虚にふるまってくれた女中の見送りを背に向けて歩き出す。だが、道中楯無は何度も小さく振り向いて、名残惜しそうな様子だ。

「……お姉ちゃん、まだ泊まりたかったの？」

「えっ!?! いや、そういう意味じゃないんだけど……いい人だったなあって思っていてね」

「うん、確かに優しい人だったね……」

簪ももう少し彼女と話してみたいという気持ちはあったが、本来の目的を見失ってはいられない。素早く気持ちを切り替えると、あまり整地されていない荒れた山道を上がっていく。

「簪ちゃん! そんなに急いで歩くと危ないわよ!」

「え……? あ、うん……」

昨日の夕べまでの取り乱しようから一転し、今日の姉はなんだか冷静な様子だ。昨日まではたとえ嵐の中でも単独で入っていきそうな焦燥感に駆られていたはずなのに、今日は落ち着き、安全を重視して進んでいつている。あまりの心境の変化に若干疑問が浮かぶ、いったい昨日の夜に何があったのだろうか。

『山の天気は変わりやすいです。常に雲の動きを見てください』  
「うん……」

とはいえ、ここはハイキングコースというわけではない。なかなか目的の場所へ向かおうとしても道がなかったりして回り道をしなければいけないことが多々あった。おまけに少しでも天気が危なければ、戻ったりして雨風を凌ぐ。だが、二人を進んでいる、少しずつだが目的地へ。

『っ! 止まってください!!』

突如エストの静止の声とともに二人は立ち止まる。何やら危険が

あるのかとおもって周囲を見渡したが、生憎そのようなものは確認できない。

「エストちゃん、どうしたの?」

『これを……』

そういい、地面を指さすとそこにあつたのは足跡であつた。大きさは楯無や簪と同じぐらいで形は若干縦に丸みを帯びた形状をしている。その足跡がちょうど四つある。

『二人分の足跡です。しかも形が崩れていないところを見ると新しいです』

「本当っ!?!」

それを聞くな否や大声で叫びたくなるが、ここは人の手が行き届いていない山奥だ。下手に大声や物音を立てると、危険なものも呼びかねない。

『足跡を見失わないように少しずつ進みましょう』

「ええ」

少しずつ、確認しながら慎重に進んでいく。その心がけがあつてこそなのか、その足跡は少しずつ新しくなっていく、そして『眞実』へたどり着く。

「っ!」

山頂へ辿りたどり着くための小さな小道、本来ならば人などまづいでないであろうその場所に二つの人影があつた。高鳴る心臓の心拍を抑えながら少しずつ歩みを進めていき、大きく息を吸い、そして――

「雄星君っ!!」

全身全霊の力を込めて彼の名を叫ぶ。その声は大きく広がっていき、周囲の鳥を羽ばたかせるほどだ。その声に反応したかのように目の前の二人は足を止め、ゆっくりと振り向く。一人はフードを被つていたせいで顔が良く見えない、だが、振り向いたもう一人の顔は間違いないかつての想い人小倉雄星であつた。

「……………」

「……………」

振り向いたが彼は何もしやべらない。ただ、ひたすら楯無と簪の顔を見つめるだけであった。

「雄星君……よね……?」

もつと近くで彼の顔を見ようと歩み寄っていく。だが、その道中で招かれざる者が介入したのだった。

「っ!」

突如、何かが風を切るような鋭い音が聞こえてくる。それに警戒したときはもう遅い。

「きゃっ!」

激しい轟音と衝撃はとともに、何の前触れもなく楯無と簪の目の前に黒い巨人が着地する。

「あれは……」

その黒い巨人には見覚えがあった。かつて学園を襲撃した無人IS、それがなぜか再び自分たちの前に立ちふさがり、楯無と簪を潰そうを大きく腕を振り上げる。

「後を付けられていたか……っ、おい!」

彼女たちを救おうと動く雄星よりも早く、隣にいたフードの人物が動く。目の前の無人ISに恐れることなく、背後から素早く近づくと、相手機体の腰部の装甲の出っ張りを足場にして大きくジャンプして無人ISの前へ飛び越える。そして無人ISの腕が振り下ろされるよりも早く楯無と簪を抱え上げると、二人を連れて大きく後退する。

「あ、ありがとう……」

あまりにも人間離れた身体能力に驚きつつ、礼をいう。さつきは雄星に目を奪われて気にしなかったが、あの雄星の隣に並んで歩くとは、何者なのだろうか。

「っ……」

目の前の無人ISと敵対するかのようにつ謎の人物だが、その身には何も纏っておらず、生身のままだ。そんな状態で挑むなど無謀にもほどがある。だが、その人物は退くこともなければ、逃げることもなく、挑戦的な態度で立ったままだ。

「グオオオオッ!!」

その対応から瞬時に敵と判断すると、まるで熊のような激しい轟音と機械音を起こすと同時に腕部に装備されたブレードを引き抜いて突撃してくる。

「っ………」

迫りくる黒い巨体。それに対抗するために手をわずかに開くと、そこから光の粒子が収束し、自身の倍の長さで大きさがあるであろう巨大なソードが展開すると同時に振るい、相手の攻撃をはじく。耳を塞ぎたくなるほどの金属音と飛び散る火花。その中でも決して集中力を乱すことなく、冷静に相手の攻撃を防いでいく。

「す………」

ただただそれしか言葉がでない。生身の状態ですに挑む。それは敵の攻撃を食らったら良くして重傷、最悪即死という極限の状況だ。それなのに焦ることなく冷静に対処する。それを実現するためにはどれほどの技量と精神力が必要とされているか。

その光景に漠然とした表情を浮かべている簪に対し、楯無の目は眼前で戦う人物の武器に向けられていた。白と銀のカラーリングをした長身のソード。なぜだろう、その武器に見覚えがある。どこで見たとかは思い出せないが、その武器を楯無は知っていた。

(何……この気持ち……)

モヤモヤとしたはつきりとしなない感情が胸をこみあげてくる。まるでサビの部分は知っているが、曲名が思い出せないような感覚だ。だが、その疑問はすぐに晴れることとなる。

「っ！」

偶然、敵のブレードの先端が被っていたフードの端に引っかかる。それによって布地がズタズタに引き裂かれ、かぶっていたフードが静かに倒れて奥に隠されていた素顔が晒される。

「嘘………」

その素顔を見た瞬間、楯無と簪の目が大きく開かれる。まず目を引くのが何一つ着色されていない真っ白の髪だ。純白で清楚、そう表すのがふさわしい美しい髪、そして顔は優しく、慈愛に満ちた印象を受



ける少女。その顔は紛れもなく――

「小倉……瑠奈……」

かつて雄星の義姉であり、学園で敵対したはずの小倉瑠奈であった。かつて彼女は自身の想い人である雄星を楯無と簪に奪われたことを憎悪し、愛情を狂気と殺意に変えて襲い掛かってきた。その彼女がなぜか今度は自分たちを守るために戦っている。そのいきなりすぎる人物の登場に頭の展開が追い付かない。

「くっ……っ!!」

啞然とする二人をよそに戦いは続いていく。次々と振り下ろされる巨大な刃、そのうちの一振りを大きく弾いて後ろへのけ反らせる。

「悪くないタイミングだ」

その隙を逃さないといわんばかりにヴァリアントを展開した雄星が後方から接近すると同時に、腕部の爆熱機構『ゼノン』で無人ISの背中を貫く。その個所は的確にコアを射抜いており、動力を失った相手は手足を脱力させ、静かに倒れる。

「……………」

「……………」

勝ったものの、喜びの声はない。ただひたすら互いの顔を見るだけの時間が続いていく。

「…………とりあえず、静かに話せる場所に行かない?」

その雄星の提案に従い、四人は山を下っていく。当然ながらその間も無言であり、これから起こる面倒な出来事の予感を薄々と感じ取っていた。

――

「これはこれは再度のご利用、誠にありがとうございます」

「あははは……ごめんなさい、すぐに戻ってきちゃって……」

場所は山から一転し、昨晚楯無と簪が利用した旅館へ再び戻る。正

直、あれほど端を切って出発したというのに、大体七時間ぐらいで戻ってきてしまったため、旅館の女中とは妙に気恥しい。だが、この近くで安心して休めそうな場所がここぐらいしかないのだ。

「四人泊められる部屋は空いていますか？」

「はい、お部屋は空いております。ご案内いたしますよう」

素晴らしい、部屋に案内される。幸いにも今日も他に宿泊客はいないらしく、人気のない静寂が宿全体を包んでいる。

「・・・で、説明してくれるわよね？雄星君、いえ、破壊者ルットローレと呼んだ方がいいかしら？」

「あー・・・」

部屋の中央に置かれたテーブルを挟んで取り調べを受ける。妙に鋭い目つきをしている楯無と簪に向かい合う形で破壊者ルットローレとその隣で呑気に手元のメモ帳に意味不明な数式の計算をしている小倉瑠奈。彼女たちの様子を見ると、どうやら納得するまで開放はしてくれない様子だ。

「その・・・信じてくれないかもしれないが、こいつ・・・小倉瑠奈が雄星なんだ」

「え？」

突如話されるその意味不明な言葉に姉妹揃って間抜けな声が出てしまう。

「ど、どういう意味？」

「なんて言ったらいいか・・・この小倉瑠奈はあんたたちが知っている攻撃的な性格の小倉瑠奈じゃなくて、小倉瑠奈の肉体に雄星の意識をナノマシンと電子信号でコピーしたものを埋め込んだものだ。だから、見た目は小倉瑠奈でも中身はあんたたちが知っている雄星なん

「?????だ」

あまりにも奇天烈すぎる内容に一旦思考を止め、頭を抱える。要するにこの小倉瑠奈は見た目は小倉瑠奈だが、人格は雄星ということなのだろうか。当然だが、人間はロボットではない。記憶や人格をメモリーカードのように抜きだして、他者の肉体に埋め込んだら無事復活

するなど簡単な話ではない。それを実現するには緻密なまでの計算と技術、そして大きな倫理観の欠如が必要であろう。

「……」

「その目、信じてないな？」

「当然でしょ、そんな夢物語を信じるほどメルヘンな考えはしてないわ」

「証明する方法は簡単でしょう。本人にしかわからない質問をすればいい」

先ほどまで沈黙していた瑠奈が突如、口を出す。当然ながら声は完全に小倉瑠奈だ。その声を聞いた瞬間、彼女と敵対したときの恐怖がよみがえる。憎悪と嫉妬の蠢く感情で襲い掛かってきた過去の記憶、それはなかなか忘れられないものだ。

「っ……」

「どうしました？早く質問を」

「そ、そうね……」

質問といっても、正直楯無や簪も雄星のことをそこまで知っているわけではない。ひとまず、学園生活での出来事を中心に質問していく。

「部屋のルームメイトは？」

「あなたと簪でしたね」

「修学旅行はどこへいったかしら？」

「京都。といっても目的は亡国機業ファントム・タスクへの攻撃でした」

「所属していたクラスは？」

「一年一組」

「夏休み前に行われたダッグトーナメントは誰と組んだか覚えてる？」

「セシリア・オルコット。アクシデントが起こって中止になりましたが」

「あなたが作ったAIの名前は？」

「エスト、僕が簪のサポートを目的に作りました」

「あなたが拾ってきた猫の名前は？」

「サイカ、白猫のオス」

「……」

ここで質問できる内容が尽き、沈黙する。より本人であるかどうかの確証を得るために学園での出来事だけでなく、身の回りのことも軽く質問したのだが、完璧な答えを返してくる。それに加えて小倉瑠奈であること、破壊者ルットローレの隣を歩いていたこと、そして先ほどの戦闘技術。認めたくないが――

「あなたなのね……雄星君……」

「……はい、お久しぶりです。刀奈さん」

少々口ごもりながらも彼女の本名を口にする。だが、頭の整理が完全についたわけではない、あの愛した少年が寄りにもよって最悪で最恐の容姿となって甦った。その現実感のない出来事に頭を悩ませていく。

「では、こつちの質問の時間だ。なんで俺たちの居場所が分かった？」

「……教えてもらったの、エストに……」

「はああ……」

その名前が出た瞬間、大きなため息を破壊者ルットローレは吐く。確かにエストとは連絡を取っていた。だが、それは自分たちの居場所を漏洩させるためではなく、学園の出来事を把握しておくためだ。

「エスト、こんな山奥に来てまで何の用だ？」

『お二人のためです。事件後、お二人方は傷心とショックで重度の心労状態でした。それを解決するためにはあなたたちが生きていることを本人たちの目で確かめさせるしかないと判断しました』

「心労で疲れている人間はこんな山奥にくることなどできないと思うがな。そのせいで彼女たちは尾行され、俺たちがまだ生きていることがバレたわけだ。どうしてくれる？」

あきれ半分、苛立ち半分といった口調で楯無と簪、そしてエストを責め立てる。生きていることを伝えなかったのはなにも意地悪でしなかったのではない。これ以上自分たちは人間の社会に関わるべきではないと判断してのことだ。その行為を彼女たちは感情に身を任せたいで壊された。とても悲しいことだ。

「だったら・・・学園に戻ってくればいいじゃない」

「ふぎけるな、あんな場所に戻れるか」

「僕はいいと思う。こうなってしまった以上、どこの国も干渉できない学園へ避難するべきだ」

学園に戻るべきという意見を否定する破壊者<sup>ルットローレ</sup>と人間社会への帰還を望む雄星。ここで意見が分かれる。

「ここで旅を再開してもいたずらに周囲に被害をまき散らすだけだ。ならば、どこかに居住を構えれば少しは安心できるかもしれない。それに・・・彼女たちがこうして会いに来てくれたのは嬉しい」

「雄星君・・・」

彼（彼女）の素敵な告白に嬉しそうな様子の楯無と簪。その自身の半身の意見に頭を悩ますが、そもそも自分が人間社会が合わないことなどわかっていることだ。とてもではないが、学園へ戻る気にはなれない。

「やっぱり・・・ダメ・・・？」

心配そうに声を出す簪を見た瞬間、目つきが変わる。細く、鋭い獣のような野蛮な瞳に。

「条件がある。それはー」

その条件を聞いた瞬間、この場にいる破壊者<sup>ルットローレ</sup>以外の者全員の目が見開かれる。そして動き始める、眩しく力強く駆け抜けたあの日の続きが。

軍や政治においてスパイするときのコツはなんだか知っているだろうか。別に諜報技術とか偽造とか難しいことではない。スパイをする時のコツはとにかく目立たないことである。見た目も地味、声も地味、服装も地味。きつとどこにいても馴染み、擬態するであろう大人しさが必要となってくる。

それは瑠奈の肉体を得て蘇生した雄星にも言えることだ。学園に転入してくるとなると、多少は注目を浴びることとなる。そうなったとき、数日もすれば皆飽きてしまうような存在でありたいと思った。だが、現実是非情である。そんな願いなど自らのミスによって易々と崩れ去るのであった。

「えーと……それじゃあ、自己紹介をお願いします」

「は、はい……」

場所はIS学園の一年一組の教室。朝のSHRの最中であるはずのその教室に教卓の前に立つ一人の少女の姿であった。

「は、初めまして……今日からこのクラスに転入してきました。笹原ささきはら亜紗日あさひといいます。よ、よろしくお願いします……」

恥ずかしそうにか細い声で自己紹介を口にする。こんな暗い自己紹介をしたら普通ならば「暗いやつ」というレッテルを張られてしまうかもしれない。だが、クラスメイト達はそんな自己紹介などお構いなしにある部分を凝視している。

半分は眩しいほどの真っ白な髪の毛。もう半分は彼女の太ももだ。膝上十センチまでつめられたミニスカート、そして膝上にまで履かれた黒いニーソックス。そして一番の目玉はその中間に存在する黒いガーターベルトだ。制服のカスタマイズが自由なこの学園だがここまで大胆なカスタマイズをしているというのもまた珍しい。

その女の子の色気を具現化したかのような容姿と服装にクラスメイトは釘付けである。これは彼女が初日もっとも恐れていたことであった。

「笹原、自己紹介は終わったな？席は更識の隣の席だ。さっさと席に

つけ」

「は、はい……」

周囲の目から逃げるようにそそくさと席に座る。その時ちらりと隣にいる簪を見たら口元を手で覆い隠していたが、その隙間から除けば必死に笑いをこらえていることは一目瞭然である。

「最悪だ……」

ぼそりと呟くが、その声は教卓の前の千冬の声でかき消されるのであった。

「——以上だ。これで朝のSHRを終わる。笹原は転入手続きのため後で職員室にくるように」

その声が終わると同時にクラスメイトは席を立ったり授業の準備をするなりして動き始める。

「ゆう……笹原さん、行こ？」

「うん……」

羞恥と恐怖で動けない笹原の身を案じてくれたのか、隣の簪が誘ってくれる。その手を取り、二人は職員室へと歩いていく。そして職員室で言われるであろう嫌味に想像して心底うんざりしてそうな顔になるのであった。

「なんだその恰好は。ふざけているのか？」

「……」

職員室にたどり着き、千冬と対面したものの、待っていたのはごもつともな言葉であった。

「お前の事情や立場上、目立つような恰好は感心できんな。何を考えている？」

「会長に目立たない女性らしい服装にしてくれって頼んだらこれがきた……」

「なるほど……」

不思議とその言葉で全ての合点ができてしまう。そして思い浮か

べるのはこの事態を招いた張本人の悪戯のような笑み。

「……まあいい、いろいろ渡すものがある。教材に制服の予備、そして重要なのはこれだ」

素晴らしい、渡してくるのは一枚の検査用紙。その内容は学園への転入前に行ったIS適正検査の結果である。雄星あらため亜紗日は偽造書類をつあつて学園へ転入してきたわけだが、このように実施できる範囲で再現はしている。まあ、ISスーツを着るという屈辱的な行為をしたわけだが、それに見合う結果は得られたのだろうか。

「……これはこれは……へえ……」

検査結果を見た瞬間、あまりにも予想外の結果に思わずそんな声が出てしまう。検査結果のIS適正は「C」、あまり良い結果とはいえないものであった。ただ純粹に彼女の肉体の適応能力が低いのか、それとも破壊者だから適応能力が低くなっているのか。

「……」

「自分を見つめなおすのは後にして、さっさと教室に戻れ」

意外な真実に不思議そうな目で自身の手を見つめる亜紗日を尻目に千冬は業務へ戻る。久しぶりの再会に何か言葉でも労ってくれかとおもったが、よく考えたら彼女とはそこまで親しいわけでもなかった。荷物が入っている段ボールを持ってそそくさと職員室を出る。

「亜紗日、どうだった？」

「まあ、いつも通りだったかな。劳いの言葉一つなかったよ」

外で待っていた簪に苦笑いを向けると、教室へ戻っていく。ふと時計をみるとまだ授業開始まで時間がある。暇つぶしがてら、彼に会いに行くでしょう。



コンコン

「どうぞ」

「保健室」と書かれた扉をノックすると聞き慣れた声が返ってくる。扉を開けてみると、部屋には自分がいた。

「……おまえか」

「仕事には慣れた？」

白衣を着たかつての自分。だか、あれは自分ではなく、別の自分だ。部屋の机に向かって何やら書類を書いている別の自分、それを見つめていると不思議な気持ちになつてくる。

「何をやっているんだい破壊者<sup>ルットローレ</sup>」

「ここでは溜奈と呼べ。俺もお前を亜紗日と呼ぶ」

「そう、それじゃあ溜奈、何をやっているの？」

「溜まっていた書類の片付けだ。お前は気楽そうでいいな」

保健室のベットの所で寝っ転がっている亜紗日を横目で見ながら、書類にペンを走らせていく。その仕事の時間に招かれざる客が乱入する。

コンコン

「どうぞ」

亜紗日がこの保健室に来てしばらくたった頃、再び扉がノックされる。どうせ千冬だろうと思ったが、その予想は見事に外れた。入ってきたのは制服を着た六人の生徒であり、その中央には世にも珍しい男子生徒がいた。

「その……溜奈、ちょっといいか？」

「手短にね」

その男子生徒を彼は知っている。織斑一夏、世界でISを唯一使える男と言われている人物だ。その傍らにはその幼馴染である篠ノ之箒にイギリスの代表候補生セシリアに中国の代表候補生である鈴、フランスの代表候補生であるシャルロットにドイツの代表候補生のラウラ。まさに一年生の専用機持ちが勢ぞろいであった。

「何か用？」

「その前に笹原さん、悪いけど少しの間部屋を出て行ってくれないか

「？」

「ん？」

申し訳そうに一夏がベットに寝っ転がっていた亜紗日に退室願いをだすが、本人が答えるよりも早く瑠奈が口を挟む。

「今から話すことは他者に聞かれてはまずい機密事項なのか？」

「いや、そういうわけじゃないが……」

「じゃあ、彼女がいても問題ないだろう。互いに多忙な身だ、迅速に済ませよう」

「いや、でも……」

「早く言え。授業が始まるぞ」

異議や反論を言わせない高圧的な態度に委縮したのか、亜紗日を追い出すのを諦め、本題を切り出す。

「その……俺たちは謝りたいんだ。あの時、何の事情も知らずに戦ったばかりに大きな迷惑をかけてしまって……本当に悪かった！！」

大きな謝罪の言葉とともに大きく頭を下げ、謝罪の意を示す。他の者たちも同じように頭を下げ、必死に誠意を見せる。

「……」

その行為に瑠奈は何も言わず、亜紗日もただ眺めているだけだ。そんな状態が数分続いただろうか、瑠奈が重そうな口を開く。

「本当に申し訳ないと思っっているならば、一つ頼みを聞いてくれるか？」

「あ、ああ！俺たちにできることならばなんでも言ってくれ！」

「今すぐこの場から消えてくれ。できるだけ早く、静かにだ」

「っ……」

先ほどの意気込みから一転し、その冷たい言葉に黙りこく。瑠奈としては別に怒っているわけではない。だが、かつて敵対していた者たちとこれ以上顔を合わせたくないのも事実だ。しかし、中には自身の非を認められずに逆上する者もいる。

「なんださつきからその態度はっ!?せつかく私たちがこうして謝っているというのに!!」

一緒に聞いていたポニーテールの少女、箒が逆上するように怒るが、その鬼人の如き怒り顔を見ても瑠奈の表情は変わらない。

『せっつかく私たちが』と言われても、今のお前たちの頭にそこまで価値があるとは思えないな」

「なにをお!!」

さつき言った瑠奈の頼みはどこ行つたのか、今にも胸倉を掴みかからんとする箒だが、そこで運よく授業開始のチャイムが鳴り響く。

「早くいけ、遅れたら教師の怒りが襲い掛かるぞ」

「っ……そ、そうだな……」

時間がたつても千冬の逆鱗は怖いのか、その言葉で落ち着きを取り戻していき、やがて保健室を出ていった。残されたのは瑠奈と亜紗日のみ。

「……なにか文句はあるか」

「少しムカついただけで殴らなかつたのは素直に褒めたい」

少し前の狂犬のような彼であつたら少し噛みつかれただけで相手を殺していたかもしれない。だが、今は自制心を覚えて会話をした。言い方はともかく、本能で動かないようになっただけ進歩を感じる。

「我慢せずに言い放つてしまったが……別によかつたかな……」

「多分、僕も同じことを言つていただろう。相手の心境はどうあれ、立場と関係は明白にしておきたい」

誤解や間違いがあつたとはいえ、戦つた相手とこれまでの遺恨や禍根を流して仲良くすることなどできない。さつきはその意思表示だ。

「それじゃあ僕……じゃない、私は教室に戻るよ。仕事頑張つて」

さすがに女口調で話すのはプライドが許さないらしく、ややボーイデッシュな口調で話す。そのまま眩しいほどの白髪をたなびかせて保健室を出ていく。自分で見て、考えて、行動する。人ならば当然の流れだが、生命体として未熟ばかりにまだまだおぼつかない部分がある。自分はこの学園において小倉瑠奈であり、雄星でなくてはならない。

ただ一人の人間であつた少年の意志。そう良くも悪くもその一人の人間に過ぎない少年の意志にこんなにも押しつぶされそうになる

のだろうか。

――

ISに関する事前の軽い復習もあつてか、授業自体は別に問題はない内容であつた。ISの運動性能や姿勢制御、内部機構の内容などエクストリームの調整や修理で嫌というほど直面しては悩んできた。車の整備をしていた人間がスポーツカーを担当するようなものである。

だが、やはり知らない単語や造語もあり、そこらへんは調べておく必要があるであろう。

「あつ、来た来た。こつちよ！」

そんな授業内容を考えながら亜紗日と簪は学園の屋上に来ていた。上を見れば快晴の天気が広がり、昼下がりの日光が降る注ぐ。そんな芝生が生えている屋上の真ん中にレジャーシートを敷いて二人を待っている人物がいた。片方は呼び出した張本人である楯無、そしてもう片方は手元の書類を凝視している瑠奈であつた。

「なんの用ですか、昼休みに呼び出したりなんかして」

「いやねえ、これに決まっているじゃない」

「そういい、手元のバッグからランチボックスを取り出す。」

「人数分作ってきたからみんなで食べましょう」

「ど、どうも……」

準備の良さに戸惑いながらもレジャーシートの上に簪とともに座る。

「亜紗日ちゃん、女の子があぐら座りはないんじゃない？」

「え……あつ……」

注意を受けて急いで楯無と同じ上品な正座座りに直す。だが、今度

はそのせいでガードーベルトが付けられている太ももが強調されてしまい、隣にいた簪が恥ずかしそうに目を逸らす。結局、どっちに転んでも結果はそう変わらなかつたらしい。

「瑠奈君、食事の時ぐらいは仕事はやめなさい」

「・・・失敬」

楯無の注意を素直に聞き、手元の書類を強引に白衣のポケットに突っ込む。

「亜紗日ちゃん、授業内容は理解できた？」

「大体は理解できましたけど、やはりいくつかわからない部分があります。できる限り自力でやってみますけど、いざとなつたら頼るかもしれません」

「そうよ、私たちを存分に頼っていいのよ？」

「まあ、その時はその時で。瑠奈、そっちはどうだった？何かあつた？」

「相変わらず書類の相手だが、大体は片付いた」

「へえ、あれだけの量を、それはすごい」

食事をしながら今日の午前起きたことを報告しあう。この時間は大切だ、いつどこでミスが出るのかわからないのだから。

「午前は乗り切ったとはいえ、やっぱり亜紗日ちゃんにはまだまだ女性として未熟な部分があるわね」

「無茶言わないでください。そこまで適応性は高くないんですから」

正直、まだこの体の力加減すらもまともに把握できない状態だ。破壊者の強化筋肉繊維では女性の腕の骨ぐらいであつたら、思いつき握れば砕くことができる。それがここの生徒のような弱い少女ならばなおさら容易い。

日常の中で偶然触れた相手にケガをさせるとなれば、大問題となる。程よい力加減を見つけ出さなくては。

「・・・やはり、俺は来る必要はなかつたのではないか？」

「え？」

その話に割り込んできたのは表情をしている瑠奈であつた。表情はいつもと変わらないように見えるが、不思議なことに少し落ち込ん

でいるように感じる。

「条件つきで来たとはいえ、俺を置いて亜紗日、お前だけが学園に来ればもう少し楽になったかもしれない」

「あなたを置いていけるはずないでしょ？何をいつているのよ」

「だが……」

どうにも彼は学園での生活に乗り気ではないようだ。そのことに對して必死に抵抗する楯無と簪だが、そんな二人に對して、亜紗日はじつと顔を見ている。まるで何かを伺うように、感じ取ろうとするように。

「……寂しかったのか？」

その声に反応するかのように瑠奈は亜紗日の顔を睨みつける。

「転入初日なのもあってか、それほど遊びに行けなくて悪かった。これからはできるだけ寄れるようにするから」

「……」

それ以降、話をすることなく楯無の作った弁当を食べるだけであった。おそらく彼なりの照れ隠しなのだろうか。

「ふふっ……」

なんとも幼稚で子供っぽい反応に不思議と笑みがこぼれる。楯無や簪は彼がどのような考えを持っているのかはわからない。だが、今の反応からすると、彼は意外なことに自分たちとそれほど違う存在ではないのかもしれない。そんな不思議な親近感を感じてしまうのであった。

なぜ人間は心底どうでもいいことをいつまでも覚えていくくせに、重要なことはすぐに忘れるのだろうか。これは雄星——亜紗日が昔からずっと思っていたことだ。それと同時になぜ自分が想像する悪いことが必ず起こるのだろうか。

そんな一種の哲学のような疑問も今ならばわかる気がする。この悟りを開いた今ならば。

「おそろ．．．きれい．．．」

晴れた日の午後のアリーナでそんなことを呟きながら生気の失った瞳で空を見上げる。まるで自分の死期を悟った者のような状態の亜紗日を近くにいた簪が宥める。

「あ、亜紗日、そんな顔しないで．．．似合ってるから．．．」

「簪．．．今日も君はかわいいね」

「今日もって．．．さつきから何度も会ってる．．．」

昼食が終わり、午後の授業が始まった。それ自体はいい、午後の授業が始まることは時の流れから必然といえることだ。だが、午後の授業はISの実習演習、つまり——

「ISスーツ似合っているから．．．」

めでたく笹原亜紗日はISスーツデビューを決めたというわけだ。体に張り付くように着用しているISスーツがさつきからうっとおしくて仕方がない。

「笹原さん、すごい肌キレイ．．．」

「ねえねえ、お肌の手入れってどうやってるの？教えてよ」

「太もも舐めていい？」

周りからの視線や言葉が心に突き刺さる。正直、ISスーツなど死んでも着たくなかった。だが、ほぼこの学園において最重要科目をサボるなどしたら間違いない目立つであろう。自身のプライドとの葛藤の結果、授業に参加することにしたわけだが、さすがに同じ更衣室を使うわけにはいかなないので保健室で着替えて参加している。まあ、そのとき瑠奈に見られて笑われたわけだが、今の状況に比べれば前菜

のようなものだ。

「っ……んっ……」

とにかくさつきから全身が圧迫されるような感覚がうっとおしくて仕方がない。まるで全身の血管が塞がれそうだ。簪はすぐに慣れるといっていたが、不快な感覚には変わりない。そして顔を下に向けたら胸元には二つの大きな膨らみ。

女子高校生にしてはいささか育ち気味な胸。それがなおさらに圧迫感を感じる要因となっている。

（お姉ちゃん、意外と胸が大きかったんだな……）

「や、やあ、笹原さん……」

すると特注の男性用のISスーツを着た一夏が声をかけてくる。

「さつきはごめんな、笹原さんがいるのに俺の連れが怒鳴っちゃまって」  
おそらくさつきの保健室の出来事を言っているのだろうか。そのことをこうしてわざわざ謝りに来るとは意外と几帳面な性格なのだろう。

「……別に気にせず。あの場にいるって決めたのは私だし」

「そ、そうか、ありがとう。あとISスーツ似合ってるぜ」

「どうも……」

似合っているといっても一夏の目線はチラチラと亜紗日の胸元に注がれている。本人はバレてないと思っているかもしれないが、正直丸わかりだ。

（人の胸をジロジロみるな、このスケベ野郎が……）

男の性であるがゆえに理解できなくもないが、それを許せるかどうかは別問題だ。好きでもない男に体を見られるのは気持ちのいいものではない。

「ほら、織斑先生がきたよ。整列しないと」

「え、あ、ああ……」

教員である千冬と真耶がきたことを知らせると、亜紗日と一夏は小走りで整列しに向かう。その時、走った拍子に胸が大きく揺れて一夏の視線を釘付けにする。女性の胸が大きいのはいいことはあっても悪いことではないと思っていたが、どうにも悩みどころとなる。これは



幸せな悩みなのだろうか。

「今日はISの格闘技術の演習を行う。各グループはISをハンガーから搬出しろ！」

準備運動後、千冬の指示と同時に実習演習グループに分かれて作業を開始する。その肝心のグループなのだが、そこには意外な人物が混ざっていた。

「あちゃひ〜」

気が抜けるような声と同時に一人の女子生徒が近づいてくる。眠そうな目にフラフラとおぼつかない足取り、その人物を亜紗日は知っている。

「よろしくね、本音ちゃん」

「ういつ、こちらこそだよ〜」

偶然にも同じグループの中には簪の(形式上は)従者の本音がいた。贅沢を言えば、簪が良かったのだが、彼女は専用気持ちということまでできない。そのため多少は心配していたが、心身共に鈍い本音と一緒にあれば多少ボロを出しても気が付かないであろう。これは嬉しい誤算だ。

「よろしくね、笹原さん」

「よろしく〜」

「よろしくね〜」

次々と同じグループのメンバーが集まってくる。ある程度の手順は知っているが、ここは転入生っぽくするためにカマトトぶるとしよう。

「それで、まずはどうしたらいいの？」

「最初はISが入っているハンガーを出すんだけど、重いんだよねえあれ」

「そうそう、しかもうちには本音がいるからさらに苦勞するし」

「もうひどいなあ！この本音ちゃんも頑張っているのにく」

そんな年相応の会話をしながらハンガーを出そうとするが、確かにISが収納されているだけあって重い。一応、全員の力を込めて少しずつは動いているが、本音がほとんど戦力になっていないのに加え、この年の非力な少女だけでは苦勞するだろう。

(仕方がない……っ！)

「お、動いた!!」

わずかに力を込め、ハンガーを引っ張る。そうするとさつきまでは微々たる速さでしか動かなかったハンガーのスピードがわずかに上がる。

「どこに置けばいいの？」

「グループごとに練習場所が分かれているから、私たちの場所に運ぶの。ほら、あそこー!」

指をさした場所にハンガーを運ぶと、パネルを弄ってIS『打鉄』を出現させる。正直、重機を使えばいいと思うのに、なぜわざわざこんな手間をかけさせるのだろうか。

「いやー笹原さん、すっごく力強いね。鍛えているの？」

「まあ……ストレッチはやっているかな……ははは……」

愛想笑いを浮かべながらちらりとさつき自分が握っていたバンカーの取っ手をみると、力をかけすぎてしまったからか少しひしゃげてしまっていた。やはり、今の状態で暮らしていくのは危険すぎる、なんとかしなくては。

「それじゃあ、運用演習からいこうかな。笹原さん、いける？」

「え、あつ、うん、大丈夫」

IS適正は低かったが、今の自分の肉体は女性だ。理論上はISを動かせるはずだが、どうなるか。四肢を固定され、教科書通りのやり方でISを起動させていく。

「接続よし、メイン電源も問題なし。いけるかな……」

緊張しながら電源スイッチを入れ、次々にシステムが立ち上がっていく。どうやらISは亜紗日を操縦者として認めているようだ。

(よし、問題はな——っ！)

次の瞬間、大きな反発と衝撃で意識を失いそうになる。外から攻撃されたわけではなく、体の内側から弾き飛ばされそうな感覚。その原因となる犯人が誰かはわかっている。今乗っているISだ、このISから発せられたものだ。

「悪い子だな、いい子にしろ……」

「笹原さん？どうしたの？」

「いや、ちよつと手順を間違えちゃって。すぐに直すから少し待って」  
吹き飛びそうな意識を堪え、できる限りの平常心を保って返答する。今乗っている乗機から感じるのはひたすら拒否の意志だ。お前を認めない、お前は相応しくない、おそらくこのISは本能的にたつた今知つたのだ、亜紗日が破壊者<sup>レットローレ</sup>であることを。

自分たちを滅ぼす可能性をもった存在であることを。

(大人しくしろ……今の主は僕だ！)

感覚を集中させ、この拒絶の根源を力づくで押さえつける。これは例えるならば暴れ馬を人間の力で強引に押さえつけるようなものだ。意思疎通や和解など縁遠く、力あるものが弱い者の上につくという単純な考え。

「くっ！……ふんっ……」

そのわずかな息遣いととも機体の抵抗は沈静化する。強引に押さえつけ、強制的に従属化させることができたが、少し押さえつけを緩めたら一気に反発してくる。

「それじゃあ、軽く歩いてみるね」

そういい、あぼつかない足取りで少しずつ歩いていく。そのまま一通りのトレーニングをこなすと、次の人へ搭乗を代わる。

「ふう……」

思わぬアクシデントがあつたが、なんとかISに乗ることができた。だが、適正は『C』どころではない、『E』判定ですら生ぬるいことがわかった。

「笹原さん、すつごくISに乗るの上手だね。どれくらい乗っているの？」

「そんなに上手だったかな？別にたくさん経験があるわけじゃないよ。数回乗ったことがあるぐらいだし」

適当な嘘をつき、地面に座り込む。不意打ちな出来事であったためか、意外と動揺してしまった部分がある。そんな気持ちを落ち着けるかのように呼吸を整える。I s 学園でI S から拒絶される、それは例えるならば猫カフェの店員が猫アレルギーであるようなものだろうか。

乗れないという最悪の事態は避けれたが、そこそこ面倒な事態となった。これも溜奈に報告しておこうと軽いため息を吐くのであった。

「それでは今日の主な課題である接近戦の模擬戦闘を行う。織斑、前へでてI S を展開しろ」

「はい」

名前を呼ばれた一夏が一步前へ、専用機「白式」を展開する。

「これから織斑と接近戦の演習を行ってもらおう。相手はそうだな・・・  
笹原、お前だ」

(マジか・・・)

千冬はさっきI S に乗った亜紗日の身に起こったことを知らない。I S というより、時間がなくて報告できなかったため知らない。千冬としては別に悪意があったわけではなく、ただ純粹にどのくらい動けるか見ておくというテストを兼ねたつもりなのだろう。

「織斑とお前のグループで使用した打鉄で軽い演習をしてもらおう。やれるな？」

「は、はい・・・」

これほどの大衆の前で拒否ができるはずもなく、一言返事で引き受けてしまう。そしてよりにもよって自分が使う機体はさっきやんちゃを起こしてくれたあの打鉄。もはや悪い予感しかしない。

「くっ……っ……っ……」

再び搭乗してみても案の定、先ほどと同じような感覚が襲い掛かってくる。それでも必死に堪え、模擬戦闘用の非殺傷ブレードを構える。

「今回は接近戦のイメージを見せることだ。飛行、武装の使用は禁止する。織斑、笹原は経験が浅い、あまり激しい攻撃は加えるな」

「はいー!」

大まかな説明を終え、二機のISは適度な距離を取って構える。

「いくぜ、笹原さん」

「ど、どうぞ……」

それと同時に白式が接近すると同時にブレードを振るう。手加減しているためか、動きは遅いものであったが、満身創痍な状態である亜紗日にとって対応するのは一苦勞であった。

「くっ!」

剣の軌道と自分の間にブレードを挟み込み、何とか防ぐ。だが、次々と出される攻撃に防御が間に合わない。それでも思った通りに動かない機体に鞭を打ち、剣筋をわずかに逸らしたり、弾いたりして防いでいく。だが、このまま続けてもジリ貧になることは明らかであった。

(ならばっ!)

一か八か勝負に出るために、渾身の力を込めて白式の剣筋を力強く弾いてわずかばかり後方にのけ反らせる。

「うわっ!」

さすがに予想外の力だったらしく、驚嘆の声とともにわずかに隙が生まれる。

(今しかないっ!)

その隙を逃さないとはかりに大きく足を踏み出し、ブレードを振るうがわずかばかりに攻撃に気を向けたのが悪手であった。

(っ!?)

この時を待っていたといわんばかりにISから放たれる拒絶反応が亜紗日の意識を大きくぐらつかせる。そのせいで全身が大きくふ

らついたせいで前に重心が傾き、そして――

「うわっ！」

「うっ！」

目の前の百式を押し倒すような形で二機のISが倒れる。大きな轟音と金属音が響き、周囲に土煙を舞い上げる。そして二機の機体は静かに沈黙するのであった。

「ううう……」

真っ暗となった視界の中、体全体に大きな圧迫感を感じる。

「どうなったんだ……」

なぜか頭が動かず、周りを見渡しても真っ暗な空間が広がっていくだけだ。いや、圧迫感の他に胸元に温かくて柔らかい感触を感じる。これの正体は分からない、だが、味わっているとなんだか安心するよ  
うな奇妙な感覚だ。

「あれは……」

すると、目の前の暗闇に美しい紅い二つの球体が浮かび上がる。この暗闇の中、なぜか美しく光り輝いており、その美しさは宝石や着色料などでは到底再現できないであろう輝きを発している。

「すげえ……」

歓喜、感動、だたそれしか出てこない。今まで見たことのない美しさが眼前にあった。それを手に取り触ろうとしてもなぜか体が動かない。それが悔しくて恨めしい、なぜ動かない、なぜ触れられない。その後悔とともにどんどんと輝きに魅了されていく。そして――  
「いつまで覆いかぶさっているつもりだ!!」

そんな聞き慣れた幼馴染の怒声とともに、ほのかな芳香剤の香りとともに、真っ白な髪とともに目の前に光が広がっていく。周りを見てみると自分を囲うクラスメイト達、だが、その表情はどこか赤い。

「えっ・えっ？」

状況が理解できない状態で前を見ると、専用機である『紅椿』とそ

れによって持ち上げられている亜紗日がのる打鉄がいた。

「大丈夫ですか織斑君？」

心配したように真耶が寄ってくるが、それでも状況が呑み込めなかった。

「な、なにがあつたんですか？」

「演習の途中で笹原さんの乗るISが織斑を押し倒したんです！それで……それで……」

そこまで行つたところで真耶の顔が赤くなり、言葉が途切れる。

「お、織斑君と笹原さんの体が合わせるように倒れて……はたからみると……その……」

自分と笹原の体が合わさつた。ということとは、あの輝きは彼女の目であつたということだろうか。だが、あんなに素晴らしい輝きを放つ目など聞いたことがない。ちらりと彼女の瞳を見てみても、その瞳はいつもに戻つており、いつも通りであつた。

「ごめんなさい、痛かつた？」

「あつ……いや……」

謎の余韻が抜けきらないまま、反射的な返事をしてしまう。だが、ひとまず生徒たちに接近戦の例を見せられたということだけでひとまず模擬戦は終了する。

「これから近接戦闘の演習をグループごとに開始する。細心の注意をはらつて開始しろ！」

千冬の指示とともに生徒たちはそれぞれの場所へ向かつていく。その中でひととき目立つ亜紗日の後姿を一夏は見つめていた。あの輝きが、先ほどの光景がどうしても忘れられない。そして、やがて少年の心には彼女に対しての奇妙な好奇心と興味が生まれてくる。

「笹原亜紗日、君は……何者なんだ……？」

その問いに答えられるものは存在せず、風にかき消されるだけであつた。

女になる。それは思春期以上の男性であったのならば誰もが望むことであろう。違う自分になりたい、違う人間関係を構築したい、邪なことをしたい。そんな全人類の男性の願望を自分は唯一叶えたわけだが、正直、女に慣れてよかったことなど一つもない。

トイレのやり方も面倒だし、スクールカーズに従わなければならない、ISの実習演習は面白くないし、まともに胡坐をかくこともできない。規則、制限が山積みで面倒にもほどがある。それでも苦行の時間はいつか終わるものだ。いや、抜け出せるといったほうがいいかもしれない。

「はあ……」

慣れない一日の終わりからの疲労からか、ため息を吐きながら放課後の寮の廊下を歩く。正直、今日の放課後ほど待ちわびたことはない。少なくとも寮の部屋に入れば周囲の目から逃れることができる、まさに聖域だ。

「……」

部屋につき、番号を確認して部屋に入る。一応、そこそこ早足で帰ったつもりなのだが、既に室内には同居者が先に帰っていた。

「お帰り、亜紗日ちゃん！」

「……」

部屋の中にあるベッドに寝っ転がり、ファッション雑誌を見ている水色の髪の少女。彼女を亜紗日は知っている、今日の昼間に会っていたのだから。

「早い帰りですね楯無さん」

「まあね、生徒会の仕事は今日はお休みしたので、あなたのためにね」

そういつて同居人出る楯無は微笑む。正直、同居人がこちらの都合を知っている彼女であることはとてもありがたい。一日中、女性の仕事などしたくないし、やってられない。そう、この部屋の中では自分は男でありたい、だが、彼女の服装はそれを意識しての行動であろうか。



「何ですか、その服装は……」

「いやん、そんなに見ないでエツチね」

寝っ転がっている彼女の服装は制服のワイシャツ一枚だけであった。スカートもいつも着ているカーデイガンも着ておらず、スラリと伸びた脚が、年不相応に大きく育った胸の谷間などが丸見えの状態だ。

「僕をからかっているんですか？」

「それもあるけど……これはこれからするレッスンのための服装よ」

「レッスン？」

「そうレッスン、あなたがこれから学園を過ごしていくための大切な勉強」

そう意味深な言葉を言うと同時に、ゴロリと寝返りをうち、うつ伏せの体勢となる。そのせいで綺麗な太ももお尻の膨らみが丸見えの状態だ。

「ねえ、雄星君。マッサージしてくれない？」

「え、マッサージ……ですか？」

「そう、マッサージ。最近ずっと座りっぱなしで体が凝っているの、ほら、早く早く」

戸惑う亜紗日……いや、雄星を急かすようにお尻をフリフリと振って催促してくる。その挑戦的な行為に照れ隠しつつ、ひとまずベットに上がり、太ももに指をあてる。

「とりあえず脚からやりますね」

「ええ、お姉さんをたくさん気持ちよくしてね？」

「……」

何とも言えない気分で適度な力を込めてマッサージを行うが……

「いたたたたつ!!力を入れすぎよ!!」

指に力を入れた瞬間、楯無が悲痛な声と同時に飛び起きる。その突然な行動に雄星もわずかに驚いてしまった。

「い、痛かったですか？」

「足つぽマッサージをするんじゃないんだから、筋肉をほぐすように

優しくしなさい！いたたた・・・」

「ご、ごめんなさい・・・」

しゅんと叱られた子供のようになり落ち込む雄星を見て、楯無も少し言い過ぎたかと反省する。そうだ、彼（彼女）は別に悪意があつて痛くしたわけではなく、純粹に自分の疲れを取ろうとしただけであるし、そもそもマツサージをねだつたのは自分の方であつた。

「別にいいのよ、元氣を出して。雄星君のために私も頑張るから」  
「は、はい・・・」

よしよしと頭を撫でて落ち込む彼を元氣づける。はたから見れば落ち込む妹を励ます姉のような光景だが、楯無からすれば弟を相手にしている気分だ。

「次はもつと力を落としてみましょう。そして少しずつ力を入れていくの」

楯無の体を使ったレッスンは続いていく。もう戻らないものもあるが、これまでの戦いによって負つた大きな傷跡は少しずつだが癒えつつある。それは楯無にとつて再びあの日常が戻りつつあることの証明であり、これから起こる大きな出来事の狼煙であることを誰も知らない。

—————

「♪～♪～」

上機嫌そうに鼻声を歌いながら寮の廊下をあるく。楽しみと興奮を抑えきれない子供のような、そんな感覚を感じながら一つの部屋の前へたどり着いた。瑠奈も生徒たちと同じように寮に泊まるわけだが、そこには当然ながら同居人がいる。そしてその相手は知っている、その人物こそは彼の目的であつたのだから。

「入るぞ」

数回のノック後に部屋に入る。部屋には備え付けられた二つの

ベッド、その片方のベットに怯えるような表情をしている眼鏡をかけた水色髪の少女――簪がいた。

「お、おかえり……」

「……どうした？」

まるで自分を委縮するかのようにその態度や感情はどこか細かい。まるで自分が恐れられているかのようだ。彼女――この簪という少女のことはよく知っている。雄星の中にいた時、毎日のように見ていたのだから。その時の彼女はもっと大胆で楽しそうな顔をしていたのだが、やはり未知の部分がある自分には恐怖を抱くのも無理はないか。

何とかして近づきたいが、ここで無理をして近づいても余計に警戒させてしまうだけだ。手にしていた荷物を放り投げ、着替えることなくベッドに横たわる。

「……」

「……」

そうして互いに言葉を発さずに過ぐすこと数十分。ふと簪が立ち上がると、瑠奈のもとへ向かってくる。

「……どうした？」

「その……ふく……」

「？」

何か言ったようだが、声が小さすぎて聞こえなかった。なんか「ふく」という言葉は聞こえたが、完全に委縮してしまった様子のせいでその先は聞こえなかった。

「ごめん、聞こえなかった。もう一度言ってくれるか？」

「ふ、服……シワができるとよくないから……」

「あー、すまない」

どうやら今着ている服を一緒に洗濯したくて声をかけていたようだ。正直、言ってくればすぐに出したのに、ここまで勇気を使われるとは思ってなかった。

「一緒に洗濯……しちやうから……」

「ありがとう、助かる」

洗濯ものを渡し、簪は洗濯機のある洗面台へ歩いていく。その小さくもかわいらしい後ろ姿を眺めながら、瑠奈——いや、破壊者<sup>レットローレ</sup>はペロリと唇をなめる。それはまさに目の前の獲物を見定めるような猛獣のような仕草であった。

(ど、どうしよう……)

稼働する洗濯機を見つめながら簪は試行を駆け巡らせていた。ひとまず洗濯を口実にあの場を離脱することができたが、どうやって彼と話すべきか。どうやって……というか、そもそも前はどんな調子で彼と話していただろうか。

やはり、見た目は同じだというのに、彼をどうしても違う存在として見てしまう自分がある。それがとても恨めしい。彼も——雄星という存在だというのに、どうしても差別し区別してしまうのだろうか。そんなことを考え込んでしまったがゆえに気が付けなかった、彼の存在を。

「簪」

「え、きやあ?」

突然、自分の名前を呼ばれることと同時に後ろから抱き着かれる。その正体は誰かは分かっている、この部屋には自分と彼しかないのだから。

「る、瑠奈、ど、どうしたの……?」

「今日一日のあいつの面倒を見てくれたことに加えて、洗濯してくれただことのお礼がしたくてね。マッサージをしてあげたいんだが、いいかな?」

「ま、マッサージ……? いいけど……」

お礼というのならば断る理由はない。ただ純粹な親切心、恩返し、そう考える簪だが、既に彼の——破壊者<sup>レットローレ</sup>の恐るべき計画が始まるうとして、まだ誰も気が付けずにいた。

「さあさあ、横になって。まずは背中から始めよう」

「うん……」

彼にすすめられるがままにベッドにうつ伏せとなり、横になる。その時の表情は不安半分、期待半分といったところだろうか。

「ゆっくりと力を込めていくから痛かったら言ってくれ」

「そういう、ゆっくりと両手の親指に力を込めて背中の筋肉をほぐしていく。」

「んんっ……あん……」

意外と力加減はできており、程よい快楽が全身を駆け巡っていく。

「意外と筋肉が凝っているね。エリート様は毎日が疲労の連続かな？」

「そう……かな……んんっ……」

放課後ということもあつてか、今日一日の疲れはピークに達している。そのせいか別にプロ級というわけではないが、簪を気遣ってでのそのマッサージは大きな安らぎをもたらしてくれた。

「次は脚をしよう」

「うん……」

気持ちよきのせいで意識が朦朧となった簪の反射的な許可を得て、次は脚のマッサージを行う。今、男子に太ももやふくらはぎを触られているわけだが、完全に呆けてしまっている簪は気が付かない。二次性徴を迎え、全身に肉付きが良くなり、脂肪と程よく鍛えられた筋肉のコラボレーション。正直、触っている側は口がにやけそうだ。

だが、今日のメインデッシュはこれではない。快楽とそれによって生み出される睡魔で少しずつ警戒心を解いていく。脚の筋肉をほぐし、足裏のツボについて疲労を取り、少しずつ全身を揉みしだく。

「んんっ……うんっ……すう……」

いつの間にか声は小さくなり、安らかな寝息が聞こえ始める。目は既に細まり、意識は完全に夢の中に落ちているであろう。だが、まだ

だ、まだ責めない。さらに追い打ちをして完全に意識を絶つ。

「……………」

さらにマッサージすること数十分。もはや簪は声を出すことなく、ただひたすら寝息を発するのみとなった。何度も確認し、完全に反応がなくなったことを確かめると、彼は隠していた毒牙をさらけ出す。ふくらはぎをマッサージしている両手を少しづつ上へ上げていく。そして――

「それじゃあ、ここのマッサージもしょうか」

「んっ……………」

簪の履いているスカートの中へ手を忍ばせ、かわいらしい肉付きをしている尻部を両手で鷲掴みにする。明らかにマッサージをするにはおかしい部分だが、完全に夢の世界に旅立っている簪は抵抗することなく、与えられる快楽に身を流している。

「いいお尻だね、安産型かな？たくさん子供が産めそうな形状と肉付きをしているね」

指に軽く力を入れて肉付きに沈む指先の感覚を楽しんだり、両手を軽く震わせてつられて振動する尻部の脂肪を味わったりと少しずつ行動はエスカレートしていく。

「やはり、見立ては間違っていないかったな。それじゃあ、メインデックスユというか」

軽くなでるとともに、両手で簪のお尻を大きく割り開く。手触りでの感覚だがわかる、この場所に彼女の排泄部分があると。興奮と喜びで笑い出しそうになるが、何とか口をかみしめて耐える。だが、どうしてもわずかに口角が上にあがってしまう。

「んっ……………あっ……………んっ……………」

まずはゆっくりと指を伸ばし、優しく彼女の尻の谷間を撫でる。そうすると生理反応だからかわずかに体が震える。次に少し指先をたてて排泄部分の粘膜と敏感な神経を少し刺激するように撫でる。

「あっ……………あ……………あん……………」

わずかな声が発せられ、起きてしまうかと思ったが、それでも簪は目を覚まさず、されるがままの状態だ。意識がなくても体は反応して

いるためか、簪の口角からはわずかに唾液が垂れており、シーツに黒いシミをつくる。

「よし、身体検査といこうか」

そして本日のメインデッシュが訪れる。指を簪の尻部の排泄部分に挿しこみ、少しずつ体内に侵入させていく。粘膜と程よい締まりが指に絡めていくと同時に、肉体の生理反応といわんばかりに周囲の筋肉が異物を体外へ押し出そうと動く。

「あっ……うっ……あん……はあっ……」

「素晴らしい反応だ。次は……っ!?!」

さらなる刺激的な反応を見ようと指を動かそうとした瞬間、部屋のドアから人の気配を感じる。瞬時に指を引き抜き、寝ている簪と距離を取る。そのわずか数秒後、部屋のインターホンが鳴り響く。

「ん……え……?」

インターホンの音に目を覚ました簪がベッドから体を起こす。おそらく数秒遅れていたら、先ほどの行為を知られていただろう。

「簪、お客のようだ。出るよ」

「あ、大丈夫。私が出る……」

寝ぼけているのか、少しふらつきながら簪が部屋のドアへ向かう。

「はい、誰ですか?……あっ」

わずかに部屋のドアを開けた瞬間、その隙間から白猫が侵入し、簪の足に体を絡める。

「かんちゃーん」

「ほ、本音……?」

尋ね者は簪の幼馴染である本音とサイカであった。どうやら預かっていた猫を返しに来てくれたようだ。

ニヤツニヤ……

「ごめんね、しばらく会えなくて……」

再開を喜ぶように足元ではしゃぐサイカを撫でながら本音と楽しそうに会話する。その光景はまさにどこにでもいる少女といった様子だ。

「……ぺろり」

そんな様子を眺めながら、彼は自身の指先に付着した粘り気のある透明な体液を舐めとる。

「……………っ……………」

「かんちゃん？どうかしたの？」

「あつ、な、何でもないから、大丈夫」

ふと、お尻から感じる違和感と渴きを感じながらも、平常心を保つて大切な幼馴染と話す。だが、表情はごまかせてもその体を誤魔化すことができるわけがなく、わずかに顔が赤くなる。だが、そんなことに気が付くこともなく、和やかな会話でこの放課後の時間は過ぎていくのであった。



「んんっ……」

窓から差し込む朝日の日差しを受けて目を覚める。人によっては憂鬱と感ずるかもしれない一日の始まりだが、ここにもう一つの朝日がいた。

「すう……すう……」

自分の胸元に顔をうずめて小さな寝息を立てている白髪の少女。彼女は昨日、学園に来たばかりの転入生ということになっているが、彼女のことはよく知っている。彼女は「……いや、彼は自分がずっと追い求めていた存在なのだから。」

「おはよう、雄星くん」

「えっ……あ、おはようございませう、刀奈さん」

朝の挨拶に目が覚めた彼女（彼）だが、今の状態を見て恥ずかしそうに顔を逸らす。今の状態は互いに抱き合うような体勢となり、胸に顔をうずめているあられもないものだ。

「ご、ごめんなさい、すぐに離れます」

「あら、大丈夫よ。まだ、時間があるからもう少しゆっくりしましょう？」

「そ、そうですか……。それでは失礼して……」

起こした体を再び横たわらせ、先ほどと同じように刀奈の胸に顔をうずめる。柔らかい感覚に温かい温度、その母性の象徴に安らぎを感じてしまう。

「にやむ……」

「ふふっ、すごい声ね」

無邪気に甘えてくる彼女（彼）に愛しさを感じながら、リラックスしている猫のように目を細める。肉体は女性となっても本能は変わらないらしく、素直で無邪気に甘えてくる。初めは容姿に戸惑いもしたが、こうして本心を知ってしまうとかわいいものだ。

例えるならば、オオカミに近い犬種であるハスキーが甘えん坊と知ったときだろうか。どんなに見た目が異質で怖くても、中身は無邪

気で甘えん坊で寂しがりやな少年。その素直な本心は刀奈という女性の母性本能を大いに刺激する。

「ほら、もつと甘えていいのよ？ 今日一日分のエネルギーをたくさん充電しなきゃね」

ゴソゴソと布団の中で動きながら、こうして朝は過ぎていく。今日一日も彼とこうして過ごすことができる。その真実は刀奈のなかで既に大きな希望となり、それは自分が頑張ることができる理由となっているのだった。

「ごちそうさまでした。洗い物は僕がやります」

「そう、ならばお願いしようかしら」

布団の中でのイチヤイチャタイムも終わり、朝食も済ませる。そして洗い物も済ませて制服を着るわけだが、これが今日で一番最初の試練となる。

「あれ．．．おかしいな．．．」

パジャマを脱ぎ、ブラジャーを付けるわけだが、なかなか背中のフックが引つかからない。慣れないということに加えて、背中という死角での出来事なのもあってコツが必要そうだ。

「ちよつとずれているわね。もう少し上に．．．ほらできた」

「ごめんなさい、面倒をかけて」

既に制服に着替えた刀奈に手伝ってもらい、下着とガーターベルトの着用は終了する。あとはワイシャツとスカート、ブレザーを着るだけだ。

「刀奈さんはもう出て大丈夫です。あとは一人でできます」

刀奈は生徒会長ということもあり、早めに出なくてはいけない。これ以上の面倒は彼女の遅刻を招く。

「じゃあ、あとはお願い。お昼にまた会いましょう！」

それだけ言い残すとバッグと大きな弁当箱を片手に部屋を出てい

く。あとは下着姿の雄星——いや、亜紗日のみ。

「着替えなきや……」

床に落ちているワイシャツに袖を通し、ボタンを閉めようとしたとき、部屋のチャイムが鳴り響く。

「刀奈さん……？忘れ物かな……」

そうつぶやくと、そのままの恰好でドアへ向かっていく。仮に違っていたとしても同性ならば大きな問題ではないだろう。覗き穴で相手が確かめることなく、ドアを開けるが、訪問相手は意外な人物であった。

「笹原さん、おはよ——うわあ!？」

「あつ」

ドアを開けた瞬間、大きな男の声が聞こえる。ドアの前にいた人物は世にも珍しい男子生徒であった。そしてその人物を亜紗日は知っている。

「なにか用？織斑君」

「そ、その……な、なんで下着姿なんだ!？」

亜紗日の質問に答える余裕はないらしく、必死に両手を使って自身の視界を遮っている。よく考えたら今の自分は下着に黒のガーターベルト、そしてその上にワイシャツを羽織っただけの姿であった。小さくはない胸と大人びた雰囲気醸し出す肉体は思春期の男子には刺激が強すぎるだろうか。

「今制服に着替えていたところだから。それで要件はなに？」

着替えてくるといふ選択肢はないのかといわんばかりに必死に顔を逸らし、目を覆い隠す。だが、それではいつまでたっても話は進まない。総意を振りしぼって、片手に持っていたランチボックスを突き付ける。

「こ、これ……」

「これは……お弁当?？」

「あ、ああ、昨日のお詫びも兼ねて、今日一緒に……その……昼食でもどうかかなと思って。笹原さんの分も作ってきてるから……」

「……………」

昼食ならば、既に刀奈が作ってくれている。そのため断ろうとしたが、ここで彼のご厚意を無下にしたら、それはそれで面倒な注目をされる気がする。考えること数秒、突き出されたランチボックスを受けとり

「ありがとう、ありがたく受け取らせてもらうね」

「ほ、本当か!? それじゃあ、また昼で会おうぜ」

軽くお礼を言うと、一夏は嬉しそうな表情を浮かべて走っていく。ふと時間をみると登校時間は既にすぐそこまで迫っていた。

「あとで刀奈さんに謝らないとな……………」

制服を着て、おかしな部分はないか念入りに鏡で確認して部屋を出ていく。そうして笹原 亜紗日としての一日は今日も始まっていくのであった。

—————

ミヤー、ニヤー

「サイカ、今は仕事 중이다。あっちへ行っていてくれ」

午前中の保健室でさきほどから足元をうろついている猫を作業机から少し離れた場所に置き、再び椅子に腰かける。そしてそのまま書類に目を通してしていると、コツコツとハイヒールが地面と接触している足音が聞こえてきた。その足音は少しずつ大きくなっていく。

コンコン

「溜奈、いるか?」

「残念、留守です」

そう答えたのにも関わらず、声の主である千冬が部屋の中に入ってくる。だが、彼女の表情はどこか不機嫌そうでご機嫌斜めな様子だ

「最近はあるたを怒らせてばかりだな。で、今回は何の御用?」

「私が文句あるのはあれだ」

千冬が指さす方向には窓――ではなく、窓越しで見える学園内のアリーナだ。そのアリーナの中心にたくさんの生徒に囲まれている機体があった。それは黄緑色と白のカラーリングをしており、まるでケンタウロスのようなフォルムをした珍しいものだ。一目見ただけでも人が乗るとは考えづらいだろう、それもそうだ、あの機体を操るのは人ではないのだから。

あの機体は前にとある件を解決するために使用したのだが、いかんせんその後処分することもできずに放置したままであった。それだけならまだしも物とサイズが大きいだけに倉庫へしまっておくこともできずに、広いアリーナに青空駐車していたのだが、あの機体があるせいで何時まで経ってもそのアリーナを使用することができないため何とかしてほしいと要望が来ていたのだが、それを無視し続けた結果がこれだ。

なんとも面倒な使いを出されて怒鳴られている。

「何回も通知は着ているはずだ、いい加減片付けろ」

「おもちゃをおもちや箱にしまおうスケールの話じゃないんだ。あのミスティックは元々衛星軌道上に待機させておいたんだ。それをもとの場所に戻すとすると打ち上げロケット――大型のHLVと国規模の打ち上げ施設が必要だ」

「どうしても無理か？」

「何度もそう言っているだろう。少なくとも今日、明日ではな」

よく考えれば自身のことを知られるのを嫌う彼がここまであの機体を隠そうとしないところを見ると、それは本当らしい。諦めに似た溜息を吐くと、近くのベツトに腰かける。

「……………」

「……………」

それから二人の会話は途切れ、床を走り回るサイカと時計の秒針の音だけが流れていく。そんな時間が少し経った頃、千冬が重そうに口を開いた。

「雄星」

「なに？」

「どうしてお前は戻ってき...てくれた？」

その問いにピタリとペンを持つ腕の動きが止まる。「どうして戻ってきた」ではなく「戻ってきてくれた」ということは拒絶されているというわけではないのだろう。

「お前は自分の力で過去の怨恨を断ち切り、自由を手にした。そのはずなのになんでわざわざ学園に戻り、地位や社会に縛られた生活をしたと思うた？」

「.....」

その問いに対して答えることなく、瑠奈は窓越しに外を眺めている。千冬はしては彼の身を案じて話しているというのに、彼はどこか他人事のようなそっけなさがある。いや、その口調からには不安や緊張も感じられた。

コンコン

「先生、います.....か.....?」

「そんな露骨に嫌な顔をするな、さすがに傷つく」

休み時間に遊ぶために保健室へ入ってきた簪だが、部屋の中に既に招かれざる客である千冬がいると分かった瞬間、表情が凍り付く。やはり、日頃威厳と恐怖の混じった対応をしているからか、簪の中で織斑千冬は苦手の立ち位置らしい。

千冬としては雄星... 亜紗日を見守る身として仲良くしたのだが、どうやらまだまだ時間がかかりそうだ。

「いや... その... 小倉先生に会いに、来たんですけど...」

「それくらいわかってる。私も既に要は済んだ。もう出ていくさ」  
今の自分は2人にとって邪魔者だということに自覚している千冬は簪の入室からほぼ入れ違いという形で部屋を出ていった。そんな気を使わしてしまったことに申し訳なさを感じつつ、備え付けのベツトに腰かける。

「よく来てくれたね。せっかくだし、またマッサージでもしようか？」

「あ、ありがとう。でも、質問したい... ことがあるんだけど... いい？」

「答えられる範囲でなら」

最近、彼女に何か疑いを向けられるようなことをしただろうか。そんなことを思いながら質問を持つが、なぜか簪は何も発さず、モジモジしているだけだ。

「簪、大丈夫？何か変だよ」

「えっ、そ、そうかな・・・？」

気のせいだろうか、なんだか顔も赤くなっているような気がする。それほどまでに言いづらいものなのだろうか。だが、黙っているだけでは何も進まない。それは、簪も同じらしく、少しずつ思い口を開く。「学園に、戻ってきたときのことを・・・覚えてる？旅館での話なんだけど・・・」

「ああ、もちろん」

「その時・・・あなたが言った、条件が・・・その・・・気になっ  
ていて・・・」

「あー」

そういえばそんなことを言っていた。学園に戻るための条件、それは自分をローリー破壊者ルットローレを簪と同じ部屋にするとという条件であった。理由を聞かれたが、一切答えることなく強引に彼女と同部屋にしたのだった。そのことが簪の中で気になっていたらしい。

そのことを本人に聞くなど、大きな勇気が必要だったであろう。だが、それは彼女が優秀であるということの一つの証拠であった。

「・・・いい、とても・・・」

「る、瑠奈・・・？」

ゆつくりと椅子を立ち、簪のもとへ歩み寄っていく。わずかな笑みを浮かべ、妖しくも艶やかな表情を浮かべ。

「簪」

「え、きやつー」

突如両肩を掴むと、そのままベッドに押し倒す。そこから間髪入れずに両靴を脱ぎ捨て、簪の腹部の上に膝立ちで立つ。

「るーーーゆ、雄星？」

当然の行動に怯え半分、驚き半分といった様子の震えた声で彼の名を呼ぶ。だが、その声に返答することなく、肩を掴んでいた両手で簪

の両頬を包み込み、顔を直視させる。垂れ下がった長い黒髪、だが、その髪の間隙からは紅い双眸が覗いている。

その美しい輝きに釘付けになり、まるで蛍光灯の灯りに集まる虫のように自我を忘れて見つめる。

「俺は肉体を手に入れた。自分の力で歩くことができ、言葉を話し、生きることができる肉体を」

口調からしたらまるで信者を諭す牧師のような無感情で不愛想なものだ。だが、今、簪を見つめている瞳からは大きな野望と願望を感じられた。そして薄々と感じ取る。その野望は、願望は自分を狂わす内容であると。

(ダメ……ダメ……)

耳を傾けてはいけない、これは禁断の囁きだ。そうわかっている。彼の声は脳内に響き、逃げ場を作らせない。

「こうして蘇生することができたのなら、俺は人として、生物としての幸福を手に入れたい。せつかく生きているんだ、俺が幸せになっちやいけないなんてことはないだろう？」

簪を見つめる顔はどんどん近づいていき、彼女の耳元に口を近づける。そして更識 簪という少女のこれからの運命を、未来を大きく変える言葉をいい放つ。わずかに息を吸い、小さく、だが確実に耳元で囁いた。

「俺の子供を産んでくれないか？更識 簪」

その言葉で簪の中の時は静止する。声が耳を通り、脳に届く。だと



いうのに、その意味をどうしても認識することができない。眼前には彼の顔があるというのに目は虚構を見つめ、その輪郭はぼやけ、全身に力が入らずに脱力する。

「……………んっ……………」

無抵抗な簪に悪魔の手が迫りくる。隙だらけとなった簪の胸元のボタンを解き、手を忍び込ませて胸を優しく掴む。大きくはないがその手には確かな膨らみと温もりが感じられる。

「喜べ、若くも素晴らしい想いを持つ人間よ。お前は这个世界でたった一人しかいない人類を超えた完全なる上位種であるこの破壊者<sup>ルットローレ</sup>の妻に選ばれた。お前の未来は俺と交わり、優秀な子孫を産む運命なんだ。くくく……………ははははは……………」

自らの野望に歓喜するように口からは笑い声が部屋に響く。だが、放心状態である今の簪にはそんなことが聞こえるはずもなく、虚ろな瞳で虚無を眺めるだけであった。

「笹原さん、昼食にしようぜ」

午前の授業が終わり、昼食の時間となった教室で数少ない男子生徒が話しかけてくる。その男子生徒の名前は織斑 一夏、クラスメイトである。

「そうだね」

先ほどの授業に使用した教科書を仕舞い、登校前に受け取った弁当箱を持って席を立つ。そしてちようど食事をとれる場所へ案内される。

「……他の人たちは？」

「ああ、皆は学食らしい。俺たちは俺たちで昼食を食べようぜ」

いつも引っ付き虫のようにくっついていてる面子だというのに、なぜ今回に限って別々になったのだろうか。まあいい、騒がしいよりはマシだ。正座し、今朝受け取った弁当箱を開ける。内容は白米に色とりどりのおかずが入っている。

「織斑くん、料理ができるんだ」

「ああ、家だと俺しか料理する人間がないから。一時期は知り合いの店で食べるときもあったんだけど、結局は自炊するようになったんだ」

「へえ……」

知らなかったが、心底どうでもいいことに適当に返事を返す。亜紗日としては一夏の過去などに興味はないのだが、そんなことはお構いなしにペラペラと喋ってくる。

「笹原さんはもう学園には慣れたか？」

「まだ来て二日目だからね。もうすこし時間がかかるかも」

「もしわからないことがあったら遠慮なく聞いてくれ。力になるぜ」

「そう、ありがとう」

織斑 一夏、彼は優しい。だが、その優しさは悲しいことに万人受けするようなものではなく、他人の中にズカズカ入り込んでくるようなものだ。それに対して不快感を示すものもいるだろう。少なく

とも彼は嫌いそうだな。

「笹原さん、ISを動かしてどのくらいなんだ？」

ふと、食事中にそんな会話を投げかけられる。一夏本人としては特に他意はなく、亜紗日という少女をさらに知りたいという好奇心からでた質問なのだろうか。

「そんなに動かしたことはないね。その未熟さゆえに、昨日のような事故が起こっちゃったわけだし」

「それなら、俺たちと一緒に今日の放課後ISの練習しないか？皆で協力すればすぐに上達するさ」

「申し訳ないけど、今日の放課後には先客がいるの。気持ちは嬉しいけど、ごめんなさい、無理ね」

「い、いつなら一緒に練習できるかな!？」

「・・・なんでそんなに私の練習に付き合いたいなの？」

そんなに練習したいのか、身を乗り出してグイグイと迫ってくる。ここまで亜紗日の練習に同行したいとなると、何か他に他意があるのではないかと疑ってしまう。

「私のことを心配してくれるのは嬉しい。だけど、織斑くんも織斑くんのやるべきことがあるんじゃないの？」

「そ、それはそうだけど・・・」

論すような口調で言われて頭を冷静にして考える。まるで彼女の教師になるような口調だが、一夏本人も別にそこまで優秀というわけではなく、むしろ教えられる側だ。同じ教師役ならば、優秀で教え上手なシャルロットの方が適任かもしれない。

「ご、ごめん、こんながつつくようなことをして・・・」

「そんなことないよ。転入生である私にこんなに親切にしてくれてありがとう」

「っ・・・」

ニコリとまるで天使のような笑顔。その笑顔に不意に一夏の心臓の鼓動が高まり、顔が若干赤くなる。

「ほら、早く食べちゃおう織斑くん。もうすぐお昼休みが終わるよ」

「そうだな。あ、あと、俺のことは織斑くんじゃなくて一夏って呼んで

くれ」

「……いいの？」

「ほら、担任も織斑っていうだろ。まあ、俺の姉なんだけど……や  
やこしいから一夏って呼んでくれ」

「じゃあ、お言葉に甘えて一夏くんって呼ばせてもらうね」

会話だけ見たらごく普通の学生の会話であろう。ということは少  
なくとも今の自分はこの学園の生徒、笹原 亜紗日として暮らしてい  
けているのだろうか。

「ごちそうさま、とてもおいしかったよ」

「ああ、良ければまた弁当をつくってもいいかな？もっと俺の弁当を  
食べてほしいんだ」

「本当？ならば、またお願いしようかしら」

空となった弁当箱を返して、亜紗日は「歯磨きをしてくるね」といっ  
て教室を出ていく。そして残された一夏は人知れず、大きな満足感を  
得ながら手元の弁当箱を見つめるのであった。

「ねえ、君はここにいる生徒と仲良くする気はある？」  
「全くないな」

放課後、保健室のベッドに寝っ転がりながら彼に不意にそんな質問  
を投げかけるが、返答はとても冷徹なものであった。

「俺と人間……この生徒は水と油だ。混ざり合うことはなく、分  
かり合うこともない。ならば、互いが最適な距離を取るべきだ。それ  
だったら誰も傷つかないし、傷つけない」

「僕と一緒にこの学園に戻ってきてくれると聞いたときは人間にすり  
寄ってくれるかと思ったんだけど……気のせいだったかな？」

「お前のために学園に来る？己惚れるな、お前のために好きでもない  
種族の中に飛び込んで、暮らすほど今のお前に価値はない」

「ひどいこというなあ、じゃあなんで君は学園に戻ってきたの?」

「最高の人間が見つかったからだ」

「さつきと言っていること矛盾してない?」

さりげないツツコミをいれると、自分と並んで横になっているサイカの顎下を撫でる。少し、時間が空いてしまったが、相変わらずこの愛猫は初対面の者でも人見知りすることなくそのあざとい可愛らしさで今日も周囲の人間を夢中にする。

「なんでお前は人間に好かれるのに、僕たちは好かれないんだろうな……」

指先で顎下を撫でると、気持ちいいのか目を細めて喉をゴロゴロと鳴らして寝返りをうつ。まあ、猫に人間の悩みを持ち込むなどナンセンスであろう。

「そういえばお前の機体はどうする? 一応、この学園のアーリーナであれば降下ポイントとして使えるが」

「そんなんことしたら降下の衝撃でアーリーナが吹き飛ばじやないか。そうなったら千冬が大激怒するよ。今は待機状態でいい、必要になったらエストを通じて動かす」

「なんだよつまんねえな」

ぼそりと本音を呟くと同時にちようど今日一日分の仕事を終える。軽く内容を確認するが、書類にミスや間違いはなく、きちんと仕事をできている。

「仕事には慣れた?」

「一応は。お前はそれの体での学園生活には慣れたか?」

「その質問がされるのは二回目だね」

かみ合っていそうでかみ合っていない会話の繰り返し。そうしていると、目の前で眠っていたサイカが喧しそうに目を覚まして鳴く。

「悪かったよ、静かにするよ」

再びサイカを寝かしつけ、自身も目を瞑る。慣れない環境だが、少しずつ馴染めている。そう感じてはいるのだが、残酷なこの時間がそんなことを大きな波乱が始まろうとしていた。

「し、失礼いたしますわ」

数回のノックの後に一人のロール状の髪型をした女子生徒が入室してくる。その人物は瑠奈と亜紗日は知っている。

「何か体調が悪いのかな、セシリア」

その生徒はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生にして、亜紗日のクラスメイトである。一応、前までは戦友として戦っていた時期もあったが、今はただのクラスメイトという関係にまでなり下がった。

「どこか体に不調が？それとも悩み相談？」

「い、いえ、そのようなご用件はありません……きよ、今日は一つお誘いをするためにお伺いをしたのですが……」

チラチラとセシリアは亜紗日を見る。どうやら、そこそこ重要な要件のようで今ここにいられては邪魔らしい。数回顔を軽く振ると、サイカを抱っこして亜紗日は部屋を出ていく。そして部屋に残されたのは瑠奈とセシリアのみ。

「で、そのお誘いというのは？」

「ら、来週の日曜日にご予定はございますでしょうか？もうなければ……私と……ここに……」

後半はほぼ聞き取れないほどの音量になりながら、ポケットから二枚のチケットを取り出す。それは都内にある大きな遊園地のペアチケットであった。

「なんで私なんだ？ほかにも誘う人間はいるはずだ。私でなくてはいけない理由はないはずだが」

「それはそうなのですが……」

少し、威圧のある口調で言い過ぎたせいか、セシリアの視線がきよろきよろと動き、落ち着きがなくなる。別に瑠奈としては問い詰めているつもりはなく、少し会話をしているだけの話のだが、すこし攻撃的過ぎただろうか。

「ら、来週の日曜日は、わたくしの誕生日なのです！せめて、誕生日ぐらいは、その、愛しの人と……形だけでもよろしいのでわたくしと過ごしていただけないでしょうか！」

後半はいろいろと吹っ切れたのか、ほぼ叫ぶような口調で話す。来

週の日曜日というと、ちょうどクリスマススイブであった。幸いなことにカレンダーには予定はない。

「……………」

正直、彼女のしぶとさには心底呆れる。あれほどの目に遭い、拒絶されたというのにまだこの少年に縋りつき、自身の安堵を求めている。その諦めの悪さとしつこさには逆に感服する。ここでそのことを言っ、差し出されたチケットをはたき落とせば無事完全に失恋となるであろう。立ち上がると、緊張した様子のセシリアに近づき、差し出されているチケットを――

「わかった、来週の日曜日の予定は空けておく」

片方のチケットを受け取り、ポケットに入れる。その反応は張本人であるセシリアですらも予想外だったらしく、驚いたような表情を浮かべている。

「よ、よろしいのですか……………」

「誘ってきたのはそっちだろう。幸いなことにその日に予定はない。まあ、こうして再び会えたのも何かの縁だ、付き合うよ」

「あ、ありがとうございます、瑠奈さん!!」

心底嬉しそうな声と表情を浮かべてセシリアは部屋を出ていく。そしてその入れ替わるようにしてサイカを抱っこした亜紗日が入ってきた。

「……………何を考えているんだい?」

「わざわざ誕生日に苦い体験をすることもないだろう」

「……………また変な期待をさせることになるよ?」

「勝手に期待して、勝手に失望する。それが人間の愚かしく、身勝手な部分の一つだな」

正直、亜紗日としてはそのデートに対して不安しかない。彼は戦闘技術は超一流だが、それに対しての人間社会に対して多くの部分が抜け落ちてしまっている。そもそも生まれて――肉体を得てまだ十日余り、おまけにその十日間は人里離れた山中での世捨て生活。

そんな状態で付き合いいーデートなどできるのだろうか。

「亜紗日、一つ質問がある」

「なに？」

「遊園地ってなんだ？」

「.....」

めでたいことにさっそく不安の種が一つ増えた。これは亜紗日も動かなくてはいけない事態になるかもしれない。なぜ、他者のデートに自分が動かなくてはならないのか疑問だが、このままにはいけないだろう。

—————

晴れた日の休日というのはとても爽やかな気分になる。だが、今は冬であるがゆえに外にでるのが嫌になる者もいるであろう。亜紗日としては別に外が嫌いというわけではないのだが、今はこのような状態であるがゆえに、不用心に外に出歩くという事態はできるだけ避けたい。

「.....」

それは重々承知しているのだが、今日はどうしても外出しなくてはいけない要件がある。それはこうして物陰から除いている存在であった。

「あ、瑠奈さん、こちらですわー！」

さつきから度々男性の視線を釘付けにしているおしやれをした金髪の少女が元気そうに声を上げる。今、いるのは休日の人々がごったがえしの状態である都内の大きな遊園地。休日に遊園地へ行くというのも別に悪くないが、残念なことに今日の目的は遊ぶことではなく、目の前に現れた要注意人物の監視だ。



「ごめんセシリア、少し遅れた。なかなか仕事が片付かなくて」

「遅れたといってもたったの一分ではないですか。それよりも早く参りましょう」

金髪の少女――セシリアと肩を並べて歩き出す一人の少年。その外見はとても見慣れているものだ、つい昨日も見たものなのだから。

「よし、おかしいことはないな」

掴みだしは大丈夫なことを確認し、二人は園内へ入っていくところを見届けると安堵のため息を吐く。だが、こちらもちらで問題があった。

「簪ちゃんっ!? 簪ちゃんっ!?」

「あう……ふあ……」

さっきから自分の後ろで勝手に騒いでいる姉妹――馬の空といった様子の簪を楯無が活気づけている。

「簪はどうですか?」

「ダメ、今日も頬けてて……どうしたのよ……」

最近、簪はずっとこんな調子だ。何事にも集中できず、焦点が合っていない瞳で虚無を見つめている。初めは何かの精神病かと思っ  
て検査をしてみても異常はなし、カウンセリングをしようとしてもそもそもカウンセラーの言葉に対して反応がない。

正直、こんな状態の簪を連れてきたくはないのだが、目を離すと逆に何をしでかすかわからずに不安なのだ。そのため、あえて足手まといになるとはわかっていてもこうして連れてきている。

「……というか、楯無さん、あなたが寮で簪を見張っていればよいのでは?」

「嫌よ。セシリアちゃんと破壊者ルットローレのデートなんて見逃せるわけないじゃない。それに非常時に備えて人手は多いほうがいいんじゃない?」

最もらしいことをいっているが結局は彼女は放心状態の簪を連れてまで、あの二人のデートを見たいというだけだろう。

「尾行する気があるのならば、もう少し静かにしてください。このま

まじや目立ちすぎます」

「あら、あなたも人の事言えないんじゃない？」

今の亜紗日の服装は白のセーターにウールでできた白の帽子という見事に白に統一されたものだ。その眩しいまでの純白は大衆の中ではいささか目立ちすぎる。

「一応、違和感がないようにしたんですが……失敗だったか……」  
「まあ、物陰から除いていくのならばなんとかなるんじゃないかしら。ほら、二人が入園したわ、私たちも行きましょう」

その掛け声を聞くと同時に、亜紗日は懐からサングラスをかけて歩く。正直、そのせいで見かけだけいえばハリウッド俳優のようで、さらに目立つこととなるのだが、とても似合っていたのであえて声はかけないでおく。

「エスト、簪から目を……って、今はいないんだった」

遠目で注意深くデート中の二人を見ながら、亜紗日、楯無、そして放心状態の簪は入園していく。正直、こんなことになるのだったら一体化しているときに、人間のマナーや常識を教育しておくべきだったと後悔するが、既に遅い。一時も目を離せない色々な意味でドキドキのデートは開始したのであった。

「きゃっ……」

入園早々、セシリアの口から可愛らしい小さな悲鳴が飛び出る。その原因はセシリアの右手にあった。袖から出る白くて美しい彼女の手、その手を瑠奈の手が握っている。

「……不快だったかな？」

「い、いえ、そんなことは……」

慣れない異性との接触到に落ち着かない様子だが、こうして手をつなぐことができたのは素直に嬉しい。

「まずは……あれに乗りたくないな」

手元のパンフレットを見ながら、一つのアトラクションを見る。大きな円盤のようなものの上に、馬や馬車などの様々な乗り物が吊るされている。

「メリーゴーランドですか、なかなかおしゃれですね」

「気に入ってくれて嬉しいな。ほら、早く早く」

手を引き、まるで子供のような無邪気な動作をしてセシリアをメリーゴーランドへ誘う。なんだか新鮮な気分だ、彼とは同じ年なはずなのになんだか年下の男の子を相手にしているような気持ちになる。

「よいしょつと……」

馬の造形をした乗り物の背にセシリアを乗せ、瑠奈もその後ろに乗る。そのおかげでセシリアの後ろ姿が見えてしまい、彼女の綺麗な髪が見える。ウィッグや染髪などでは再現できない生まれながらの鮮やかな色。

「……」

ふと指先で彼女の金髪を撫でる。美しい、ただその一言に尽きる感触だった。きちんと手入れされているからか、枝毛一つない髪の毛、その光景に魅了されそうだ。

「瑠奈さん、始まりますわよ？」

セシリアの声の後に開始のアラームが鳴り、アトラクションが動き始める。少しずつスピードは増していき、やがて最高速度となる。

「わぁ……」

当たってくる風が気持ちよくてセシリアの口からそんな声が漏れる。幼いころ抱いていた子供の遊び心がこみ上げてきたというものもあるが、後ろで自分の背中を覆うようにしている彼の存在。それがとても嬉しい。そんな子供心を抱いているからだろうか、後ろにいた彼に無邪気な悪戯心が忍び寄る。

「きゃっ!？」

後ろから両手が伸びてくると同時にセシリアの胴体をがっしりと抱きしめる。

「る、溜奈さん……?？」

「セシリア、しっかりと掴まっていないと危ないぞ」

口ではそういうが、明らかに口調には堪えきれない笑みが含まれている。彼が何をしようとしているのか感づいたときにはもう遅い。両手をセシリアの脇の下に添え、そして――

コシヨコシヨコシヨ

「ちよっ、溜奈さん、ふふっ、うふふふふっ! あははははっ!」

両手でセシリアの胴体をくすぐっていく。前に座っているせいでセシリアは抵抗らしい抵抗ができず、ただただ必死に体をよじらせて溜奈のくすぐりを耐えている。

「君が無防備な姿を見せるのが悪いんだ。ほら、ここがいいのかな?」  
「る、溜奈さん、そ、そこは……あははは!」

貴族だというのに大きな声を上げて笑い声を出してしまう。はたから見たらカップルのじゃれ合いのように微笑ましい光景のように見え、周囲の者たちを笑顔にしている。そうしている間にも溜奈のくすぐり攻撃は続いていく、結局溜奈の攻撃は止むことなく、アトラクション中はセシリアの貴族らしかぬ可愛らしい笑い声が響いていくのであった。

――

「もおっ！もおっ！もおっ！」

「牛のものまね？上手だな」

「もおおお！！」

メリーゴーランドを降りてからというものの、セシリアの照れ隠しの混じった声が響く。おかげさまでアトラクション中、セシリアはくすぐり攻撃によって笑い声を出す羽目になり、周囲からは注目の的であった。的になったといっても「仲がいいカップルだなあ」と笑われる程度であったが、それをセシリアは恥ずかしいと思っているらしい。

「瑠奈さんがくすぐるから、た、たくさんの人に見られてしまいました！とても恥ずかしかったですわよ！」

「別に恥ずかしかっただけで、恥をかいたわけじゃないからいいじゃないか。ここは遊園地だ、たくさん笑わなくちゃな」

顔を真っ赤にして怒りを露わにしているセシリアだが、手は依然繋がられたままであるところを見ると、本心から嫌がっているわけではなさそうだ。

「とにかくっ！あのような悪戯は事前にお声をお掛けしてから行ってくださいまし！いいですわね！」

「わかった、わかった」

悪戯されることは否定しないのかと心底思いながら、園内を歩いていると設置されたステージの前で大勢の親子連れが集まっている。

「セシリア、次はあそこに行こう！」

「はいー」

興味と好奇心で近づき、パンフレットを受け取ると設置された席に座る。

「これは・・・なんだ・・・？」

「えーっと、これはヒーローショーというものらしいですわね」

ヒーローショー、その単語の意味は事前に亜紗日から聞いている。

なにやら着ぐるみをきた人間がステージの前で劇をするというものであったはずだ。それを思い返してみると、ステージ開始の合図が鳴り、妙な着ぐるみをきた複数の怪人らしき人物が登場してくる。

「さて、今日の獲物はどの子かなあ・・・クッククック・・・」

いかにも悪役らしいセリフを吐きながら客席を吟味する。どうやらこのショーは観客参加型らしく、こんどは客席側に降りてきた。このようなショーとしてはできるだけ遠くの客にもわかるように目立つ人物を抽選するのが暗黙のルールとなっている。だからであろうか、よりにもよって最悪の人物と対面してしまう。

「そこのお前っ！」

偶然、近くを通り過ぎた怪人が声をあげる。声の先には白のセーターに白のウールの帽子といった全身眩いばかりの白の服装をしている人物であった。十分目立つ服装だし、見た目も悪くない。許可を得ようと顔を覗き込むが、その人物の目を見た瞬間、全身が凍る。

「あゝっ？」

まるで悪魔のような凶悪な目つきをした少女がこちらを睨みつけていた。その目からは到底人間とは思えないほどの殺意と敵意があふれており、恐怖により相手を恐縮させるには十分すぎるほどの威圧であった。運悪いことに声をかけた人物は溜奈<sup>レット</sup>リー<sup>レ</sup>破壊者とセシリアを尾行していた亜紗日であった。

ここで声がかかり、ステージ上に上がったのならばまず間違いなく二人にバレる。そのため、ここで声がかかり、ステージ上に上がるのだけは避けたい。

「なんだお前？」

「いや、その・・・あの・・・」

声をかけてしまった以上、何か言わなくてはいけないのは分かっている。しかし、恐怖で委縮しているせいで喉から声が出ず、言葉にならない断片が出るだけであった。

「おい、お前こっちにいー！」

そこで運が良いことに別の怪人が客席から選別が行われた様子であり、別の人物がステージ上へ上がっていく。

「いや、えつと・・・、ごめんなさい！」

大きく頭を下げると、その怪人はステージ上へ戻っていく。ひとまず一難去ったことを確認すると、隣の楯無が苦笑いを浮かべる。

「運が悪かったわね、あなたもあの人も」

「運なんていう不確定なものを信じたくはないですね。それに残念なことに今日は厄日のようです」

「それはどういう・・・あっ」

指さす先にはさらに運が悪いことに悪の怪人にさらわれてしまったセシリアがいた。見た目からして悲劇のヒロインのような光景だが、さらに悪いことにゲストとして呼ばれたからか、対面には瑠奈がいる。

「お前の恋人は我々が預かったっ！返してほしければ我々の同士となるがいい！」

「・・・・・・・・」

いかにも典型的なセリフを吐く怪人に対して言葉を考えること数秒、ビシツと指をさし瑠奈が大きな声で叫ぶ。

「彼女は私と将来を誓い合った大切な人だ！彼女のためにも絶対にお前たちには屈しない！」

捻りやセンスもない言葉だが、まるで恋愛ドラマのような果敢さと勇猛さがあり、観客たちが熱っぽい息を吐く。だが、一番感動しているのは意外なことに人質となっていているセシリアであった。

（瑠奈さん、わたくしを大切な人と・・・）

演技や台本だったかもしれないが、瑠奈が自分を大切な人と言ってくれた事実は、セシリアの胸の中に大きな余韻を残す。できる限り、それが表に出ないように努力はしたが、ひよっとすると口元が緩んでしまっているかもしれない。

「ふはははっ、ならば我々を倒して取り戻してみろ！」

「いわれなくてもっ！」

当然ながらこれはショーということとは互い重々承知だ。そのため、相手の急所を避け、転倒させるときも内蔵などがある胴体や背中を避け、足元から転倒させてダメージを最小限に抑える。そしてふと脳裏

をよぎる、自分は破壊者<sup>ルットローレ</sup>。

文字通り全てを破壊し、人間に大いなる厄災をもたらす存在。そのはずなのに、なぜ自分は今大勢の前で見世物をしている、なぜ人間の道楽などに付き合っている、そしてなぜこんなにも楽しいと思っっているのだろうか。

――

時というものは必ず過ぎ去るものである。どんなに楽しい時間も、苦しい時間もいつかは終わる。それが時間というものであり、この世の法則だ。

「セシリア、もう少しこっちに来てくれるか？」

「は、はい・・・それでは失礼して・・・」

夜景が見える大きな観覧車の中、一組の男女が身を寄せ合っている。正直今日一日はデートと言うより、瑠奈の遊びにセシリアが付き合ったような形であった。初めての遊園地に好奇心旺盛な彼はあちらこちらとセシリアを連れて様々なアトラクションを乗り回す。

だが、これは瑠奈がセシリアをリードしているということでもあり、彼の無邪気な表情と時々される悪戯が楽しくなかったといえましょう。いや、今日一日はとても楽しかった、そう一日胸を張って言うことができる。再び子供に・・・いや、童心に戻ったようなとても楽しい時間であった。

だからこそ、こう考えてしまう。この時間が、今日という日がずっと続けばいいのにと。

「スンスン・・・セシリアはいい匂いがするな」

「そ、そうですか？うふふつ、嬉しいです」

「ああ、とても好きな匂いだ。香水・・・それともシャンプーかな、い



や、生まれもつての体臭という可能性もある」

「ちよつ、か、嗅ぎすぎです！ 恥ずかしいではないですか！……きやつ！」

首元やうなじに鼻を当てて、犬のように香りを満喫する瑠奈を笑いながら静止させようとするが、そこで不意にバランスを崩し、セシリアを瑠奈が押し倒してしまふ体勢になる。

「すまない、少し調子に乗りすぎた」

「いえ、よろしければ……その、も、もう少し味わってもかまいませんよ？」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

彼女の着ている高級そうなコートのボタンをはずし、胸元、肩、腹部に鼻を走らせて香りを味わっていく。異性が……想い人が自分の体臭を嗅がれているこの状況がとても恥ずかしいが、彼が……瑠奈が自身の魅力の溺れていることがとても嬉しい。

(瑠奈さん……)

頭を撫でて大きな幸福感と充実感を感じる。すると、一通り香りを満喫した瑠奈がセシリアの体から頭部を離し、セシリアの目を見つめ、首筋を優しくなでる。

「んっ……」

くすぐったいようなむず痒い刺激に襲われ、口からかすかに声が漏れる。

「セシリア」

「な、なんででしょうか？」

「僕がこれから君をホテルに連れ込むっていったらどうする？」

「そ、それは……」

あまりにも刺激的で突然すぎる質問に頭がふらつき、心臓の鼓動が高鳴る。つまり彼は自分と肉体関係を持ちたいといっているのだろうか。想い人であり、憧れの存在、そんな彼が自分を必要としてくれている。それがとても嬉しい。

「そ、その……瑠奈さんがよろしければ……わ、わたくしは、その……」

恥ずかしながらも、必死に自分の胸の内を口にしようと努力する。「あなたが自分のそばに居てくれるのならば、この心も身体も捧げる」。ただそれだけのストリートな内容の言葉が羞恥と鼓動の高鳴りのせいではなかなか出てくれない。

「わ、わたくしは――」

『お客様にお知らせいたします。まもなく、閉園のお時間となります。お忘れ物をなさらないようご注意ください』

そこまで言いかけたところで園全体に閉園を告げるアナウンスが流れる。時間を見たらもうすぐ夜の九時になろうとしており、下を見ると、他の客もそろそろと帰ろうと出口へ向かっていた。

「……」

そのアナウンスを聞くと瑠奈はセシリアの体を起こし、開けられたコートのボタンを閉める。そしてポンポンと埃や汚れをはたくと、セシリアに向かい向かい合う形にして座る。

「悪いが、時間切れだ。遊びの時間はここまでのようだ」

「え、な、なにを言っているのですか!？」

「忘れたのか？今日はもうすぐ君の誕生日であることに對しての祝いの疑似デートだったはずだ。それが終わった以上、これ以上君と恋人を演じるつもりはない」

そういえばそうであった。今日はもうすぐ自分が誕生日であることを祝して、一日だけ恋人になってほしいという自分の願いでここに来たのだが、今日一日があまりにも楽しすぎてセシリアは忘れてしまっていたのだ。しかし、彼は覚えている、あくまで相手はクラスメイトであり、恋人ではないということをお忘れずに今日一日自分と過ごしたのだから。

「っ……」

ふと見てみれば今日一日ずっと繋がれていた手がほどかれており、セシリアをみる彼の目も冷たくて冷酷なものへと変わっている。

「ま、まっってください！もう少し……もう少しだけお願いしますー！」「申し訳ないがこれ以上君と恋人ごっこに興じるつもりはない。すまないがお断りだ」

セシリアの脳内をよぎるのは今日一日一緒に過ごした子供っぽくて無邪気な彼の姿。だが、目の前にいる彼は姿形は一緒でも、態度、口調からはそんなことは何の片鱗も感じられない。突如、訪れた終焉の時。それが大きくセシリアの心を傷つける。

「そんな・・・先ほどのわたくしをホテルへお連れするというお約束はどうなるのですか!？」

「は？なんで恋人でもない君をホテルへ連れ込まなければならぬんだ？恋人だったのは一分前の話だろうに」

夢のように幸せな時間から一変し、残酷で冷徹な現実へ。そのあまりにも突然すぎる終焉に混乱しながらも、縋るように彼に手を伸ばす。今日一日ずっと手をつないでいたせいでまだほんのりと彼の温もりが残っている白く、美しいセシリアの手。

「っ！」

パチンツッ!

その手を瑠奈ははたき落とし、もう話すことはないといわんばかりに座席へ座り込み、外の夜景を眺める。

「うつ、うつ、グスツ・・・うつう・・・」

それから先、二人の間には会話はなく、ただただセシリアの泣き声が響くだけであった。他者から見れば彼をひどいというものもいるかもしれない。だが、それ以上に彼にはセシリアの心情が理解できない。

今日一日の疑似デートを申し込んできたのは彼女だ。この遊園地へ誘ったのも彼女だし、小倉瑠奈という相手を選んだのも彼女であったはずだ。そしてその願望は見事叶い、今日一日は充実した日となったはずだ。なのになぜ彼女は泣いているのだろうか。

後悔、絶望、悲観、悲劇、それが彼女の心境なのかもしれない。だが、それを自分は理解できない。その感情は、感覚は、心境は人間だけが持つことを許されたものなのだから。

閉園最後の観覧車を降り、二人は静かに出入口へ歩いていく。相変わらず二人の間には会話はなく、前を歩く瑠奈の後ろを泣いたせいで目が赤くなつたセシリアが付いていく。

「……………」

こうして彼と一緒に歩いていると、否が応でも今日一日の思い出が蘇ってくる。元気そうな少年の表情を浮かべて自分の手を引いて連れまわす彼の姿。だが、夢は夢のまままで終わり、こうして現実へ戻ってくる。

「あ、あのっ！」

だが、最後にセシリアは渾身の勇気を振り絞って声をかける。このままこの遊園地を出てしまふ前に、完全にこの夢から覚めてしまふ前にこれだけは聞いておきたいことがあつた。

「瑠奈さんは……今日一日、わたくしと一緒にいて楽しかったですか？」

「……………」

その問いに対して瑠奈は何も答えない。脆く、今にも壊れそうなセシリアのその心を見透かすように綺麗な目を見つめているだけであつた。だが、仮初だつたとしても今日を恋人として過ごした彼女には今の自分の心境を知る権利があるかもしれない。

「僕は……………」

口を開いた瞬間、夜空が眩い閃光に包まれ、地上を明るく照らす。その異常気象ともいえる現象に瑠奈やセシリア、そして周囲の一般人たちも驚きの表情で空を見上げている。

「これは……………なんですか？異常気象……………でしょうか？」

「こんな気象聞いたことがないな。もしかすると自然現象じゃなくて……………人口的な現象か……………っ!？」

すると、夜空の雲が螺旋を描きながらまるで渦巻のように回転し始める。そしてわずかな空気の震えと直感が告げる、これから自身に直面する危機を。

「ふせろっ!!」

大声を叫ぶと同時に、目の前のセシリアの頭を掴むと地面に伏せさせる。次の瞬間、まるで落雷のような激しい轟音とともに地面に衝撃波が流れ、周囲の人間を吹き飛ばす。タイミング良く、それを察知していた瑠奈によってセシリアは伏せていたため吹き飛ばされることは防げたが、それでも衝撃波の影響で一人で立つことができないほどだ。

「大丈夫か?」

「は、はい、なんとか……。な、なにが、起こったのですか?」  
「さあな」

正直、状況がさっぱり理解できない。空から何かが起きたことまでは理解できたが、その何かを特定するまでの判断材料が現時点であまりにも欠如してしまっている。

「このまま帰ってもいいんだが……救助だけでもしていくか?」  
「そう……ですわね、このまま何もしないとこの後味が悪いですし」

「よし、それじゃあー」 「お嬢様」

会話の途中で背後から聞き慣れない声が聞こえてくる。振り返ると、そこには見知らぬ少女が立っていた。外見から推測すると、瑠奈やセシリアとそこまで大きく離れておらず、何かの制服らしき黒い服装に、やや赤みのかかった髪、肌の色は日本人離れた白色をしており、何ともいえない魅力を秘めている。

「チエルシー?」

その少女を見て、セシリアがそう声を漏らす。

「なぜ、あなたがここに……祖国で仕事を任せてきたのに……どうして……」

「お久しぶりですお嬢様。私はとある目的のためにここにきました。その目的は……あなたです!小倉瑠奈っ!!」

瑠奈の名を叫ぶと同時に、手のひらに光が収縮し、鈍い輝きをした黒い槍が出現する。その槍をセシリアの隣にいた瑠奈に向かって投擲する。無駄のない動作から放たれる頭部を捉えていた正確な狙い、

その点から考えると彼女も相当な手練れであることがわかる。だが、それはあくまで人間の中での話だ。

「ふんっ！」

素早くヴァリアントソードを展開すると同時に振るい、放たれた黒槍をはじき返す。その動きから焦りや困惑は一切感じられない。

「出会い頭で槍投げとは随分と物騒だな。で、誰だお前は？」

「申し遅れました、私の名はチエルシー・ブランケット。そちらのセシリア・オルコットお嬢様の使用人をさせていただけます」

「セシリアの使用人……そんな格下の立場の人間が僕に何の用だ？」

遠まわしにこのチエルシーという少女を挑発するような言葉を投げかけるが、それでも彼女は一切感情を乱すことなく、大胆不敵な微笑みを浮かべている。

「手荒なことはしたくありません。小倉瑠奈、抵抗することなく、私についてきてはいただけませんか？」

「お断りだ。悪いが、出会ってばかりの人間についていくほど純粹無垢じゃない」

「手荒なことはしたくないと申したはずです。その言葉の真意は既にお見せしたと思いますが……」

その言葉の意味を理解すると、ふと夜空を仰ぐ。先ほどの謎の攻撃のせい、夜空にはまだバチバチと白い閃光が走っている。

「先ほどは警告が目的のため、あえて着弾直前で爆散させましたが、今度、私のこの切実な願いを無下になれるのなら、今度こそこの場所に砲撃を直撃させてもらいます」

「砲撃ねえ……あれはISの武装なのか？」

「お答えできません」

「次弾装填までのタイムラグはどのくらいなんだ？」

「お答えできません」

「その服装からすると、お前は亡国企業だファントム・タスクと思うが、なんでそんなところに入ったんだ？」

「貴方には関係ありません。ご回答を」

「こちらの質問を次々と却下し、解答をせがんでくる。さて、どうし

ようか、あの砲撃の威力、範囲は不明だがここ周辺は容易く巻き込むことができる威力だった。ISが使えるセシリアならばなんとか脱出できるかもしれないが、周囲には従業員やお客ををはじめとした人々がまだ大量にいる。

この人数を連れてさっきの砲撃範囲の外へ逃げるなど間違いなく不可能だ。

「……………」

見事に首を縦に振るしかないこの状況。だが、ここで頼もしい増援が訪れる。

「っ！」

何かに感じたチエルシーが素早く後方へ飛び退くと同時に、その場所へ白と銀のカラーリングをしたソードが地面に突き刺さる。

「邪魔が入ったようですね。続きはイギリスでとしましょう、お嬢様、いえ、セシリア・オルコット」

それだけ言い残すと、セシリアのブルー・ティアーズに似た機体を展開すると同時に、空間に沈むように消えていく。

「溜奈っ!!」

「お前たちか、助かった」

それに続き、今日一日溜奈とセシリアを尾行していた亜紗日と楯無に手を引かれた簪が駆けつける。彼女たちが一日中自分を尾行していたのは心底憤りを感じるが、さっき助けてもらったのであえて何もいわないでおこう。

「さっきの女性は何者?」

「彼女の使用人らしい」

そういい、目を向けるのは地面に座り込み真っ青な顔で震えているセシリアであった。さきほどの出来事に対していくつか彼女に尋問して聞き取ろうと思っていたのだが、この様子だと何も吐かなそうだ。

「相手の目的は僕だといっていたが……何が起こっているのだから」「モテモテじゃない。よかったね」

そのブラックジョークに対して両手を大きく広げるようなりアク

シヨンを取ると、瑠奈はセシリアを置いて一人歩き出す。先ほどの出来事は自分の預かり知らぬ場所で大きな出来事が蠢いていること、そして彼がルー破壊者<sup>ルットロー</sup>が再び戦場へ舞い戻ることを示唆している。だが、今すべきことはいきなり殴りこむことではなく情報収集だ。この量と正確さが戦いの命運を分ける。自らの勝利と未来のため、少年は歩みを休ませることなく進み続けるのであった。

――

「……………」

遊園地での出来事から一夜明け、時刻は午前十時。いつもならば地上に日差しが降り注ぐ時間なのだが、瑠奈の周囲には日差しはおろか一片の光も存在しない。何も聞こえず、聞こえてくるのは低いソナー音のみ。それが今瑠奈のいる場所を物語っていた。

「……か……………」

場所は都市から少し離れた湾岸の海底。そこに水中用の装備をしたヴァリアントが海底を這うようにして移動している。目的は昨晩遭遇した原因不明の砲撃の調査だ。そのため着弾場所と予想できるこの近辺に訪れたわけだが、幸いなことに目的はすぐに発見できた。埋立地として開発されたこの周辺の海底。丈夫なコンクリートで固められているはずの海底に大きな穴が掘られていた。主犯らしきあのチエルシーという人物は警告を兼ねて着弾直前で拡散させたといっていたが、もし直撃されていたらその衝撃による地盤沈下や津波、地震などでどれほどの被害が出ていたかわからない。

（……………）

腕部から分析スキャンレーザーを出して砲撃予想地点を割り出し



ていく。着弾点の形状が楕円ではなく、ほぼ円形の形からするとほぼ垂直の形で行われたのは間違いないであろう。だが、この威力を引き出せる武装がどうしても導き出せない。

「既存の装備じゃない・・・新たなIS装備。いや、もしかするとISの装備ですらないのか？」

砲撃位置も問題だ。これほどの砲撃をすると、かなりの高高度でなくては着弾と発射の反動と衝撃で自身の身も危険となる。

(亜紗日雄星を連れてくるべきだったかもな・・・)

頼りになる相棒の欠如に嘆いているとヴァリアントが通信が傍受する。てつきり雄星かと思つたが残念なことに違つていた。

「僕だ」

『る、瑠奈さんですか？今、どこにいらつしやるのですか？』

「どうでもいい質問をするのならば切るぞ」

『ま、まっってください!!』

聞こえてくるのは昨日、嫌というほど聞いたセシリアの声。当然だが、彼女には携帯の番号を教えていない。どうやら昔ダツグを組んだ時に教えた機体の通信回線を使って通話してきているようだ。

「なんの用だ、今忙しいんだが」

『その・・・お話したいのは昨晚の出来事なのですが』

「ああ」

『チエルシーの事もあり、あの出来事の真偽を確かめるためわたくしは近々祖国イギリスへ帰国しようと考えております』

「そうか」

『それで、非常に厚かましく凶々しいとは思うのですが・・・わ、わたくしと一緒に来てはいただけないでしょうか？』

「お断りだな。クラスメイトの実家の人間問題にいちいち首をつっこめるほどするほど暇じゃない」

『そ、そこをお願いしますっ!!』

断られることは薄々感じてはいたらしく、間髪入れずに懇願の声が聞こえてくる。

『わたくしも已惚れてはいません。この件は既にわたくし一人で手に

負えるようなものではないことは既に自負しております。．．．今のわたくしには瑠奈さんの力が必要なのです』

「手に負えない、だからこそ君一人の力で何とか終局させなきゃいけないんだろう。無理だった、だからといってよそ者に泣きついたらさらに舐められるだけだぞ」

『確かにそうかもしれません。．．．それでも、それでも．．．』  
自信と慢心は紙一重だが、今のセシリアは瑠奈に頼れば必ず何とかなるという斜め上の自信に支配されているような状態だ。一種の依存ともいえるこの状態を見ていると、少し彼女に希望を示しすぎたかと反省する。

「二つ条件がある」

『は、はい、何でしょうか!?!』

「昨晚、君の使用人はI Sを使っていたが、あの機体に対して知っていることをすべて教えてほしい」

『あの機体は確か、わたくしの祖国イギリスで開発途中であったブルー・ティアーズ三号機『ダイブ・トウ・ブルー』だと思います。ですが、なぜ開発途中のあの機体が完成し、それがよりにもよってチエルシーの手に渡ったのかは．．．わかりません．．．』

「彼女があんなテロ紛いの行為をすることに對しての心当たりは?」

『そ、そんなものありません! チエルシーはわたくしの昔からずっと頼りにしてきた使用人でもあり、幼馴染でもあったのです! 自慢ではないですが、チエルシーのことをわたくし以上にしている方など存在しません!』

「なるほど」

何とも必死さを感じる解答を聞いてみると、丁度射撃予想位置の計算が終了する。計算結果は衛星軌道上からの攻撃、その色々ぶっ飛んだ真実に軽く驚嘆しながら作業工程を手早く片付ける。

「今から戻る。続きは学園でにしよう」

『は、はい、お待ちしておりますわ』

それだけ聞き届けると、素早く通信を切り、水中用装備をパージしてスラスタを全力で一気に飛翔する。大きな水飛沫とともに海面

から飛び出す白と青のカラーリングをした機体。そしてそのまま学園へ帰還していく。

本当ならばもう戦場になど戻りたくなかった。だが、こうして忌まわしい環境のせいで否が応でも武器を持たなくてはならなくなってしまうのだ。帰る場所が戦場、うるさくて危険で不確定な場所であふれているそんな場所。できれば一人の女が帰る場所でありたいのだが、その幸せ計画にはまだまだ時間がかかりそうだ。

大昔の人間に「将来、空を飛ぶことができる乗り物が開発される」と伝えてもおそらく信じないだろうと個人的に思う。そんなことができるのは鳥や虫だけだと、自分たちには無理だと、そう言っただけで諦めちゃう。だが、そうやって暮らしているうちに不満を持つものが現れた。

車や船では移動に時間がかかる、もつと早く移動できるものはないのかと。だが、海や道路では障害物などの影響などで素早く移動することができない。ならば、空がいい。空ならば大きな障害物がない分、もつと効率よく移動することができるはずだ。

そうしてライト兄弟は飛行機を開発し、その構造とコンセプトは現代にまで語り継がれている。結局のところ、大いなる発展と開発に必要なのは現代に対する不満と飽くなき執念だ。そしてその執念はやがて利便性へとつながっていく。

「.....」

窓から外の風景を眺めると青空に混じった雲が見える。この風景はヴァリアントに乗っているときに見慣れているはずなのだが、こうして何もしなくても目的地に向かってくれるこの状況ではまた違う風景に見える。

「溜奈・・・ぽてち、食べる・・・？」

場所はセシリアの家用ジェット飛行機の内部。そこで外を眺めていると隣の座席の簪からお菓子を差し出してくる。

「よくこんな状況で食欲がでるな」

そう嫌味をいいながら差し出されたお菓子をパクリと啜る。これから遠足にでも行くような調子だが、ここで下手なことを言っただけで不安を刺激してもよくないので黙っておく。そしてさつきから騒がしい後方をちらりと見る。

「セシリア、この冷蔵庫にあるコーラもらうわよ」

「すごいね家用ジェットなんて。セシリア、本当にお嬢様だったんだね」

「この飛行機は対赤外線レーザーを積んでいるのか？」

「みなさん、ちゃんと席に座らないと危ないですよー」

「山田先生、コーヒーを頼む」

専用気持ちのまるでパーティ会場のような騒がしい雰囲気の中で、まるで我慢の限界といった様子のセシリアが座っていた。別にこの件に対して専用気持ちがこうして協力してくれることはとても嬉しい。クラスメイトであり、ライバル、その者たちが自分に力を貸してくれるのはとても心強く感じるであろう。だが、その中で異質なものがある。

「亜紗日ちゃん、ほら、もつとこつちに来なさい。おねーさんが膝枕してあげる」

「ちよ、ちよつと恥ずかしいです・・・」

さつきから楯無にあーだこーだと絡まれている転入生の少女、笹原亜紗日。専用機を持っていない彼女がなぜここにいるのかがわからない。彼女は専用機を持っていない一般生徒であるはずなのに、溜奈が条件として「笹原 亜紗日を連れてくること」が二つ目の条件となっており、断れなかったのだ。

無論、何があっても自己責任ということにはしてあるが、理由を聞いてもどうしても教えてくれなかった。「確かに笹原 亜紗日は専用機を持っていない。だからこそ、行く必要がある」と意味不明な言葉で言い包められ、こうして同じ飛行機に搭乗している。

前々から思っていたのだが、彼女と溜奈はどのような関係なのだろうか。明らかに転入生と教員などという関係ではないことは一目瞭然だ。まるで自身の半身のように彼は亜紗日という少女を気にかけている。一部の生徒の間では「肉体関係を結んでいる」や「師弟関係」、拳句の果てには「兄弟なのではないか」とバカげた憶測やデマを流す始末だ。

「セシリア、この飛行機には対赤外線装置を積んでいるのか？」

「ラウラさんー！一体さつきから何なんですの!?! いったいー」

その声に反応するよりも早く、後ろの窓に映る物体が映る。

「み、ミサイル!?!」

それを叫ぶと同時に機体の後部にミサイルが直撃し、急降下すると同時に外へ投げ出される。だが、さすがは専用気持ち達といったところだろうか。パイロットと教員を抱え、素早くISを展開させる。だが、その中でいまだにISを纏っていないものがいた。

「くっ！」

激しくたなびく白髪を抑えながら亜紗日は自由落下していく。亜紗日は専用機を持っていないため、このような不測の事態に対応しきれない。

「笹原さんっ！」

そのことをいち早く気が付いた一夏が救出しようとするよりも早く、楯無が動く。素早く飛行機の残骸を避けながら近づくと同時に亜紗日を優しく抱え上げる。

「ごめんなさい、遅くなっちゃったわね」

「いえ、ありがとうございます。助けてくれて……」

亜紗日の体に傷やケガがないことを確かめると、楯無は亜紗日の身を引き寄せる。亜紗日としては大勢の前で抱きしめられるのは恥ずかしいのだが、今いるのは高高度であるがゆえに逃げ場がない。

「亜紗日ちゃん、あなたミサイルが直撃する直前に私から離れようとしたでしょ？」

「バレてましたか……私がいると邪魔になるかなって思って……」

「もうっ！次そうやって自分を卑下したら怒るわよっ！」

「へー、なかなか見せつけてくれるじゃねえか更識楯無サンよお！」

頬を膨らましていかにも怒ったような表情をする楯無の前に、さっきの攻撃の張本人らしきロケットランチャーを捨てたISが現れる。楯無の専用機によく似た形状をしているが、先ほどの攻撃からすると味方ということはなさそうだ。

「面倒なのが来たわね！織斑先生、ここは私に任せて先に行ってくださいー！」

「っ、そ、そんな……」

その提案に困惑の声を上げたのは楯無に抱きしめられている亜紗日であった。

「大丈夫、私は必ず勝つから。あとでイギリスで合流しましょう？」  
「しかし……でも……」

ここで楯無と別れるという選択を中々割り切れないでいる亜紗日をさらに身を寄せ、顔を近づける。そして――

チュツ

「っ……」

彼女の頬に楯無が唇を落とす。その突然な行動に亜紗日だけでなく、近くにいた一夏でさえも驚きの表情となる。

「今はこれで我慢なさい。すぐに会えるから安心して」

「わかりました、それではお返しに――チュツ、景気づけです」

亜紗日も楯無の頬に唇を落とす。これで御相子という彼女(彼)の意思表示なのだろうか。

「ここは任せます。また後でお会いしましょう」

「ええ、一夏君、この子をお願い!」

一夏に亜紗日の身柄を預けると、専用気持ちはこの領空から離脱していく。ふと、振り返るとまるで亜紗日が捨てられた子犬のような表情で見つめている。

(そんな顔をしちゃだめよ。思わず追いかけたくなるじゃない)

せめて学園に戻ったらくさん可愛がつてあげるとしようか。そしてその表情をするということは順調に彼女(彼)が自分を信じ、甘え始めたという明確な証拠だ。一時とはいえ、別れるのは楯無もつらい。だが、亜紗日――雄星は少しづつだが再び自分を信じ始めている。それを確認することができただけでよしとしようか。

――

「見えてきたぞ、あそこだ」

予想外のアクシデントにより、雲の中を進むこと数十分。大きな滑走路らしきものと巨大な管制塔らしきものが見えてくる。そこはラ

ウラが隊長を務めるドイツの特殊空軍基地だ。本来ならばこのままイギリスへ向いたところであったのだが、さきほどのアクシデントにより、態勢の立て直しを余儀なくされている状況だ。

ならばという話でドイツのIS基地に寄ろうという戦略だ。幸いなことにラウラのコネもあつてか話は問題なく通っている。

「総員、整列！隊長、お久しぶりです！」

「ああ、久しぶりだなクラリツサ」

到着した瞬間、隊員の敬礼による豪華な出迎えに圧倒される。部隊名が『黒ウサギ隊』シュヴァルツェ・ハーゼだからか、部隊全員が赤いラインの入った黒塗りの制服に眼帯という奇抜な服装をしている。ここまでくるとまるで一種の宗教のようだ。

「クラリツサ、オペレーション・ルームを借りるぞ」

「はい、既に準備は整っております！とここで……」

代表者らしきクラリツサと呼ばれている女性の視線は、専用気持ちの中で大きな異彩を放つ一人の少年へ向けられている。

「……なにか？」

「いや、お前が小倉瑠奈だな。隊長からとても優秀な人物だと聞いている」

「どうも……」

さつきらチラチラと注がれる視線に不快感を示すように低い声で返答する。だが、ラウラがご丁寧に報告していたからか、クラリツサが瑠奈に興味を持っていることは薄々感じ取れる。というより、自分の知らないところであーだこーだと話されていたことに何とも言えない怒りを感じてしまう。

「……亜紗日、ここではどうだ？」

「残念ながら無理だね。場所と位置はいいけど、ここにはあまりにも関係ない人たちの目がありすぎる。ここであの機体を晒すのは悪手かな」

「そうか」

それだけいうと彼は何も話さず、黙って歩くだけであった。ある程度人間社会に馴染めていると思っていたのだが、そうやって感情を



抑えきれない辺り、まだまだのようだ。

「それでは改めて現状を確認する」

借りたオペレーションルームで空中ディスプレイを広げる。

「先ほど楯無から連絡があり、こちらもちちらで独自のルートでイギリスを目指すとのことだ。こちらもちちらで戦力をドイツ経由とフランス経由の二つに分け、それぞれイギリスを目指す」

「わざわざ戦力を二つに分けるんですか？」

「戦力を一つにまとめると、いざというときに身動きをとれなくなる可能性がある。それに新装備受領の命令をデュノア社から受けている。よってフランス経由を私、一夏、デュノア、ラウラ、サポートに簪。ドイツ経由を山田先生を引率にセシリア、鈴、箒の四名とする」

「千冬姉え、瑠奈と笹原さんはどうするんだ？」

「その二人は……」

ちらりとその二人の問題児の方を見る。亜紗日は脚を組み、妙に色っぽい座り方をして簪に注意されているのに対し、瑠奈は頬杖をつき、心底退屈そうにディスプレイを眺めている。

「二人は私と同じフランス経由でいく。他に何か質問はあるか！」

「教官……」

そこで声を上げたのはこの会議を見守っていたクラリツサであった。相変わらず、千冬が相手としても堂々とした立ち振る舞いをしてる。

「先ほどのご説明ではフランス経由の方に明らかな人数の偏りがあります。そこでご提案なのですが、私、部隊副隊長であるクラリツサを始めとしたドイツ軍精鋭部隊が教官の護衛します」

「お前はさっきの説明を聞いていたか？」

そこで口を挟んだのは意外なことに瑠奈であった。頬杖を突いたまま、顔をクラリツサの方に向けることなく、無表情に、しかしはっ

きりとした口調で意見を言う。

「戦力を二つに分けるのはいざという時に迅速に動くためだ。そうだというのに、さらに人数を増やしてもしたら余計邪魔になるだけだろうが」

「ほう、貴様は我々が足手まといになると？。そういいたいのか？」

「そう捉えたのならそれでいい」

瑠奈としては別に部隊を見くびっているわけでもなければ、馬鹿にしているわけでもなく、これ以上の増員は危険だと意見したかったのだが、やはりそこはまだ社会経験と対人能力が低い破壊者<sup>ルットロー</sup>。オブラートに包むことなく、直球な言い方でしか物を言うことができない。

「我々は過去に教官<sup>千冬</sup>に教訓と訓練を受けており、その実力はドイツの中でナンバーワンと自負している。その実力をもってすれば、お前のような礼儀知らずの子供一人ぐらいは守って見せよう」

「いいよ別に。これ以上無駄な時間を使わせるのも申し訳ないし」

少しずつだが、クラリツサの言葉に怒りと攻撃性が乗り始める。千冬としては瑠奈と同じようにこれ以上世話になるわけにもいかず、断りたいのだが、一度火がついた争いは簡単には収まらない。

「教官、申し訳ないですが私と彼に少しお時間をいただけでしよるか。彼とは一度上下はつきりとさせておく必要があります」

「確か、これを日本では「オモテへ出ろ」というのだったな」

ピリピリとした雰囲気の中、ラウラのしようもない日本知識が響く。当然だが、瑠奈としては別にクラリツサも部隊も蔑んでいるつもりはなく、ただこれ以上の増員は危険だと警告したかっただけだ。それに対し、クラリツサは少しでも千冬の役に立とうと警護を申し出てくれている。そこには悪意や敵意などなく、ただ単純に自分のやり方でより良い方法を実現しようとしているだけであった。

人は皆違ふ。そして、それぞれが胸の中にある正義と正しさを持つがゆえに他者と対立し、争う。争いや戦いを引き起こすのは悪ではなく、それぞれの思想の対立なのだ。

社会において論争による意見の対立が起きた場合、一番最初に比べられるのは互いの地位である。仮に相手が自分よりも社会的地位が高かった場合、十中八九相手に軍配が上がる。力比べではなく、今までお互いが積み上げてきた成果によって勝ち負けを決めるそのやり方はとても平和的であるといえる。

だが、そんなやり方ではまた同じことの繰り返しである。負けたことが納得できない相手は何度も似たような難癖や文句をいって食い掛ってくる。醜く、性懲りもなく何度も。よく言えば「諦めない」、悪く言えば「しつこい」、そんな相手には一度格の違いを見せつけてやればいい。同じ条件で同じ状況で一度相手に絶対的な壁を見せつけ、絶望させる。

そうしたら相手はおそらく二度と齒向かってこないだろう。自分はいっつには勝てない、それを体の芯にまでわかつているのだから。しかし、それを社会は行わない。なぜか、そうなると力あるものが社会を支配するおとなり、自分たちが思い描いていた秩序とは矛盾するから。

だが、そんな弱者が社会だの地位だのそんなものを握ったところで待っているのは悲劇なのだ。一度人間は自然に帰るべきではないのだろうか、強いものが全てを握る。シンプルだが隙の無いそんな世界へ。

場所はドイツ軍が所持している特殊アリーナ。その中央に向かい合うように立つ二人の人物がいた。

「確認するぞ。もし私が勝ったら我々の精鋭部隊をそちらの護衛につける。貴様が勝った場合はIS部隊に対して最低限のサポートをしてこの件からは手を引く。それでいいな?」

「ああ」

不機嫌そうなクラリッサに対し、対戦相手である瑠奈は対決直前だというのにアリーナの上空に広がる青空を眺めている。

「綺麗な青空だね」

「え？あ、ああ、屋外訓練の時は少しでも視認性を上げるため、この基地は比較的快晴の日が多くなるように気象庁のデータを多く受け取っている。そのため、天気予想は万能だ」

「そうなんだ・・・ずっと見ていたくなるような素敵なお空だ」

負け惜しみでもなければ皮肉でもなく、心の底からの賛美の言葉。唐突に飛び出たその言葉に先ほどの怒りは消え去り、困惑の心境となる。隊長であるラウラからは「不思議や奴」という評価を聞いていたが、何となくわかる気がする。なんというか、彼は全てを客観的に評価することができるのだ。どんなに憎い相手でも、嫌いな相手でも相手の悪いところをいい、良いところは良いところとして心の底から賞賛し、それを言うことができる。

「おい、試合を始めるぞ。まずは握手だ」

クラリッサの言うドイツのルールに従い、まず二人は握手する。こうして並んでみるとわかるのだが、瑠奈の身長はだいぶ小さく、クラリッサを見上げるような状況になってしまう。正直、初めのこの握手で思いつきり力をいれて出鼻をくじいてやろうかと思っていたのだが、先ほどの賛美の言葉に加え、自分より年も身長も下の少年に対してするのはなんだか可哀そうで大人げないような気がしたのでやめておく。

「それでは試合、開始!!」

千冬のその合図とともに両者が一斉に機体を展開すると同時に飛び立つ。背中から両翼を生やしたようなフォルムをした白と青のカラーリングをしている機体であるヴァリアントに対し、相手のクラリッサの機体は異様な形状をしているものであった。

ラウラの機体に似た黒のカラーリングだが、全身の装甲から赤色の突起らしきものが生えており、例えるのなら黒い肺胞のような見た目をしているといてもいいだろう。その明らかに危険な存在に用心し、あえて開幕早々突っ込むのを止め、クラリッサの周りを円を描くように回り始める。

「ふんっ、まるで典型的な動きだな。くらうがいつっ！」

自分の周囲を飛行するヴァリアントに狙いを定め、クラリツサは一斉に機体のワイヤーブレードを射出する。そのワイヤーブレードならば過去にラウラとの戦闘で経験済みだ。だが、今回は大きく違った。

「なんて数だ……」

ラウラの時は数個であったのに対し、クラリツサのISからは全身の突起から発射された十以上の大量のワイヤーブレードが向かってくる。その光景はまるで食虫植物が自身の触手を伸ばして目の前の虫を捕まえるようでヴァリアントを執拗に追いかける。

「我が黒<sup>シュヴァルツェア・ツヴァイク</sup>い 枝の攻撃、防げるものならば防いでみろ!!」

そういい、ワイヤーブレードに加え、大型レールガンの標準をヴァリアントにあわせる。その標準とワイヤーブレードから逃れるようにヴァリアントはさらに加速しようとするが、ここはあくまでアリーナ内である。下手に加速してでもしたら逆に先回りされる可能性がある。

もつと速く、遠くへ飛ばたきたいのに、まるで鳥籠の中のような閉塞的な場所。その悪条件に加えてクラリツサ自身が優秀なこともあってか、最悪なことにヴァリアントを照準を捉えさせてしまう。

「うおっ!?!」

激しい轟音とともに放たれる弾丸がヴァリアントの右肩を掠る。さすがに直撃は無理だったが、今はそれで十分だ。大型レールガンから放たれる巨大な弾丸はたとえ直撃できなくても足止めには十分すぎる効果がある。巨大な弾丸から発生する衝撃波と疾風は大きくヴァリアントのバランスを崩し、わずかに足を止める。その隙をクラリツサが見逃すはずがなかった。

「食らうがいい! 黒<sup>シュヴァルツェア・ツヴァイク</sup>い 枝をつー!」

先ほどから追いかけてまわしてきた多数のワイヤーが一斉にヴァリアントの全身に巻き付き、身動きを封じる。そのまま一斉に動かしヴァリアントを地面へたたきつける。その次は引きずりまわし、その次はアリーナのエネルギー障壁へ叩きつける。あえて一気に接近して決着をつけたいところだが、相手が相手だ。むやみに接近せずに少

しずつ遠距離から削っていく。

「あ、亜紗日っ、このままじゃ……」

一方的にアリーナや壁に叩きつけられる。まさになぶり殺すような戦いに試合を見ていた簪が声をあげるが、亜紗日はなにも動かない。彼は自分の半身だからだろうか、なんとなく彼が考えていることはわかる。だが、相手にその戦略がバレているからか、それとも運が悪いのかなかなかチャンスが訪れない。

しかし、福引を引き続けていけば必ずいつかは当たりが出るように、耐えていれば必ず逆転の機会は訪れる。そして偶然か、それとも必然か、ワイヤーに拘束されたヴァリアントがアリーナの中央の地面に叩きつけられた。それはこの状況を打開するためのチャンスであった。

「っ！」

地面に叩きつけられるな否や手のひら、つま先、足裏から一斉にストツパーを展開し自身の体を地面に固定する。

「っ!?!……なんだ?」

なぜか動かせないヴァリアントの原因を考えるよりも早く、ヴァリアントの両翼がわずかに広がり、光の粒子を放出する。そして——  
「全感応アイオス。翼よ飛翔しろっ！」

その声と同時にヴァリアントの背中に装備されたビット端末が一斉に射出され、アリーナを飛び回る。

「無駄な小細工を——」

ビュンビュンと飛び回るビット端末を撃ち落とそうと腰部に装備されたアサルトライフルを撃ち放つがあまりにもスピードが速く、一つ一つに狙いを絞ることができない。そしてビット端末に注意を向けたその一瞬が勝負の命運を分けた。

複数のビットの先端から光の刃が出現し、ヴァリアントに絡みつくワイヤーを切断していく。そのことにクラリッサは気づき、右肩の大型レールガンを向けるがもう遅い。それよりも早く拘束が解けたヴァリアントがクラリッサへ突っ込んでいく。

「早いっ、だがっ！」

馬鹿正直に突っ込んでくるのならば対策はある。右手にエネルギーを集中させて、わずかに身構える。そしてヴァリアントの刃が降られると同時にタイミングで隠し玉を使用した。

「なっ……これは……」

「ふん、お前にはいろいろ驚かされたぞ。だが、それもこれまでだ」

振られたヴァリアントソードの刃はなぜかクラリツサの直前で止められていた。理由はクラリツサのISに搭載されているAICだ。クラリツサのISである黒い枝はラウラの専用機、シユヴァルトツェア・ツヴァイク「黒い雨」の姉妹機であるがゆえに当然AICが装備されている。

だが、クラリツサのISはラウラの使っているAICとは大きく違う部分がある。

「っ……くっ……」

クラリツサが指をわずかに動かすとヴァリアントの腕が少しずつ曲がり、やがて自身へは先を向ける。これが黒い枝のAICの特徴だ。捉えた物体の動きを止めるだけでなく、その物体のコントロールを得る。その技術はラウラが学園にいる間に集めたデータのおかげで既に完成していた。

「これで終わりだ。所詮子供の浅知恵では私には勝てん」

少しずつは刃先はヴァリアントへ向かってきている。その絶体絶命な状況でも彼に焦りはない。少し手間はかかったが、こうして接近することができた。それで十分だ。

「勝ち誇るのもいいが、頭上注意だ」

次の瞬間、AICを発動させているクラリツサの右腕を頭上から降下してきた「アイオス」のビット端末が大きく弾く。

「なっ!?!」

あまりの突然のことにクラリツサだけでなく、観客席の者たちも反射的に驚きの声を上げる。普通、遠隔操作端末装備を相手と接近しているときに使うものなどまずいない。そもそも操作自体が難しいというのもあるが、接近戦での使用は自身にも攻撃が当たる可能性があるからだ。そう思い込んでいたが、目の前の少年はそんな常識を易々

と覆し、思いもよらない方法でA I Cをうち破った。

「こんなことがっ！」

驚くよりも早く再び右腕にエネルギーを集中させ、A I Cを発動させようとしますが、そんなことが許されるはずもなく、自身に再び翳される腕を蹴り飛ばし大きくクラリツサを吹き飛ばす。

「くっ！これならどうだああああ!!」

接近戦用の装備であるトゲ付きナツクル、シユツルム・ドラッケ「嵐のように」を使用し殴りかかるが、同時に出されたヴァリアントの左足の足裏に受け止められると同時にストッパーが展開し、手首を拘束する。そのまま腹部に蹴りを入れると同時にバランスを崩させ、クラリツサの腹部も右足で拘束し、そのまま二機の機体はアリーナの地面へ墜落する。

「ぐはっ！くっ！」

気が付いたときにはもう遅い。ヴァリアントはクラリツサの右手首と腹部を踏みつけたままマウントポジションを取るような状態で立っている。右手にはヴァリアントソード、左手にはアイオスのピットを先端に装備し、銃剣を出現させたヴァリアントライフル。その二つが握られている腕を大きく振り上げ、そして——

「っ！うっ！うああああー！」

まるで太鼓を叩くように両手に握られた武器を使って一斉にクラリツサに武器の刀身を叩きつける。抵抗しようにもいつの間にかワイヤーブレードはすべて切られ、ヴァリアントを持ち上げるほどの推力もない。A I Cを発動させようにもその腕は拘束されている。

「こんな……ばかな……」

殴られ続けること数秒、クラリツサのその言葉を最後に試合は終了する。結果はいうまでもなくヴァリアントの勝利だ。初めは明らかに優勢であったはずなのに、まるで絵に描いたように一発逆転された。その事実を誰もすぐには受け止めることができず、誰も呆けるような表情を浮かべているだけであった。



「大丈夫か？少しやりすぎたかも」

「いや、大丈夫だ」

試合が終了すると、機体を収納してクラリツサに手を伸ばす。もし、彼女が殺し合った仲ならばこうして手を伸ばしたりなどはしないのだが、あくまで先ほどの練習試合だ。そのことなど言われなくても重々承知している。

「素晴らしい腕だな。隊長からお前の報告は聞いていたのだが、報告以上の実力だ」

「どうも、そっちも悪くない腕だったよ。楽しかったよ」

互いに賛美を言い合い褒めたたえる。正直、クラリツサ相手にここまで手こずったのは予想外だ。経験と実力が高く、状況によっては負けていたかもしれない。

「副隊長さん、すまないがフランス領の国境近くまで護衛を頼みたい」

「ん？護衛が不要だからこの勝負をしたのではないのか？」

「考えが変わったんだ。あんた——副隊長さんの実力からこの部隊は護衛するのに十分な実力があると判断した。出せるだけでいいから護衛を頼めるだろうか。そして部隊の実力を疑った非礼を詫びたい」

「あ、ああ！我が部隊の誇りにかけてお前たちをフランス領へ届けて見せよう！」

その賛美の言葉に喜びにより大きく興奮したかのような表情を浮かべると、観客席にいたラウラへ向かっていく。どうやらこの件を報告しにいくようだ。ラウラとクラリツサが観客席で話している光景を眺めること数分、今度は喜んだ表情をしたラウラが来た。

「溜奈、わが部隊に入隊したいとはとうとう分かってくれたか!!まずは国籍をドイツ国籍に変えるところからだな！歓迎の準備をして待っているぞー！」

「もう一度伝言ゲームをやり直せ」

そうツツコミを入れると、再び上空の空を眺める。なぜだろう、この空が少しずつだが好きになってきた。それはただ単純に青空が好きだからだろうか、それとも今の自分が青空が好きな気分だったからだろうか。

「それでは英国にて。ごきげんよう、みなさん」

「ああ、またなセシリア」

陽の光が降り注ぐ駅のホームで列車にのったドイツ経由チームが手をふる。それに続いて別のホームに到着していたフランス行き列車に千冬たちも乗る。あとはもう何もすることもなく、あとは待つだけである。

「それにしても珍しいね。君が人間に認めるような発言をするだなんて」

「発言？ああ、あの試合での出来事か」

向かい合いの座席で正面に座った亜紗日が思い出したかのように話しかけてくる。隣に座っていた簪も不思議そうな顔をして見つめてくる。

「別にあの女を認めたわけじゃない。賞賛される部分を賞賛しただけだ。少なくともその価値はあの操縦者にはあった」

「そういうのを認めるっていうんだよ。でもいいことだと思うよ。人間の中でも他者の良い部分を認めることができない人間もいるからね」

「うん、すごい立派なことだと思う……」

「……ふんっ」

亜紗日と簪の自分に対する誉め言葉にむず痒くなったのか、肘をつけて無表情で外を眺める。一応、彼には人間としてのルールは教えているのだが、こうして言葉では教えられない部分の成長を感じる事ができるのは喜ばしいことであった。

「……、いいか？」

すると、招かれざる人物が入ってくる。その人物は引率教員である千冬であった。

「あんたが話しかけるべき相手はこっちじゃなくて、あっちじゃないのか？」

指さす方向には憂鬱そうなシャルロットを相手に元気づけるよう

に話しかける専用気持ち達がいる。「自分を冷遇している父と会う」その複雑な家庭環境に戻ることに對してシャルロットの気分は察するが、別に瑠奈としては励ますつもりもなければ勇気づける気もない。ここでどんな言葉をかけたところから湧き出る勇気や希望は所詮安物のロケット花火のようなものだ。どうせ消えると分かっているような言葉など元からかけるつもりはない。

「生徒の相手は生徒に任せるさ。ところでお前の方の調子はどうか？」

ちらりと千冬は亜紗日「ーいや、白髪の少女、小倉瑠奈の顔を見る。信じられないようだが、この少女の中には少年の魂が入っている。その何とも言えない状態に奇跡を感じずにはいられない。

「なぜ、お前は小倉瑠奈に人格データを入れたんだ？自分を殺そうとしたこの女の体にどうして……」

「同じ破壊者だから適合するかと思っただよ。その結果は大成功。めでたくこうして女になって蘇生したわけだ」

嫌悪する千冬が相手だからだろうか、その口調はどこかおちやらけでいてずさんなものだ。だが、千冬としてはこうして再び彼と話すごとができる日々が訪れたことに対する喜びを感じていた。

「亜紗日、女としての暮らしはどうだ？もう慣れたか？」

「トイレのやり方は覚えた。だけど仕草がまだかな。よく脚を組んで怒られる」

「あと、ブラジャーがうまくつけられない……」

「ははは、そうか」

軽い近況報告に笑い声をあげる千冬。それにつられてか簪もわずかに笑みを浮かべている。すると、列車が次の駅に停車する。

「一夏、すまないが購買で全員分の軽食を買ってきてくれないか？少し小腹が空いてな」

「いいけど、全員分持てるかな？」

「じゃあ、私も行く」

素晴らしい、名乗り出たのは意外なことに亜紗日であった。ただの気まぐれか、それともそんな気分だったのかはわからないが、意外な出

来事に軽く驚く。

「そ、そうか、一夏、笹原、頼むぞ」

「ああ、ほら笹原さん行こうぜ」

「ええ」

列車を降りると、丁度いいことに移動購買らしき男性と出会う。

「ボンジュール、おいしいサンドイッチはいかがですか？」

「一夏君、サンドイッチだって。それにしよう」

「ああ」

様々な種類のサンドイッチを見ている一夏だが、その時ふいに販売員の男性と目が合う。

「もしかして君・・・織斑一夏かい？」

「は、はい、そうですすが・・・って、なんで俺の名を」

「そりゃあ、有名人さ！世界で唯一ISを使える男性！俺たちの希望の星なんだから！そっちの女性は恋人かい!？」

「ただのクラスメイトです」

大興奮といった様子の販売員の男性に亜紗日は冷静な声を出す。

「なんだよ、恋人とかだったら大スクープだったのに・・・あ、サインもらっていい？」

「こ、恋人って・・・」

そのワードに顔を赤くしながら差し出された紙とペンにサインを綴る。はたから見れば自分と亜紗日はそんな風に見えていたのかと思うと少し照れてくる。

「今日はすごい日だなあ。あ、サンドイッチおごるよ」

「結構です。お気持ちは嬉しいですが、あなたに物を恵んでもらう理由がありませんので」

「わかった、じゃあ半額でどうだ？」

「一割引きで」

「じゃあ、四割引きでどうだ!？」

「二割引き。これいじょうの気持ちは受け取れません」

「わかった、じゃあ間をとって三割引きにしよう。これでどうだい?」「異議なし」

なんだかよくわからない値段交渉の末、全品三割引きの値段で買い物を終える。

「それにしても笹原さんってすごいな」

「何が？」

「いや、自分の意見をあんなにはつきり言えるなんて、相当頑固なんだな」

それは誉め言葉なのかわからないが、亜紗日としては返せない貸し借りは作りたくないのが本音だ。その保身でのあの行動なのだが、それが一夏にとつて素晴らしい行動に見えたらしい。つくづくこの男とは価値観が違うのだなと感じるが、まあ別にどうでもいい。両手いっぱい軽食をもつて列車へ戻る。

時刻はもうすぐ夕方となる。どうやらフランスへ着くのは明日になりそうだ。

――

フランス列車の旅は続いていき、とうとう日は落ち、夜が訪れる。夜が訪れば人は寝る。それは大昔から続いてきた人類のサイクルだ。だが、その就寝を目の前にして一つの問題ができた。

「部屋割り……どうする？」

人数は七人。そのため三人部屋を二つと個室が必要となる。そしてその部屋を借りること自体は成功したのだが、その部屋割りに対して頭を悩ませていた。

「個室が一つに対し、男子は二人だ。誰かが女子二人とともに寝ることになるな」

「その女子の中に織斑先生は含まれているのかね」

できるならば事情を知っている千冬か簪を瑠奈と亜紗日の同室にしたいところだが、どっちにしろ女子二人に男一人が同室で寝るという現状は変えられない。頭を悩ますこと数十分、熟考に熟考を重ねた

結論を千冬が言い放つ。

「部屋割りはデュノア、ラウラ、更識が同室。私は一夏と笹原と同室にし、瑠奈は個室だ」

「え？」

その部屋割りに一夏が疑問のような声を上げる。てっきり、瑠奈と同室かと思ったのだが意外な人物との同室に驚きを感じてしまう。

「千冬姉、俺が笹原さんと同室なのか？」

「嫌か？」

「いや、嫌っていうわけじゃないけど……」

ちらりと亜紗日の方を見てみるが、無表情でいるだけであり、特に一夏と同室であることに嫌悪するような様子は感じられない。それだけみると安心できるが、やはりクラスメイトの女子とともに一夜を明かすというこの現状に何とも言えない緊張がでてくる。

「よし、それでは各々荷物をもって部屋に移動しろ。明日の日程は後々伝える」

その千冬の指示を受け、皆移動を始める。こうして意外な人物とともにここフランスの夜は始まっていく。

「へえ、部屋は意外と広いんだな」

部屋に入ると、想像以上の部屋の豪華さに驚きの声ができる。列車だから必要最低限のものしかないと思っていたのだが、意外なことに様々な装飾や調度品が備わっており、まるで高級ホテルのような内装であった。

「一夏くん、ベッドはどうする？」

「笹原さんが先に選んでいいぜ」

「じゃあ、一番下をもらうね」

三人部屋だから当然だが、部屋の中には三段ベッドが置かれており、その一番下の段の占拠を宣言すると、荷物を置き、ゴソゴソと中

を漁り始める。その姿を見ながら一夏も二段目に上ろうとしたとき、亜紗日が信じられない行動を起こす。

ヌギツ

「なっ!?!」

突然、亜紗日が一夏の目の前で制服を脱ぎ始める。男の目があるというのにそれを構わず突然始まるストリップショーに驚くよりも早く、体を反転して彼女を視覚の外へ追いやる。

「さ、笹原さん、何をやってるんだ!?!」

「何って……今から寝るから寝間着に着替えているんだけど」

「こ、この部屋に男の俺がいるんだから、それは俺の目が届かないところでしたくれ!!」

「それもそうね……一夏くん、あつちを向いてて……って、もう向いているか」

無気力な声でそういうと亜紗日は着替えを続けていく。後ろから聞こえてくる衣擦れの音に理性が壊されそうになるのを耐えること数分、音が収まる。

「一夏くん、もういいよ」

「まったく、笹原さんももう少しはーっぶっ!」

振り向き、彼女の姿を見た瞬間、再び驚きの声 that 口から飛び出る。目の前の亜紗日の着ている寝間着は、黒の下着の上に薄いシースルーの生地ワンピースを羽織っただけのほぼ下着に近いものであったからだ。目を凝らせばわずかにキラキラと光る生地の下には大きな胸を包むブラジャー、下を見ればはち切れそうなお尻を包む黒の布地に、そこからのびる瑞々しく、程よい肉付きの太もも。

「あまり可愛げのないパジャマでごめんね。次はもう少しおしやれなやつを着ていくから」

「か、可愛げがないって……」

これで可愛げがないとなると、次はどんな寝間着を着るのだろうか。見てみたい気がするが、その刺激的すぎる寝間着のせいではなかなか顔を動かせない。

「一夏くんも寝間着に着替えたらず? 私、向こうをみてるから」



「そ、そんなことをいったって・・・」

ちらりと見てみると、そこには彼女の癖だからかすらりと長い素脚を色っぽく組んで手元のスケジュール帳に目を通して見ている亜紗日の姿がある。過去に彼女の下着姿を寮でのハプニングのため見てしまったことがあるが、それよりも彼女を異性として見てしまっている自分がいるのだ。

(やばい・・・やばいぞこれ・・・)

自分の中で何かが崩壊しようとしている。それが崩れ去ったとき、彼女に何をしてしまうのか自分でもわからない。

「おい、明日の日程がきまつ・・・」

それに耐えていると、打ち合わせを終えた千冬が部屋に入ってくる。だが、部屋で刺激的な下着を着た亜紗日にそれに必死に目を逸らしている一夏。そのカオスな状況に言葉が止まる。

「・・・どういう状況だ?」

「あなたの弟が私にセクハラした」

「なっ! 一夏、お前・・・」

「ち、違う、俺は何もやってねえ。頼む、信じてくれ!」

わりと冗談抜きで笑えない冗談を言われ、危うく冤罪にかかりそうになる。そんな必死に自己弁護をする一夏を意尻目に亜紗日はベツトに寝っ転がり、読書に耽るのであった。

「おい、せっかく同室になったんだ。お前たちの間で親睦を深めてみてはどうだ?」

夕食を終え、一息ついているとふと寝間着のタンクトップ姿の千冬がそんな提案をしてくる。

「親睦?」

「ああ、笹原は学園にきてまだ日が浅い。一夏、この機会にクラスメイトとして少しは親しくなっておけ」

そう言われ、亜紗日の方を見るがすぐに目を逸らす。先ほどは色っ

ぼく脚を組んでいたのに対し、今は部屋に備え付けられていた椅子の上に座り、右脚を抱えるような体勢でいる。そのせいで真っ白な脚とパンツが丸見えの状態となってしまうていた。

「せっかくだ、お互いに気になることを質問しあってみてはどうだ？」  
「質問って言っても私は特に彼に聞きたいことはないんだけど……」  
それは遠まわしに「お前に興味がない」と言っているようなものであり、少し気分がへこむ。だが、肝心の一夏は質問したいことは山ほどある。だが、一方的に質問するというものも不公平だろう。

「じゃあ、こうしようぜ。俺が笹原さんをマッサージするから、マッサージしている間だけ笹原さんは俺の質問に答えられる範囲で答える。これなら不公平じゃないだろ？」

「まあ、それなら……」  
「っ!？」

マッサージしやすいように気を使っただけか、上に着ていたシースルーのワンピースを脱ぎ去り、完全な下着姿となるのだが、その突然の動作に一夏の心臓が高鳴る。だが、そんな一夏の心境など知るはずのない亜紗日はベッドにうつ伏せの体勢で横になる。

「優しくお願い」

「は、はい、それではやらさせていただきます……」

目の前には下着姿の美女。シミ一つない真っ白は背中と対面し、正直どこから手を付けたらいいのか困惑する。なんだか見えていて恥ずかしくなり、視線を下に逸らすとそこには彼女の張りのあるヒップ。もともと布地が少ないパンツだからか、お尻の谷間に布地が食い込んでTバックのような状態になってしまっている。

(さ、笹原さん、いつもこんな下着履いてるのか……)

「おい、一夏」

挙動不審な一夏を警戒するように千冬が上のベッドから顔をのぞかせる。その前には同じ年の下着姿の異性に対して邪な行動をするのではないかという疑いが伺える。

「ち、千冬姉、そんな目で見ないでくれよ……」

「私はいつもお前を信じているぞ？まあ、その信頼が今回で少し歪ん

だがな」

さらっと傷つくことを言われながら背中へのマッサージを開始する。やはり、女性の体だからか男の筋肉よりも若干脂肪が多く、柔らかい感触であった。

「それで、何が知りたいの？」

「えっと、笹原さんは学園に来る前はどこに住んでいたんだ？」

「寂れた田舎町の普通の女子高生だった。だけど、ある日I S適正が高いことが判明して会長補無さんの推薦を受けて学園にきたの」

あらかじめ作っておいた設定に若干の補強をいれて適当な嘘を言う。もし相手に関係者だったのならば危ない綱渡りだったのかも知れないが、幸いなことに相手は一般生徒。その程度であつたら十分誤魔化せる。

「そうなんだ・・・家族とかつているのか？」

「誰もいない。だからずっと一人暮らしだったの」

「へえ、じゃあ俺と同じだな。俺も両親がいないからずっと千冬姉と暮らしてきたんだ」

自分と同じような家庭環境であつたせい、心なしか一夏の表情が嬉しそうに聞こえる。だが、亜紗日は彼の家庭環境や生活環境などどうでもよかつた。

「次の質問をどうぞ」

「えっと・・・さ、笹原さんの好きな人のタイプってなんだ？」

「そんなことが聞きたいの？」

「いや・・・ちよつと気になつて・・・」

なんだか修学旅行の夜に交わされるような話題に疑問を抱きつつも、別に答えられないような質問でもないので本音交じりの理想像を話す。

「私の全てを受け入れてくれる人かな。私の身体、心、全てを認めて肯定してくれる、そんな人が好み」

「そうなんだ・・・」

彼女の身体と心を受け入れる。その瑞々しい肉体に対してその乾いた心、それらをすべて受け入れた時、彼女はその者の所有物となる。

なぜだろう、そのことに不思議な探求心がでてくる。それを例えるならば宝島に挑むトレジャーハンターといったところか。

「背中はもういいから、次は脚をお願いできる?」

「え、あ、ああ……」

身体をわずかに動かして下に移動する。亜紗日の脚は日頃二一ソックスに隠れているため、見たことがないが、やはり肌荒れ一つない綺麗な脚であった。その生足の太ももを指で優しく押していく。だが、その指を圧押ししたときの圧力で脂肪が大きく上に押し出される。次に指を離すとその脂肪の盛り上がりが解除されるのだが、その拍子に彼女のお尻に波が立ち、ヒップが小さく揺れる。

その煽情的で色欲な光景にマッサージ中であることを忘れ、見とれてしまう。もし、もしだ、もし彼女を手に入れることができたらならば、この肉体を好きにすることができるようだろうか。どこを触っても、どこを眺めても怒られることなく、恍惚な表情を浮かべてさらに求めてくる。そんな彼女の妄想が一瞬、脳裏をよぎる。

「どうしたの?急に体調でも悪くなった?」

「だ、大丈夫。ちよつと綺麗な脚だから見とれちゃって……」

「それはどうも……」

邪な妄想を振り払い、次の質問を口にする。それは今、一夏の中で最も気になっているものであった。

「笹原さんってその……溜奈と仲がいいのか?」

「彼は私の恋人よ」

「え!」

その衝撃的な一言に反射的な声が飛び出る。

「る、溜奈と恋人なのか……?」

「ええ、少し前に知り合ってたね。あまり大きな声では言えないけど肉体関係もあるわ」

その衝撃的な事実に対して驚きはあった。だが、それ以上に一夏の心から湧き出たのはなぜか嫉妬という感情であった。彼女のこの素晴らしい肉体をあつ男は触れ、そして禁断の領域へ踏み入った。自分が知らないものを見て、自分が生涯触れられないものに触れた。羨ま

しい、妬ましい、そんな感情がムクムクと湧き上がってくる。

「なーんてね」

「え?」

「冗談、彼とはただの教師と生徒の関係に過ぎないから安心して」

まるで男を弄ぶ遊女のような無邪気な声を出すと、先ほどの発言を撤回する。そのことに安堵する一夏であったが、冗談とわかっていても先ほどの発言によって生まれた感情は簡単には消えてはくれない。

「笹原さん、その・・・悪いこととはいわないからあまり溜奈と関わらないほうがいいぜ」

「どうして?」

「あいつには・・・うまく言葉にできないけど危険な雰囲気があるんだ。代わりの相談や協力ならばいくらでも俺がするからさ。笹原さんも頼りにしてくれていいんだぜ」

さらっと間接的にかつての自分の悪口を言われているわけだが、そのことに対しての嫌悪感を顔に出すことなく聞き流す。それでも見かけ上は何も知らない女にいつも一緒にいる男の悪口ーいや、陰口をいうのは見かけ上、いかななものか。

時刻は深夜二時を回り、他の乗客も完全に就寝したのか他の部屋からは物音一つ聞こえない。通路も閑散な雰囲気となっており、人の気配は皆無だ。そんな列車の中で灯りが漏れている部屋がある。一人客用の個室宿泊部屋であるため、いくら夜更かしをしようが苦情は一切来ない。それは「彼」の絶好の狩場であった。

♪♪♪

部屋に置かれていた最低音量のオルゴールが心地よいBGMとなり、気持ちを落ち着かせてくれる。できればこんな空間にずっといたいと考えるが、生憎これからそれ以上のお楽しみがある。

「……ふんっ」

軽く鼻を鳴らすと、ベッドから体を起こしてオルゴールを止める。そしてわずかに耳を澄ましてこの部屋に通路から接近するものがあることを感じ取る。常人ならば通路から存在するものがあるなんて気が付かないかもしれない。だが、彼には分かる、この部屋に誰が近づいているのかを。

ギイイイ

低い音を立てながら個室のドアがゆっくりと開かれる。ノックや声もかけずに他人のドアを開ける行為は本来ならば失礼なことにあるのだが、彼は怒らない。獲物が自分から自分の狩場へ来てくれるのだ、起こる理由がどこにある。

「はあ、はあ、はあ……」

ひどく息を荒らしている。足取りも臆気でまるで酔っ払いのような様子だ。だが、彼は警戒することなく、手元のリモコンを操作して扉のオートロックを起動させる。これで扉にはロックがかかり、部屋には彼と不法侵入者のみ。

「よくきたな」

コツコツと歩みを進め、侵入者の前に立ち、頬を撫でる。そうして彼——瑠奈の瞳に侵入者の顔が映し出される。

「眠れなかったかな？ 簪」

侵入者の正体は本来ならば別室で就寝中である簪であった。だが、先ほどから息は大きく乱れており、頬は赤く染まつており、瞳もどこを見つめているのかわからない虚ろなものだ。まるで誰かに操られているかのように今の簪には自我や意識のようなものが感じられない。

「ふむふむ、順調に出来上がっているな」

「はあ、はあ、はあ、・・・ゴクツ」

ベッドに戻った瑠奈を指すようにおぼつかない足取りで歩き始めるが、その歩みは直前になって静止をかけられる。

「待て、その前にお前にはやることがあるだろう」

「うう？あう・・・」

「そこで服を全部脱げ」

あまりに非常識で常識外れな命令だが、その命令に簪は反抗することなく今着ているパジャマに手をかけてゆつくりとボタンをはずしていく。上着を脱ぎ捨て、今度はズボンを脱ぐ。そして下着姿になるが、彼の命令は「全ての服を脱ぐ」ということだ。ブラジャーのホックをはずし、パンツも脱ぎ捨てる。そして見事に生まれたままの姿となる。

「うーん、お前の肉体はやはりいい。何度見ても飽きないな」

二次性徴を迎え、徐々に大人の身体になりつつある少女の身体。子孫の出産に備えて全身に脂肪が付き、少しずつだが大人の色に染まり始めている。普通ならばこのまま彼女は大人になっていったのかもしれない。そう、普通ならば。

「舐めろ」

ベツトに腰かけ、全裸の簪に足先をつきだす。言わずもながらこれは自分の足を舐めろという命令である。その命令にも文句一つということなく、膝をつき、優しく両手で足を掴む。そしてー

ジュプツ、ペロペロ

舌先で足先を舐めて奉仕する。全裸の少女が目の前少年の足を必死に舐めて奉仕する。服従、従属、屈服、奴隷、まさにそんな言葉がこの光景にはふさわしい。

チラツ、チラツ

「そんな俺の顔色を窺わなくていい。十分にお前は奉仕できていい」

自分の奉仕がお気に召しているかどうか顔色を窺うように上目遣いで見てくる簪に優しく、温かい言葉をかける。すると、その誉め言葉に恍惚するかのように虚ろな目を細めると、足の指先だけでなく、指の間にも下を這わせて奉仕する。

「んふっ、はむっ……れる……」

人の足を舐めるなどという屈辱的な行為のはずなのに、簪には嫌悪の表情はなく、まるで酒を飲んだ時のように全身がほんのりと赤く染まっている。そんな状況が十分ほど続いたころだろうか。唾液まみれとなった足の指先をつかって簪の顎をあげて自分を見上げさせる。

「前に俺がいない間に俺の枕を使って自慰行為をした非礼はこれで許してやる。さあ、こっちにこい」

「はぁ……」

その言葉に歓喜するように口角を上げて喜びの表情を浮かべるとゆっくりと溜奈のもとへ歩み寄る。ちらりとさつき簪がしやがんでいる場所をみると、そこには彼女の体液による小さな水たまりができていた。

「今夜は随分と『出来上がって』いるな。まあいい、っ！」

「ひゃんっ！」

小さく、吐き捨てるような声で呟くと目の前の簪の両手首をつかむとベッドに押し倒す。それによって小さな悲鳴が出るが、相変わらず簪に嫌がる様子はない。

「今日もそのかわいらしい体に蔓延る情欲を解消させてやる」

舌を簪の首筋に置き、少しずつ下へ這わせていく。首筋から鎖骨、鎖骨から胸の谷間を通過し、腹部、下腹部、そして最終到達地点へ。

「はうっ！」

限界まで盛り上がった体に自分ではない者によって与えられる刺激に反射的に声のでて、脚を閉じようとするがそんなこと彼が許すはずがない。



「脚を閉じるな。広げたままにしろ」

ビチャビチャと彼の舌が自分の体液を弾く音を聞きながら少しづつ簪は脚を開いていく。だが、快楽は際限なく与えられたせいで大きく上半身を悶えさせるが、それでも必死に耐え続ける。これはいい兆候だ。少しづつ彼女の身体が瑠奈を『同族』の格上ということ覚え始めている。

毎晩しつかりと入念に簪の身体を「仕込んでいる」おかげで、夜になるとほぼ自動的に彼女は自分のもとへ向かってくるようになった。そしてその事実は簪の身体が少しづつ人間でなくなっていることの証でもある。いや、ここまでくると、もはや人間として生きるなど不可能かもしれない。

この更識 簪という少女の肉体は既にこの破壊者レットローレが握っている。そこに本人の意思は関係なく、ただ奉仕し、愛されるといふ願望があるのみ。それでも彼女は幸せそうだ。こんなにも素敵な笑顔を浮かべているのだから。

――

「おー、これがパリか……って寒っ!」

列車を降りるや否や想像以上の冷たさに身を震わせる。一応、季節ということもあって学園の冬服を着てきたのだが、それでも肌寒いほどの気温の低さであった。

「さ、笹原さん、寒くないか?」

「まあ、少しだけ寒いかも」

「じゃあさ、その……俺マフラー持っているから一緒に巻かないか?」

「ええ、ありがとう」

手元のバッグからマフラーを取り出すと、一夏は亜紗日の首にマフラーを巻き、余った部分で自身の首に巻く。破壊者である亜紗日<sup>ルットローレ</sup>としては別に問題のない寒さなのだが、この気温は人間にとつては耐え難い気温らしい。そのため適度に周りに合わせておくとしよう。

だが、他人と同じマフラーを一緒に巻くという日頃の一夏では想像できないほどの大胆な行動に千冬が驚いた表情でいる。

「溜奈、私もあれがやりたいのだが……でかいマフラーはあるか？」  
「少し待て。確か……ああ、あった……」

一夏と溜奈を指さし、まるでうらやましがる子供のような発言をするラウラの要望を応えるため、バッグから大きなマフラーを取り出す。これはこの前冗談半分で楯無からもらったジャンボサイズのマフラーだ。何かの役に立つかもしれないと思って持ってきたのだが、その用意周到さは意外と侮れない。

「ふむ、やはり密着すると温かいな」

「もう少し入れそうだな、ねえ、簪？」

「……」

ラウラと溜奈が小柄なのもあってかもう一人分ぐらい余裕がある。そこで近くにいた簪に声をかけるのだが、返答がない。

「簪？」

「え？ひゃあ!？」

不審に思い、肩をゆすると溜奈の存在に気が付いた簪が驚きの声を上げる。

「な、なに？どうしたの？」

「いや、寒いから一緒にマフラーを巻かないかっていう話なんだが……」

「う、うん、ありがとう……」

そんな明らかに挙動不審な様子の簪とともに駅をでる。すると、そこには豪華なリムジンの高級車とともに執事服姿の初老の男性が待っていた。

「お嬢様とご友人の方々、ようこそパリへ。社長がお待ちしております、お車へお乗りください」

会社のなかで複雑な立場にあるシャルロットであるから、てつきり使用人も彼女を冷遇しているのかとおもっていたのだが、その言動からはシャルロットに対して深い敬意を感じた。

「うん、わかったよ。それじゃあ、いこー」

催促の言葉を聞き、それぞれの面子は車へ乗り込む。

「一夏くん、そろそろ・・・」

「あ、ああ・・・」

車内は暖房が効いており、もう大丈夫と言わんばかりに一夏へマフラーを返す。

「寒かったらまた言ってくれ。また貸すよ」

「ええ、ありがとう」

昨夜での夜での出来事のせい、不思議と彼との距離が近いような気がする。まあ、多少自分のことを話すぎたような気がする。そのせいで彼は自分と親近感を抱いているのだろう、そうに違いない。

デユノア社が所持する特設ISアリーナ。その前に高級スーツに身を包んだ厳格な雰囲気纏う中年の男性がいた。

「遅い」

頭ごなしにそう言い放つ。その対応に一夏がムツとするが、空気が読めない人物が混じっていた。

「誰だあの人？」

後ろでわざと大きな声「ーいや、普通の音量で話す瑠奈にその男はじろりと睨みつける。

「申し遅れた、私の名はアルベル・デユノア。デユノア社の社長にしてシャルロットの実父だ」

「へえ・・・」

それを聞くともう興味はないとばかりに大きな欠伸をする。自分から聞いておいてその態度にアルベルは苛立ちを募らせる。

「そろそろ本題に入らせてもらおう。シャルロット・デユノアには第

三世代ISへの乗り換えを行ってもらおう。そのための準備は既に整っている」

「ちよ、ちよつと待つてください！乗り換えって、そんな・・・僕はリヴァイブを降りる気はありません！」

「お前の意見は聞いていない」

食らいつき、拒絶の意志を示すシャルロットだが、アルベールは一瞥しただけであった。自分の意志を無視し、勝手に物事を進めていくそのやり方と態度にシャルロットは拳を握りしめる。

「本人が拒んでいるのに無理やりやらすのが親のすることですが！」

「新世代機ではシャルロットの実践データが生かせないでしょう。それは愚策というものだ」

シャルロットを擁護するために一夏とラウラが千冬の静止を振り切って、アルベールの前に立ちふさがる。シャルロットを新世代機に乗せたがるアルベールとそれを拒むシャルロット、見事に膠着するこの状況にとある人物が声をだす。

「ならば競わせればいい」

その声に一夏だけでなく、アルベールも顔を向ける。その先には堂々とした振る舞いをした白髪の少女、亜紗日がいた。

「その新世代機と彼女のリヴァイブ。その両方を戦わせ、勝利した方を彼女の専用機にするのが単純かつ、合理的なやり方では？強いものが弱い者の上に立つ、それが間違いや過ちが起きない方法だ」

「ふむ・・・なかなか良い案だ。君、名前は何という？」

「亜紗日です。私の名前は笹原 亜紗日」

「ふむ、では笹原 亜紗日。君の提案を受け入れよう。それでは実践データ収集をかねた模擬戦を行う。それでリヴァイブが勝つのならば、今までの無茶を許そう」

それだけ言い残すとアルベールはアリーナへ歩いていく。こうして戦いの火ぶたが切られると思われたのだが、生憎まだやらなくてはならないことがあった。

「・・・そこをどきたまえ」

アルベールの先を立ちふさがるように瑠奈が立つ。

「お前たちが遅れてきたせいでスケジュールが大幅に遅れている。それだけでは飽き足らず、またしても私の予定を狂わせるつもりか？」  
「ええ、ご存じです、お互い多忙の身でしょう。ですが、大事な大事なお話があるのです。それはとても大事なお話がね……」

大胆不敵で挑発的な笑みを浮かべると、視線をアルベール……ではなく、シャルロットの方に向ける。

「おたくの娘さんが過去に私の機体のデータを盗み出そうとしたことがありましたね。子供の責任は親の責任、というわけで謝罪していただきたいですよ、社長であるあなた直々にね」

その言葉にシャルロットははっと思い出したかのような表情を浮かべる。そういえばそうだった、学園に転入した時期に彼の部屋に忍び込み、データを盗もうとしてバレたことがあった。今では過去のものであり、シャルロット本人も忘れてしまっていたのだが、彼は執念深く覚えており、よりもよって最悪のタイミングで告発した。

実の娘が盗みをしたという都合の悪い事実にはシャルロットだけでなく、アルベールも動揺するが、それを表に出さずに押し殺す。動揺していることがバレたのならばあつという間に相手のペースに乗せられるからだ。だが、どんなに感情を押し殺しても、彼には関係ない。それほどまでに事態は既に収束に向かっているのだから。

「それは娘が失礼なことをした。後に会社に報告し、相応の謝罪をさせてもらおう」

「いえいえ、そんなことをする必要はありません。今ここであなたが私に謝ってもらえれば許してあげます。あなたが頭を下げてくれればね」

『許してあげる』それは格下の相手に投げかける言葉だ。目の前の子供よりも自分の立場が下、その事実アルベールの高いプライドを逆撫でする。

「人も物を盗んではいけない、それは子供でも知っている常識だ。……おたくの娘さんはどのような教育をなさっているのでしょうか？しっかりと対処してもらってもよろしいでしょうか？」

「……もし、断るといったら？」

反抗心と意地からでた素朴な疑問。その疑問に瑠奈は最終忠告と警告を兼ねた言葉を返す。

「お前は中絶手術をしたい産科医がいると思うか？」

なんの答えにもなっていない返答だが、そのたとえ話が瑠奈のやり方を物語っている。もうはぐらかすことはできないと判断するとアルベールは脚をそろえ、腰を曲げる。そして――

「私の娘があなたに失礼な行いをした。誠に申し訳ない……」

頭を下げ、謝罪の言葉を口にする。先ほどまでの厳格な雰囲気とは一変し、心の底から許しを請うその態度にシャルロットだけでなく、一夏、ラウラ、簪、そして千冬までも驚いた表情をする。

「軽い頭だ」

それだけ呟くと、瑠奈は千冬たちの元へ戻っていく。その異端ともいえる立ち振る舞いにアルベールの背筋に冷たい汗が流れる。

「随分と根に持っていたんだね」

「命綱を奪われそうになったのに、こうして社長の頭一つで勘弁してやったんだ。だいたいサービスしただろ」

「そういえば彼女と対戦する最新鋭機の名前は『コスモス』っていうらしいよ」

「俺はキンモクセイが好きだ」

「ああ、昔よく香りを嗅がせてほしいって言ってきたね」

その時、強風が吹いて瑠奈と亜紗日の髪を大きくかき乱す。混合する白と黒、合わさっているのに決して混じることのないその色はこの二人の立場と存在を明確にしているように見えた。

「くっ……強い……」

アリーナの内部をオレンジ色のISと花びらのようなスラスタウイングを広げるISが飛び交う。ほぼ、意地とプライドで起こったこのシャルロットの専用機を決める試合だが、さすがというべきか最新鋭機「コスモス」は伊達ではなく、試合開始早々シャルロットは劣勢に立たされる。

ただ単純に機体の相性が悪いというのもあるが、相手の操縦者の腕前も中々だ。機体性能も技術も上回っているというのに一気に勝負を決めようとせず、確実に堅実に勝ちを狙いに来ている。まるでじわと獲物を絞め殺す蛇のように。

「シャルロット!!」

皆が苦戦するシャルロットを注目しているのに対し、瑠奈と亜紗日は相手の操縦者に目を向けていた。対戦相手の名前はシヨコラデ・シヨコラデ、デユノア社のテストパイロットらしいが、かなりの戦闘慣れしている様子だ。ヘルメットバイザーをしているせいで表情は分からない、だがなぜだろう、なぜか見覚えのあるような気がする。

「……………」

「……………」

だが、所詮疑問は疑問に過ぎない。なんの証拠もなければ問題もないこの試合を勝手な疑いで中止などできるはずもなく、今できることはただこの試合を見守ることのみ。

「っ！ これなら!!」

このままでは埒が明かないことを感じ取ったシャルロットはダブル・イグニッション二段階瞬間加速を仕掛け、コスモスに接近する。そしてそのまま至近距離でショットガンを浴びせる。

「やったー!」

確かなダメージを感じ取り、喜びの表情を浮かべるシャルロットだが、その顔は次の瞬間凍り付くことになる。今のショットガンによって頭部のヘルメットバイザーが砕け、対戦相手であるシヨコラデ・

シヨコラータの素顔が晒される。

「なっ！あなたはっ!？」

「ちっ、やってくれるじゃねえかクソガキが!」

対戦相手の顔には見覚えがあった。その顔は、もはやおなじみとなった亡国機業のオータムであつたのだから。

「な、なんで、あなたが・・・」

「この最新鋭機をいただこうってハラさ。察しの悪いガキだな!」

そう叫ぶと同時にアリーナの天井のハッチが少しずつつ開き始める。

「デュノア社長!これはいったいどういうことですか!？」

千冬が詰め寄るが、このことはアルベールも知らなかったらしく、狼狽の表情を浮かべているだけであつた。

「デュノア社長!すぐにシールドハッチのロックを!」

「やっている!やっているが、さっきからハッキングを受けているのだ!」

「全て用意されている罠か!簪、カウンターハッキングを仕掛けろ!」

「はい」

千冬の指示で打鉄式を部分展開し、情報ウィンドを開いてコンソールに指を走らせていく。

「エスト、手伝って!!」

そういうが、返答はない。その沈黙で今、大事なパートナーが留守であることを思い出す。少し前に「旅に出ます。探さないでください」と謎のメッセージを残してエストはいなくなった。日常生活でエストがいなくても大丈夫だが、このような人手が必要な時の欠如は致命的だ。

その証拠に簪一人だけでは対抗しきれず、アリーナは少しずつ解放されていく。

「織斑先生!ハッキング元が特定できました!場所はこのアリーナの上空一千メートルです!」

「くっ!」

到底、今からでは迎えない場所であることに苦悶の声を出したとき、ガコンとアリーナのバンカーが動き始まる。



「おい、何だ!?」

監視モニターを見ると、そこにはいつの間にか射出用のカタパルトに足に乗せる青と白のカラーリングをした機体――ヴァリアントがいた。

「シャルロットの援護に向かうつもりか？」

射出の警報とアラームが鳴り響くと同時に射出され、アリーナ内にヴァリアントが乱入する。そのままシャルロットの加勢に向かうかと思われたが、その後、意外な行動に出る。

「うわっ!？」

「うおっ!？」

アリーナの中央で戦うシャルロットとオータムを吹き飛ばし、そのまま天井のシールドハッチをぶち抜き、一気に上空へ向かう。

「あいつ……」

シャルロットの援護よりも上空のハッキング相手の対処。その勝手な行動に憤りを感じるが、この状況では説教することもできない。そんな千冬を知る由もないヴァリアントはすさまじい速度で上昇していき、ついに敵を捕らえる。

「あれか……」

上空で浮いているゴスロリの服装をした少女、クロエを視認する。それを捉えると、手元のヴァリアントライフルの標準を少女の頭部に定める。

「俺は前に言ったよな？次に会う時は殺すと。それでもこうして俺の前に姿を現すということは死にたいんだな？いいだろう」

仏の顔も三度までという言葉があるが、生憎溜奈ルットローレいや破壊者は仏ではない。そのため三度もチャンスを与えなければいけない理由も道理もない。ためらいもなく放たれた射撃はそのまままっすぐ向かっていくが、着弾する直前で弾かれる。

「……」

相手の周りに何らかのフィールドが張られているのか、射撃が効かない。

「無駄です、破壊者ルットローレ。あなたの攻撃は一切私には通じない……」

「あの女も中々面白いおもちゃを作るな。次は何を見せてくれるんだ、お嬢ちゃん？」

「その口がいつまで続きますかね……?」

自分の主を小馬鹿にするような発言にわずかに目つきをとがらせると同時に、手元の杖を振るう。すると、ヴァリアントの周辺を真っ白な空間が包み込む。

「破壊者、あなたはこの世界を混乱させ、秩序を乱す災い。ここであなたは終わり、束様の手によって封印されるべき存在」

なんとも物騒な単語を最後にクロエの姿が消え、この何もない真っ白な空間に閉じ込められる。だが、この状況に見覚えがある。過去に学園で体験した分離世界ワールド・バースとかいうやつだろうか。きよろきよろと周りを見渡していると、不意に前で何かが動く。

「っ!?!」

見てみると、前で人らしきものがうつ伏せで倒れている。真っ白な長い髪が背中を覆いかぶさるような状態であり、何も着ていないのか、腕や太ももが露出している。腕や足がか細いところを見ると、女性なのだろうか。うつ伏せで倒れているせいで顔は見れない。だが、自分は彼女を知っていた。

「あ……あああ……」

うめき声のようなものを発しながら静かに立ち上がる。そのまま、まるでゾンビのようなゆっくりとした足取りで歩み寄ってくる。相手は丸腰、おまけに動きも速くない。対処するのが容易であるはずなのになぜか体が動かない。まるで筋肉が凍り付いているかのようだ。

「わ……た……しを……」

「お前は……」

目前にまで接近してきたところでようやく気が付いた。目の前の人物の両目まるでくり抜かれたかのようにないことを。両目がないのにも関わらず、両手を破壊者ルットレの首に触れる。そして——

「よくもおおおおおお!!」

女とは思えないほどの腕力で首を絞めつける。想像外の腕力とまるで化け物のような声に蹴落とされ、思いつき後方に押し倒され

る。

「私を殺し、よくも雄星の肉体を!!私の雄星を!!この化け物がああああ!!」

「ぐっーううう．．．ぐぐぐぐ．．．」

もはや彼女の話す言葉に文脈などなく、まるで自身の恨みや憎しみを吐露するかのような禍々しく、憎々しいものだ。

「返せ！返せ！私に雄星を！私のたった一つの希望を、お前はあああ!!」

「まだ．．．死ねないのか．．．」

哀れなものだ、殺され、希望を奪われて、それでもその亡骸さえも利用され、今度はその執念すらもこうして利用されて。何回も掘り起こされ、何回も墓荒らしをされ、人として穏やかな眠りをつかせてもらえない。そんな彼女にできることはただ一つ。

「がっ!!」

「そんなにごの世に未練があるというならば、何度でも寝かしつけてやる。絵本を読んで、子守歌を歌って、それでもまだ起きてこうしてくるというのならば強制的に寝かせてやるよ!!」

腹部を蹴りつけ、わずかに力を弱らせると反撃と言わんばかりに両手で首を絞める。細く、白いその首を一切手加減することなく、力いっぱい締め付ける。

「がっ．．．がっ．．．」

「次はよく眠られるといいな、小倉瑠奈」

「あっ．．．あ．．．」

最後の抵抗なのか、腕わずかに爪を食い込ませると全身が脱力し、動かなくなる。すると、この空間を形成するコアの停止を確認したのか、この空間が少しずつ綻びていき、現実世界へ戻っていく。

「．．．．．」

周りにクロエの姿はない。それだけ確認するとあの空間で遭遇した不思議な体験の余韻に耽るかのように空を見上げる。

「あんたを殺すのは何回目かな．．．」

同じ人物を何回も殺す。その残酷すぎる行いを決定付けているの

はいっいたいなんなのだろうか。破壊者<sup>レクター</sup>であるが故の宿命か、それともこの少年の肉体であるが故の因果か。

「おやおや……」

アリーナに戻ると何があったのか、最新鋭機「コスモス」を身にまとうシャルロットに、そのシャルロットに銃を突き付けられ、地面に這いつくばるオータムの姿があった。シャルロットの援護をせず、逃げられるように天井のエネルギーフィールドハッチも破壊した。それなのに彼女はそのチャンスを生かせず、こうして再び捕らえられてしまった。

「いつも間接的にチャンスを与えているのに、どうしてお前は生かせないだろうな？」

「うっせ……」

その悪態をつくような声にオータムは強く返すことなく、項垂れるだけであった。

――

「っ！ なんのつもりだ？」

帰還早々、心底<sup>ゴ</sup>立腹な表情をした千冬に胸倉を掴まれる。

「なんのつもり？ 何がだ？」

「とぼけるな！ お前はシャルロットの援護よりも上空の敵の迎撃に向かったな？ もし、シャルロットが負けてオータムに逃げられていたらどうするつもりだ!？」

「どうするっていわれてもな……そうなった場合はその社長さんの首が飛んで終わりだろ？」

「危うく亡国<sup>ファントム・タスク</sup>機業にISが奪われるところだったんだぞ!! それを危険とは思わなかったのか!？」

「そもそもオータムを招き入れ、ISに乗せたのは社長である会社だ。

その責任をかばうだなんて、随分と優しいんだな。生徒にもその優しさを向けられるといいな」

反省の色などなく、ただ淡々と物事を語る瑠奈に千冬は苛立ちを募らせる。

「あれだ、自分たちの不注意と怠慢がこの事態を招いたんだ。その後始末ぐらい自分たちで付けたらどうなんだ。俗にいう自分たちの尻拭いは自分たちでしろっていうやつだ」

それだけというと瑠奈は部屋の隅で安堵の表情を浮かべるアルベールへ近づいていく。てつきり、この事故を円満に解決することができたことに対しての祝いの言葉が出るかと思っただが、彼の口から出たのは真逆の言葉であった。

「どんな気分だ？お前たちが散々冷遇し、否定してきた愛人の娘と心底見下していたクソガキに命を救われるというのは」

彼は怒っている。不祥事を起こしたことではなく、その不祥事を起こして自分の手を煩わせたことに対して。その怒りから生まれる感情は到底少年が持つようなものとは思えないほど濁ったものであった。

「悪いが用事は済んだのならばさっさと行こう。ここにいと次にこの社長がなにをやらかすのかわかったもんじやない」

凍り付いているアルベールに気をかけることなく、彼は歩き出す。人は見かけによらない、この言葉はよく聞くが、その内面が彼は違えずぎただけの話なのだ。

――

「悪いけど、さっさと降りしてくれな？」

イギリス領へ入り、森林地帯を通過中に亜紗日がそんな声を出す。

「どうしたんだ笹原さん、もしかしてトイレか？」

「まあ、そんなところ。降ろして」

生返事に近い返答をすると、雑木林のような高い木に囲まれた場所に着陸する。

「瑠奈、あれある？」

「ああ」

短いやり取りを交わし、瑠奈から黒い大きなバッグのようなものを受け取ると同時に開く。中には何やら大きな機材が入っており、いじり始める。その行動から明らかにトイレが目的ではないことは一目瞭然だ。

「さ、笹原さん……？ いったいなにをしているんだ？」

「黙ってて気が散る」

「ご、ごめん……」

大きなトランスポンドのアンテナを設置し、周波ダイヤルをヘッドホン片手に調整していく。そんな時間が数分ほど続いたころだろうか、亜紗日が静かに口を開く。

「申し訳ないけど、私を置いて先に行ってくれる？」

「え……なんて言った!？」

「私を置いて先に行つて」

淡々とした口調だが、確かにそう口にする。ここで素直に首を縦に振ってくれると嬉しかったのだが、そう簡単に許してくれるはずがなかった。

「そんな……笹原さんを置いていけるわけないだろ!!ここはイギリスの町から遠く離れた森林地帯だ、もしかすると熊とかの狂暴な動物がいるかもしれない!!危険だ!」

「大丈夫だから、先に行つて。自分の身は自分で守れるから」

「それならせめて俺を残らせてくれ。それなら大抵なことがあっても対処できる」

「気持ちだけ受け取っておくわ。早く行って」

「笹原さんっ!」

心配症なのか、一夏が大きな声を出して亜紗日の肩を掴む。その表情は死んでも離さないといった様子だ。そんなまるで少年漫画の主人公のような表情をしている一夏の首元に冷たい感触が伝わる。

「彼女を離せ」

その冷たい声と同時に、一夏の首元にナイフの刃を当てているのはいつの間にか背後に回っていた瑠奈であった。あとほんの僅か力を加えればナイフの刃が肌に食い込むであろうというギリギリの距離まで接近させる。

「彼女はやりたいことがあるが、それを成し遂げるためには僕たちは邪魔らしい」

「笹原さんはただの女の子なんだぞ！それをここで置いて行けというのかよ!?!」

「ああそうだ、彼女はそれを望んでいる」

あまりにも非常識で危険な行動に異議を唱える一夏と亜紗日の願いをかなえたい瑠奈。その両者が激突する。

「やめろ二人とも！」

その争いを止めたのは千冬であった。できるならば、互いがケガをしない範囲で納得できるまで話し合わせたかったのだが、これ以上の足止めはスケジュールに響く。

「亜紗日を置いて、我々は先に進む。亜紗日は後で合流しろ」

「そ、そんな、千冬姉、ここで笹原さんを置いていくのかよ！危険すぎる」

「お前の意見は分かる。だが、そうやっていつまでも言い争っていても時間の無駄だ。我々は我々で進んでいく」

「待ってくれ、それじゃあー！」「くどい!!」

必死な声もむなしく千冬の声に一蹴され、黙り込んでしまう。自分は彼女の身を心配しているだけなのに、案じているだけなのに、なぜかこうして怒られている。

「ありがとう、一夏くん」

そんな落ち込んでいる一夏に亜紗日は優しく声をかける。

「私を心配してくれてありがとう。だけど、今は私を置いて先に進む

で。あとで必ず追いつくから」

「本当……だよな？」

「ええ、約束する」

それだけ言うと彼女は再び機材を弄って作業に戻る。心配だが、ここでいつまでも嘆いていても何も始まらない。それを感じ取ると、再び機体を展開させて飛び立つ。そして全員の姿が見えなくなるのを確認すると、手元のマイクに話しかける。

「エスト、聞こえるか？」

『は……い……電波、状況が……わる……い……ですが……』

「お前と『ヨルハ』の降下準備は整っているな？ 僕がいる場所の北五十メートル先に降下させろ」

『りよ……かい……射出しま……す』

それだけ聞くと通信がぶつりと切れる。メッセージは伝えた、あとは待つだけなのだが、案の定、すぐに空から彗星らしきものが見えた。  
「……ん？」

だがおかしい、なぜかその彗星が二つ見える。一つはさつき自分が注文した荷物、だとすると、もう一つは――

「おい、エスト、荷物が二つあるぞ。もう片方はなんだ？」

『に……げ……げ……』

「おい、なんだ？ 聞こえないぞ」

『に……げ……て』

「逃げて？」

その言葉の真意を確かめるよりも早く、上空から突風が吹きあられ、周囲の木々を揺らす。その風力はすさまじく、亜紗日もわずかに膝をつくほどだ。

「なんだよ……っ！」

数秒後、風が収まり目を開けた瞬間、全身が凍り付く。目を開くとそこには忌々しい『黒』がいた。まるで蝶のような文様をした羽が背中から生え、黒の装甲、そして手元には槍のような形状に鈍い輝きを放っている武器。



「まじかよ……」

紛れもなく目の前にいるのはかつて敵対し、そして共闘した  
ファントム・タスク  
亡国機業所属の黒騎士であった。その機体が上空で殺意を放ちなが  
ら亜紗日を見下ろしている。

「……エスト、機体降下を急げ。……っ！」

それと同時に亜紗日は後方へ一気に走り出す。地面を蹴り、全身の  
筋肉をフル活動させてまるで陸上選手のように走る亜紗日の後方か  
ら黒騎士は腕部のサブマシンガンを乱射しながら追いかけていく。  
相手はISであるのに対し、こっちは生身。まともに戦っても瞬殺さ  
れるのは明白だ。だから逃げる、ある場所へ、逃げ続ける。

「くそっ！せつかくの再会なのにこれかよ!!」

苦言を言いながら亜紗日は走り続ける。幸いなことにここは森林  
地帯だ。相手は上空から追うことはできず、地上を滑走していくしか  
ない。その証拠に後ろから追ってくる黒騎士はご自慢の飛行機能は  
使わずに、森の木々を切り倒しながら追ってきている。

「ちよこまかとー！」

素早く逃げ続ける亜紗日に向かって腕部内臓のサブマシンガンを  
乱射するが、視界が悪いのに加えて驚異的な身体能力のせいではなか  
な命中心しない。

「動くな！抵抗しなければ貴様の両足を潰すだけで済む!!」

「勧告になっていないな！もう少しいい条件を提示してくれよ!!」

たった数十秒のはずなのに、その何倍の長さに感じる死の鬼ごっこ  
をしながらようやく目的地にたどり着く。大きく開けた溪流。その  
中心に巨大な降下ポットがある。

「あれか……っ！ちい！」

開けた場所に出たせいかわ、追跡者である黒騎士が後方から飛び出し  
てくる。

「エスト！機体を稼働させて操縦者のフィードバックを開始！各機能  
をアンロック、武装にエネルギー供給を開始しろ!!」

ほぼ叫ぶような声で指示すると同時に、ポッドの一部が開く。上空  
から次々と放たれる攻撃の雨をギリギリで避けながらわずかに身を

屈ませる。

「っ！」

そしてまるでスパイ映画のワンシーンのようにポットの内部へ飛び込んだ。

「……やらせるか！」

笹原 亜紗日を殺せないのならば、機体ごと破壊すればいいだけの話だ。腕部のガトリングに加え、ランサービットの攻撃をポットに集中させる。激しい轟音と爆発とともに次々と対象は傷ついていく。まるでボールのように弾みながら外部装甲は吹き飛び、焦げ、また傷ついていく。

そんな攻撃が一分ほど続いただろうか。黒騎士による容赦のない攻撃のせいでポットの外部はへこみ、えぐれ、見るも無残な姿へと変貌する。

「……………」

反撃がないことを確認すると、少しづつ近づいていく。そして警戒しながら触れようとしたとき、ポットの内部からドンツと奇妙な音が聞こえてくる。

「っ!？」

反射的に後方へ飛び退くが、その音は少しづつ大きくなっていく。そして一定の大きさになった瞬間、ポットの外部装甲が内側から蹴り飛ばさ、内部から亜紗日が姿を現す。

「待たせたな、さあ、戦おう」

「貴様……………」

操縦者バイタル グリーン 機体エネルギー残量100%

各部駆動系 問題なし エクセリアYヨORルHaハ起動

次々と表示される情報を確認しながら、全身に装甲を纏っていか。かつて愛しきものにして、宿命の人物が使用した機体。それを皮肉なことにその亡骸を纏ったものが使用する。そしてそれはこの戦場に二人目の破壊者ルットレが降臨したことを示していた。

「エクセリア・ヨルハ。輝く希望が黒く染まり、地に墮ちるとき、そこから新たな希望が生まれる」

かつての輝きは失われ、黒く染まったその機体。しかし、その絶望が今は新たな希望となり、新たな危機の前にその伝説は再び蘇る。二刀流ブレード『バンカー・ヒル』を装備し、大きく構える。

「お姉ちゃん、今は君の機体を使わせてもらうよ」

わずかな謝罪、それだけを口にする。目の前の倒すべき敵に対してその刃を振るう。こうして少年と少女は戻っていく、今度こそ全てを終わらせるためにこのかつての戦場へ。